RECONSTRUCTION

改造

萬有引力の否定

共産土曜・朝鮮赤化

女人焚殺・米統改選

思想と評論

石原純

穗積重遠

藤井健治郎

室伏高信

末廣重雄

大庭柯公

批判と文藝

昇曙夢

山川菊榮

貝塚澁六

柳宗悅

泉鏡花

高倉輝

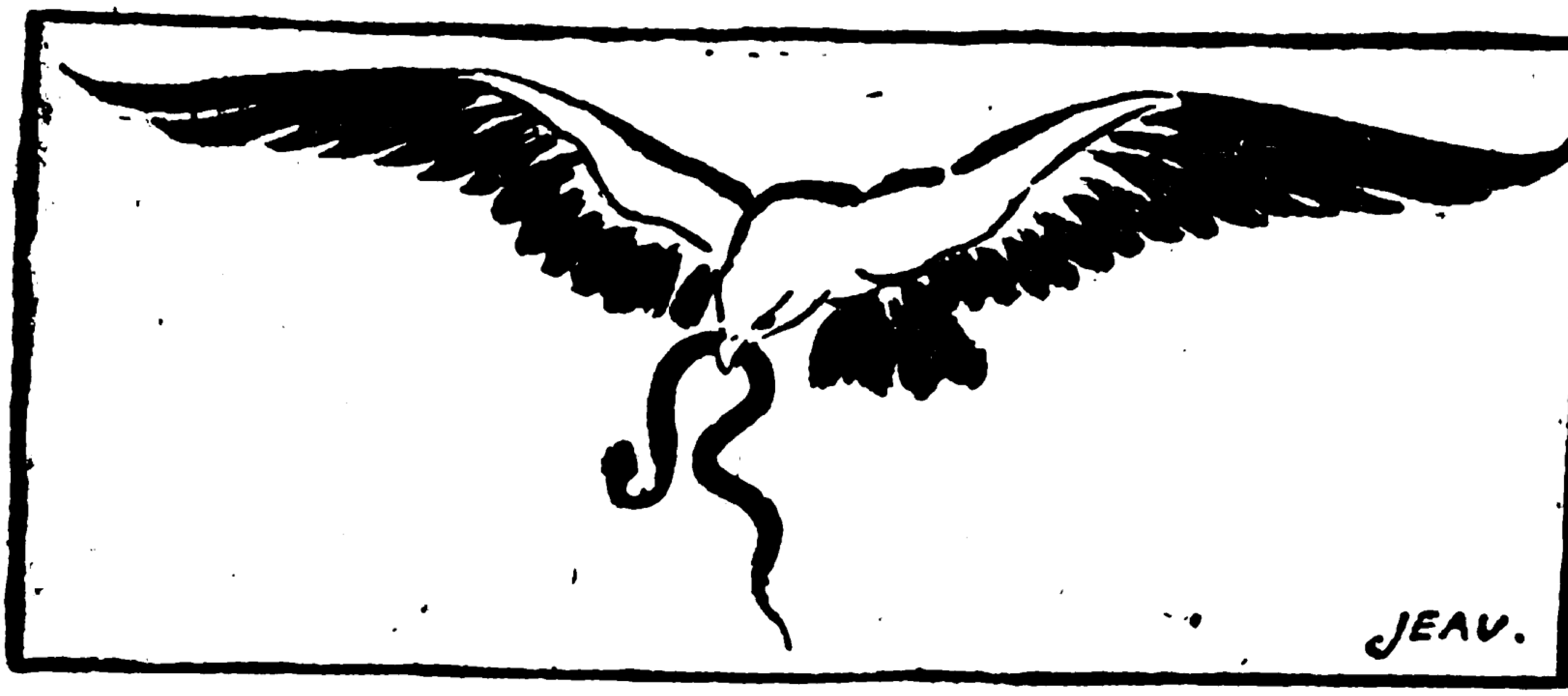
拾貳月號


S.S.S.
Ink
永世不變!!
絕對安心の下に
重要書類に用ふ
べき
永世不變色の
サンエス
インキ
サンエス萬年筆本舗
細沼株式會社



改造十二月號目次





==（改造十二月號）==

遣唐使時代の再現

昨今ボツ／＼北京遊學なる聲を聞くやうになつた。そして大藏、內務省等は聯合して外國より輸入さるゝ書籍の檢閲を一層手酷くやると云ふ。何と云ふ時代逆轉だらう。

新らしき人と、古き人と眞劍に抗爭すべき時は來た。武力に培はれた山縣、平沼等が依然として、野蠻時代のユトピアに憧憬し、その舊物保存のためにいかに惡辣なる戰鬪準備を整へたるかを見よ。國家の進歩を主題として討議さるゝものが、舊思想の權化、尤も血の廻りの惡い檢察官のアバキに逢ふのは當然のことであらう。我等は從來の警視廳の執れる刑事政策も苛酷過ぎると思つた、しかし此頃は警視廳でさへ手をつけぬ思想問題へ、ドシ／＼檢察官の手が伸びて行く、死んだ大浦に輪をかけたのが近頃の平沼の頑實振りだとの怨みの聲が高い。

シカシ、我等は諸君を慫慂するほど逃避はしない。我等の希望する國家や社會に一歩、一歩と近寄るための自分の努力を眞劍に働かすのみだ。諸君の茶喫みばなしで國家が運用されたのは夙くの昔の事だ。モウそう簡單にやられて堪つたものでない。世の中は武力の背景のみでは縮み上らないであらう。

外國から送らるゝ新刊書のみが危險であつて、それのみが新人の糧と思つて居ると大間違ひである。すべての大氣、すべての事象がモウ諸君には味方して居らぬのである。たとへ、それが外面や形式に於て一時は勝利を得たかのやうであつても、國民の赤い血汐は諸君の傳統的な、鎖國的な事大思想にどれほど反感を持つて居ろう。

諸君の文明驅逐策は十年後に、廿年後にどれほど我が民族をして世界に孤立たらしめるか、または光輝ある國家をしてどれ程暗くならしめるか、それがおわかりにならぬのか、北京へ――北京への聲は……――遣唐使時代の再現かと思はせて、今更らに昔ながらの學問の自由、個人の自由を繰返すの悲劇を生んだことが哀しい。

時間及び空間の相對性

理學博士　石原　純



一

私は先づ自然並びに時間、空間に關する一般の哲學的の意味を解明し、さうして後に私の玆に說明しやうとする主題に及ぼしてゆくことを許容して頂きたいと思ふ。之が複雜なる路をとほりて高遠なる思想に到達する經程を幾分でも容易く追隨し得る所以であると信ずるからである。私は自分のなかに意識の主體たる我を認むることを以て始めなければならない。併し意識する我があるといふことは、同時に意識せらるゝ對象の存在をも肯定することであらねばならない。この意識せらるゝ對象のすべては最も廣い意味においての自然を形つくりてゐる。さうして自然のあらゆる現象は、何れ

にしても或る時間の經過のなかに、或る空間の擴がりに於てあらはるゝものとして先づ吾々に認識せられる。此最初の階梯にありてはそれらの一切の認識は純粋に我の直觀に屬すべきものである。

私はまた自分のこの直觀的認識のなかに、自分と同等なる意識を有する多くの人間と、それらの人々の意識内容とを見いだすことができる。さうして再びそこに彼等の認識を通じて存在する自然現象と、それが行はるゝ時間及び空間とを考へることが出來る。私は玆に當然の問を發しなければならない。私自らが第一次的に意識せるものゝなかにあらはるゝ自然及び時間空間は、他の人々の意識にあらはるゝとして第二次的に私自らに映ずるそれらと果して同一のものであるか否かと。私は先づこの疑問を如何にして判斷することができるであらうかを究めなければならない。之を明らかにすることは即ち對象の客觀性に關する根本的の意味を知る所以である。

すべての人間に意識せられる對象的自然を素朴的に同一なものと假定してしまつた時代には、自然の實在性や、時間及び空間の絶對性はその當然なる歸結でなければならなかつた。そこには動かすべからざる空間の枠のなかにあらゆる自然が劃然として閉ぢこまれてゐた。さうしてその中に置かれた各の人間は一樣に流れゆく時間の窓隙をとほして自分の外をながめてゐるのであつた。人間は瞬時的な自然の見物者に過ぎないのであつた。併しこの素朴的な見方は最初の批判的の疑によりて既に壞されてゆかれねばならなかつた。物質的な對象が何もなかつた處に空間的の擴がりを測り得るかどうかを疑がつてみるがいゝ。又何の變化も起らないときに時間的の經過をどうして知ることが出來るであらうかを思つてみるがいゝ。空間の枠や時間の窓隙は之等の現象と離れて絶對に與へられたものと思惟することはどうしてもできない筈である。そればかりではない。之等の現象は我の意識によりて始めて感じ得らゝのである。我の存せぬ處に之等の對象のみが先づ存することをゆるすのは、直觀的には不可能である。斯やうにして自然の素朴的實在は我の自覺に

よりて消失してしまつた。さうして一切の自然は我の認識にのみ依存するやうになつた。

我の自覺はまことに哲學的に重要なる意味をもつてゐた。併し私達はもつと考ふべきことをもつてゐる。それはこの自覺せられた我のなかには、私自らが第一次的に意識せる我ばかりではなくて、第二次的にすべての他の人々に属せりと認識する多くの我をも含まなければならないといふことである。從つて之等の多くの我のなかに認識せらるゝ對象的自然は、各獨立な直觀によりて現はるゝものである。それらが同一の對象であるかないかを如何して判斷することができるであらうか。之が私の最初に述べた問題である。

私は今自分のまはりの自然を見る。私の傍にゐる他の人がやはり之れを圍む自然を見てゐることを私は認める。彼の見る處がどんなに私の見る處と一致して居やうともそれが絶對に同一對象であるといふ完全なる證明を得るには、私達の有つてゐる感覺が余りに個性的に異つてゐることを私は感じなければならない。彼のいふ赤いと云ふ色彩が果して私の感じてゐる赤いと云ふものと同じであると誰が直接に斷ずることができるであらうか。併し私達は又思つてみなければならない。之等の個性的に異なつた感覺をもつてゐる人間が各その經驗によりて認知せる自然のなかに、何故に普遍的な自然法則的關係を見いだすことができるのであらうか。私達のつくる自然法則が個々の人間の獨立な經驗的事實に基くにも拘らず、何故に個々の感覺に依らない普遍的なものとなることが出來るのであらうか。此の問題は極めて大切なものであることは謂ふまでもない。私達は此の普遍なものを求めて、始めて之に自然の實在性の根據をおくことができるからである。さうして此の普遍が唯一の可能關係に相當するときに自然の絶對性が確立せられる。時間と空間とがそこれやはり絶對なるものとして與かつてゐるかどうかも、之と同時に解かれなければならない問題なのである。

自然科學の內容を塡充すべき自然法則は、自然現象のなかに抽象的に求められる概念の間の一定の關係をあらはすものである。その窮極なる最精なる形に於ては之に入る概念は常に數量的であつて、その間の關係は一定の數式によりて與へらるべきものであることは一般に認容せられる處である。私はこゝに自然法則の普遍性の眞の意義が存することを信じやうと思ふ。

二

もと吾々は實在學としての自然科學に對して形式科學としての論理學を有してゐる。さうして論理學の最も精なるものは數學であることは謂ふまでもない。數學は或る公理を先づ假定してそれから論理的に可能なるあらゆる關係を導き出してゆかうとするものである。數學に於ける公理は最初經驗的につくられた數の概念又は空間の概念のなかに含まれる性質をもつて之に充てたので、それから代數學や幾何學が發達して行つた。此の點に於て之等の數學は既に經驗的實在と或交渉をもつてゐなければならなかつたのである。併し純粹の抽象的數學に於ける公理は必ずしも經驗的事實に依ることを要しない。數學を一の論理形式であると見る以上、公理とはその論理の系統の基礎になる命題に過ぎないのであつて、一つの系統內にある幾つかの公理は、それらが互に獨立であり、さうして矛盾しないものであればよいのである。現に虛數に關する公理や非ユークリッド幾何學に於ける公理の如きは經驗を超越せるものであつて、吾々は只抽象的に可能なる關係としてのみそれらを假定したのであつた。ともかく之等の數學に於ける公理及びそれから導かれる論理の最も重要なる性質はそれが普遍的であるといふことである。各の人が個性的に異なるにも拘らず何故に普遍的な概念を抽象しその間に普遍的な論理形式をつくることが可能であるかといふことに關しては、私の各の我の本性のなかに、

之が完全にせられたときにあらはす絶對普遍性を想像して、そこに根柢をおかなくてはならないと思ふ。此の論は今玆には暫く措くこととするが、形式科學としての數學の普遍性は否定することのできないものである。私は之と密接なる關聯を有する自然科學が亦普遍的であるべきことをも之によりて解したいと思ふ。

私達は數學を應用して自然現象を說明するといふ。さうして自然法則を數式の形に於て云ひあらはすといふ。此の意味を仔細に考へてみれば、それは自然現象のなかに抽象せる種々の概念の間に、數學の論理形式と同等な關係を見出すといふことに外ならないのである。勿論自然現象は甚だ複雜なものであるから、私達の現に知つてゐる限りの數學の論理形式のみであらはし得ないものを含んでゐるかも知れない。又結局は既知の論理形式に導かれるものでも自然の多樣のなかから未だ適當なる概念を抽象し純化し得ない部分もある。併し窮極に於ては之がすべて可能であることを豫想することは誤でないと思ふ。否この豫想そのものが自然科學成立の前提になるべきであると解したい。斯く解することによりて數學の普遍性は卽ち自然科學の普遍性をつくるべき要素と見做すことが出來る。

私の直觀せる自然そのものが他の人々の直觀せるものと同一であるかないかを判斷することは恐らく主義的に不可能である。併しそれらの自然現象から一定の概念を抽象することが各の人に許されるならば、さうしてその間の關係と同等なものを數學の論理形式のなかに見出したとするならば、之は全く普遍的なものである。夫故に直觀的自然は個別的であるけれども、之に反し自然法則的に結合せられた概念的自然は普遍的であると云はなければならない。此の普遍的自然に於て始めてその實在性を確立することができるのである。

自然の實在を吾々の直觀のなかに求めずして却つて概念的構成のなかに見出さうとすることは、尙ほ適切さを疑ふ人があるかも知れない。併し吾々が自然現象のなかに常に普遍的關係を有する數量的概念を見出すことが出來るといふ處

に、自然の實在の意味が存することを深く思ふならば必ずしも諒解し難いことではないであらう。私は之等の概念の網をもつて最後に一切の完き實在的自然を蔽ひ盡すことができるのを信じたい。自然は斯やうにして吾々の認識のなかに滅びないものとしてつくられてゆくのである。私はもう一度こゝに自然の實在を數學の普遍性に基いて論じて來たことを繰返してをく。そうして吾々の思惟作用のなかに生るゝ數學の論理形式が何故にその對立者を直觀的自然のなかに見出し得るかといふことに關して、思惟そのものの實在的自然に對する深い關係を指摘しておきたいと思ふ。

三

以上の哲學的考察は自然科學の普遍性の根據を吾々に啓示する。併しながら自然科學の內容をなす自然法則や之がなかに獨立變數として入る時間及び空間座標が果して絕對の意味をもつてゐるかどうかは、具體的に諸現象を研究することによりて始めて決定せられなければならない。

時間と空間とは全く獨立に思惟せられることが從來信ぜられてゐた。勿論時間を測定するには空間內に起る運動現象を媒として必要とするけれども、そうして此の意味に於て既に或密接なる關係が兩者の間に存在するけれども、空間のすべての點に於て同一の普遍的な時を定め得ることを否定するものはなかつた。此の意味に於て時間は絕對的であつたのであつて、從つて或る一定の原因とその結果との時間的距離或る出來事の時間的繼續は如何なる觀測者にとりても同一であるとして判斷し得たのである。

時間の判斷の絕對でないことを始めて明らかにしたのは、私の今述べやうとする相對性原理の創唱者アインスタインであつた。彼は先づ二つの離れた場處に於て同時刻なることを判斷するには此の間に信號として傳達せらるゝ或る物理

的現象を媒介とする必要のあることを指摘した。例へば其の一方から光を送り他方で之を鏡に反射せしめて前者に戻したとする。若し光の進む速度が往復とも同一であるならば、前者に於て光を送り出した時刻と、再び戻つて來た時刻との中央が、後者に於て之を受け取つた時刻に相當しなければならない。さうして之に依りて同時刻の判斷と時計の進み方の比較とをなすことができる。併しながら若し光の速度が往路と復路とに於て異つてゐるとしたならば二つの場處の同時刻の判斷は此の速度がどの位異るかによりて適宜に變へられなければならないことは明らかである。即ち同時刻なる判斷は絶對に決定せらるものではなくて少くとも信號として用ゐる現象が空間を如何に傳播するかといふ法則に依存することが理解せられるであらう。從つて信號として如何なる現象を用ゐるべきかと云ふことにも關聯する。斯くして若し同時刻といふ判斷が異なり得るものとすれば、時間の前後の判斷も之によりて左右せられなければならない。さうして或る場合には原因と結果との順序を逆にしはしないかといふ杞憂を伴ふことになる。之は深く考慮しなければならない問題ではあるまいか。

信號として光を用ゐる理由が若し、光が空間のすべての場處を傳はり得る普遍的な現象であるといふに止まるならば甚だ不充分なものであると私は思ふ。さう云ふ普遍的な現象はまだ他にもあるかも知れないといふ點に於てその必然性を缺くからである。光を用ゐなければならない必然の理由は實に此の現象が呈する獨特な性質に依るのである。さうして此の光の獨特な性質はアインスタインによりてその相對性原理の最初に假定せられた處のものなのである。

光の現象に此の性質が假定せらるゝに到つた由來は甚だ遠い。光がハイゲンスによりて一の波動現象として解せられて以來、此の波動を起し得る物質的媒質として空間を充すエーテルなるものが假想せられた。さうして之に不思議なる性質が賦與せられた。天體の運動がエーテルの存在によりて殆ど何等の抵抗をも受けないために之は極めて稀薄なる氣

體に比せらるべくあつた。光が純粹に横波として傳はるために之が媒質は固體的の彈性を有しなければならなかつた。更に運動せる物體内に於ける光現象は物體の運動にも拘らずエーテルが常に絶對に靜止すべきことを要求した。之等の諸性質を實際の物質が同時に有すべきことは殆ど不可能のやうにも見える。併しエーテルは論理的に當然之を具有しなければならない不思議なものであつたのである。けれども私達は單に思惟に困難であるといふ理由のもとに論理的に當然なる所産を捨てゝはならない。却つて之を實驗的に探し求めることによりてその論理の基礎を確かめやうと努めなければならないのである。

　エーテルが若し空間に絶對に固定してゐるものならば、之に對して運動する物體の速度が何等かの實驗によりて觀測せられなければならない筈である。たとへば吾々の地球はやはりエーテルに對して或る運動をなしてゐるに違ひない。地上の觀測者から見ればエーテルは即ち逆に流れてゐるのである。此の地上に於て地球の運動の方向に光を往復せしめた時間と、之に垂直な方向に同じ距離だけ光を往復せしめた時間とを比較すれば、エーテルの流れが存在するために前者の方が後者より稍々長くなる筈なのである。若し之と同樣な實驗を河の流れに於て光の代りに一定の速度を有する汽船を往復せしめて行つたならば、確にさう云ふ結果を得るに違ひない。然るに米國のマイケルソン及びモーレーが光を以て前記の實驗を極めて精細に行つた結果は全く否定的に終つてしまつた。彼等は即ち地球運動の方向と之に垂直なる方向とに於て光の往復の時間に少しの差をも認め得なかつたのである。玆に於て私達は疑問を起さなければならない。船の往復に於て明かに差のあるものが何故に之と同樣の意味を有すべき光の場合にあらはれないのであらうか。アインスタインは玆に光の獨特の性質を見たのであつた。

　彼は此の光の獨特の性質を假定することによりて極めて簡單にマイケルソン及モーレーの實驗の結果を說明しやうと

した。光の速度はすべての觀測者にとりて常に同一であると。之が彼の原理の最初におかれたる假定なのである。地球がどんなに動いてゐやうとも地上に於て相等しい距離だけ光が往復して來る時間はこの假定によれば勿論相等しくなければならないことは明瞭である。

相對性原理は光現象に限りて此の特種の性質を假定した。こゝに光を信號としてすべての場處に於ける同時刻の判斷をなさなければならない必然の理由が存するのである。何故に之を敢てしたかと云へば、私達はマイケルソン及モーレーの實驗の結果がこゝに導いたものであると謂はなければなるまい。ともかく時間の判斷が絶對的のものでなくて此の光現象の法則に依存することはこゝに說いた處によりて解せられたであらうと思ふ。

四

光がすべての觀測者にとりて常に同一速度で進むといふことは、それ自らに於て簡單な命題であるけれども、その影響は極めて重大なるものゝあることを認めなければならない。

第一はエーテルの否定である。若しエーテルが媒質として存在するならば、さうしてそのなかで光が一定の速度で進むならば、之に對して運動せる觀測者にとりて光の速度は異なりて見えなければならない筈である。此の相異を否定することは卽ちエーテルを否定することでなければならない。エーテルの不可思議なる性質を私は前節に述べた。併しエーテルはこの論理的に當然なる所產のために捨てられる理由はない筈であつた。然るにエーテルが今こゝで抹殺せらるゝやうになつたのはその物質的假定が、光現象の法則と矛盾するやうになつたからである。矛盾のみが吾々の論理系統のなかに生息し得ない要素だからである。

之に反して物質的媒質なしに波動を思惟することは稍困難を感ずると云ふかも知れないが、そこにはもはや矛盾は存しないのである。物質のない空間、但それは抽象せられた幾何學的空間ではない。對象的自然として與へられてゐる物理學的空間をいふのである。此の空間のなかに力の場が存し波動が起ることを、空間それ自らの根本的の性質と見ればそれでいゝのである。その波動が實際の彈性的媒質内に起るのと似てゐると云ふまでである。私達が最初に彈性體内の波動を經驗したといふことが、空間内にも彈性的媒質がなければならないと云ふ結論を齎らす理由にはならない。エーテルがなければ空間に波動が起らないと思ふのは空間を抽象的な無內容なものとして思惟するからである。具體的な物理的な空間は現に私達が認識するが儘の空間なのである。その中に波動の傳はるのが認められるならば、空間それ自らがそう云ふ性質を具へてゐるに外ならないのである。吾々はその認識のなかに矛盾を含むやうなエーテルをもつて之を充ち塞いでおく必要はない。

第二は絶對空間の否定である。もと私達が抽象的に空間を思惟してゐる間は、點の位置及びその運動が相對的にしか意味のないことは容易く諒解せられる處である。空間を具體的な物理學的なものと見なした上でも、力學的の現象のみを經驗してゐた時代にはやはり絶對空間を認知する方法はなかつた。併し光及び電磁氣現象に於て空間に絶對に固定せるエーテルなるものを認めるに到つて、それが絶對空間を標示するものとして意味せらるゝことが可能になつた。此の點に於てはエーテルはたゞ光現象を說明する媒質としてのみでなく、もつと重大なる意義をも負はせられてゐたのである。然るに此のエーテルはアインスタインによりてその存在を否定せられてしまつた。さうして私達は再び絶對空間を標示する何ものをも有たないことになつた。すべての觀測者は空間のなかに於て全く同等の權利を與へられた。彼等が互に運動してゐるとしても、それは相對的に意義を有するばかりで、その何れが空間に靜止し何れが動くかといふ差別

がない。否さう云ふ差別をつくる絕對空間そのものが認識せられ得ないのである。夫故に波動は同等に光の速度を測りて常に同一の値を見出さなければならない。何故なれば、若し異つてゐるとしたならば何故にその一方が大きく他が小さいかといふ理由を求め得られないからである。彼等の一方が他よりもより速に動いてゐると判斷するやうな絕對空間が與へられてゐないからである。

五

相對性原理は時間と空間とが極めて密接なる關係を有することを明かに私達に教へる。

この原理に於て絕對空間と共に絕對時間が否定せられてゐることは既に言ひ及んだ通りである。すべての觀測者は光の速度が同一に見えるやうに時計を調節して同時刻なる判斷を行はなければならない。此の結果は相對的に運動せる二人の觀測者の一方に同時刻として判斷せられる現象は、他方の人には必ずしも同時刻ではなくなるのである。即ち各の觀測者はそれぞれ自己に固有な時間的判斷をなしてゐるのであつて、必ずしも他の判斷と一致してはゐないのである。

同時刻の判斷の斯やうな相異は、おのづから空間の長さの判斷の相異をも結果するものである。たとへば私が玆に或る棒をもつてゐるとする。此の棒の長さが幾許であると云ふ意味は、棒の兩端の點が同時刻に存在してゐる空間内の二點間の距離がそれだけあるといふことに外ならない。然るに相對的に運動してゐる他の人から見て同時刻といふ判斷が異なるならば、その人にとりて同時刻に棒の兩端の存在してゐる距離は、棒と共に居る私自からの測つたものとは異なるのが當然であらう。夫故に棒の長さはやはり絕對に定まつたものではなくて、此觀測者によりて異なつた値を有するのである。

丁度此の事實は曩のマイケルソン及モーレーの實驗を說明しやうとしてローレンツが地球運動の方向に測つた距離の短縮を假定したのに相當する。彼は此の短縮によりて運動方向に往復せる光の要せし時間がエーテルの流れのあるにも拘らず長くならないことを說明したのであつた。彼の假定した短縮はエーテルに靜止せる觀測者の立場に於て云ふてゐるのである。さうしてアインスタインから云へば之は斯樣な觀測者が地上の觀測者に對して同時刻なる判斷を異にする爲めの當然の結果に過ぎない。現に此の短縮はすべての物體に運動の際に共通にあらはるべきものではあるけれども、それは壓力によりて縮められた場合とは全く異なることは種々の實驗に於て確められてゐる。夫故に物體が觀測者に對しての速度を增して、光の速さに近づくとき、その運動方向の長さが減じて零に近づくといふことが云はれるにしても、必ずしも解し難いことではないであらう。それは實質的に厚さを失ふのではなくて斯樣な觀測者の長さの判斷が異なるためにさう見ゆるに過ぎないからである。

空間の長さの判斷の相異は又時間の長さの判斷の相異を伴ふことは言ふまでもないことゝ思ふ。その空間を過る光の速度が變らないやうに時間と空間とを測らなければないからである。夫故私達が幾年生きてゐるといふことも、相對的に動いてゐる人から見れば異つてゐなければならないのである。すべての空間と時間とに關する判斷は斯くして觀測者に對立するだけの意味をもつてゐるので、それ以上に絕對なる意味はない。

畢竟、光の速さがすべての觀測者から見て常に同一であるといふことは、アインスタインに取つては論理的に演繹せられたものではなくて、却つて論理の先頭におかるべき一の公理なのである。之が成立つやうに時間及び空間の判斷測定を行へばそれでいゝのである。そこには何も矛盾が生ずる筈はない。只此の公理は私達の從來慣れてゐた公理とは異つてゐる。それがために種々の點に於て異樣を感ずるに過ぎない。たとへば地上に於て一方に光を送れば之は一定の速

さで進むでゆく。私達がこの光の方向に又はその反對にどんなに速く駈け出したとしても光の速さは少しも變つて見えないのである。之は誰しも不審に思ふに違ひない。光でなくて、汽車が走つてゐるとしたならそれは大變だからである。幾ら速く走つてもさう云ふ汽車があつたとしたら之に追ひつくことは不可能になる。數學の言を用ゐれば、光の速度は之に何を加ふるも減ずるも變らない量であるといふことになる。斯様な加減法は明かに私達の通常慣れてゐる公理には含まれてゐない。併し之を公理とする數學は勿論成立ち得るものであつて、相對性原理に於ける速度の加減は之に從ふものに外ならないのである。

私は尙ほ之に數言を加へておきたい。若し光の速度を無限大であるとするならば、この加減法は通常の意味を有するやうになる。換言すれば之に於ては通常の加減法に於ける無限大の數の役目を或る有限なる數がつとめてゐるのである。此の意味に相當して光の速度はすべての可能なる速度のうちの最大の値であり、物體は如何なる力にはたらかるゝも之れ以上の速度に達することは出來ないことも推論せられる。又光の速度を超ゆる速さを以て傳はる物理的作用はあつてはならないことも之から結論せられる。若し斯様な現象があると假定すれば、之を信號として同時刻といふ判斷を行ふときは、或る適當の場合に於ては、光の信號を用ゐた場合と時間の前後を逆にし、從つて原因と結果との順序を倒まにするに到るからである。さうして同一の事象に對しては原因と結果との連結は一義的でなければならないからである。

六

時間と空間との相對性はミンコフスキーの「物理學的世界」に於て最も明確に示された。彼は空間の三次元の外に時間の一次元を融合して、四次元の双曲的空間を想像し之に物理學的世界なる名を與へたのである。或る時刻に於ける

一質點の位置は、此の世界のなかの幾何學的點としてあらはされ、從つて質點の時間的に經過せる運動は、此の世界に於ける幾何學的線としてあらはされる。彼は之に世界點、世界線なる名を與へた。此の世界に於ける時間空間の一座標系は一の觀測者に固有なものである。之と相對的に運動せる觀測者に屬する座標系は、時間の軸を含む平面內に前者を廻轉したものに相當する。廻轉によりて得た後者と、前者との關係は全く相對的であつて、同等の權利を有してゐる。すべての觀測者にとりて各それに屬する座標系が時間空間測定の基礎になるものであつて、それらの何れも絕對の意味をもつてはゐない。卽ち時間空間の相對性は、軸の廻轉の相對性によりて最も能くあらはされてゐる。

時間及空間の密接な關係が亦此の世界形象のなかに能く透見することが出來る。之に於ては時間の軸は空間の軸と全く同等の役目におかれてゐる。軸の廻轉によりて得られた新らしい時間の軸はその射影をもとの時間軸の上のみでなく、空間軸の上へもつくる。又新らしい空間の軸はその射影をもとの時間軸の上へもつくる。之等の幾何學的關係は前節に述べた時間空間の判斷をその儘にあらはしたものなのである。私は餘りに專門的に亙ることを恐れて之れ以上の說明をこゝに省略する。

ミンコフスキーの世界の特性は、光速をあらはす世界線が常に不變に殘るといふことである。軸の廻轉は之が成立つやうに行はれるべきものである。併し一般に座標軸の廻轉は世界形象の內容に變化を齎らさない筈であつて、從つてすべての他の世界線も其の形象に於ては不變なのである。之は甚だ重大なる物理的意義をもつてゐることであつて、自然現象の本性に立ち入る一大原理といふべきである。

光の速度がすべての觀測者に對して同一であるといふことは、光現象をあらはす法則がそれらに對して同一であることの結果と見做すことができる。ミンコフスキーは更にすべての世界形象の不變といふことを假定して之をあらゆる自

然現象に規範しやうとした。彼の相對性原理の內容は次の如きものである。

「時間と空間とは融合して一の物理學的世界をつくる。自然法則は此の世界のなかに於てあらゆる可能なる軸の廻轉に對して常に不變なる幾何學的形象としてあらはされる。」

此の原理を先づ假定して、之に從ふものゝみを正當なる自然法則として解しやうとした。私は茲に再び最初に述べた處の哲學的考察を持ち來りて此の原理の言ふ處を明らかにしたいと思ふ。

自然科學の普遍性は吾々が自然現象のなかに見出す概念の普遍性と、その間の關係を對比する數學の論理形式の普遍性とに基くことを私は述べた。此の關係は即ち自然法則をあらはすものに外ならない。

自然法則は此の意味に於て普遍的であるけれども、之が絕對の普遍であるかどうかは遽かに斷言することはできない。同一の事象に對して異つた法則が立て得るかも知れない。マッハの如きは實際多くの法則の可能を豫想して、只その中に最も思惟を經濟にするものを選んで承認すべきであると云つて居る。併しながら思惟經濟は選ばれたるものの必然を意味しない。自然の實在をその普遍的關係に於て見出さうとするに當りては之が必然であり絕對であることを要求するものである。さうして思惟經濟は其の當然の結果であると見做すことによりて始めて徹底的の意味を見ることが出來ると私は思ふ。何故なれば、可能なるあらゆる論理形式のなかに於て實在的自然にその對立を見出すものが、最も多く思惟經濟の理に協ふものであり、さうして一面から見れば吾々の思惟作用が亦自然の一現象として此の理に從ふを當然とすると解したいからである。ともかく同一の現象に對して異れる多くの法則の可能なることを私達は今日に於て經驗しない。そればかりではなく、上に述べた相對性原理はすべての自然法則を唯一絕對の不變なる形象に於て時空の世界のなかにゆるさうとするものであることを思へば、此の原理が上の哲學的疑問に對して與かる處の尠なくないことを覺るに

足りるであらう。

自然法則そのものに對して之を容るゝ形式としての時間及び空間もやはり同じ意味に於て普遍的の概念である。併し相對性原理は之が全く相對的の意義を有するに過ぎないことを明らかにした。一定の時間空間は各の觀測者に對してのみその本來の意味をもつてゐるのである。私は尙老婆言とは思ふが、之は各の觀測者にのみ所屬せるものではあるけれども、各人の直觀的の時間空間と同じではないことを注意しておきたい。何故なれば前者はやはり普遍的に認識せられたものであつて、相對的に運動せる二人の觀測者に屬せる時間空間の間には一定の普遍的關係が之を結びつけてゐるからである。

七

ミンコフスキーの物理學的世界は軸の廻轉に對して不變に殘るといふことを相對性原理は主張した。此の軸の廻轉は相對的運動の場合に於ては速度の不變なるものに相當してゐた。實際にマイケルソン及モーレーの實驗以來論ぜられてゐたのは等速的な相對運動のみであつたのである。玆に於て等速でない運動に對してはもはや相對性は成り立たないものであらうかといふ疑問が再びアインスタインによりて攻究された。さうして彼は多くの困難を排して遂に相對性原理の偉大なる擴張に到達したのであつた。

運動の相對性はもと等速運動に限られるやうに信ぜられてゐた。私が今滑かに一樣に走つてゐる汽車のなかに坐つてゐるとする。その場合には自分は動いてゐることを感じないで、只窓外のものが自分に對して動いてゐることを認める。併し汽車の速度が急に遲くなつて止まれば私は自分を前方に衝きのめされるやうに感ずるに相違ない。私はそのときや

はり意外のものの自分に對して動く速さの變つたためにこんな力を受けたのであると判斷するであらうか。恐らくは私は之に反して自分の運動が變つた故であると思ふに違ひない。從來の力學は實際さう敎へてゐるのである。力學の法則は等速運動の相對的であるのに反して力や加速度は絕對的であることを假定してゐる。私達は併しこゝに疑つてみなくてはならない。絕對なる加速度とは果して何に對して云はれるべきであらうか。加速度のないことを標示せられたる物體若くは座標系はどこに存在すべきであらうか。ノイマンは斯樣な假想體を名づけてアルフア體と呼んだ。力學の法則から推論すれば此のアルフア體は、宇宙のすべての物體の質量の中心に對して加速度を有しないものでなければならない。併し宇宙の擴がりに對して知らない吾々はその質量の中心が一定に決し得べきものであるかどうかをも豫め判斷し得ない。又若し宇宙が有限であつて斯樣な點が定まつたにしても、何故に此標準體に對してのみ力學の法則が作られねばならないであらうか。之が法則を最も簡單にする所以であると答へるならば、此の選擇にはやはり必然性が缺けてゐると謂はなくてはならない。私達は既に各の觀測者に對する時間空間の相對的意義を覺つた。アルフア體に結付けられないすべての觀測者に對しても、適當なる時間空間の判斷を與ふることによりて、力學の法則を同一の形式につくることが果してできないであらうか。之は時間空間の相對性に關する更に根本的なる問題でなければならない。

アインスタインは此の問題の解決を萬有引力の性質の擴張に於て求めやうとしたのである。彼は物體が加速度を受くるときあらはす惰性を測る惰性的質量と、重力に引かれた重さに比例する重力的質量とが全く同一なることに注目し、遂に加速度によりて生ずる力はその本質上、重力及びその廣義に於ける萬有引力と同等なることを大膽に假定したのであつた。さうして加速度を受くる觀測者が惰性の力を感ずるのは彼に屬する時間空間の四次元世界が或る歪曲率を呈するがためであるとし、從つて亦萬有引力の場に於ける觀測者が力を感ずるのはやはりその世界點のまはりに同樣たる歪

を示す故であると解した。

私達は地面に立つてゐるとき地球の引力と、地球が自轉するための遠心力とを受けてゐる。地球の自轉が假りにだんだん速くなつたと想像したならば遠心力が漸次大きくなり、遂には私達の身體の重さが感ぜられなくなつてしまふであらう。そうなつたとしても私達の身體は地面の上に接觸して地球と一緒に廻轉を續けてゐるに違ひない。私達は力にはたらかれて居るのを感じないにも拘らず何故に眞直にゆかないで地球の周圍をまはるであらうか。地球のまはりを遠くまはつてゐる月もやはり之と同じ有様におかれたものなのである。

アインスタインは之に答へる。力が作用しない時に物體が眞直に動くといふことはその空間が曲率を有しないユークリッド空間であるからである。直線はそこに於て二點を結付ける最短距離だからである。地球の周圍の空間は其の重力の爲めに私達に歪むで見える。その中に於ける最短距離をあらはす線は直線ではなくて曲つた線である。地上に於て力のはたらかれてゐないと私達の感ずる物體はさう云ふ路を通つてゆくのである。

アインスタインの此の論はすべての運動の相對性を主張するものである。如何に動いてゐる觀測者に對しても適當なる時間空間の判斷によりて之に同一の運動の法則を成立たせることができるものである。ノイマンのアルフア體はもはや玆には不必要にせられ、嘗てエーテルの出遇つたのと同じ運命におかれてしまつた。ミンコフスキーの相對性原理は單に時間空間軸の廻轉に對してばかりでなく世界空間のあらゆる歪に對して成立つやうに擴張せられた。前節の終に述べた自然法則の絶對性と時間空間の相對性とはこの御蔭によりて益々廣い範圍に於てその意味を確立することが出來たと謂うてよい。

私は更に此の相對性原理の擴張が他の意味に於て私達に多くを敎へたことを言ひ添へたい。それは非ユークリッド幾

何學が經驗を超越した公理のもとに純粹に抽象論理として發達して來たものであるに拘らず、それが空間の本質に、より深く觸れてゐることを認めらるゝと共に、一方に於てアインスタインの引力論によりて其の對立者を實在的の空間に見出し得たといふことである。實在的自然の普遍性が斯樣にして數學の普遍性と關聯することの意味が之によりて最も明かにされたと謂ふことが出來ると思ふ。

八

アインスタインは獨逸生れの猶太人で國籍を瑞西においてゐる。本年四十六歲にしかならない年配であつて、戰爭前からベルリンのカイゼル、ウキルヘルム研究所の研究教授となつてゐる。極めて溫和な風貌をもつた質實な人のやうに見える。

彼が相對性原理に關する最初の論文を書いたのは一九〇五年であつて、ミンコフスキーが物理學的世界を論じたのはその三年後であつた。萬有引力論は一九一〇年頃から試みたのであつたが、種々の困難に出逢うて數度之を補ひ訂し大戰後一年即ち一九一五年に至りて略〻完成したものである。それから戰爭中引續いて彼は論文を發表してゐる。獨逸のあの苦しめられた國情のなかに於て科學の歷史にも比類の少ないこの偉大なる仕事がなされたことに關して私達に感慨を增さしめるものが多いと思ふ。

アインスタインの萬有引力論の最も有力なる證明は水星の運動に於て見られた。從來のニウトンの引力の法則は天象を記すに極めて精であつたに拘らずひとり水星の運動に於て說明し難いもののあつたことは之に對する大なる謎とせられてゐた。即ち水星軌道の近日點の移動のうち原因の不明なるものとして每百年に四十三秒の角度を數へてゐたのであ

る。さうして今アインスタインの理論が精密に此の數量を與へるといふことは既にその正しいことを示すものと解せられた。併し更に此の理論からの驚異すべき結果は、光が太陽の近傍を通過するとき屈曲するといふ事實であつた。太陽の周圍の空間が歪んで居りさうして光がそこに於て最短距離を通るといふ以上、之は屈曲しなければならないのである、此の事實はアインスタインによりて既に一九一一年に豫言されたのであつたが、丁度昨年の五月二十九日の日蝕の際、英國の觀測隊が遠くブラジル及びアフリカ西海に於て之を確むる機會をもつた。この結果が全く肯定的に十一月六日の英國學會に於て發表されたときに學界は驚嘆に充ちて之を聽いた。英國の學士院長チエー、チエー、ノムソンは海王星發見以後の大豫言であると稱揚した。アインスタインは當時のタイムス紙上に彼の原理に關する簡單なる說明を寄せたがその最初に於て特に英國の學者が勞資を費して戰時中敵國に於て完成された理論を試みたことに對して感謝の辭を述べてゐる。さうして彼は最後に相對性の例として自から云うてゐる。自分は今英國に於ては瑞西の猶太人として紹介され、獨逸に於ては獨逸生れの人間と云はれてゐるけれども、若し風向を代へて自分が惡者として罵らるゝ場合には英國に於て獨逸人と呼ばれ、獨逸に於て瑞西の猶太人と云はれるであらうと。私は之等を讀んで、人間がその最も眞摯なるべき科學的の仕事に努めてゐるときに、國際的の事情が之に禍ひし若くは之が褒貶に關與することの止むなきを思ひ、さうしてまた學術聯盟の時事に連想しないではゐられない。

九

私は最後にアインスタインの理論の齎らす徹底的なる宇宙論を記して時間空間の性質の考慮に資したいと思ふ。

宇宙の擴がりは何處まで到達するかといふ問題は元より直接の實驗からは判斷することの出來ないものであるけれ

とも、私達の思惟實驗は之に關して或る程度の解決をゆるすものである。最初に考へ及ぶことは宇宙の無限なることである。私達はどこまでで宇宙が終るといふ界限を見出す特別の理由を少しも有つてゐないからである。併し私が特に玆で注意しておきたいことは界限のないといふことが此の場合の主要點なのであつて、無限であるといふことはそれの結果として導き出された處なのである。此の無限であるといふことに關しては種々の疑がある。宇宙に於ける星の分布は多樣であるけれども、その充分大なる範圍を包容してみれば物質の平均密度は、或る場處に於て特に大であるといふ理由のない限り、何處も等しい筈である。さうして宇宙の何れの場處に於ても星の光から來る明るさはやはり平均に於て等しくなる筈である。然るに此の假定はニウトンの引力の法則とは矛盾するのである。何故なれば若しかやうな星の分布を容認すれば引力の强さは無限の遠方に於て無限に大きくなるからである。即ちニウトンの理論に從へば、宇宙の全體には中心があつて、其の近傍にすべての星が集まり、之から遠ざかるに從つて星の質量が平均に於て減ずるやうにならなければならない。斯くして星の世界は限りなき空間の擴がりのなかに、局部的の集群をつくつてゐるやうになる。

宇宙の構造を斯やうに想像してみた處で、私達には尙ほ不審が起る。多くの星から發する光は限りなく諸方に擴がつてしまつて、もう再び戻つて來ない。それは星群から遠ざかつて限りない空間のなかに失はれてしまふ。空間のなかに星が存在してゐれば之に衝き當りて光は吸收せられ相互的の平均を保つことが出來たでもあらうけれども、全く星のない遠方の空間に出てしまつた光はもはや吾々の星の世界から永久に失はれたものである。此れは窮極に於て安定な宇宙を想像する所以ではない。

アインスタインの萬有引力論は之等に反して能く私達の思惟の要求に應ずる宇宙をつくることができるやうに思はれ

る。彼の理論によれば物體の重力の及ぼす空間は或る歪を生じて非ユークリッド空間になつてゐる。今星が平均に宇宙全體に一樣に分布されてゐるとすれば、之がために空間全體は一定の曲率を有する球空間となる筈である。球空間はその界限のないことに於てユークリッド空間と同樣であるが、併し之の如く無限に擴がつてゐない。最短距離をあらはす線は無限の長さをもつてゐないで有限である。丁度昔は地面を平であると思つてゐたのが今日に於て地球が球面をなすことの見出されたやうなものである。アインスタインの宇宙は何故に斯く有限になつたかと云へば、之は空間が歪んでゐるがためであり、空間の歪は物質が存在してゐるが爲めである。さうして空間の曲率半徑は宇宙の全物質の量に比例することが結論される。夫故に宇宙の物質の總量が大なれば大なる程、宇宙の擴がりは大きいのであつて、之に反しすべての物質がなくなつたとすれば、同時に宇宙夫れ自らの擴がりも消失してしまふのである。物質がありてさうして宇宙が之に依存するといふことは極めて深い意味をもつてゐることでなければならない。

私は茲に解し易いために歪の起る空間を單に實在的の空間の如くに説明したが、實は之はミンコフスキーの世界空間に就て謂ふべきものであり、從つてそのなかには時間の概念が含まれてゐるのである。時間を含むだ世界空間が物質のために如何に歪むかに關しては尚ほ多少の議論もあることで玆には説明し難い。併しそこには宇宙の空間的擴がりと共に時間的繼續に關する極めて興味ある問題を含むでゐることを示しておきたい。時間及び空間の根本的な諸性質に關する問題が如何に相對性原理によりて解かれてゆくかを省りみるとき、私達は今更に此の原理の科學的に並に哲學的に重要なる意義を思はない譯にはいかない。

改造原理としての社會的正義

文學博士　藤井健治郎

一

此一兩年來は莫迦に改造流行で、人皆改造を謂はざるを恥ぢ、改造を爲さざるを憂ふるものの如しである。しかし改造の事たる中々込み入つたるもので、之をいふにも之を爲すにも、種々なる事項を研究考察しなければならぬものであつて、決して容易なる事柄でない。世の改造を云爲するもの、果して斯の用意ありや否や。

改造については、少くとも四の事柄を考察、研究しなければならぬ。改造の必要其第一、改造の設計其第二、改造の方法其第三、而して改造の原理其第四である。今之を住宅の改造に譬へていへば、或は家屋が傾いたとか、土臺が腐つたとか、或は家族の人數が増加して増築しなければならぬとか、或は其社會上、交際上の位置から模様變へをしなければならぬとか、かういふのが住宅改造の必要である。地面の格好(形)凹凸、廣狹、四隣との關係、此等の諸制約の下に、如上の必要を充たすべく考案するのが、住宅改造の設計である。建築材料の選擇とか、其技術とか、其資金支辨の方法とか、すべて其設計を實際に實現するに必要なることが、住宅改造の方法である。而して其改造の必要の有無、輕重、緩急を決定したり、又其改造の設計、方法を判斷したりするのが改造の原理である。凡そ苟くも在來あつたものを改造せんには、少くとも此等四事項の考察、研究が必要である。而して僅かに一住宅を改造するについても、此等四事

項に亘つて仔細に考察することは、さう容易なことでない、況んや古い歴史を有つてをり、込み入つた組織と、又四隣との關係を有つてゐる、社會といふ大々的家屋の改造に於いてをや。

此等の四事項は各専門的に分擔して調査研究を要する。改造の必要を感じ、其急を訴へるものは社會其者であるが、それを調査して其正否を決定するものは政治家、乃至社會の實際指導者であり、改造の設計方法を研究するものは行政官吏及改良家であり、其原理を考察するものは學徒であらねばならぬ。是事も住宅改造の場合に宛嵌めて考へれば、必ず點首かれる事柄であるが、重ねてそれを説くの煩を避け、讀者各位の御推考に委かせる。

さて改造事項の調査研究は各専門的に分擔するとして、從て私達學究の徒の主として擔任すべき事項は、其第四項たる改造の原理であらねばならぬ。

二

私は先づ率直に、改造の原理は社會的正義であるといふ斷案を看板に表示する。

其謂ふ所の社會的正義とは如何なるもので、何故にそれが改造の原理となるか、私はそれを説く前に、改造の原理といふ意味を、前に述べたよりは今少し詳しく説明しておきたいと思ふ。

改造の原理といへば、現實改造の必要ありとして、問題になつてゐる事柄に對して、何等かの光明と指針とを與へるものでなければならぬ。高遠な人生の理想といふが如きものは、たとひ理論上に於ては正しい理想であるにしても、而して又改造の原理も結局する處まで詰められれば、必ずそこへ至らねばならぬものであるとしても、それは直接に改造の原理でなくして、唯原理の原理である。原理の原理も學徒の當さに研究すべきものの一つであるにに相違ないが、そ

れは實踐哲學の考究すべき範圍内の事項である。改造の原理は、理想を高遠な天邊から直接の地上へ下ろして現實の問題に對して直接に解答を與へるものであらねばならぬ。だから私が改造の原理は社會的正義であるといつた處が、必ずしもそれが人生の最高理想であるといふ意味ではない。

次に改造の原理は唯一つでなければならぬといふこともなければ、又多くであらねばならぬといふこともない。故に私が社會的正義が改造の原理であるといつても、それが唯一のもので其他にはなく、又あつてはならぬといふのでない。唯私は少くとも社會的正義といふものが、改造の原理であるといふに過ぎないのである。

三

改造の原理といふ意義について、以上二ケ條だけ註解をつけておいて、此に本論の筋道へ歸つて。社會的正義とは何で、何故にそれが社會改造の原理にならねばならぬかを論述して見ようと思ふ。

社會的正義とは社會の各員が、社會組織の體制上から自己に課せられたる職分を、各其才能德性に應じて、自己の自由及權利の領域となし、之を恪守、實行すると同時に、社會の各員は、互に決して他人の畛域を侵害せず、以て社會其者をして健全なる生活をなさしめ、其最高使命たる倫理的目的を成就せしむることをいふのである。

如上の定義の中、先づ説明せざるを得ないとは、社會組織の體制上から社會の各員に課せられたる職分と、社會各員の自由と權利との關係である。從來の原子觀個人主義（アトミスチツクインデイヴイヂユアリズム）――私は玆に特に原子觀個人主義といふ。それは正當に理解されたる個人主義其者は人生觀の哲學として、正しく妥當なる一思想體系に相違ないものであるが、併しそれが原

子觀の個人主義になると、謬見となつてしまう。而して一般に個人主義は誤つた人生觀であると思ふてゐるのは、正しく理解された個人主義についていつてゐるのでなくして、多くは此原子觀個人主義について論じてゐるのである。かうした込み入つた理由（わけ）があるので、私は玆に特に原子觀個人主義といつた――此原子觀個人主義に從へば、個人は本來的に一定の自由と權利とを有つてゐるもので、是は他の何者から與へられたものでもなければ、從て又他の何者からも奪ひ去られることのないものである。國家若しくは社會の出來たのは、此等の原本的自由と權利とを完うせんが爲めであつて、從て國家社會の任務は、唯其等を安全にし、保障するにあるばかりである。といふのであつたのである。然るにかうした。原子觀個人主義の謬見であることは、前世紀に於いて既に明かにされたことである。即ち原子觀個人主義の說く所の自由と權利とは、眞の自由でも權利でもない、眞の自由と權利とは社會組識の體制上から、必然に各員に課せられてゐる職分の上から規定されてゐるものである。恰も人體內の諸機關が、更に細說すれば其機關を組織してゐる所の諸細胞が、各其特殊の官能を有つてをり、而して假りに其等諸機關、諸細胞に個人に於けると同樣に自覺があつたとすれば、彼等諸機關諸細胞は、其特殊の官能を營むことを、自分達の自由であり、權利であると意識するであらうやうに。

社會の各員が、かく理解された自由と權利とを恪守し、互に他人のそれを侵害しないのが、正義である。かうした考方は、從來の個人主義が觀てゐたのと甚だ近似してゐるが、しかしそは單に言語の上だけのことであつて、實際の意味は甚しく異つてゐる。從來の個人主義の觀方から觀た正義は、個人が互に他人の自由と權利とを侵害しないといふことと及國家又は社會が其各員の自由と權利とを安全にし保障するといふこと、其事自らが目的であり、意味であつて其以上に何等の目的と意味を有つてゐないのである。しかしながら所謂社會的正義に於いては、各員各自の畛域を恪守するこ

と、他人の自由と權利とを侵害しないこと、其等自らの目的でも意味でもなく、それ以上に、各員が然かすることによつて、社會若しくは國家全體を健全になし、以て其最高目的たる倫理的使命を果たさしめるといふ意味を有つてゐるのである。此の點が原子觀個人主義の觀てゐる正義――假りに之を個人的正義と名づくるを妥當とすれば、其個人的正義と所謂社會的正義との顯著なる差異點である。

前述の社會的正義の定義中に於て次に說明しなければならぬことは、『各其才能、德性に應じて』といふ一句である。從來の原子觀個人主義の觀方では、人はすべて本來的に平等なものであると觀、從て平等の自由と權利とを有つてゐるものであると考へてゐるので、平等といふことが、正義の基礎觀念になつてゐるのである。しかしながら此平等といふ觀念には、私が曾て或は『丁酉倫理講演集』に於いて（『平等の諸意義に就て』）、或は『哲學研究』に於いて（『平等觀個人主義と差別觀個人主義』）既に公にした論文中に於て論じたやうに、二つの觀方がある。一は自然主義的平等觀であつて、一は理想主義的平等觀である。而して此等二種の觀方の中で、前揭の論文中に既に論じたやうに（從て其論證は今茲に之を略するが故に、看官各位幸に前揭論文を參照せられんことを望む）、理想主義的の觀方のみが正しい觀方であつて、自然主義的の觀方は謬てゐるものである。さて理想主義に觀られたる平等觀念は正しいものであるとして、それと正義との關係は如何うであるかなれば、人間の自由と權利とは、人間が只その自然物でなく、自覺ある人格者であるといふが爲めに存するものである。少しくくどいやうであるが、今一度繰返していへば、自由と權利とは、自覺のある人格者のみが之を有することの出來るもので、他の一切の自然物は到底之を有することの出來るものでない。然るに理想主義的に考へられた所の平等は人格者としての平等である。故に理想主義的に觀られたる平等觀念は、自由と權利とに從て正義の觀念に其據て立つ所の地盤を與へるものといふことが出來る。かうしたのが、理想主義的に觀られたる平等

と、自由と權利、及正義との關係である、しかしながらそは唯地盤を與へるだけであつて、其地盤の上に建てられる自由と權利といふ建物は、社會組織の體制といふ現實の條件によつて、時代により、民族によつて其相を異にして來る。而して社會の各員が其特殊の相の自由と權利とを活用せしめる上に於いて、各其才能、德性に從て、種々異つたる作用を爲すのである。各員が各其才能、德性に相應した活動をなし、互に他人のそれを侵害しないのが正義である。是れ私が社會的正義の定義中に『各其才能、德性に應じ』といふ一句を加へた所以である。

以上の説明で、私の社會的正義の定義の意味が明瞭になつたことゝ信ずるのであるが、私の以上の定義は、最近亞米利加邊の學者が研究したものを、すべて綜合統一したものである。（最近ヰルロービー、カーヴァー、オヴーストリート等米國學者が社會的正義について如何なる研究をしてゐるかは、『哲學研究』所載拙稿『社會的正義に就て』を參看されんことを乞ふ。）そればかりでない、遠くプラトーンが其對話篇『國家』に於て論じた所のものをも包含してゐる。

社會的正義は、正義てふ觀念に『社會的』といふ形容詞を冠つてゐるが故に、時としてそれは『正義』といふより大なる觀念の中の唯一種の形であつて、從てそれは『個人的』正義に對したものとして理解されるのである。實は私も以前々揭の一『社會的正義に就て』を書いた頃には此見解に囚はれてゐた。）しかし能く考へて觀るとそれが謬見であることが解かつた。謂ふ所の『個人的正義は、原子觀個人主義の思想體系から導き出された觀念であつて、而してその原子觀個人主義なるものは、到底成立し得ないものであるが故に、其から派生された所謂『個人的』正義といふことも亦成立し得る筈がない。從て殘るは唯『社會的』正義のみである。從て『社會的』正義は『個人的』正義に對したものでない、それのみが正義觀念のすべてであつて、『社會的』正義が即正義其者である。かうならざるを得ないのである。

四

正義其者である所の社會的正義は如上の性質を具へたるものである。然るにそれを構成する所の重要條件である所の社會組織の體制、並に個人の才能・德性は、經驗的に與へられたる條件である。從て具象的に實現されてゐる所の正義は、其社會組織の體制の如何によつて、種々に其相を異にしてゐる筈である。正義觀念と密接に結合して當然といふ觀念があるが、甲の社會、甲の時代に於て當然爲すべきこととされてゐることでも、乙の社會、乙の時代に於ては必ずしも然うでないことがあり、又それと反對に、甲の社會、甲の時代に於て當然爲すべからざることとされてゐることが、乙の社會、乙の時代には、さうでないこともある。即ち如何なることが正義であり、如何なる事が不正であるかは、社會、時代によつて定められるもので、具象的正義には定相がない、時・處・位によつて推移してゐるものである。

公平——偏頗のない、依怙贔屓のない公平といふことは、正義觀念の一要素であるとは、ゼー・エス・ミルの夙に論斷した事柄である。而して爾後の多くの學者も之を承認し、私自らも亦曾て之を承認した。（『哲學雜誌』所載拙稿『正義觀念の變遷に就て』及『大觀』所載拙稿『平等について』）。しかし此點に就いても、私は私の前說並にミルの論斷を訂正する必要を認める。此公平の觀念は前述の當然と同じく、正義觀念と密接に關係してゐるものではあるが、しかし、正義觀念其者を構成してゐる一要素と觀ることは出來ぬ。正義觀念は前に論じたやうな事情で、其自身で成立するもので、其中に其構成要素として公平といふ觀念を含んでゐるものでない。社會の各員が各其才能・德性に應じて、社會から課せられたる自由と權利とを主張し、行使するに當て、其主張・行使が故意に妨げられるか、又は曲げられるか、又其主張・行使から生ずる結果すなはち功績に對する評價が、故に偏重、偏輕せられるか、公平、不公平の觀念は、かうした場合に始めて正義觀念の中に這り込んで來るのである。即ち社會各員の自由及權利の主張・行使が、何等他のものによつ

て妨げられることなく、眞直ぐに通されたといふことや、又は其評價が依怙の心で加減されることなく、實際其ある通りにされることが公平であり、それ等の反對のことは不公平である。從て公平・不公平の觀念は定まつた正義觀念があつて、それに添加して起つて來る觀念で、正義觀念其者を構成してゐるものでない。かうした道理から私はそれ並に私の前說を飜へさうといふのである。

正義觀念と公平觀念との關係はかうしたものであるとして、此事からして又次の事項が其當然の論理的歸法として生れざるを得ない。それは既に論じたやうに、具象的正義は、社會時代につれて推移するもので、定相といふものはないものであるから、從て如何なる事が公平であり、如何なる事が不公平であるかも亦、その正義觀念の推移につれて變遷するもので、時・處・位を絕した絕對の公平とか、絕對の不公平とかあるものでない。甲の社會、甲の時代に公平なることでも、乙の社會、乙の時代には不公平なることがあり、又其反對に甲の社會、甲の時代に不公平なることが、乙の社會、乙の時代には却て公平であることもあり得るといふことである。シュモラーが個人的に收入の多い英人よりも、個人的に收入の尠い獨逸人の方が、多くの租稅を徵收されるといふことがあつても、それは決して正義を破つた不公平なものであると謂ふことが出來ぬ。英國には英國特殊の正義公平があり、獨逸には又獨逸特殊の正義公平があるからである。(論文『經濟上に於ける正義』)と論斷してゐるのは確かに正論である。

差別の觀念を絕對に容れることの餘地を有たない所の自然主義的平等觀念に脚を立ててゐる論者は、其當然の論理的歸結として、公平とはすべての人間を平等なものと觀、且そのやうに取扱ふことであり、不公平とは人間に等差を附し且等差を附して取扱ふことであるといふやうに說くのである。しかし是は其根本の自然主義的平等觀念が誤つた觀念であるが故に、其公平觀念も亦勿論正しきを得ない。平等は唯人格者としての平等のみが認容され得る觀念で、自然主義

的の見解のものは謬見である。然るに人はすべて人格者であるといふのは、具象的人間を抽象して觀た觀方からいはれたことで、具象的人間は、種々の經驗的內容を有つた處の特殊的人間である。賢不肖、能不能、才不才、德不德、等種々の特質を具へた人間である。然るに既に論じたやうに具象的正義は此等の經驗的條件に制約されて成立してゐるものなるが故に、人間に等差を附して觀、且そのやうに之を取扱ふことは、必ずしも正義に反してゐるものでもなし、又從て必ずしも公平を缺いてゐることでもないのである。現實の人間社會に於いて考へることの出來る、而して又實行することの出來る公平は、所謂アリストテレースの謂つた所の『比例的平等』たらざるを得ないのである。

然るに爰に『法律の前には萬人皆平等である』といふ命題がある。此命題は比例的平等の思想を打ち破る命題であるやうに見ゆる。しかし深く考察すれば此事も何等除外例と觀る必要はない。法律の前に萬人が平等であり、又必ずそうでなければならぬことは、國法運用の嚴正を期する上から當然のことであらねばならぬ。しかし是は矢張り抽象された人間に就いての命題で、司法上の根本則であるが、具象的の法律の條項を、具象的の人間に適用する場合には、其の具象的條件の如何によつて、種々其程度を異にするのである。例へば玆に甲乙二人の窃盗罪の刑を課すべきものありとせんに、其犯せる罪の程度は、略、同樣なものであるにしても、甲乙二人の種々の具象的條件の如何によつて、其課せられる刑の輕重は必ずしも同一でないのである。殊に輓近刑事學上進步した思想を懷いてゐるものは、(卽ち所謂刑法學上の社會防衛說を主張してゐる所の人々は)、刑罰の個人化、若しくは主觀化てふことを唱へて、刑罰は可成だけ犯罪者其人の特殊の性質と事情とに適應せしめるやうにしなければならぬと論じてゐるが、私は其社會防衛說といふ刑法學原理には反對してゐるものであるが(『哲學研究』所載拙稿『倫理上より觀たる社會防衛說』參照)、しかし其刑罰の個人化、主觀化といふ意見には贊成せざるを得ないのである。一部の人は、此刑罰の個人化、主觀化を以て單に刑事政策上の一原

理としてゐるやうであるが、私はそれに反對で、それは政策上の原理でなく、刑法學上の一原理であると信ずる。彼の法律の前には萬人が平等であるといふ命題は、一面に於いては犯罪其者及犯罪者其人に具はつてゐる所の具象的條件が同一なる場合には、其課分も亦同一なるべしといふ意味に解し、他面に於いては其等一切の具象的條件を捜索し列擧し而してそれを評價する上に於いて、寸毫も依估の沙汰あるべからずといふ意味に解すべきもので、其他にそれと異つた意味を有つてゐると解すべきものでないと思ふ。此故に法律の前には萬人平等であるといふ命題は、一見した處では比例的平等の思想と扞格するやうであるが、深く其意味を明にすれば、何等矛盾するものでないことが解る。

以上私は社會的正義の如何なるものかを説明し、且それに密接して關聯し來る所の公平觀念の如何をも論じた。今や進でそれが現代の改造原理となる所以を説明すべき機會に達したのであるが、それへ入る前に、私の論の誤解を防がんが爲めに、玆に一言せざるを得ざるの必要を感ずるのである。そは他でない。私は實現社會に現はれてゐる具象的正義は、社會と時代とに制約されて、皆特殊相を表はしてゐるもので、絶對不變なものでない、從て又同樣に、公平にも具象的には絶對の公平なるものがあるものでないと論斷したが、それは具象的正義、具象的公平に就て述べたものであつて、理想的正義、理想的公平について謂つたものでないことである。故に幾多の特殊相を具へた具象的正義があれば、先づ其等一切具象的のものを統一し、而して更に其等をして漸次に進歩、發展せしめるやうに嚮導する處の正義がなければならぬ。然らざれば其等特殊相を具へた正義は、それが果して正義であるか否かも解らず、又其變遷推移も、唯單なる變化に過ぎずして、向上發展といふこともいへなくなるからである。而して其統一し嚮導する所の正義は唯一のもので、絶對のもので、不變のもである。それが理想的正義である。此理想的正義の實在は、私は之を否定するものでない。否私は前述の理由によつて私の經驗統一上、必ず之を認容せざるを得ないのである。私の前第三節、及本第四節

の正義及公平についての論述は、或は讀者各位をして、私は此統一、指導原理としての理想的正義、理想的公平の實在を否定するものにあらざるかといふ誤解を懷かしめることあらざるかを虞れ、茲に一言した所以である。若し夫れ其謂ふ所の理想的正義、理想的公平の如何なるものであつて、其等と具象的正義、具象的公平との關係は如何なるものであるかといふ問題は、本論の筋から懸隔して行く問題であるが故に、今は之を略する。

五

是から一轉して、右に述べた所の意味に於ける社會的正義が、現代社會の改造原理とならなければならぬ所以を論じやうと思ふ。

社會は第一に、學校教育並に新聞・雜誌・圖書館・博物館・各種の會合等、社會教育の普及並に進歩の爲に、國民の智識及道德の普及並に進歩を促がし、從て人生に關する「考へ」、即ち人生觀に變化を及ぼし、それと同時に國民間に於ける智識の分配に變動を來して、從て智識を重なる基礎として成立しつゝありし社會的階級の地盤に動搖を起さしめ、次ぎに外國に於ける思想及運動は、直接若しくは間接に、又暗々に、若しくは明々に國民の模倣心を刺激し、暗示を與へて從來の考へ方と、位置とに安住するを得ざらしめ、又列國との交際上、列國の形の勢の變化に應じて、或る程度まで自國をもそれ等に順應せしめねばならぬことから起る動搖、次ぎには人口が增殖することからと、今一つは世界市場に於ける物質の生產並に分配、及金融の緩急等の事情に順應せざるべからざることから、國民の生活狀態と、並に經濟活動とが起きる。而して此等の事情が起きて來たが爲に、國民が從來の社會組織に對して不安を感じ、何等か新しいものを望むやうになり、而してそれが社會意識となるに至れば、そこで社會は自分自らを改造しなければならぬと感ず

る樣になる。故に社會が自分自らを改造するといふのは、社會が内外二面の現實の事實に順應して、自分の生々存續を圖り其隆昌發展を期せんとする努力であるといふに他ならぬ。事態此くの如きに至れば、改造の機運は十分に熟した者である。人間のする改造運動とは、斯かる機運を促進し、指導し、改造を妨げ若しくはそれに不利なる事情を除き、それを進め、若しくはそれに有利なる狀態を養ひ、以て其改造をして、極めて圓滑に、著實に成就せしめる所の運動をいふのである。而して此場合其改造運動に於いて目標とすべきは社會的正義でなければならぬ。

何故に社會的正義が改造運動の目標とならなければならぬか。それはかうである。社會の改造とは一面からいへば、今述べたやうに、社會が新興の内的、外的事情に順應して、自己自らを生々存續せしめんとする努力であるといへるが他面から之を謂へば社會の各員の間に生じたる不平を除去して、其不平に對する囂々の聲を絶たしめることであるといへる。

然らば其謂ふ所の、社會の各員の間に生じたる不平とは如何なることであるかなれば、社會が本節の冒頭に擧げたるが如き種々の事情の爲めに脅威されて、現在の組織を變更しなければならぬやうになれば、社會が其各員に課したる所の職分も亦自然に變更せざるを得ざるやうになる。換言すれば各人の自由と權利との領域が變動せざるを得ざるやうになる。然るにそうした場合に於いて各員をして猶從來の通りの自由と權利との領域に止まらしめんとすれば、そこに不平が起らざるを得ない。其不平を取去て、社會の各員に新たなる事情に適應して、各其自由と權利とすべき職分を課するのが改造の眼目である。

或は言はん。改造の眼目は社會的正義などいふ局限されたものでなく、その他に猶社會的福祉等をも包含した所の、一層包括的な、一層完全的なものであるべき筈である。社會的正義だけではあまりに狹過ぎると、かやうにいふものも

あらん。此論は一應は尤もであるが、しかし是は改造の眼目と、常時に於ける社會完成の目標とを混同した所の議論である。吾々が社會の一員として其社會の完成を期することは、吾々が常時に於て斷えず爲さねばならぬことで、改造の場合に於いても勿論然りであるが、改造の時でない場合に於いても、同樣に勉めなければならぬことである。然るに社會改造の必要が焦眉の急となり、其機運が既に熟したといふことは、社會的正義の觀念が動搖し始めたといふことである。而して其社會的正義は、社會其者が成立する倫理的最小の限度であつて、其社會的正義が動搖してゐては社會は遂に崩壞することを免れない、そうした理由であるから、改造の際には、先づ何事を差措いても、社會的正義を眼目とし其確立を期さなければならぬ。之を家屋に譬へれば社會的正義が動搖しかけたといふことは、雨漏がした、土臺が弛みかけたといふやうな者で、家屋に於いて雨漏がしたり、土臺が弛みかけた場合には、何事を差措いても先づ其雨漏を防ぎ土臺を直す工夫をしなければならぬ。勿論その場合、そうした事をするにしても、可成だけ在來の圖案を壞さぬやうに可成だけ他の諸部分との調和を破らぬやうに、而して又可成だけ全體として美しからしめるやうに注意して修繕しなければならぬのであるが、しかし何といつても眼目は其雨漏を防ぎ、土臺を直すにあらねばならぬ。社會的正義が社會改造の原理とならなければならぬ理由も、大略そうしたものであると理解することが出來る。

六

私の此論の正見なることは、之を今日行はれつゝある改造運動に適用して見て、其妥當なるに徴しても解かると思ふ。今私は現代に於ける三大改造運動たる、普選運動勞働運動、及婦人運動の三者に適用して見て、私の論の道理に悖らざるを述べて見やうと思ふ。しかし斷つておくが、此改造原理から觀た此等三大運動の詳しい論評は、私の腹案では各一

論文を形成するに十分なる內容を有つてゐると考へてゐるが故に、今玆で論ずる所は、單に要領に過ぎないものであることを、看官各位に諒して貰ひたい。

普選運動は、其仔細の點に亙つての意見に至つては、我國の普選運動者の間にも種々齟齬してゐる點のあることは、昨年以來の運動で明瞭な事であるが、併し其眼目としてゐる大局の觀方、又は根本の意見に至ては略一致してゐるといふとが出來る。即ち先づ第一に納税額に依る制限をば全然撤廢してしまつて、複雜した國務の事に關し、略明瞭なる自己判斷をなし得るならんと推斷し得る年齡以上に達したる男子には、すべて衆議院議員の選擧權を與ふべしといふ點に於ては一致してゐる。さて此點だけについて考察するに、納税額の如何によつて、選擧權の資格を決定するといふことは英國に國會制度が始めて起つた事情から考察して、歴史的には多少意味もあるけれどもが、しかし西洋に於いても國會の性質に關する考へ方が段々變遷して來て、今日に於いては西洋に於いても其意味が甚だ薄弱になつて來て、終に支持することが出來ぬやうになり、多くの國に於いてはそれを撤廢するやうになつた。しかし西洋諸國の例は如何うでも可いとして、我が日本の帝國議會の倫理的性質から考へて、納税額の如何によつて、選擧權の有無を決定するといふことは其理由甚だ貧弱、殆ど支持するに困難であるやうに思ふ。(我が帝國議會の倫理的性質に關する愚見は、先年既に雜誌『丁酉倫理講演集』に、『立憲政治の根本義』と題して之を開陳しおいた。就いて參照あらんことを望む。)

かやうに納税額で繩張をして埒內、埒外を分ち、國民のある者、而かも少數のあるものゝみを其埒內に入れ、國民の他の一部、而かも多數の他の一部をば其埒外に立たしめておくことは、其繩張が確かに倫理的に意味のあるもの、存在の理由あるものとの社會意識がある間は、其埒外に立てゐるものも、それを當然として我慢もしやう、諦めもしやう、しかし其繩張は最早其倫理的意味と、存在の理由とを失てしまつてゐるといふ社會意識の起つた後に於いては、到底我

慢も諦めもし切れるものでない。況んや其埒外に立てる者が、自分達が國家の事に關して判斷し得る自分達の智力德力は、彼等埒内に在るものに較べて、何等遜色あるものでないと意識するやうになれば、其不平は愈昂じて來ざるを得ない。之を社會又は國家の側からいへばかうである。國家が從來國民の一部を其埒外に立たしめたのは、從前に於いては十分の理由があつての事であつたにしても、今は種々の事情からして其理由が甚だ薄弱になつたとすれば、國家は其變化した事情に應じて、彼等埒外に立てゐた人達に對して、當然新たなる職分を課して、彼等の自由と權利とをして、新たならしむべきである。かうした理由からいつて、普選の改造運動は社會的正義を目標としてゐると謂はざるを得ない。

しかし此社會的正義から觀たる普選の改造運動の意味は、原子觀個人主義の立場から觀た所のそれとは異つてゐる。原子觀個人主義の立場から觀た所の普選運動は、人は皆一樣に本來自由と權利とを有つてゐるものであるから、或一部にのみ參政權を與へ、他の一部にはそれを與へぬのは、本來不公平な事柄であると觀るか、若しくは學校教育、社會教育等の普及、進歩等によりて、國民の智德の進歩及分配に多大の變動を來たし、從來參政權の埒外に立たしめられてゐた人達も、十分に國家の事に參與し得るだけの智德を得るやうになつたとして、それを猶納稅額の制限で、何時までも其埒外に立たしめておくのは、個人の自由と權利とを侵害してゐるものである。かやうに觀るかである。而して原子觀個人主義では、唯かく觀るばかりで、それ以上の意味を有つてゐるものでない。然るに社會的正義から觀た所の改造の意味はそれだけでない。社會的正義からいつても、普選運動は個人の自由と權利とを尊重し、從て其個人的人格を尊重する所以であるに相違ないが、しかしそれだけでなく、其れと同時に國家自らが現在の動搖を鎭め、缺陷を補ひ、而してそれ自らを漸次完成の域へ進め、其最高目的たる倫理的使命を、出來るだけ完全に達成せしめんとする國家其者の爲であるといふ意味をも有つてゐる。故に國家が新たに生じたる不公平を除き、國民の各員をして各其所を得しめるやうに

努力しなければならぬが、如何にして其不公平を除くべきかの方法に至つては、國家自らが自己の倫理的使命を果たす上に於ける便否を標準として、國家自らが各其特殊の歷史及現實の事情に照らして考慮しなければならぬことである。それ故に此に普選運動が起てゐるにしても、其解決の方法は、單に直ちに普通選擧を即行するといふことが——勿論それも一つの解決の方法に相違ないのであるが、それが唯一可能なる方法でない、他にも解決の方法があることを合點して置かねばならぬのである。然らば日本の現在の普選運動に對して如何なる解決の方法があるか。是は本論の冒頭に論述しておいた通り、政治家、行政官吏達の考慮・研究すべき事柄で、私達學究の適當なる仕事でない。私達學究は唯其改造の原理を論定し、又其原理に照して、彼等の立てた設計、方法を批判すれば可いのである。

次ぎに勞働運動について考察して見やう。若し勞働者が、横着と怠惰とを恣にして、それで食へないから、何とかして貰はうと、社會又は國家に要求するのが勞働運動であつたなら、そんな勞働運動は一言の下に之をはねつけてしまうべきである。之に反して勞働者が如何に眞面目に忠實に働いても、到底人間らしい生活を生活して行くことが出來ないから、何とか改造して人間らしい生活をして行くことが出來るやうにして貰はうといふに至て、勞働運動はそれだけでも意義のある者になる。そうした勞働運動は勞働者側から觀れば自由なる人格者として、其の生存の權利を主張することであり、又之を適當に解決することは、國家又は社會の側から觀れば、富の生産てふ經濟組織の一部を永遠に健全に支持して、自己自身の生生存續を圖つて行く所以である。勞働運動は從來の原子觀個人主義に立脚した所の、經濟上の自由及權利の觀念に對して起した不平の心から生じた運動であつて、その原子觀個人主義の代りに、社會聯帶の上に立てられた所の、新しい事情に適應した經濟上の自由と權利とを獲得しやうといふ運動である。それだから勞働運動も亦、社會的正義を根據としてゐる、若しくはそれを目標としてゐる社會運動であるといふことが出來る。國家若しくは

社會が此勞働運動を適當に解決することは、一面からいへば是迄資本、嚴密にいへば私有的資本に對して不公平の取扱を受けてゐた勞働に對して、新しい事情に順應して、其當然の權利を認めてやることであり、他面からいへば、國家又は社會が、新興の事情に順應して其經濟組織を改造し、以て富の生産及分配をして澁滯なからしめる所以である。然らば現實の問題として、如何にせばそれが最も適當な解決になるか、そうした問題は、それは政治上に於けると同樣に、實際家、即ち官吏・實業家・社會指導家達の考慮すべき問題であつて、私達學徒の當面になすべき問題ではない。

最後に婦人運動に就て一瞥を與へて見やう。婦人運動は、其種類甚だ多岐に亘つてゐるが、其の眼目とする所は、社會の生活樣式の變動から、又婦人の智德の進歩發展から、彼等が從來當然居るべき處と定められてゐた位置から離れて其變動せる狀態、及進歩せる智德に相當した、新しい位置を與へて貰ひたいといふ點に存してゐる。家庭から社會への解放運動、家庭及社會に於ける婦人の位置の向上運動、母性保護運動等、皆上述の眼目を眼目として居らざるはなしである。社會生活の樣式は異つて來てをり、婦人の智德は、進歩して來てゐながら、唯婦人たるの故を以て一向に疎外せられ、男子のみが社會の人であるかのやうに横行するのは、彼等婦人に取つては堪へ難い苦痛であり、不滿であり、不平であり、又男子からいへば、男子の得手勝手の横暴であり、又婦人に對して侮辱を加へてゐるものである。而して彼の女子の不滿や不平やは、新興の事情に照して考へて見れば十分理由のある不滿・不平であつて、唯自然的情緒の自然的發動と觀るべきでない。又之を社會國家の側から觀るも、此新たなる情勢に鑑みて、適當なる位置を婦人に與へることは、國家自らが四圍の事情に順應して、其健全なる生存發達を遂げる所以で、從て個人及國家の兩面から見て、社會的正義を完うする所以である。

前既に述べたやうに「當然」具象的社會意識によつて承認せられたる「具象的當然」は、時・處・位を絶した所の、

「凡そ當然（ダス・ゾルレン）」てふものの根據に立てゐなければならぬことは勿論であるが、其れ以外に、すべて具象的事情に依て制約せられてゐるものである。從て具象的當然には定相がなく、時代によつて其相を異にしてゐるものである。三從・七去の教訓の如きも、今日から觀れば不當然千萬のものであるけれども、或る時代、或る社會に於てはそれ等でも立派な當然であつたのである。頑迷なる思想の所有者は女子の今日の有樣を其當然なる有樣であるとなし、そは永久に變へてならぬもののやうに考へてゐるやうであるが、是は具象的當然は、具象的事情に條づけられて、段々推移してゆくものであり、而して今や從來の當然を變化せしむべき事情が、新たに起つて來てゐることに眼を閉ぢてゐての妄見である。要するに婦人運動も其眼目とする所は、社會的正義に存してゐることが明瞭である。

以上で略私の此論文中に於いて言はんと欲する所を盡したるが故に、私は此に擱筆する。

（大正九・一一・四稿了）

「ロシア」革命と婦人の地位

法學博士　穗積重遠

一　婦人國有の噂

「ロシヤ」革命が起ると間もなく、過激派政府が婦人國有を命じたと云ふことが報道されたのは、讀者の記憶にまだ新たな所であらう。其後又「サラトフ市」では現に婦人の共有が實行されたと云ふので、同市の婦女公有條例とでも云ふべきものの條文まで傳へられた。私は此等の報道に接して一種不快な氣持がしたのである。革命其もの又先般の「ロシア」の革命に對する批判は暫く措いて、私は婦人の地位は時と共に向上するもの、即ち文明史の一面は婦人の地位の上進史であると信じ、又さうあれかしと祈つて居つた。而して從來の維新とか革命とか云ふべき政變は概ね婦人の地位向上の一階段をなして居る樣に思はれる。「フランス」革命が其好適例であることは疑ひない所であるが、又我國の女權擴張史の第一頁は明治維新によつて開かれたと云つて宜からう。例へば明治六年五月太政官布告第百六十二號で

『夫婦の際已むを得ざるの事故ありて、其婦離縁を請ふと雖も夫之を肯ぜず、之がため數年の久しきを經て終に婚期を失ひ、人民自由の權利を妨害するもの不少候。自今右樣の事件於有之は、婦の父兄弟或は親戚の内附添ひ、直に裁判所に訴出不苦候事。』

と宣言した如きは、妻の夫に對する絶對的屈從を『人民自由の權利を妨害するもの』と見たのであつて、此一布告だけ

でも明治維新の文化的價値を語るに足らう。更に近くは「ドイツ」革命の結果たる同國新憲法の第百九條には、『男子及ビ女子ハ原則トシテ公民トシテノ同一ノ權利ヲ有シ義務ヲ負フ』と規定して居る。然るに「ロシア」革命のみが此大勢に對する大逆轉を結果しやうとは、どうも信じられぬ所であり、又信じたくない所であつた。そこでどうかして尙ほ此點を確かめて見たいものと思つたのであるが、何分研究材料が手に入らぬので其儘になつて居たのである。

二 過激派政府の親族法典

然るに本年になつてから此問題に關係ある一資料が發表された。それは本年三月及び四月の The Contemporary Review に "Soviet Law of Marriage and the Family" と題して掲載された「ロシヤ」新政府制定の親族法典及び其理由書の英譯である。此一資料のみでは不充分なことは云ふまでもなく、又其後今日まで其法律が行はれて居るのかどうかは確實でないが、併し此材料自身は比較的信賴せられ得るものゝ樣であつて、これによつて革命當初の過激派政府の態度を知り得るのである。

革命前「ロシア」の法律の主要なものは、一八三二年「ニコラス」一世帝の治下に編纂された『法律全典』であつた。而してそれは如何に舊「ロシア」の法律にしても餘りに舊式なものであつて、一九〇三年頃既にこれに對する改正案が出來て居た位故、革命と共に此舊法が廢止されねばならぬのは固より當然である。そこで一九一七年十一月の新「ロシア」建國以來過激派政府は續々新法令を發布したが、其中纏まつた法典として第一番に出たのが前記の親族法典であつて、其日附は一九一八年九月十六日、即ち革命後一年にならぬ中である。此法典は二百四十六箇條から成り、第一章が出生登記婚姻登記死亡登記法、第二章が婚姻法、第三章が親子法、第四章が後見法で、親族法典として頗る完備したものである。

而して過激派政府としては早速出さねばならぬ筈の勞働法典よりも先きに此法典が出たのは注目すべき所であつて、過激派政府が親族關係問題——隨つて婦人の地位の問題——に相當に重きを置いて居ることを推測し得やう。以下此革命新法が婦人に如何なる地位を與へたか、それが革命前の舊法律に於ける婦人の地位から見て向上か逆轉かと云ふことを觀察したい。

三　宗教婚主義の打破

新法に於いて先づ第一に目に著くのは、舊法の宗教婚主義を全廢して所謂民事婚主義を採用したことである。革命前の「ロシア」では婚姻は全然教會の管轄であつて、教會で宗教上の儀式に從つて結婚しなければ婚姻は成立せぬのであつた。然るに宗教的勢力に對する反抗が革命の一眼目だつたのであつて、前記新法の理由書も『先づ第一に教會及び宗教から其の國家に於ける權威を剝奪せねばならぬ』と云つて居る。而して其爲めの重要手段として民事婚制度が採られたのである。民事婚と云ふのは、法律上の結婚手續をするだけで婚姻が成立し、宗教上風俗上の儀式を行つたか否か及び其先後を問はぬのであつて、我民法も其主義である。而して「ロシア」の新法は一定の手續を履んだ上で婚姻登記簿に登錄するによつて婚姻が成立するものとした。此の民事婚制度採用については新法制定の際も反對論があつた樣である。即ち理由書にも『官廳をして婚姻の登記を爲さしめると云ふ制度に對しては、此法典の審議に際して激しい非難が向けられた。婚姻の登錄——官僚的婚姻——これらも何等の社會主義ぞやと人々は叫んだ』と云つて居り、又婚姻を宗教的に行ふか法律的に行ふかを全然當事者の任意とするのが自由主義に適ふ所以だとの反對論もあつた樣である。併し其樣な手緩いことでは教會勢力を打破することは出來ぬと理由書は反對して居る。而して此民事婚主義採用は『フランス』革命の際

に行はれた『婚姻の還俗』(Sécularisation du mariage)と同一の現象であつて、一七九一年九月三日の「フランス」革命憲法が『婚姻ハ民事契約ニ外ナラザルモノト認ム』と宣言したのと同精神である。斯く宗教婚主義を打破したと云ふことはそれ自身婦人の地位の問題とは關係がなささうに見えるが、實はこれが婦人の地位の改善の出發點なのである。即ち正統的「クリスト」教義に於ける婦人觀婚姻觀はかなり婦人に取つて不利であること後にも述べる通りであるから、婚姻法が「クリスト」教の覊絆を脱したことは、やがて婦人に地位改善の自由が解放されたことになるのである。又革命前は婚姻の法則が各宗教の謂はゞ自治に委ねられて居た所から、例へば回教徒の如く其宗教が一夫多妻を許す場合には法律もそれを禁じなかつたのであるが、新法は重婚禁止即ち一夫一婦主義を明言して居るのであつて、而して其重婚禁止は各人の信教による例外なき絶對一般のものなのである。此點に於ても革命が婦人の地位を上進せしめたと云ふことが出來る。

四　自由結婚

更に新法について注目すべきのは『婚姻ハ契約當事者ノ合意ニ依リテノミ締結セラル』と規定して居ることである。これは『ノミ』と云ふ一語に重大なる意味を含ませて居るのであつて、即ち婚姻には父母の同意を要せぬと云ふのである。而して此自由結婚主義は舊法に對する大變革と云はねばならぬ。舊法は『父母後見人又ハ保佐人ノ許可無クシテ婚姻ヲ爲スコトヲ禁ズ』と規定して居た。而してそれには何等年齢上の制限が設けてないのであるから、男女共いくつになつても婚姻には父母の同意を得ねばならぬのであつた。尤も父母の同意は婚姻の絶對要件ではなかつたのであつて、父母の同意なくして爲された婚姻も婚姻としては有效に成立するのであるが、其代り當事者は父母の同意を得ずして結

婚したことに付き、又は相手方が父母の同意を得ないことを知りながらこれと結婚したことに付き、刑事上及び民事上の制裁を受けるのである。刑事上の制裁と云ふのは、四箇月以上八箇月以下の禁獄又は僧院幽閉であり、場合に依つては父母の同意無き女と結婚した男が誘拐罪に準じて「シベリア」流罪に處せられたこともあると云ふ。但しこれ等はいづれも親告罪であつて、父母から告訴した場合に限りて問題となるのである。民事上の制裁と云ふのは、父母の同意なくして結婚した子は其父母に對する相續權を喪ふことになつて居た。即ち刑事上も民事上もかなり重い制裁があつたのであるが、それが餘りに苛酷であると云ふことは既に革命前に於ても問題になつて居た。そこで新法は舊法とは全然反對の絕對自由結婚主義を採つたのであつて、其主義の善惡は暫らく別問題としても、此婚姻の自由が特に婦人に取つて有意義であつて、從來結局父母によつて結婚せしめられて居た婦人が解放されたと云ふ點は看過することを得ない。蓋しこれ亦婦人の地位の顯著なる上進である。況んや婦人を國有として强制的に結婚せしめると云ふが如きは『當事者ノ合意ニ依リテノミ』と云ふ新法の趣旨と相容れないこと無論であつて、後者を宣言した政府が他方では前者を命令したとは、如何にしても想像に苦しむのである。

五　婚姻障碍の撤去

結婚が自由になつたと云ふことの他の一面は、舊法が設けて居た種々の所謂婚姻障碍が撤去されたことである。例へば舊法では前述の通り婚姻を宗教的のものと觀た所から、宗教の相違に因る婚姻障碍があつた。即ち「ロシア」正教會(「ギリシヤ」教會)又は「ローマ」教會に屬する「ロシヤ」人が非「クリスト」教徒と結婚すること及び新教徒たる「ロシア」人が「ユデア」教徒及び回教徒以外の異教徒と結婚することは禁じられて居た。然るに新法は『當事者間ノ信教ノ

相違ハ婚姻障碍タルコトヲ得ズ』と明言して居る。又舊法は近親結婚の禁止の範圍について各宗教の教義に從ふことゝして居たので、概して禁止の範圍が頗る廣かつた。即ち正教會では六親等内の血族及び四親等内の姻族（即ち我國の民法で親族とするもの全體よりも少しく廣い範圍）の相婚を禁じ、又所謂靈的親族即ち教父母（名附親）と子又は實父母との間の婚姻をも禁止した。然るに新法は直系血族間及び兄弟姉妹間の相婚を禁じたのみで、伯叔父と姪又は伯叔母と甥との婚姻を許し、又姻族間の婚姻には何等の制限をも設けなかつた。即ち極端から極端に飛んだのであつた。次に舊法では高級の僧侶の結婚は禁止され、又文官軍人共結婚に所屬長官の許可を要したが、新法は何等斯の如き制限を設けない。更に舊法には『第四回目ノ結婚ハ之ヲ禁ズ』とあつて、各人生涯三回きり結婚を繰返し得なかつたのであるが、新法は一切此種の再婚制限規定を設けなかつた。要するに新法は此等の點に於て舊法の窮屈さを脫却したのであつて、理由書は『すべての族長政治式封建的婚姻障碍を一掃した』と自慢して居る。而して斯く結婚が自由になつたことは、直接に婦人のみの利益に關することではないが、兎に角これ又婦人の地位上進の一方面と云ひ得るのである。

六　離婚の自由

「ロシア」革命が同國の婚姻法に及ぼした最大の影響の一つは、離婚が自由になつたことである。前述の通り革命前の舊法は婚姻を宗教的のものと見たのであるから、離婚の許否も各宗教の教義に從つた。而して正教會の教義は「クリスト」教の根本義に應じて離婚を嚴重に制限する主義を採り、離婚は宗教裁判所の判決によつてのみ許さるべきものとし、裁判所が離婚の判決をするのは小數の重大な原因が存する場合のみに限つた。然るに新法に於ては宗教の如何に拘らず離婚はなるべく夫婦の意思に任せて自由ならしめる方針を採り、即ち裁判所へ持ち出さずに夫婦間の協議で離婚す

ることを許した。而して夫婦の一方が離婚を承諾せぬ場合には他方民事裁判所へ離婚の訴を起すことが出來るのであつて、裁判所が離婚を許し得る場合に付ては何等の制限なく、相當の理由ありとさへ認めれば離婚判決を爲し得るのである。斯く離婚を容易にしたこと、殊に協議離婚制度を採用したことは、單に「ロシア」舊法に對してのみならず歐米諸國法一般に對して革命的と云ふべきである。（我國の離婚制度は殆ど此革命的離婚法と同樣に自由離婚主義である。）これは「フランス」革命後直ちに一七九二年九月二十日の法律で協議離婚制度が新設されたのと正に同一現象で、偶然か必然か『歷史は繰返すもの』である。而して斯く離婚を自由にしたことは婦人の地位の改善上頗る有意義なのであつて、婦人はこれによつて男子の壓制に對抗する最後の手段を確保されたのである。

七　夫婦の對等

革命前の「ロシア」舊法は夫婦關係の規定に於て頗る舊式であつた。例へば、

『夫ハ妻ヲ其一身ノ如クニ愛シ、之ト相和合シテ生活シ、之ヲ尊重シ、之ヲ保護シ、其缺點ヲ宥恕シ、而シテ其疾病ニ際シテハ其輕快ヲ圖ルベキ義務ヲ負フ。』

『妻ハ夫ヲ家長トシテ之ニ服從シ、愛ト尊敬ト無限ノ從順トヲ以テ之ニ附隨シ、主婦トシテノ懇切ト忠實トヲ示スベシ。』

『妻ハ主トシテ夫ノ意思ニ服從スベキモノナルモ、之ニ因リテ父母ニ對スル服從義務ヲ免カルヽモノニアラズ。』

と云ふ三箇條の如き、いづれも女大學式の道德訓であつて、これが即ち正統的「クリスト」教義の婚姻觀である。然るに新法は舊法の此夫唱婦隨主義を否認すること、理由書中の左の一節を讀んでも明白である。

「法典は婚姻法の範圍に於て男女間に完全な同等を樹立した。即ち社會主義的秩序が確立する前の過渡期に於て出來得る限りの自由を婦人に與へたのである。而して斯くすることによつて婦人解放の社會主義的理想に一層善く適合する様婦人を導かんとするのである。」

而して新法の此夫婦對等主義が最も露骨に現はれて居るのは、夫婦の同居に關する規定である。舊法は夫婦間の同居義務を規定し、夫が住所を轉じた場合には妻はこれに隨從せねばならぬことゝした。これは單に舊「ロシア」のみならず現在の諸國の婚姻制度に於て大體同一に歸着する所である。然るに新法は此點に於て一新機軸を出し、『配偶者ノ一方ノ住所ノ變更ハ他方ニ隨從ノ義務ヲ生ズルコトナシ』と規定して居る。又婦人は結婚すると其娘時代の姓を棄てゝ夫の姓を名乘るのが、單に革命前の「ロシア」のみならず世間一統の通例である。然るに新法は此場合にも夫婦の對等を徹底させた。即ち、

『婚姻關係ニ在ル男女ハ同一ノ姓ヲ稱スベシ。婚姻手續執行ノ際當事者ハ、夫タルベキ者ノ姓、妻タルベキ者ノ姓、又ハ兩姓ヲ結合セルモノヲ、今後ノ姓トスベキ旨ヲ表示スルコトヲ得。』

と規定した。これを日本の姓にして例へて見るならば、森太郎と林花子とが結婚する場合に、夫婦は以後森太郎森花子と稱すべきか、將た兩人共改姓して森林又は林森となるべきかと云ふことを、兩人の相談できめるのである。又「ロシア」人と外國人とが結婚した場合にも、妻は當然には（即ち特に歸化の手續でもしなければ）夫の國籍に轉じないことになつて居る。其他財產關係に於ても扶養關係に於ても夫婦は全然對等になつて居るのである。

八　好奇心の失望と理性人情の安堵

之を要するに一九一八年九月十六日の親族法典を通して現はれた「ロシヤ」勞農政府の婦人觀は、女權擴張史上百尺竿頭更に一歩を進めたのである。成程過激派の地方的末輩は革命騷ぎのどさくさ紛れに婦人に對する亂暴狼藉を働いたかも知れぬが、法典理由書に『婚姻法の範圍に於ては男女間の完全なる平等を確立した』と自讃して居る女權論者が、他方では婦人の人格を全然無視して男子の共有物たらしめ、『新法典は子を生むことを以て婚姻の目的とはせぬ』と明言して居る理想家が、婦人を以て產兒機械に過ぎぬものと見ると云ふことは、如何にしても受取れぬ話である。即ちかの婦人國有の噂の如きも、　は好事者流の虛構ではあるまいかとまで考へられる。少くも此革命第一年の新法典に現はれた所では、所謂過激派の過激を以てしても人生共同生活の基本たる一夫一婦の婚姻制度は覆し得ず、却つて人類進步の大勢たる婦人の地位の向上を促進して居るのであつて、婦人國有の噂が先入となつて居る我々の好奇心は失望させられるが、我々の理性と人情とは稍や安堵するのである。

ロシアの共産土曜

室伏高信

一

○○の葡萄酒は新らしい壜に盛られなくてはならぬ、といふ一言を、私はクララ・ツエトキンの小冊子から見出すことができた。女史はマルトフやカウツキーを反駁するために、そしてレニンを辯護するために、○○の葡萄酒は新らしき壜に盛られなくてはならないといつたのであつた。も一度いふと、○○の葡萄酒は古るき制度のうちに盛ることはできない、それは『獨裁政治』の新らしき壜に盛らなくてはならないといふのであつた。そしてこの獨裁政治――彼女に從へば、『無情殘酷なる獨裁政治』から、彼女の謂ふところの『民主主義の美しい夢』へと行くことが、ボルシェヴヰズムの行路であつた。かくしてクララ・ツエトキンに從へばボルシェヴヰズムこそ『民主主義の美しい夢』への『無情殘酷』なる道程であつた。私たちは果してかゝる無情殘酷なる道程から、民主主義の美しい夢へと行くことができるであらうか。私はこの大なる疑問のうちにたゞ一つ、民主主義の美しい夢が、モスコーの荒野のうちに、朦朧として現はれつゝあることを見る。『共産土曜』といふ一つの小さい出來事こそ、彼女の謂ふところの『民主主義の美しい夢』、その夢への道ではないであらうか。私をして、否レニンをして先づこの美しき夢について語るところあらしめよ。

二

私は『共産土曜』について語る前に先づヤゴビイの言葉について語らなくてはならぬ。彼れは獨逸帝國の勃興期における卓越した中等階級的民主主義者の一人であつた。彼れは中等階級的民主主義者ではあつたが、彼れは愛國狂でもなかつたし、國民的自由主義者でもなかつた。彼れの時代に獨逸は普墺戰爭の勝利者であつた。そしてまた彼れの時代に獨逸において勞働組合が生れた。彼れは一八七〇―一年の戰爭の後に次のごとく述べたことがあつた、勞働組合の誕生はキヨーニグラーツの戰ひよりもより偉大なる歷史的價値をもつてゐるのであると。彼れは正しかつた。キヨーニグラーツの戰ひは普國のために決定的の勝利を與へたにしても、それは普國と墺國との、何れが獨逸の資本主義帝國の指導權を掌握するかを決定したに過ぎなかつたに對し、勞働組合の誕生は、勞働階級の世界的勝利への一步短いながらも一步であるからである。その同じことが『共産土曜』についてもいふことができる。然り、一九一九年五月十日モスコウ、カザン鐵道の勞働者によつて創始された第一回の『共産土曜』は、ヒンデンブルグや、フオッシユや、または英國やの、一九一四―一八年における帝國主義的戰爭における勝利よりも、より偉大なる歷史的重要性をもつてゐるものである。何となれば世界戰爭は英米佛の百萬弗長者の利益のための、勞働者の數百萬の殺戮を意味してゐるものであり、そして死滅しつゝある資本家制度の殘虐性を示してゐるものであるに過ぎないのに對し、モスコウ、カザン鐵道從業者の『共産土曜』は、あらゆる地上人の人民を資本主義の羈絆から解放し、そして戰爭に終焉を與へるところの新社會の萌芽であるからである。――レニンは彼れの有名な『共産土曜論』のうちでかくのごとくに述べてゐる。人々は、レニンの支持者も、その反對者も、彼れのこの言葉のうちに、動かすべからざる確信の存在することを見るであらう。然らば『共産

土曜』とは何か。レニンをして先づ『共産土曜』の何ものであるかを語らしめなくてはならぬ。

三

『共産土曜』は最初にモスコウ、カザン鐵道の共産黨員によつて始められたものである。モスコウ、カザン鐵道の共産黨支部は、革命後における産業上の困難に面しながら、特に鐵道運輸業の困難なる事業に面しながら、五月七日（一九一九年）次のような決議を通過した。そは新社會の建設の大業にとつて、何ものにも增して重要な決議であると思ふからその全文を掲げるのであるが、その決議に曰く『われ等の階級的敵對者と戰ふことの必要から生れ出でた危險な地位に鑑みて共産黨員並にその友僚は彼等の閑暇の一時間を捨てる——他の言葉でいへば一日の勞働に一時間を加へることを決議する。餘剩時間——全體で六時間——を一所にして土曜日に働くべきである。われ〱と同じく、共産黨員は健康と生命との危險を冒してまでも、革命のために働くことを信じつゝ、われ〱は少くとも無報酬で餘剩時間の勞働をなさなくてはならいと考へる。『共産土曜』はコルチヤクに對する完全なる勝利を見るに至るまではこの全支部を通じて嚴守されるであらう』と。この決議があつてから三日目に土曜日がきた。そは一九一九年五月十日であつた。『共産土曜』はこの日に始められたのである。この日、モスコウ、カザン鐵道の共産黨員並にその友僚によつて『共産土曜』の第一日が實驗された。勞働に加はつたものはモスコウで百卅六人、ペロウオで六十九人、合せて二百〇五人である。彼等の手によつてなされた勞働の結果についてはこゝに省略するであらうが、そはレニンの計算してゐるところに從へば、五百萬留に値ひするものである。そして勞働の行程は、積荷において普通の勞働よりは二百七十パアセントだけ勝り、その他においても略〻同一の成績を擧げた。そは職工長の陳述に從へば、普通の無智の、不注意な勞働者の一週間分の勞働

に匹敵するものであつたと。以上はモスコウ、カザン鐵道勞働者の一例であるが、五月廿日、プラウダ紙には、更に同樣な勞働が他の方面においても行はれつゝあることが報ぜられた。レニンはその『共產土曜論』のうちにこのプラウダからの拔萃を擧げた。その拔萃に曰く、この種の事件は稀なことではない。同樣なことが電氣事業においても各種の鐵道においても爲されてきた。ニコライ鐵道では、共產黨員が脫線した機關車を引起すために數日間引續き終夜の勞働をなした。北部鐵道では、共產黨員並にその仲間が鐵道線路の雪掻きのために土曜の數日を終日働いた。多くの貨物停車場における共產黨の支部は每夜貨物の盜難を防ぐために徹宵した。……この手本は旣に摸倣者を見出した。そしてそれの影響は益々各地に蔓延しつゝある。アレキサンダア鐵道の共產黨員とその仲間との總會では軍事上の關係を慮つて次のごとき決議を通過した。一、五月十七日からこの鐵道に共產土曜を設けること。二、共產黨員は仕事が如何にして爲されるべきか、並に近代的道具と材料をもつて何ごとを仕遂げべきかについての模範を示さなくてはならぬことの二つがこれである。

カザンにおけるわれ等の同僚の陳述に從へば彼等の範例は非常な感激を與へた。そして將來に來るべき土曜日においては共產黨外の非常な多數の勞働者がこの例に倣ふであらうと期待されてゐる。この陳述が書かれてゐた時にはアレキサンダア鐵道の工場における義勇的勞働はまだ始まつてはゐなかつた。しかし旣に單なる無報酬勞働の報告だけで共產黨に入つてゐない勞働者に非常な刺激を與へた。「われ〳〵も知つてゐたら貴公等と一所に仕事に加つたであらう。」「次の土曜日にはわれ〳〵もやるだらう」、といふような叫びが各方面から聞くことができた。共產黨員によつて黨外の人々に與へられた印象は恐ろしきほどのものがあつた。

カザンにおける人々の範例は各所の共產黨支部によつて摸倣されるに相違ない。モスコウ管區における共產黨員ばか

りではなしに、全ロシアの全共産黨がこれに倣はなくてはならぬ。村落においてもまた共産黨員は赤衛軍の兵卒の田園を耕作し並にその家族を援助することの指導者とならなくてはならぬ。

カザンにおける共産黨員は『インタナショナル』の歌を歌ふことによつて彼等の第一回の共産土曜を終つた。若し全ロシアの共産黨員がカザンの例に倣ふとしたら、そして斷乎として彼等の仕事を遂行したとしたら、ロシア・ソビエット共和國の面前に横はる困難は近き將來において解決し、そして『インタナショナル』の曲調はこの國のあらゆる工場において聞くことができるであらう。働け、共産黨の同僚よ！』その後、五月二十三日になつて、プラウダ紙はアレキサンダア鐵道における『共産土曜』について更に他の新らしき記事を掲げた。それによるとこの鐵道で行はれた最初の『共産土曜』は五月十七日であつた。九十八人の共産黨員並にその僚友はその總會の決議によつて五時間のオウバアタイムを無報酬で働いた。仕事の用意は充分に整つてはゐなかつたのであるが、普通の生産量に比べると二倍だけの結果がえられた。ある點では三倍にも達した。二十人の不熟練勞働者が、一個三プード半もする、そして全體で八百四十五プードの貨車の發條を四時間のうちに運んでしまつた。それは實に三百パアセントの生産増加を意味するものであるとのことである。そして共産黨に屬せざる人々から、『共産土曜』を援助するの希望を申出るに至つたと。

四

かくして『共産土曜』は始められた。それは先づ勞働者自身によつて始められた。次にそれは無報酬の勞働である。第三にそれは義勇的自發的の無報酬である。そして第四にこの種の勞働が如何に愉快に行はれたかを見なくてはならぬ。即ち

それが如何に美しき民主主義の夢であつたかを見なくてはならぬ。私はこの點を彼等勞働者——共産土曜勞働者自身の口から聽かなくてはならない。一共産黨員デアチェンコは七月七日のプラウダ紙にその手記『共産土曜の記』を掲げて曰く、『私は共産黨の決議に從つて、土曜日一日の仕事を同僚等とともに愉快に始めた……私たちは古い知人等と會ひました。お互に會釋を交はし、二三の戲談も交へました。勞働者の數——それは三十人でした。……私達の前には六百プードから七百プードに亙る非常に重い機關車のボイラアが横はつてゐました。そしてそは一基米の距離にある第四の場所から第三の場所へと移されなければならないものであつた。私たちは躊躇し始めました。しかし私たちは直に仕事にとりかゝりました。同僚等は木製ローラーを汽罐の下に入れ、それに二本の綱を結付け、それで仕事が始まりました。……汽罐はいや〳〵動いたが、しかし私たちは嬉しかつたのです……私たちは私たちの監督の指圖のもとに一時間程猛烈に働きました。汽罐はだん〳〵と遠方へ動きました。しかし不意に綱がきれた……………一寸休止しました。私たちは別の綱を結付けた。……私たちは小山を登らなくてはならなかつた。そしてそれで私たちの仕事は終りました。私たちの手の皮は火のように熱した。私たちは暑い。私たちは引張り、そして汽罐が動く！管理者は立つて見てゐる。彼れは私たちの成功を喜び、そして時々手傳ひました。……赤衞軍の一人が手にハーモニカをもちながら私たちを見つめてゐた。彼れはどう思つてゐたのでしようか？「この人達はどういふ種類の人民だらうか？何故に他のものが家で休んでゐるのにこの人達は土曜日に働いてゐるのであらうか？と彼れは獨言をいつてはゐなかつたであらうか。……私は彼れの疑問を解き、そして彼れに告げました。友よ……私たちは勞働者であるばかりではなしに、完全な共産黨員であるのだ。貴下は私たちがどうして私たちの仕事に成功したかを知らないのか。私たちは懶惰ではない。勤勉力行の勞働者であると。赤衞軍の兵士は彼れの道具を片づけて、私たちのそばで綱を引張るようになりました。仲間のWがその朗ら

かな中音で仕事の歌(Der Engländer Schlan)を「クナッペル」から歌ひ始め、私たちはその合唱に加はりました。

私たちの筋肉は異常なる骨折りで疲勞しました。私たちの肩と背とは痛む、しかし私たちは私たちの前に一日の休日が控えてゐます。そして私たちは眠つて私たちの勞苦を癒やすことができる。私たちの目的地は近きにある。それからも少しの努力の後に汽罐はプラットフォームのうへに着きました。その下に板を敷き、それはそれの置かるべきところに置かれ、そして豫期の仕事をなすべき用意が整ひました。

私たちは支部の俱樂部室へ行きました。そこは電燈で明るく、揭示がされ、そして多くの綫銃が容れてある。「インタナショナル」を歌つた後に私たちは、所謂ラム酒及びパンとともに茶を喫しました。この地方の同僚によつて供せられた保養は私たちの辛苦な仕事の後に非常にありがたいものでありました。そこで私たちはこの同僚に夜の挨拶をなし、そして勢揃ひをしてから出發しました。夜の靜寂は革命の歌とそして律動的な進み行く足音で破られたのでした。

一週間過ぎました。私たちの腕と私たちの肩とは今や勞苦に堪えることができます。私たちは九基米彼方の私たちの仕事――貨車製造――に向ひました。私たちの同僚等は車の屋根で愉快に、そして「インタナショナル」を快活に歌つてゐます。公衆は靜聽し、そして明らかに驚いてゐます。車は輕々として走り、私たち屋根に登る暇のなかつたものは掛臺にかぢり付いてゐる、私たち一行は目的地に着き、そしてコムミサール氏と會ひました。仕事は多く、そして多數の人がない！たつた三十人の勞働者、そして修繕すべき澤山の貨車がある。そこには車輪が四面に置かれてゐる。空車が物置に一杯に。しかし同僚等よ、私たちは直ぐに直ほすであらう！

仕事は進む。私とそして五人の同僚は挺子で働く。六七十プードもあるタイヤが一方の線路から他方のそれへと移されました。廢物は大匙に入れられ、起重機がもち揚げて線路の外へ積み上げる。鐵槌が闇中で鳴る。同僚等は蜂のよう

に急がしく破損した車において働く。……仕事は進行する。夜は益々闇くなり、松明は益々赤く輝く。私たちは仕事を終つた。私たちの同僚のあるものは、片隅の方に蹲まつて熱い茶を啜る。五月の夜は冷たい。絃月は空に白くかゝつてゐます……』と。これ實に土曜勞働者の一人が、彼れ自身の勞働共産土曜の實驗についての記述であつた。何といふ確信に滿ちた、何といふ享樂的な、そして何といふ犧牲的な勞働であらう！ウヰリアム・モリスの『ニュース、フロム、ノーホエア』を論じたものは、『共産土曜』においてモリスの理想郷におけるがごとき、活々した愉快な享樂的な勞働――モリスの謂ふところの『勞働においての享樂』を思ひ浮べずにはゐられないであらう。モスクバの荒野において、野獸のごとくに思はれてゐる（一部の人々から）ボルシエヴヰキの治世において、この勞働の享樂と、この新社會への確信と、この無報酬の非利己的な精神とが、饑餓と混亂と艱難との間から生れつゝあることを、私たちはどうして不注意に見逃してゆくことができるであらうか。私たちがボルシエヴヰズムの支持者であるにせよ、またはないにせよ、『共産土曜』のうちに體現されつゝある、偉大なる精神を見ることができなかつたとしたら、そは疑もなく[redacted]べき道德的世界の偉大さを思ふことのできない人々でなくてはならぬ。

五

私たちは、資本主義の世界において、かくのごとき犧牲的精神を見ることができるであらうか。私たちは資本主義の腐敗した空氣のうちに、かくのごとき高貴なる道德的精神の發現を見ることができるであらうか。ストライキと、サボタージと、市街戰と、あらゆる忌はしき現代資本主義の現象を、私たちはどうして避けることができるであらうか。私たちは一方に安逸と怠慢とそして同時に利己的にして驕慢なる支配階級の存在するを見る。そしてまたこの支配階級の

面前において、彼れの勞働を出來るだけ少くし、彼れの報酬を出來るだけ多くするために苦心しつゝある多くの勞働者の存在することを見る。かくのごとき社會、かくのごとき墮落した社會、かくのごとき利己的な社會が人類を滅亡に導かないものと考へることができるであらうか。私は甞つて他の場所で次のように述べたことがあつた。『ブルヂョア文明は決して最初からその一切が腐つてゐたものといふことはできない。それは人類に自由を敎へたことにおいて不朽に貴重な光をもつてゐるものである。私たちがゲーテや、シルレルや、バイロンや、ベートベンや、そしてシエレイ等の名を思ふ時に、どうしてブルヂョア文明の一切を土とともに葬りさることができるであらう』としかしブルヂョア文明においての自由が商業主義を伴つてきたものであることを、私たちは忘れてはならない。商業主義こそ實に中世紀における人間の藝術的生活、勞働においての享樂、勞働と人格との偕調の破壞者であつたのである。そしてそはその衰頽期とともに、人間の藝術的な、自由を慾求する精神の前に、堪えがたい虛僞と墮落と嬌慢と混亂の世界となつてしまつたのである。この虛僞と墮落と嬌慢と混亂の世界を『共産土曜』に比較して考へる時に、私たちは恥恥とそして感激とを思はないでゐることができるであらうか。一つは勞働を避けんとする世界であり、他は勞働を慾求する世界である。一つは勞働を苦痛とする世界であり、他は勞働を享樂とする世界である。一つは報酬のための勞働の世界であり、他は勞働の目的のうちに感激を見出しつゝある世界である。一つは生産減少の世界であり、他は生産の二倍、三倍する世界である。然り前者は舊世界であり、後者は新社會の先驅者である。常に空虛なる道德を口にすることによつて彼れ自身を辯護しつゝある支配階級とその辯護者とは、この二つの社會に對する道德的批判において、果して彼れ自身を辯護するの勇氣があるであらうか。私は率直にいふであらう、私が『共産土曜』といふ一つの小さい出來事——實にそは共分量において小さい一つの出來事である——をもつて新社會の萌芽であるとするとに於てレニンと意見を同じうするものであ

るといふことを。否、一切のブルヂョア文明の謳歌者と雖も、彼れが若しバイロンに、シエレイに、シルレルに、ベートベンに、ゲーテに歸ることを忘れなかつたとしたならば、この小さな一つの出來事——ロシアにおける少數の勞働者の手によつて始められた一つの小さい出來事のうちに私たちの明日を見ないではゐられないであらう。そは勞働者によつて始められた。モスコウ、カザンにおける勞働者それ自身によつて始められたのである。レニンはその『共產土曜論』のうちにおいて曰く、資本主義から社會主義への道はたゞ勞働階級によつて、そしてそれによつてのみ進めることができると。私たちはかくのごとき狹隘なる精神の持主であることはできないであらう。しかし私は次の一點においてはレニンと全然一致することができるのである。レニンは『共產土曜論』において曰く、『共產土曜』は勞働者彼れ自身によつてもちきたされたがゆえに非常に重要であるのであると。そは勞働者によつてもちきたされたがために、勞働者の精神のうちに彼等が來るべき新社會をその手によつて開拓せんとする貴重なる責任感の存在してゐることを示してゐるものであるとともに、また彼等勞働者によつて新社會なるものが非利己的な世界であると感ぜられてゐることを示してゐるものであるからである。この非利己的な、犧牲的な、高度の道德的世界への萠芽として、私たちはモスイ本の野における一つの小さい出來事『共產土曜』を見出してゐるものである。

六

しかし私が『共產土曜』といふ時に、私は決してボルシェヴヰズムを思ふてゐるのではない。私は勿論この『共產土曜』がボルシェヴヰキの治世において生れたといふことを述べたに相違ない。しかしボルシェヴヰキ治世に生れたことはその一切がボルシェヴヰズムの原理を體現してゐるものといふことはできないのである。『共產土曜』は、勿論資本主

義の腐つた空氣のうちから生れることはできないであらう。また『共産土曜』の出現は、ボルシェヴヰキのような革命的精神の幻想のうちからでなくては生れ出でることができなかつたかも知れない。クロムウエルの革命軍のうちから民主主義の原理が生れたがごとくにボルシェヴヰキの革命的大運動のうちから『共産土曜』が生れたといふことができるかも知れない。しかしボルシェヴヰズムの原理はどこまでも獨裁政治、勞働階級の獨裁政治である。レニンに從へば、勞働階級のなすべき仕事は二重である。その一つは資本主義の打破である。彼れの言葉通りにいへば勞働階級は資本主義に對する革命的戰爭におけるそれのヒロイズムによつて、勞働被絞取階級の一切を導き、それを組織し、ブルヂョア階級の轉覆とそしてあらゆる種類の抵抗の完全なる破壞とに導かなくてはならぬのである、がそれとともにそはまた全勞働者と小ブルヂョア階級とを率ゐて新しき社會的結合、新らしき勞働の訓練、新らしき勞働の組織を創造しなくてはならぬ。そして後者の仕事こそ一層困難な仕事である。何となればそは單なるヒロイズムや狂熱で解決のできるものではないからである。そは遙に多くの忍耐と不屈の勇氣とを要するものであり、そしてそは遙に多く本質的な仕事であつて、この事業によつてのみ勝利の永續と安定との保障をうることができる。それゆえに『共産土曜』は深き歷史的の意義をもつてゐるのであると。この二重の仕事のうちで、第一の仕事、即ち資本主義制度の打破の事業はロシアにおいて今正に進行中である。ロシアソヴヰエット政府の轉覆說は幾度となく傳へられたのにもかゝわらず、またゴルキーも指摘してゐるとほり。英國とフランスとによつて代表されるヨオロッパはロシアを絞め殺すべく努力しつゝあるにもかゝわらず、レニン政府は今ま三周年の冬を迎えてゐるのであつて、この間における彼等の根強き活動と艱難に堪え忍ぶ勇氣とは實に驚異に値ひするものがあるのである。嘗つて『共産黨宣言』の著者はその末尾において、支配階級をして共産革命のもとに戰慄せしめよといつたことがあつたが、この『共産黨宣言』の目的はボルシェヴヰキ革命において完全

に實行されてゐのを見る。そこでクララ・ツエトキンに從へば、この殘酷無情なる獨裁政治から、明日の民主主義の美しい夢が生れるとのことである。またレニンに從へばこの勞働階級の『第一の事業』の後に、『共産土曜』が生れるといふのである。しかしボルシェヴヰズムの原理はどこまでも獨裁政治であることは既に述べたとほりである。それが獨裁政治から第二の舞臺へと移つた時にはそは最早やボルシェヴヰズムではありえない。勿論私はボルシェヴヰズムの『無情殘酷』なる獨裁政治が『共産土曜』のような『民主主義の美しい夢』と兩立ができないといはうとしてゐるのではない。私のいはんとしてゐることは『共産土曜』とボルシェヴヰズムとの間に理論的必然關係が存在してゐないといふことである。繰返していへば私がこゝに述べつゝあるものはボルシェヴヰズムについてゞはなくして、たゞボルェヴヰキのロシアにおいて生れ出でた一つの小さい出來事、モスクワの野に、冷たい五月の夜、絃月の白い光をあびつゝ、その一日の艱難にして無報酬な勞働のうちに、彼れの最大の滿足と誇りとを思ひつゝ、疲れた歸路を辿りゆく、純眞にして清高なる勞働者によつて始められた小さい一つの出來事、その出來事のもつてゐる意義、そしてその道德的價値についてゞある。

七

ボルシヴヰズムそのものゝもとに行はれてゐる道德的標準は『働かないものは食はない』といふ一つの原則、そして第二の原則は『萬人がパンをもつまでは何人も菓子をもつてはならぬ』といふことである。資本主義のもとにおいては、働かないものが食ふ。否な働かないものこそよりよく食べてゐるのであつて、その一方には、彼れの全力を傾けて働きつゝ飢餓に瀕する多くの貧しき人々を見るであらう。また勞働せんとするも職を失ひてその日〳〵のパンに窮しつ

つゝある幾多の不幸なる勞働者の存在する一方に酒と卑しき事業と、そしてあらゆる不道德と專横とに耽りつゝある人々の存在するのを見るであらう。だからレニンのいつてゐるとほり資本主義は飢餓のうへに建てられた制度であるといふことができるのであつて、この働かないものがよりよく喰ひつゝある資本主義の道德標準に比べる時は、少くとも働かないものは食はないといふことが、より高き道德であることを拒むわけにはゆかないであらう。また多くの人々が飢餓に瀕しつゝある時に美衣美食に耽りつゝあるものゝ存在する社會に比べると、凡てのものがパンを手にするまで、何人も一片の菓子をも手にしないといふ社會は、より高き道德的社會でなくてはならないであらう。しかし働かないものが食はないといふ原則、そして凡ての人がパンをもつまでは菓子をもたないといふ原則は、それが所有することなき勞働者によつて、その勞働者の權力によつて强制されつゝある時に、私達はこの二大原則の背後に尙ほ二つの陰影の存在するのを見るであらう。その一つは勞働階級によつての階級鬪爭である。他の一つは權力によつての强制である。かくのごとき鬪爭と强制の世界においては、一面には、少くとも古るき害惡に對する破壞が行はれるであらうが、またその半面においては、鬪爭と强制とに伴ふて起る幾多の新らたなる害惡を計へなくてはならないであらう。そしてその害惡の最大のものこそ實に自由の破壞でなくてはならない。レニンに從へば、資本主義から社會主義への問題を解決するために自由や、平等や、民主主義やの一般的觀念から出發するものは小ブルヂョアとしての、並に俗學者としての僞りなき性質を示現してゐるものであると(『共產主義論』十六頁)しかし高度に發達した民主主義的精神は斷乎としてかくのごとき自由に對する、從つて人格に對する侮辱に抗議しないではゐないであらう。私たちの求めるものは勞働者階級の獨裁政治でもなく、レニンの謂ふところの『一人の獨裁政治』でもなく、自由と平等と民主主義との侮辱でもなくして、否、自由と平等のと民主主義との培養であらねばならぬ。レニンのごとき鬪爭の熱狂者にとつては、自由と民主主義と

の眞實の價値は考へ及ぶことはできないであらう。そしてボルシェヴヰズムの原理においては、自由と平等と民主主義とはその眞價を認められることができないのである。かくのごとき社會においては、その道德的標準は働かないものは食はない。そして凡ての人がパンをもつまでは何人も菓子をもつてはならないといふ原則の强制される狀態よりも、より以上のものへとゆくことはできないのである。かくのごときボルシェヴヰズムの原則に比べて『共産主義』は更に遙により高き道德的世界且つ創造的世界ではないであらうか。それは既に無强制のうちに勞働者自らが、彼等の手に[redacted]を擔ふべきことの、强烈なる責任感から生れたる犧牲的精神の發現ではないであらうか。それは實に自由と平等とそして民主主義との生ける示現ではないであらうか。それは實に神が人間を造り出した時の、そのまゝの純眞なる人間精神の啓示ではないであらうか。然り、それは自由と平等と民主主義との侮蔑者の心においては到底考へ及ぶことのできない偉大にして且つ人間的な、道德的且つ創造的な精神の體現であらねばならぬ。何となればそれは既に勞働者自らの手によつて一切を實現することによつて民主主義を體現し、勞働において誇りと喜悅とを見出すことによつて勞働と自由との問題を解決し、そして無報酬勞働に自ら進んで掌ることによつて、與ふるものは幸ひであるといふ、最も非利己的な境地へと到達すべき、第一歩の道を踏み出してゐるからである。

八

マルクスは嘗つてその『フランスにおける內亂』の最後において、歷史的な革命運動としてのパリー・コムミューンを觀みて、それは永久に紀念さるべき新社會の光輝ある先驅者であるといつたことがあつた。しかし私はレニンの言葉に一層の眞理を思ふ、レニン曰く、『共産主義』は偉大なる創造であり、そして新社會の萠芽であると。マルクスがパリー・コ

ムミユーンについてそれが新社會への光輝ある先驅者であるといつたことは、パリー・コムミユーンにおいて勞働者の『支配』が始まつたことを信じてゐたがためであつた。しかし私たちが『支配』に眼を眩惑されてゐる間は、私たちはまだブルヂョアのイデイオロヂイから解放されてゐない私たちである。私たちはより高き世界にと、私たちの眼を高めなくてはならぬ。そは非利己的な、敬虔と犧牲とそして自由との世界であらねばならぬ。その世界を想ふ時に、私たちは『共産土曜』が私たちの明日に如何なる意義をもつてゐるかを眞に理解することができるのである。私はロシアにおける一つの小さい出來事、モスコウ、カザン鐵道の幾人かの勞働者によつて始められたこの一つの小さい出來事に、かくのごとき重大なる意義を見出さんとするものである。レニンはこれをもつて共産主義の第一歩であるとなし、そして共産主義は非利己的にして艱難な仕事が、生産者自身のためにでなしに、また彼等の利益に近きもののためにではなしに、遠隔の人々、――社會全體のために幾百千萬の人民のために、始められる時に始まるのであると。(『共産土曜論』二二頁)私たちはこゝに『共産主義』といふ一つの小さいカテゴリーに私たちを束縛することを欲しないであらう。私たちは『共産土曜』において、こうした一つの小さいカテゴリーにおいてよりは、より遙に大なる道徳的精神の飛躍を見ようとするものである。かくのごとき偉大なる道徳的精神の前に、利潤のために狂奔し、壓制し、虚僞しつゝある商業主義の現代文明は、如何にして彼れの威嚴を維持しようとするのであるか。人々はボルシェヴヰズムを恐れることの必要はないであらう。そはクロポトキンが大膽にも豫言したがごとくに既にロシヤにおいて崩壞しつゝあるのかも知れない。しかしまたクロポトキンのいつてゐるとほり、既にロシヤの勞働者の間に『新らしき權利と、そして同時に責務との觀念』を日々の生活に織り込んでゐるものであるとしたならば、そしてかくのごとき新らしき觀念のうちに『共産土曜』の思想を見出すことができるものであるとしたならば、ロシアの勞働者の前に、モスコウ、カザン鐵道において土

曜日の六時間を働いた幾人かの勞働者の前に、現代商業主義の文明は、戰はずして既に敗れてゐるのではないであらうか。彼等は波蘭軍の弱卒をもつてしてもボルシェヴヰキを敗ることができるであらう。しかし彼等はフオツシ軍の精鋭をもつてして、『共産土曜』に打ち勝つことができるであらうか。繰返していふ、私たちはボルシェヴヰズムを撃破することができるであらう。否、民主々義の高度に發達した精神は、ボルシェヴヰズムの『無情殘酷』に堪え忍ぶことはできないであらう。しかし私たちは『共産土曜』のうちに新社會の萌芽を、その新社會を支配する道徳的原理の暗示とを見出すことができるであらう。――『共産土曜』はその後ソヴヰエツトロシヤの全體を通じて鐵道、病院、公共營造物、橋梁の建設修繕等に普く適用せられることとなつた。

少年教育改造と「少年法案」批評

法學博士　山田正三

一

社會改造の操作は社會の承繼者たる少年を改造するに在る、」少年を改造するには少年を包容する社會自身の改造を必要とする、換言すれば社會を改造する爲めには先づ改造の準備としての社會の改造を必要とするのであつて問題は如何に此の目的の爲めに會社を改造すべきかの點に在る、健全なる社會を建設すべき少年を作らんとすれば其心身を健全ならしむる事が必要である、少年の身心をして健全に發達せしむる爲めには其教養の方法に間然する所があつてはならぬのは固より論を俟たぬ、社會は之の目的に適合するように改造せられねばならぬのであつて頃日議會に提出せられたる少年法案は卽ち少年改造の目的の爲めに社會を改造せんとするものに外ならぬ、其細目につきては研究すべきものが少なくはないが現在の社會が之の意味に於ける改造を必要とすることは疑ふの餘地がないのである、少年法なるものは最初米國に生れ今や既に二十年の經驗を經て居るから其由來と內容の大體とを紹介するとき之れを母法とする我少年法案の價値も自ら之れを知る事が出來るであらう。

二

少年法に依つて創設せられたものは幼年裁判制度である、之れは不良少年に對する新規なる保護教育の手續であつて刑事手續の進步發達に依り變遷したものではない、幼年犯罪者を懲戒處罰したる舊弊の反動として生れたる革命であつて以來其思想は丁年者に對する刑事政策上にも大なる影響を及ぼして居るのである、而して其端緒を成したものはイリノイス洲に於ける幼年裁判法の制定である。

舊と同洲に於ける幼年犯罪者の處分は其他の他洲に於けると同じく普通法に據り行はれ幼年者と雖も七歲に達するときは犯罪責任能力を有するものとし敢て丁年者と區別せられず、國家は未だ犯罪の何たるを辯別せざる幼年者を訴追して之れに犯罪人たる名を烙印し更に丁年犯罪者と共に牢獄に投ずること

に因りて之れが犯罪教育を施しつゝあるの狀態であつたのである、其結果は固より明瞭であつて人口稠密し數多人種の混淆せる市俄古市にて於ては他に之れが救濟を爲すの法制の見るべきものがなかつたので、殊に犯罪人の増加甚だしく年々激増に激増を加へ殆んと其停止する所を知らさるの有樣となつたのである、是に於てか制度の改革を必要とし同市法曹會(The Chicago Bar Association) は之れが釐革の途を講せん覺悟で委員を選定し不良少年處分に關する法律立案を計畫するに至つた(其委員長を Hon. Harvey Hurd 氏とす、同氏は當時幼年保護事業に從事し居たるものを以て副委員會を組織し其立案を補助せしめたのであつて實際法案起草の衝に當つたのは副委員會の幹事 Cr.Hastings H Hart氏である、氏は 猶ほ紐育市 The Russell SageFoundationに在り ら同年者保護事業に關する氏の著述亦少なくない) 固より一新制度の創設は頗る困難であるが當時の積弊は到底姑息の改良を以てしては之れを救濟するを得なかつたのであつて委員は先づ從來の他洲法令其他司法慣例にして現在の窮狀救濟に適應すべきものを考究し之を基礎として新規なる制度の創設を畫策したのである其特に資料とせられたものはマサチュセッツ洲紐育洲等に於て行はれたる幼年者と丁年者とを同時に審理裁判せず且つ幼年犯罪者に對しては直ちに假出獄を許し監視に謝することを得とし又收監する場合に於てで丁年者と分離すべく且つ之れを拒まさる感化院に送致することを得とする刑事法規と、當時稍久しく各洲に於て行はれたる感化少年を感　院に送致するの先例 (Probate or Surro ate court により行はれたり) 並に孤兒其他保護なき幼者に對する裁判保護制度 (chancery court により行はれたり) とであつて前者は之れが緯となり後者は之れの經となり是れに新なるイクノイス少年裁判法は其編成を見るに至つたのである之れ實に西暦一八九九年(明治三十二年)の事であつて同年七月一日より實施せられた之れを最初の幼年裁判法とする。

イリノイス幼年裁判法の規定は倉卒の間に制定せられたものであるが故に固より完全のものではない然し其規定の精神は恰も社會の要求に適應したものであつて一度幼年裁判所の設立を見るや其の新規なる手續と新規なる方法とは社會に紹介せられ殊に其新規なる精神と企圖とは深く社會人心を刺戟して社會をして其舊夢より醒めしめ幼者に對する社會道義上の義務を自覺するに至らしめだのであつて舊の刑事手續とは全く異なりたる新制度は直ちに全米國に波及したのである。

幼年裁判制なるものは右述ぶるが如く幼年者に對する刑政に革命を成したものである單に舊制度と其手續の外見を異にするのみではなく全然其性質を異にするものである、法律的に言へ

ば幼年者に對する刑事司法裁判手續に對して行政裁判手續としたものである（行政裁判としては夙に認められたる行政廳の違法な處分に由り權利を傷害せられたりとするもの其の取消變更を求むる所の外特許無效又は確認、請求、衆議院議員選擧訴訟當選訴訟等かあるか總て刑法裁判に於ける民事裁判に相當するものであつて刑事裁判に相當するものは缺けて居る若し少年裁判手續に認めらるゝに至くは後者の部類に屬する唯一の行政裁判である）從て唯々幼年犯罪者に對するのみならず廣く國家の保護監督を要すべき一般不良少年の示導教育の手續となつたのであつて假令それが司法裁判所によりて行はるゝ場合に於ても其手續は徹頭徹尾幼年裁判手續でなくてはならぬ又少年裁判所は社會救濟の組織で單に小犯罪者を裁判すべき小裁判であつてはならぬのである。

然らば幼年事件として少年裁判所（我少年法案にては少年審判所と謂と言ふ第一五條參照）に取扱ふ範圍並に手續は如何であるかと云ふに、各洲必ずしも同しではないが凡そ七歳以上十六歳に至る少年少女（我法案第一條では十八歳以下となつて居る）で法規違反行爲あるもの所謂幼年犯罪者（Invinile offender）又は不良少年（Delinquent children）と稱せらるゝもの（狹義の不良少年、我法案第四條第一項前段參照）は固より、父母其他監護者の保護監督に服せず又は其監護教育不十分なるが爲め公の監督を必要とすべき情況にあるもの所謂、無保護少年若くは浮浪少年（Neglected or Depenleut children）と稱せらるべきもの（廣義の不良少年、我法案四條第一項後段參照）を包含し裁判所は廣く被害者其他の市民又は警察官、視學官、の告訴告發又は通知を受け之れが裁判を爲すのである、裁判所には視察官（Probation officer）（我法案にては少年保護司と稱す第二三條參照）なるものがある、視察官は自己の擔當する事件につき豫め捜査を爲し裁判に必要なる材料を蒐集するの職責を有すると共に幼年者の利益を代表し法廷に於ては幼年者介抱の任に當る、元と視察の制度、（Probation System）は刑事裁判に於ける刑の執行猶豫又は假出獄の場合に於ける免囚監視の制度に相當するもので其本來の任務は裁判準備の爲めの視察に非ずして裁判後に於ける幼年者の監護教育に在る裁判所幼年者を感化院に送致せず一定期間裁判所監督の下に注視するを適當と認むる場合に於ては之れを視察官の視察に附するのであつて、視察官は視察に附せられたる幼年者を監護教育するの事法として或は幼年者の家庭を訪問し或は幼年者をして其日常行動の報告を爲さしめ之れに必要なる助言を與へ之れを誘導し以て過誤なからしむるのである、又若し幼年者の性行不良の程度甚だしきか又は幼年者の家族其他幼年者を圍繞する周圍の事情の劣惡にして幼年者をして益不良ならしむるの虞あるときは裁判所は之れが

從來の監護者より離し或は感化院に或は適當なる善良家庭に移し之れが監護教育を施さしむるのである。

感化院に種々あり、共同宿坊制（Dormitory system）を採るもの（舊式）と小屋集合制又は家庭制（Cottage or Family system）を採るもの（新式）とあり又設立經營の點より謂へは洲又は市の設立に係るものと一私人又は宗教若くは種族團體の經營に係るものと別がある然し總て裁判所と連絡し一定の監督を受くるのであつて多くは郊外數哩の地をトして居る其設備の整へる教室は幼年者の年齡能力に應し學術技藝を授け其廣漠たる田園は遠く俗塵を離れて耕作牧畜を教へつゝ幼年者の心身を養ふの料である之れが保育の職員は熱誠以て其任に當り幼年者を愛撫教導すること我兒に於けるが如くであつて幼年者は規則正しく而も愉快に共生活を樂み凡そ三年の課程を了ふるときは恰も卒業證書を得し欣然たる學童の如く將來の希望に滿ちて我家に歸るのである。

猶ほ裁判所並に感化院には專屬の醫師があつて常に幼年者の健康は注意するのみならず幼年者の能力、精神狀態等まで精密に觀察して之れに對する處置の誤なきを期して居る。

幼年者取扱の一斑は右述ぶる如くであつて裁判所並に觀察官の温情溢るる審問訓戒と監護教導とは恰も父兄の子弟に對すると異ならず感化院に於ける幼年者の保護教育は慈母の愛兒に於けるが如くである斯くして舊の追及處罰は改まりて愛撫教導となり犯罪教育の窩は變して今や良民養成の群に轉したのである

三

翻て我少年法案を見るに米國少年法と同しく幼年裁判制を創設せんとする趣旨に於て最も意義あるものである、理由書に言へるが如く少年者に對しては原則として保護處分を爲すべきものとするは（法案第四條第二九條以下）其骨子であつて少年犯罪者に對し科刑すべき場合の刑事手續につき特別規定を設けたのは（法案第六二條以下）已むを得さる例外の場合に於てすら猶ほ且つ一般刑事手續を排斥せんとするものであつて爰にも少年法の精神は窺はるゝのである殊に死刑無期又は短期三年以上の懲役若くは禁錮に該る廣き罪を犯したる少年及十六歳以上にして罪を犯したる少年に對しても裁判所又は檢事より送致を受けたるときは幼年事件として少年審判所の審判に附せらるべきものとするが如き（法案第二七條）其運用に餘地を存するものであつて立案者の苦心が見へて居る之の點は嚴格なる理論より言ふときは異の存する所ではあるが元來少年法は性質上可成

其規定に彈力性を有せしむることが必要であつて裁判官檢事並に審判官保護司等が實際之れを運用するに當り其根本の精神に反することなきを得しむる必要のあるものであるから敢て玆に贊意を表するのである。又少年に對する保護處分刑事處分、並に少年審判所の手續等に關する細密なる規定も大體に於いて適當せるものであるから玆に一々批評するの必要はない、少年法の規定は自由に運用せらるべく窮屈に適用せらるべきものではない否な寧ろ其精神の實現は社會各人の覺醒と審判官其人を得ることに繫るのであつて其運用宜しきを得ざるときは少年法の規定如何に完備するも其實效を收むることは出來ぬのである、愛情なき保護處分は少年の心裡には刑罰と感ぜらるべく保護處分と刑事處分とをして單に法理上の區別たるに終らしむると否とは一つに審判官並社會の責任であつて少年法各個の規定の如きは實に問題ではない、之のことは米國各洲都市に於ける少年法發達の跡に見るも明らかである從來幼年者に對する刑事特別處分法の存したる都市に於ても幼年裁判制の發生前に在つては其法は眠つて居つたのであるが(コロラド洲は從來此種の規定を有したるに拘らず幼年裁判所の創設前六年間に於て、デンバー市に於ける十歳以上十六歳以下の少年の監獄に投せられたるもの二千人を下らさりしと謂ふ Childrens Courts in the United States 1900 P XI)一度新思想の勃興するや其主義精神は直ちに之れを活用して其運用となり幼年裁判制は之れに關する特別成法の制定を見ざるに先ち其實行の端緒を開いたのであつて、デンバー市幼年裁判所判事リンゼー氏(Lindsey)が新法規の制定を俟たずとも死法の活用に依りて幼年裁判制の實を行ふことを得べしと確信し努力之れが實行を力めたるの結果夙に其成績の見るべきものがあつたが如きは顯著なる實例である又紐育市に於ては今や他の裁判所とは全然分離獨立したる幼年裁判所を有し其行ふ實際の手續處置等亦間然する所はないが其成法の規定を見るときは甚だ散雜せるのみならず猶ほ舊思想を脫せざるものさへ殘つて居る是に由て之れを觀るも我少年法案の各個規定の如何の如きは之を第二に讓りて可なり要は社會を覺醒せしめ審判官其人を得て速く其實效を收むるに在り今期の特別議會に於て少年法案の重ねて通過せざりしは甚だ遺憾ではあるが日に月に不良少年少女の夥しきを加ふる現狀に在りて我に判事リンゼー氏なきは更に慨歎すべきことである。

終に我少年法案は少年保護者の過失怠慢に對する制裁規定並に少年者を誘導し不良ならしめたる成年者に對する制裁規定を缺いて居るが之れは稍重大なる缺點である、社會の各人をして少年に對する責任を自覺せしむることは少年法の直接の目的で少年法の(Addresse)は社會であることを忘れてはならぬ。

咬豆茶話

□少壯哲學者として多大の期待ある田邊元博士は、以前東北大學にあつて、石原博士と新進の双璧と稱せられて居たが、田邊君大の西田幾多郎博士崇拜とあつて、内々京大に轉任方を希望した。

□かくと嗅ぎつけた東北大學總長は、順番まで狂はして歐洲へ留學させるから、今暫く東北大學に留任してくれと懇願に及んだ、所が、田邊君の曰く、歐洲の何處へ行つたテ西田博士に比すべき學者や人格者があるか留學などは眞平だとトウ〳〵京大に轉任してしまつた

□單にそればかりなら、何にも感服するまでもないが、その轉任以後、大學生と同じ卓に就いて西田博士の講義を聽いておるには學生連や、教授連もホト〳〵感心しておるゲナ。

□京大の經濟科は本年は病魔に祟られておる人氣者の河上博士が頃日病に臥して一學期の休講を申出でた上、同科の權威たる戸田博士も同じく一學期休講と來た、所で東大の經濟科はモツト甚しく、松崎博士は死亡し、新渡戸博士と松岡博士は外國に逃げ、森戸、大内の、二君は免職と來た、これでは丸で全滅の姿だ。

□病氣ではあるが、怪談當る可らざるは京大の戸田海市君でこの人ダリアの栽培にかけては天下一品との評がある。

□ラッセル氏が北京に飛込むときは、北京大學や其他内閣諸高官等は麗々しく停車場に歡迎する筈であつたのに、氏はイツノ間にかコツソリと北京に這入つて大陸ホテルと云ふ一小旅舍に納り返つてゐたそうだ。尤も講學社の蔣氏のみは途中まで出迎へた。

□ラ氏の北京入りはヂユウイ氏の北京入りより數倍の期待を以て迎へられ、隨つて各學界は總出となつて歡迎に忙殺されておるが、北京新人の中心たる胡、蔣、陳氏等はどうにかして北京大學を東洋學術の中心地としたいとの心願だそうな。

□此頃の朝鮮問題に對する總督總監の方針が微温的だと云ふて三宅阪あたりに隨分受けが惡いが、霞ケ關では總督府が壓制に過ぎると愚痴つておる、同一政府のお役人でありながら硬軟この通りの差違がある、しかし齋藤にせよ、水野にせよ政治家としての經綸がないとは一般の定評である。

□腕はあるが、寧ろ利き過ぎて困るのが田健らしい、彼が利權屋を庇護すとの巷評は案外に高い、ドウモ一度は總理になりたいなぞ柄にない夢を見ておるらしい。齋藤は感心なとには横文字の新刊を讀むが、田健と來ては新時代に處するアタマの修養は皆目との評だ

□處が、臺灣にも近頃だん〳〵眼覺めた青年が多くなつて東京に本據をおいて新思想の雜誌刊行を目論見んでおるものもあると云ふから、田健サンどうして油斷はなりませんネ。

□ニユートンの引力說がアインスタインの相對律で打破られたから當然全國の小學校から中學、大學の教科書は改訂するの必要が迫つておるのに、文部省は武陵桃源の夢豐かで、省内は申すに及ばず、東京中の學者が皆目研究しておらぬとは御目出度い話だ。

□アインスタインの生國であつた獨逸は申すに及ばず、その敵國であつた英國でも、佛國でも相對律が今殆確認されておるのに、未だに我國の大學教授が二百年前のニユートン說で推通そうとしておるのはどうした譯か。兎に角大學からでも科學の方面からでも相對律否認の狼火を擧げ貰ひたいものぢやナ。

近刊發賣豫告

中澤臨川遺稿◦吉江孤雁編◦山本鼎裝幀

嵐の前

四六版天金函入美本
定價金一圓八拾錢
送料金十六錢

故中澤臨川氏の偉大なる思想生活の方面を代表せる「新社會の基礎」を先づ上梓したが、其姉妹篇とも云ふべき故人の崇高なる感情生活を代表せる本書を上梓す。遺稿中最も珍品たる小說「嵐の前」の雄篇を始め、「ミケランゼロ」「レオナルドダビンチ」「ベートーヴエン」等の偉人に對し著者の胸に觸れたる記錄、及び長篇說苑「露西亞の女」等其他數篇を聚め、總べて故人の親友吉江孤雁氏編輯の任に當り、氏の理解ある跋文を添えたり。目下印刷を急ぎつつあり數日中に發兌す。

東京市芝區櫻田久保町　改造社　振替東京八四〇二番

本社



◆バートランド・ラッセル氏◆

社會思想家として、當代に其比を絶ち名望隆々たる

社

◆バートランド・ラッセル氏◆

社會思想家として、當代に其比を絶ち名望隆々たる

躍を見よ!!!

□或學者の妻　正宗白鳥
□（戯曲）布施太子の入山（長篇百廿枚）　倉田百三
□題未定　寺田寅彦
□秋山圖　芥川龍之介
□潮風　里見弴
□黄五娘　佐藤春夫
□暗夜行路（五百餘枚雄篇）　志賀直哉

＝新年號重要豫告＝

社の世界的大飛

◇英國社會運動の人々　新居格

◇社會運動に携はる著名の婦人　山川菊榮

講談

◇一休禪師　堺利彦

◇高田軍兵衛　白柳秀湖

創作欄

（いろは順）

□題未定　德田秋聲

□題未定　谷崎潤一郎

□戯曲　或富豪の夢　坪内逍遙

□戯曲　日常の會話　長與善郎

□題未定　武者小路實篤

□戯曲　ある一組　野上彌生子

近世社會主義發達史論

最新刊

尾崎士郎氏著

（總頁約三百[illegible]十頁）

■定價一册貳圓五拾錢 郵税十二錢 總クロース上製美本■

本書は著者が社會主義史の大著に沒頭したる餘暇に成りし小篇にして、世界に於ける社會主義發達の經路を知るべき、本邦唯一の著述たるを失はず、加ふるに考證の的確と、行文の流麗とは相俟て本書の上に輝かん

目次要項――第一章、社會主義の發生（空想的社會主義の諸運動）第二章、初期佛蘭西社會主義（(1)佛蘭西に於ける社會運動の特異性、(2)ルイ・ブランの影響）第三章、初期英國社會主義（(1)ロバート・オーエン及其思想、(2)キリスト教的社會主義とチャーチスト運動）第四章、産業革命、第五章、第二期佛蘭西社會主義、第六章、第一インターナショナル（(1)マルクス派とバクニン派、(2)社會主義の國際運動）第七章、初期社會民主主義運動（(1)ゴーター及びエルフルト綱領、(2)ベーベルとリープクネヒト）第八章、無政府主義の發達（(1)バクニンの歴史的影響、(2)バクニンの諸運動、(3)バクニン以後）第九章、マルクス、第十章、露西亞民衆運動の歸趨、其他、初期アメリカ社會主義、英國社會主義の第二期、沸蘭西民衆運動、第二インターナショナル等十五章に岐る。

尾崎士郎譯　モリス バックス　社會主義 その創生及び歸結（近刊）

東京市芝區三田一丁目　三田書店　振替東京四一八一〇

朝鮮赤化對應策

過激主義と朝鮮の自決性

法學博士　末廣重雄

一

露西亞の過激派は、既に其の魔手を我が朝鮮に及ぼして居る。同派の者が第一に目的とする所は世界に於ける資本主義の破壊であるが、朝鮮に於ては、資本主義的組織が未だ充分に發達して居ない、社會主義的國家を作るには餘りに幼稚であり、社會的革命の行はれるには未だ機が熟して居ない、などと、決して安心は出來ないのである。朝鮮人の赤化を防止する爲めには、朝鮮人をして、過激主義の勝利は、畢竟其の不幸であることを知らしむるやう、大宣傳をせねばならぬことは勿論であるが、目下其れよりも一層注意せねばならぬことは、過激派が第二の目的とするところのものである。過激派は、資本主義の産物である帝國主義の犧牲となれる民族を、其の治者たる民族より解放せんとして、一千九百十七年の革命以來、所謂民族自決主義を高調し、非併合（非賠償と共に）の平和論を唱へた。最近に至りても、歐洲に於て、治者たる民族の暴政より獨立せんとする民族に多大の同情を表し、愛蘭に於ける、シン・フエン黨の活躍の裏面には、過激派が潜んで居ると云はれて居る。「勞働し、絞取せらるゝ人民の權利の宣言」――過激派が露西亞憲法制定議會に提出せんとしたるもの――に依れば、過激派は亞細亞に於て、數億の人民を奴隷として、其の上に僅々數ケ國

の國民の幸福を築き上げたブルジョア文明の野蠻なる政策を破壞せんことを目的とし、埃及、印度等は總て英國より分離し獨立す可きものとして、其の獨立運動に對し、資金の供給其の他多大の援助を爲して居るものらしく、同じ趣旨で、朝鮮人に對しても援助を與へて居るらしい。上海に於ける朝鮮假政府と過激派との間には、何等かの聯絡があり、最近の琿春事件にも亦關係があると云はれて居る。

朝鮮人の獨立運動其のものが、既に我國に取りて容易ならぬ事件であるのに、過激派の後援があつては、一層重大なる問題となつて來る。然らば吾人は如何にして、過激派の危險を防止すべきであらうか。我國の安全の爲めに、頗る考慮を要するものである。

二

朝鮮人に對する過激派の後援を絶つ爲めには、露西亞の勞農政府を顚覆するのが、恐らく第一の策であらう。惟ふに聯合國は、過去に於て、勞農政府を顚覆すべく非常なる苦心を爲し、種々なる試みを爲した。或は露西亞に出兵し、或は其の內政不干渉の原則を無視して、反過激派を援助した、最近はユーデニッチ・デニキン・コルチヤック諸軍は皆聯合國の精神的、物質的援助に待つ所頗る多かつたが、何れも沒落して影を留めぬやうになつた。現在南露のウランゲル軍も佛蘭西を保護者と叫んで居るが、勞農政府は先般波蘭と休戰し、遠からず媾和の上、其の兵力を南露に集中し得ることになるであらうから、ウランゲルの前途は樂觀を許さぬ。

更に聯合國は、眞綿で首を締めるやうな方法で、勞農政府を倒壞せんとして、所謂封鎖を實行した。此の經濟的孤立の爲めに露西亞は非常なる物資の缺乏を來し、露人は半ば饑餓の狀態に陷つて居るけれども、流石に天然資源に富んだ國だけあつて今日まで、兎に角支へ來り、徐々乍ら國內の狀態は改善されつつあるやうである。之に反し、戰前露西亞より小麥を始め多量なる農產物の供給を得て居た聯合國は、却て露西亞よりも苦しみ英國、伊太利の如きは、進んで露西亞と通商開始を熱望するやうな次第である。斯くの如く、聯合國總掛りで、軍事的、經濟的に、あらゆる手段を講じても、未だ勞農政府顚覆に成功し得ない。尤も一說に依れば、非常なる困窮は、露人をして勞農政府に失望せしめ、民心離反の結果、遠からず勞農政府は崩壞するであらうと云ふことで、米國々務省も同樣の見込を立てゝ

居るさうであるから、或は近き將來に淪落することがあるやも計り難い。ではあるが。此事ありとしても、之は全く内外の種々なる事情に基くもので、我國の西伯利に於ける反過激派援助は之にさしたる關係がないやうである。如何に勞農政府の顚覆を企てゝも、我國單獨の力を以て、目的を達することは、思ひも寄らぬ次第である。

三

貝加爾以東に於て、緩衝國を設け、朝鮮と露西亞との直接々觸を妨げて、過激派の勢力が直ちに朝鮮に及ぶことを阻止するのは、朝鮮赤化の對應策たるを失はぬ。

我が陸軍當局は、今夏西伯利撤兵の口實を作る爲めに、共產主義を斥け、民主的施設を有する緩衝國の建設を計畫したが、其の成否は當時人々の大に疑ふところであつて、よし成立しても、我軍の西伯利撤退に伴ふて赤化し、緩衝國の實なきに至るであらう。畢竟緩衝國は眞の一時的のものに過ぎないだらうと觀測されたが、今日に至るまで、未だ緩衝國の成立を見ず、又近き將來に於て、成立する見込みがないやうである。

四

今次の琿春事件は、過激派に依つて援助せらるゝ不逞鮮人の大なる脅威が間島方面にあることを示して居る。同事件の起るや、若干の我が軍隊が琿春に派遣せられたが、支那が我が出兵を喜ばず、之に反對したから、我が政府は、國境地帶の平靜を脅かす事態を一掃し、且つ禍根を絶滅することになれば、直ちに出征軍隊を同地方より撤退せしむると云ふ回答を發したさうである。然るところ、朝鮮人の獨立運動が滅絶せざる限り、間島を策源地とする不逞鮮人の妄動は繰り返されるに相違ない從て一應不逞鮮人を掃蕩し得たからとて、撤兵すれば又もや第二、の琿春事件の發生を見るに至るであらう。斯くては全く撤兵し得る時はあるまい。間島に於ける、我が軍隊の駐屯が長びくに連れ、支那の排日派に、新なる排日の口實を與ふることになり、世界各國をして益々、我國の侵略的野心を疑はしむることになり、我國の不利、之より甚だしきはない。惟ふに、間島が支那の領土の一部をなし、其の不完全なる統治の下に立ち、過激派と結ぶ不逞鮮人の行動を完全に取締る道がない限り、我が北邊の平和は常に脅かされる譯で、誠に困つたことである。

此の脅威を芟除する道は、間島を我が國柱の下に置くの外はなく、之れが爲めには、相當なる代償を拂ふて、間島を支那より買受けることにしては、如何であらう。同地方には、二十有餘萬の朝鮮人が居住し、民族的に朝鮮の一部を爲して居ることは此の領土の移轉を正當とする有力なる一の理由となつて、我が獲得に對し非難を挿む者は恐らく多くあるまい。而うして之に依りて、將來日支親善を阻害する一原因を除き去るの利益がある。然し、朝鮮人と過激派との提携は、決して間島に於てのみ行はるゝものではない。彼等が陰謀を企て得る舞臺は、西伯利にも、支那にも、米國にもある。であるから、例へ間島が我國の有に歸して、朝鮮に對する侵入の策源地たらざるに至つても過激派の朝鮮に對する脅威は依然として存在して居るのである此の危險を根本的に除去するには、朝鮮人をして、過激派と結び、其の援助を求むるの必要を感ぜしめぬにある。ところが、朝鮮人の獨立運動がある限り、此の危險は永久に存すべく、或る人々が豫期する如うに、勞農政府が近く滅亡することがあつても、我國の敵たるべきものは、何れも常に朝鮮人の味方となるに相違ない。其處で、過激派の朝鮮に對する脅威を憂慮するよりも、進んで、先づ朝鮮問題其のものゝ解決に努力する方が肝腎である。果して然らば、現在朝鮮問題は如何うなつて居るか、朝鮮總督府の統治の根本方針は果して朝鮮の現狀に適合して居るであらうか。私の觀る所では、昨春の萬歳事件以來、朝鮮の事情は大に憂慮すべきものがあつて、而かも現在の如うに同化政策一點張りである以上、形勢は日增に惡化するばかりであらう。

五

抑も對朝鮮人同化政策は、我が朝野なる數者の支持するところであつて、原首相始め同化論者は、往々にして、朝鮮は內地と地理上の關係に於て密接であるばかりではなく、內鮮人は人種は勿論風俗人情等を大體に於て同ふして居るから、同化は決して難事でない、と說いて居るが、實際のところ、朝鮮人は、內地人と言語風俗習慣を大に異にし、數千年の特殊なる歷史を有つて居る大民族ではないか。之を如何にして同化せんとするのであるか。如何にして、朝鮮人を內地人同樣、帝國の忠良なる臣民と爲さんとするのであるか。顧ふに、近世歐洲諸國の手に依つて行はれた同化政策は、悉く失敗に歸して居る。歐洲諸國は先づ其の殖民地に於て失敗した。更に歐洲に於ても、多年

の苦心努力の甲斐もなく、露西亞も、獨逸も、墺太利も、洪牙利も、何れも同化政策の爲め散々手を燒き、墺洪國の如き遂に國內異民族の分離獨立の爲めに、土崩瓦解したことは、目新らしい事實であるから、玆に贅せぬ。

或は、我國には我國の長所特色がある。內鮮人の關係は必ずしも歐洲に於ける治者たる民族と、被治者たる民族との關係と同一でない。歐洲諸國の先例を以て、直ちに我國を律し、歐洲諸國が同化事業に失敗したから、我國も亦失敗するとは云へないと云ふ論もあらう。一應尤もなことであるから、暫く歐洲諸國の先例より離れて考へて見たいが、朝鮮人同化の爲めに、何か神機妙算があるか。同化政策の遂行上、歐洲諸國に較べて何か我國の優れる點があるか。不幸にして、私は之を發見し得ないのである。

六

從來朝鮮總督府は、教育勅語の趣旨に基き、朝鮮人を教育して來たけれども、此の勅語は、我が皇室と特殊なる關係のある日本民族に下し賜はつたものであるから、異民族たる朝鮮人が之を理解し得ないのは怪しむに足らぬ。從つて、教育勅語に依つて、朝鮮人に忠君愛國の教を授けた結果は如何うであるかと云ふに、朝鮮人をして朝鮮獨立を叫ばしむることになつたに過ぎぬ。總督府當局の云ふ如うに、教育は同化の爲めであり、忠良なる國民育成が本義であるとすれば、朝鮮人教育は、今日のところでは、全然失敗であると云はねばならぬ。然るところ、總督府は、少しも過去の經驗に鑑みる所なく、唯普通學校（卽ち尋常小學校）の數を增加し其の修業年限を延長することばかりを考へて居るやうである。教育の進歩普及は、二千萬民族の福利增進の爲めに喜ぶべきことであるけれども、其の民族的自覺を强め、總督府が期待するところと、全然背馳することになるであらう。

基督教徒をして云はしむれば、朝鮮人の同化は、基督教の力に依つて始めて其の目的を達し得るのであるけれども、米國宣教師の力に依る朝鮮人の基督教化は、朝鮮人を日本化せずして米國化するの虞がありはすまいか。斯かる危險を防止せんが爲め、我が組合教會は、米國より獨立し、先年來專ら內地人の力と金とを以て、朝鮮に於ける傳道に努力しつゝあるが、同化の目的を達するには、先づ內鮮人の多數を基督教化せねばならない。然らば內、鮮人多數の基督教化は、果して何時になつたら

行はるゝであらう。基督教が我國に於て完全なる傳道の自由を得て以來、今日に至るまでに、既に中世紀を經過した。此間基督教徒は非常な努力を拂つたけれども、果して幾何の成功を收め得たか。過去を以て將來を推せば、我國を基督教化することは恰ど不可能であるやうに思はれる。縱し可能であるとしても、今後少くとも、數百年を費さねばなるまい。朝鮮に於ても、基督教は其の勢餘り振はず、現在のところ、僅に三十萬の信徒を有するに過ぎぬから、其の全土を擧げて基督教化するのは、決して容易の業ではない。然るところ、戰後世界に於ける民族運動は益々猛烈となり、之に伴ふて朝鮮人の民族運動も亦年一年甚だしくなるであらう。斯かる時期に際して、朝鮮人を同化する爲めに、先づ內、鮮人の基督教化するのを俟つのは、恰も限りなく增加する借金を返濟する爲め、茫然と富籤の當るのを俟つが如きものである。私は基督教の力に依る朝鮮人同化の可能性を疑ふ。

或は又佛教を以て同化の手段とすべし、と說く者があるけれども、之を今日の僧侶に望むは、恰も木に緣つて魚を求むるが如きものである。

七

更に、朝鮮人の同化の行はるゝには、先づ內、鮮人の一視同仁差別待遇の撤廢が撤底的に行はるゝことの必要であることは何人も認むる所であらう。之が爲めには、朝鮮の高等官たると判任官たるとを問はず、文官の地位を內、鮮人に平等に開放し且つ官等俸給令を同一にするとか、叙位叙勳に關し差別を設けぬとか、少くとも朝鮮に於て、內、鮮人間に無差別平等を實現することが必要である。獨り公生活に於てのみならず、私生活に於ても、兩者が平等に成つて、始めて同化が完全に行はるゝ用意が出來るのであるが、此の差別待遇の撤廢が果して何れの日に實現せらるゝであらう乎。

昨年の事と記憶する。當時新聞紙の傳ふる所に依れば、京城の辯護士會に於て投票の結果、朝鮮人が會長に當選したところが、內地人の辯護士は朝鮮人を會長に戴くことを快しとせず朝鮮人と分離して、內地人のみの辯護士會を組織せんとする議があつたさうである。斯る偏見は在鮮內地人ばかりではなく、一般內地人の有つて居る偏見であるから、差別待遇の撤廢の如きは言ふべくして行ふべからざるものではあるまいか。實は將

來公私の生活に於て、朝鮮人に對する內地人の態度を根本的に改むることがあつても、同化が完全に行はるゝことは一大疑問であるのに、最近の文明の進步と、今次の戰爭とが刺激した民族自決の世界的思潮が、朝鮮人の思想を非常に動搖せしむることになつた今日以後、內、鮮人不平等の基礎の上に、同化政策を實行したからとて、何の効果があらう。其の全然失敗に歸すべきは、火を見るよりも瞭かである。

現在のやうでは、所詮、朝鮮人を日本民族化することは出來ぬ。さりとて、朝鮮人をして、何時までも、被治者たる民族の地位に滿足せしむることも六ケ敷からうから、結局朝鮮は愛蘭の如く、埃及の如く、印度の如くなる虞がある。我國の將來には、朝鮮に關し、絕えざる不安と危險とがあることを覺悟せねばならぬ。吾人は今日朝鮮に於ける過激派の勢力侵入の防止よりも、先づ朝鮮人を如何に取扱ふべきかに就て、根本的に考へ直さねばならぬ時が來た。要は國外よりも寧ろ國內に在る。

（十一月三日）

朝鮮印象の斷片

文學博士　野上俊夫

一　最初の失望

聯絡船から釜山の棧橋に下り立つて先づ第一に感ぜらるゝは來てからの期待を裏切られた一種の輕い失望である。眼に映ずるものは年來見度いと憧憬れて居た朝鮮では無くして、全然日本內地の風景である。廣大な棧橋の樣子やら、行き屆いた停車場ホテルの設備やら、見渡した市街の立派な家並みやら、全然內地の、而かも內地に於いても最も進步した船つきの都會の感を起さしめる。兼ねて繪や寫眞で知つて居る屋根の強く彎曲した建物や、低い藁ぶきの民家などは殆ど見當らず、例の面白い

形の冠を着て長い煙管をくはえて居る朝鮮人もあまり見られない。折角朝鮮を見物に來て朝鮮らしいものを殆ど見ることの出來ないのは詰らないといふやうな感じを制することは出來なかつた。

此くの如き失望の感じは、恐らくは始めて日本を見物に來る歐米人が、横濱や門司に於いて最初に感ずるものと同じことなのであらう。これ等の觀光客の中には、勿論可なり多く日本を研究して、普通の日本人よりも多く日本の事情に精通して居るものも間々あるであらうが、併しその大多數は、日本を一種の夢の國と思ひ、マダム、バツタフライの歌劇や、タイフーンの芝居などを通して見た所の、而かも著しく漫畫化されたる封建時代の日本を見やうとして來るのであらう。日本中の到る所にヨシワラがあつてゲイシヤガールやオイランが並んで居り、ハラキリは毎日のやうに行はれ、男は丁髷を結ふて兩刀をさして歩いて居ると想像して來るのであらう。然るに横濱や門司の埠頭に着いて見ると、波戸場の樣子から、電車や汽車のある有様から、人が洋服を着て居ることから、大體が歐米の模倣のみに充ちて居つて、ヨシワラもゲイシヤもハラキリも滅多には見られない所から、こゝに可なり強い失望を感じて、或るものは、日本人が自己固有の美はしい文化を棄てて西洋文明の拙なる模倣につとめることを歎じ、或るものは更に日本人は模倣には長じて居るけれども創作の方には乏しいなどゝ云ひ出すに至るのであらう。

此くの如き批評の淺薄にして誤れることは云ふ迄も無い。日本國は決して外國人の觀光の目的物たるが爲めに存在するものでは無い。一つの國家として生存競爭の激烈なる今日の世界に生きて行かねばならぬのである。隨つて今日の世界に順應するやうに自己の生活の樣式を變へて、今日の世界に早くから順應して居る歐米諸國の行つて居ることを遠慮なく取り入れて、汽車も汽船も電車も軍艦も飛行機も造らねばならなかつた。その爲めに必要なだけは舊來の多くのものを破壞し去ることを躊躇すべきでは無かつたのである。更に日本人が模倣に長じて創作の才に乏しいといふこともよく聞くことであり、日本人の中にも此くの如き考へを有して居るものが少くないが、併し維新前後から六七十年間、日本が一生懸命に西洋文明の模倣をしたといふこと丈けから、日本人が創作の才に乏しいといふとは云へぬと思ふ。模倣の方が忙しくて創作の方をやる暇が無かつたのだとも考へ得らるゝ。此のことはこゝに餘り關係が無いから詳

說せぬが、少くも日本人が歐米人に比較して創作力に缺けて居るといふことは確かな證據のあることでは無いやうに思はれる

朝鮮の現狀も矢張り此のやうな點が多いやうに思はれる。世間には、內地人が朝鮮に渡つて朝鮮の舊來の美はしい自然や、その自然に調和した建築物などを破壞したことを憤る人が少からぬやうである。自分が釜山に上陸した失望の感じも亦恐らく此くの如き人々の感じと同一種類のものであるのであらう。併し朝鮮がたゞ其の名所古蹟などによつて、觀光客の好奇心を滿足せしむる爲めにのみ存在して居るので無く、政治的、經濟的文化的に世界の大勢に後れずに進んで行かうとするが爲めには現在釜山や京城や大邱やなどの都會地に見らるゝやうな舊物の破壞若しくは朝鮮の日本化をなさしむることは蓋し已むを得ないこと、或は最もよきことなのではあるまいか。必しも『日本』化するに限るまいが、兎に角在來の朝鮮を次第に改造して現代に順應するやうなものにして行くのは極めて必要なことなのであらう。

二　景福宮と南大門

朝鮮の建築物が其の自然の背景を極めてよく調和して居ることは、少しく心ある人の必ず氣附くことであらう。北漢山を後にして景福宮の宏壯にして優雅な姿、殊にその慶會樓の蓮池に臨める頗る奇妙な而かも雄大なる趣きは、何とも云へぬよい所がある。今は其の正門なる光化門と正殿たる勤政殿との中間に總督府の建物が建てられてあるが、其の形式が如何なるものでどれ程までに自然の背景との調和を顧慮してあるかは、竣工の上で無いと分らないけれども、一通り纒まつて居る景福宮の中央に西洋建築の三階建位のものを入れることは、恐らくは自然との調和を著しく害しはせぬかと案じられる。何とか今少し他の場所に持つて行くことが出來たらばよかつたと考へられる。

京城の停車場に近い南大門は、其の極めてよく整つた形と、周圍にまつはつて居る蔦葛の美しさとによつて、京城に入る人に最初の穩かな快感を與へる。これが以前の如くに其の兩側に連つて居た城壁が保存されて居たならば、頗る儼然たる威儀を以て王城を護つて居るといふやうな感じを與えたであらうが、今は電車を通ずる爲めに兩側の城壁を切り取られて、周圍は歐米の多くの市街の中央部に見るやうなアスフアルト敷きの立派な廣場となり、其のまはりには煉瓦造りの高い建物などが出來た爲めに、昔の壯嚴雄大なりし（今と雖も勿論それ自身としては

其の通りではあるが）佛は今は去つて、絶へず進み行く若き人たちに取り殘されて孤獨の淋しさをかこつ老人の如き有様がある。何となく此の老人と共に現代の餘りに急激なる進歩を呪ひ度いやうな氣持になる。

併しながら更に翻つて考へると、此の門が其の兩側の城壁を有して居て王城への正門として萬人から仰がれて居た當時は、此の近邊は皆朝鮮在來の小さな低い藁ぶきの家屋が極めて狹隘な不潔な道路を挾んで並んで居たので、そして南大門はそれ等の小さい家や狹い路を睥睨して傲然として立つて居たのである景福宮とても同様で、李氏の定都の時の規模は知らないが、時の攝政大院君が、慶應から明治の初年にかけて七年餘の日子を費し、一世の民力を竭して建築した時には、其の壯麗雄大は恐らく周圍の民家の矮小不潔なる有様とは餘りに甚しいコントラストを現はしたのであらう。若し今日のやうに民衆の勢力の旺盛な時代に於いても其の昔のまゝの有様で殘つて居たならば、民の膏血を搾つて己れの居る所を壯ならしめたといふので、景福宮も南大門も或激昂せる民衆の爲めに破壞されるといふやうなことが無かつたとも云ひ得ない。然るに今日は景福宮内に新しい西洋式の總督府が建築せられ、南大門の周圍が純西洋式の廣場に改造せられたが爲めに、景福宮も南大門も共に新文明の代表者として愛惜せられ同情せられるやうになつた。宮も門も共に寧ろ自己を破壞して與れる新文明に感謝すべきであらう。

三　コレラ

今度の朝鮮旅行はコレラの爲めに種々な妨げを受けた。八月初に下關から釜山に渡つた時には、コレラが内地の方に多くて朝鮮には比較に少かつた爲めに、釜山港外に十二時間の停船を命ぜられて、玄海浪にゆられた醉心地のまゝ船中の無聊に苦んだのは可なりな苦痛であつた。朝鮮滯在の三四週間の間に朝鮮に於けるコレラの數は急激に增加して、遂には内地の患者數の二三倍にもなるに至つたので、終日殆ど戰々兢々たる有様で、成るべく外出をしないやうにし、兼ねてから悉く視察し度いと思つて居た朝鮮人街なども殆ど行かず、朝鮮料理などは無論味はふ勇氣などは出なかつた。講習の爲めに外出する外には、宿屋の二階の窓の一つしか無い部屋に暑さを忍んで蟄居して居たやうな有様であつた。

自分等が此のやうに恐れをなして居たと正反對に、朝鮮人の下層な人々の無頓着なのには驚かされた。自分の乘つた汽車が

秋風嶺の近所で一寸脱線して其の複舊に一時間あまり停車して居た時、乘客中の朝鮮人が線路の傍の田の中の水で汗を洗ひ口をそゝいで居るものゝ多かつたのには驚かされた。何處かの停車場の洗面場で、多くの乘客の爲めに皆が皆占領されて居たのを見た一人の老婆は、今人々の洗つたり口をそゝいだりした下水の流れ出でる所に屈んで顏を洗ひ出した。京城の東大門に近い方の町で、警察官がコレラの患者を避病院に送らうとするとその妻女が之れを取り戻さうとして、近所の人々と共に警察官を襲うたといふことが新聞に見えた。コレラの豫防注射をやると、これは病毒を注射するのであると云つて、注射場を出ると互に背を吸ひ合つて注射液を吸ひ出さうと試みたといふやうな話も聞いた。コレラ患者の死亡したのをそのまゝ置いて一家悉く他に逃れたといふやうな話もあつた。

併しながら此くの如くに衞生思想の進歩しない點からいふと日本の内地の人々も決して此等の朝鮮人の無智なるものに著しくまさつて居るとはいへない。明治二十何年かに日本でコレラの非常に流行した時は、やはり避病院は病人を殺す所だと思つて（實際その當時も今もコレラで避病院に行くものは大部分死ぬのは事實であるが）患者を陰蔽することは一般に行はれて居た今日現在に於いても病氣を癒すのに醫師によらずして怪しげな祈禱師や如何はしい云ひ傳への藥などにたよるものが内地には極めて多い。現に最近數年間に自分の住居する極く近くに起つた一二の例を擧げても、或る老婆が負傷したのに、人糞を塗るが最良の法なりと主張して、それを實行して遂に傷の爲めに死んだのがある。或る女は消化器の重い病にかゝつたのに、一二ケ月の間醫師にかゝつてもはか〴〵しくないのを見て、それからは醫者にかゝらず、毎日山伏に御祈禱をして貰つたが、無論何の効果も無くして遂に死んだ。京都といふ日本でも第三の大都會の中に此くの如きことのあるのは實に驚くべきことである。

併し更に又考へて見れば、此くの如きはたゞに朝鮮や日本内地ばかりでは無い。多少の差こそあれ歐米の最も進歩したといはるゝ國々に於いても、下層の人々の間には多く見らるゝ事柄である。神の像の足さきに接吻して病の平癒を祈るロシヤや伊太利あたりの人々の多いことや、ルールドの巖窟から出る水が神秘な効能があると云つて毎年五十萬人の參詣者が集り、或はその水を罐詰めにして諸國に送るといふことなどから考へると病に關する迷信の多いこと、或は一般に人智の進歩の度の低いことは、國と國との間に於ける差異も無論可なり大きいでもあ

らうが、結局は教育の普及すると否との問題に歸するのであらう。

四　朝鮮の教育

朝鮮に於ける教育は、內地などに比して未だ頗る及ばないけれども、併合以前と今日とを比較すれば實に雲泥の差があり、殊に最近三四年間に非常にめざましい進步を遂げて居る。支那を模範とした從來の教育は、明治二十七年に科學の制の廢せらるゝと共に衰頽し、翌二十八年に日本の制度を摸倣した學校が所々に設立されたが、其の當時の民度に適しない爲めに別に著しい効果も無かつた。明治三十七年に日韓協約が結ばれ、日本から財政外交の顧問を送るやうになつてから、日本人の學政參與官を置いて、文學博士幣原坦氏をこれに任じた。三十九年統監政治となつてから、教育の方も著しく面目を改め、普通教育を擴張し、各道の重なる土地の普通學校（日本の小學校に當る）に內地人教員を配置して着々改善の實を擧げた。四十三年の併合以後は教育は益擴張せられ、從來朝鮮全土に於て一百校しか無かつた普通學校は、翌年に至つて一躍して二百三十四校となり大正二年には三百七十一校となり、大正八年には五百十七校となつた。其の生徒數も四十三年には二萬人程であつたものが大正八年には約九萬になつて居る。勿論これは朝鮮の全人口及び學齡兒童數に比べると極めて少くて、日本內地の割合にすると朝鮮人口中の學齡兒童數は二百萬內外はあるのであるから、その內僅かに二十二三分の一しか就學しない割合であつて、朝鮮の普通教育の前途は極めて遼遠であるといはねばならぬ。就中女兒の教育は最も振はないのであつて、九萬の普通學校兒童中八萬は男兒で、女兒は僅かに一萬に過ぎない。隨つて男女を分けて考へると男兒は學齡兒童の十二三分の一が就學して居るけれども、女兒は僅かに百分の一ほどしか就學して居ない割合となるのである。

最初は教育に關して朝鮮人の中に多くの誤解があつて、或は內地人の教師に就くを屑とせず、或は國語教育に力を入れるのは卒業後日本に連れて行つて兵卒や奴隸にするのだといふやうに考へられ、入學者は極めて少かつた。然るに此頃は次第に此等の誤解は少くなつて、入學志望者は每年增加し、多い所は收容人員の二倍三倍に達するので、校長は之れを適當に拒絕する辭柄に窮して居るといふ有樣である。

中等程度の學校としては、男子の爲めに高等普通學校があり

女子の爲めに女子高等普通學校がある。高等普通學校は官立が五校私立が七校あり、女子高等普通學校は官立が二校、私立が四校ほどある。數は勿論極めて少いといはねばならぬが、初等敎育の割合から見ると中等敎育は決して劣つて居るとはいえない。殊に女子の小學兒童の數が男兒に比して八分の一にしか過ぎないに比すれば、女子高等普通學校生徒の總數は（公私立共）六百三十二人で、男子の高等普通學校生徒の總數三千五百人に對して六分の一弱に當るから、女子の中等敎育は稍進んで居るといふことが出來る。男子の中等敎育の志望者も最近に著しく增加して、大正八年に於いては官立學校すべてを通じて六百五十の募集をしたのに對して、志望者の數は二千四百に達するの盛況を呈した。

實業敎育の機關としては、公立のものゝみで、農業學校が十七、商業學校が三、商工學校が一ある。更に簡易の實業敎育を授ける爲めに、簡易農業學校四十九、同水產學校二、同商業學校六、同工業學校十がある。

高等專門學校としては京城に三校あつて、專修學校は法律經濟を授け、醫學專門學校と工業專門學校とは、それ〳〵其の專門の人々を養成して居る。

五　朝鮮兒童の印象

朝鮮人の學校を參觀して第一に驚くことは、日本語の巧みなことゝ習字の上手なことゝである。普通學校の敎師の大部分は朝鮮人であるが、その朝鮮人の敎師が朝鮮の兒童に敎へるのに國語を以てして居り、而かもそれが發音に於ても語法に於いても極めて正しいことには一驚を喫せしめられる。勿論多くは幾分かの訛りはあつて、例へば國語の濁音の多くは朝鮮人にとつては極めて困難のやうであるが（學校をカッコーと發音するやうに）併し大體九州の北部の方言を幾分か交へたやうな正確な國語を話して居る。九月の初めに參觀した普通學校の一年生などは、四月から國語を習ひ始めたばかりで、而かも一月餘の夏休みに暫く中止して居たのにかゝはらず、可なり正確に話すのに驚いた。これは一つは朝鮮語の發音は內地語を殆ど悉く有して居て、更にその他の多くの音をも有して居るから、朝鮮人が內地語を學ぶのに發音の點からは少しも困難しないといふことにも關係するであらうが、一つは矢はり朝鮮人が一般に語學の才能に於いて優れて居る爲めであらうと思はれる。

習字の巧妙なのは勿論書堂の影響であらう。書堂といふのは

古くから朝鮮各地にある私塾で、一人の教師の宅に數人乃至數十人の兒童が朝から晩まで出かけて居て、主として漢籍のよみ方と習字とを學ふので、丁度日本の昔の寺小屋に當るものである。六疊か八疊位の狹い室に八人も十人も詰め込まれて机も何も無く、床の上に書物を置き、その前に立て膝をしてそれを兩手で抱へ、上半身をゆるく前後に動かしながら、一定の調子に從つて書物を讀んで行くので、而かも一人々々の兒童が各勝手に異つた所を讀むのであるから、室内の喧囂は想像に餘りある。先生は長い煙管を啣へながら各自について之れを指導して行くのである。勿論今日の教育から見れば殆ど教育といふ名を附けることも出來ない程のものであるが、漢文の素養を與へ儒教の精神を幼い頭腦に固く吹き込むといふことゝ、反覆練習によつて文字を巧に書くに至る効能あることは疑はれない。實際書堂から來た普通學校の一年生の書く文字は、内地の中學の上級生と雖も及び得ないほどの立派なものである。中等學校の生徒の文字は、日本の普通の成人などの遙かに及ばないものが多い。此くの如き書堂は各部到る所に存在し、且つ興廢常なき有樣であるが、大正八年に於いて全土に二萬三千五百五十六個所あつて、殆ど二十五萬人の子どもに教へて居るといふから、矢張り教育上の一つの大きい勢力をなして居る。

朝鮮の子どもは、概して體格が可なり立派であるに係らず血色はよくないやうである。骨組みが頑丈に出來て居て丈も高く殊に女子は概して日本内地の女子に比して堂々たる體格を有つて居るが、頬が桃色をして居るといふのは殆ど見當らない。これは主として生活狀態、即ち服裝や食物や住宅などの非衛生的な所から來るのであらう。女兒が肋骨の上を緊縛する惡習慣低溫なる家屋に住み、刺戟性の辛子や唐辛子などの多い食物を取ることが其の最大な原因であらう。併し生活狀態を改良することは教育が普及さへすれば比較的容易に出來るのであるから在來の體格のよい朝鮮人は將來は可なり優秀なる民族になり得る望みは多いと思はれる。

六　朝鮮人の知力

朝鮮人の子どもの知力は内地人の子どもに比べて如何であるかといふことは頗る決定し難い問題である。自分が大體に於いて得た印象は、知力の點に於いては兩者の間に何等の差異を求めることは極めて困難であるといふことである。普通學校に於いて見る國語の理解力、算術の思考力、中等學校などの英語の

讀書力、或は京城の二三の專門學校の教授などから聞いた學生の學力などを合せて考へて、自分は右のやうな結論に達したのである。すべて此の種の問題を考へる時には知力と知識とを混同することを深く注意して避けねばならぬ。世人は多く此の二つを混同する所から種々の誤りを來すことが少くはない。例へば都會の子供と田舍の子供とを比較すると、都會では自然に新しい刺戟を得ることが多いから、平凡な兒供でも自動車、電車汽車等の文明の利器に關する知識を得、又活動寫眞などによつて遠い西洋の事柄などを多く知ることさへ出來て、いはゞ非常に怜悧になつて居るが、田舍の子どもは此くの如き刺戟を殆ど有して居ないから、可なり頭のよい子でも都會の子供よりも知識の分量は少く、又世故に馴れないで稍ボンヤリして居るのは止むを得ない。併しこれは決して兩者の知力そのものゝ差によるに非ずして、境遇の差異から來る偶然の結果たるに過ぎない。故に將來の大成といふ點から云へば、比較的に田舍の子供に多く、都會の兒どもは早熟となり神經質となつて結局社會の下層に沈むものが少からぬやうな結果を生ずる。

此の關係は歐米人と日本人との間にも亦存在する。今日の日本人は歐米人といふと非常にえらい優秀なる素質を有して居て到底日本人などの企及すべからざるものと思つて居るものが少くないやうであるが、それは日本が世界の田舍たる位置にあり歐米が世界の都會たる好位置を占めて居るといふことを見逃すから起る誤りである。歐米の如く狹小なる土地に多くの强大な國家が接近して居て互に相競爭して居る所では、平凡な人でも多くの新奇なる事物を見聞し、優れたる處世交際の術を學ぶ機會が多いのであつて、到底日本のやうな邊鄙な土地に住んで居るものゝ企て及ぶ能はざる多くの利便を有して居る。隨つて今日平均の歐米人が平均の日本人よりも多くの知識を有して居ることは事實であるが、併しそれは決して本來の知力の差から來て居るといふ證據にはならないのであつて、隨つて日本が何時までも歐米の下風に立つべき運命を有して居るといふ結論は生じない。

此の點は日本內地と朝鮮とに於いても同樣である。今日の朝鮮の學生乃至小學兒童が、內地のそれ等のものに比して多少劣つて居る所が假りにあるとしても、之れは比較的に文化の進んで居ない邊鄙な土地に住んで居る結果から起る偶然の事情として大部分說明さるべきものであつて、それが知力に於いて朝鮮人の劣等なりといふ證據とはならぬ。兩者の知力の比較は勿論

委しい調査を經て後に始めて決せらるべきであるが、少とも今日の所で兩者の間に優劣の差ありといふ積極的の證據は未だ無いのであらう。加之、朝鮮人の學生の中に極めて俊秀なるものゝ少なくないといふことも亦明かな事實である。内地人は決して十分なる理由なしに朝鮮人が知的に内地人よりも劣つて居るものであるなどゝいふ輕侮の念を起してはならぬことは、恰も十分なる理由なしに歐米人を非常な優等なる人種であるといふ自卑の念を起してならぬと同樣である。

極東過激派の現勢とその將來

昇曙夢

日本軍の撤退、セミヨーノフの沒落、極東の赤化――是れは豫定の行動でなくとも、大勢の上から言つて結局斯うあるべき運命にあつたので、單に時日の問題に過ぎなかつたが、果然最近のチタ政變によつて極東赤化の幕は切つて落された。今後極東に於ける過激派の活躍と時局の紛糾と之に對する關係諸國の政策とは餘程興味あり、且注意を要すべき問題であらうと思ふ

過激派と言つても――若しそれがボリシエウイキイの意味で用ゐられて居るとすれば――今日ロシアではさういふ名稱を用ゐてゐない。昨年春第八全露ソウェート會議に於いて、從來のボリシエウイキイなる名稱を廢して、コンムニスト(共產黨)といふ世界的の名に改めてからはソウエート政府及び其の與黨を共產黨と呼んで居る。極東に於ても同じことで、從來の極東過激派を極東共產黨と改稱し、現に幾個かの共產黨本支部が各地に設定されて居る。だから本文中過激派と言つても、それは單に便利上一般の慣用例に從つたまでのことである。

極東共產黨は歐露のそれと同じく職業組合員と勞働者とを中堅とし、それに一部の智識階級と赤軍とパルチザンが屬して、其勢力は他の政黨政派を遙かに壓倒して居る。そして他の政派と

違ひ黨員の結束が強固で、主義に忠實であり、理想に對しては殆んど宗教的の信念を以て熱中して居るから、從つてその活動も目覺ましいものがある。之に比べると他の政黨政派は烏合の衆同樣で、結束も弱く、勢力も微々たるもので、それに黨員間の反目も甚しく、集散離合常なき有樣である。其の間には共産黨の巧妙な宣傳や懷柔策が盛んに行はれ、その手に乘つて共産黨に投ずる者も尠くない。今日の帝政派も場合に依つては何時共産黨に變じないとも限らない。現にセミョノーフ軍の過半はだん／＼逆境に陷つて行くアタマンの手を離れて過激派に投じやうとする連中だと噂されて居るではないか。だから反過激派といふのは元來主義や信念や理想によつて結束して居る黨派でなく、單に一身の利害を中心として集まつて居る連中である若しその目指す所の利益が無いと分れば直ぐに離反し分裂するのは當然の成行きであらう。之に反して過激派は外國干渉の撤退、反過激派の沒落に連れて益々その結束を固め、極東の赤化は益々濃厚の度を高めて行く一方である。既に極東の政府といふ政府が何れも過激派である。ウエルフネ・ウヂンスク政府と云ひ、ブラゴウエシチエンスク政府黒龍州政府と云ひ、最近現はれた東部後貝加爾（ザ・バイカル）革命委員會と云ひ、純然たる過激派の政權で、獨り浦潮臨時政府だけが日本に對する緩和政策上表面聯立内閣を標榜してゐたが、是れも事實はニキフオロフ一派の共産黨によつて操つらるゝ過激派の政權に過ぎない。そして是等の政府の或者、例へばウエルフネ政府の如きは數萬の正規軍（赤軍）を有し、その他不正規軍には所謂パルチザンなるものが黒龍江沿岸より烏蘇里沿岸にかけて無數に散在して居る。最近セミョーノフを驅逐してチタを乘取つた革命軍の主力が黒龍州のパルチザンであつたとは最早周知の事實である。その他にも黒龍江對岸のオブルチエ、哈府の東方約六十里附近の鐵道沿線にはセフチユークの率ゐる過激軍が占據し、其兵力も歩兵十聯隊約二萬人、騎兵約二百、野砲十數門、外に十二珊海軍砲六門、裝甲車六輛を有し、又ホコルプカー、イーコ方面、哈府對岸黒龍鐵道沿線約十五里の過激軍及ミハイロ、セミヨノフスキー村方面の過軍等夫々氣脈を通じ、相策應してブラゴウエシチエンスク方面の過軍と連絡し、武器彈藥軍需品の輸送も圓滿に運ばれつゝあるといふから、其勢力侮るべからざるものあると同時に彼等は冬季を待つて日本軍に對し一大攻撃を開始するとさへ傳へられて居る。更に最近に至つて下層民中パルチザン團に投じた者約三萬に達したとの說もあるから愈々結氷期とならば或は

哈府及び其附近村落に所謂パルチザンの蜂起し、凡ゆる慘虐を極むるやも計られないといふことである。日本軍が冬季に先つて哈府を撤退したのも一つはそれが爲であらう。

哈府方面に就いては暫く後に譲り、先づ最近政變のあつたチタ方面に於ける赤化運動から見て行くことする。日本軍に續いてセミヨーノフがチタ撤退後同地には偏右黨のチタ國民議會が勢力を握つて居たが、近頃ネルチンスクに東部後貝加爾（ザ・バイカル）革命委員會と稱する一團體がひよつくり出現して、後貝加爾左黨の勢力を添へ、附近に迫つて居た準過激派軍がパルチザンと云ふ名稱で入市し、完全にチタ市を占領し、ルクスなる者が司令官として之れが指揮を執つたのはまだ十月廿二、三日頃のことである。此間まで肩で風を切つて居た全市一千何百人のセ軍側將校は勿論其部下等は多分鐵道線を避けて東南へ逃げ去つたと思はれる。元來この計畫は疾くから行はれて居たもので、無論アタマン、セミヨーノフを排除驅逐するを以て目的とするもので其裏面にオエルフ號や武市各政權が幇助し企劃に關係して居たことは些の疑ふ餘地がない。併し乍ら表面ウエルフネと武市兩政權の共同動作であることを飽迄隱蔽して居る所以のものは、曩に本年七月中旬ゴンゴダに於ける日露停戰委員の間に締結せら、れた停戰議定に抵觸するから強いて其侵入軍隊に冠するにパルチザンと云ふ名を以てして日本側を誤魔化そうとした狂言であらう。無論其實體は疑に後貝加爾鐵道線のゴンゴダ驛、モグゾン驛、及び莫斯科街道やヒロク河谷に漸進し來つて居たウ市政權派遣軍の一部隊で、又伊市から東進し來つた過激派軍の正規軍であることは、少しく彼地の情勢に通ずる者の直ちに首肯し得る所である。是等の軍隊を中堅として東部後貝加爾革命委員會が黒龍州方面の赤色勢力を背景に蔚然一勢力を擡頭して活動し始め、チタの行詰つた局面を打開したのが、所謂チタ政變である。偶々此の時チタに出張して居たアタマン、セミヨーフは其退路を斷たれて本營所在地であるダウリヤに戻るに汽車便を用ゆることが出來ないで飛行機で逃げ去つたといふからには大分急轉直下の變局が演ぜられたものと察せられる。

彼のウエルフネ政府なる者は赤大根の正反對で、唯だ極東に經濟的出口を開きたさに、一心に極東共和國建設問題に就ても神妙らしく交讓の態度を示して居るもの丶、一方に於ては着々共産政治を實行して居るのである。彼等は執行委員をば大臣、勞兵會をば總管部、共産黨をば平均黨、沒收をば徴發と稱し居るも、是れぞ赤大根の正反對で、僅かに皮丈を白く見せやうと

して居るのである。去れば極東共和國建設問題の豫備條件に對しても表面は賛成して居ながら反面に於てはパルチザンを使嗾して絕えず各方面を攪亂し、極東の統一に對して全く誠意のないことは明白である。

チタに於ける今回の政變後に處するウエルフネ政府が、チタに於ける國民議會に民主的政府の虛名を負はしめ、前に決議せる極東統一條件を尊重するが如く見せかけ、事實に於ては兵財の實權を握つて着々共產政治を實現しつゝあることは何人も之を想像し得るのである。サテ斯うなつた時に、彼の何かと謂へば民主民主と叫ぶ社會黨一派が、共產黨は吾人を欺いたとか、ヤレ不都合だとか憤慨して見た所で後の御祭である。唯だセミヨーノフはチタに於て兵政の兩權を失つたといふものゝ、彼のロザノーフの如く海外に亡命した譯でもないから、此間に於ける彼の行動は多少注目に價する者があると思ふ。が併し是れとても大勢は如何とも致し難いことは明かで、捲土重來は迚ても覺束ないであらう。

斯く觀じ來れば極東の近き將來は民主政治の下に統一を表面の名義として事實は沿海州の一角を殘す以外は悉く赤化され、着々共產政治が施行さるゝものと見て大過ないのであらう。否今日の如く經濟組織が根本的に破壞されては否が應でも共產政治にするより外はないのである。現に共產政治に反對しつゝある文武の官吏が家賃を踏み倒し、必需品は給養會の供給をうけて居るではないか。尤も是れは極東各都市に於ける現象である農村にまで共產政治を徹底せしむるまでには尙ほ幾多の曲折と波瀾があるであらう。

近着の浦潮新聞に、極東各政府代表者會議に列席する爲にウエルフネへ向つた黑龍州國民革命委員會委員の覺書が發表された。それによつて見ると、ウエルフネ政府と黑龍州革命委員會との間に最初から默契が成立つて居たことや、彼等が設定せんとする極東共和國なるものは名のみであつて、內實勞農露國の直接支配の下におかんとする野心であることが明かに看取される。その覺書なるものは次の通りである。

（一）本委員は黑龍州が他の凡ての國民と平和なる關係を結ばんことを衷心より希望することを表明す。但し之が爲には極東共和國の獨立を認め其內政に干涉すべからず。且つ外國兵の撤退せんことを條件とす。

（二）極東諸州を唯一民主共和國に統合するに當り、右共和國と勞農露國との間に密接なる有機的經濟關係を保存せざるべか

らず。且つ本委員は表明す、中央主權はウエルフネ政府ならざるべからずと。何となれば勞農主權がウエルフネ政府を斯く承認したるが故なり。而して本委員は此の點を以て主權改造會議の根柢となす。主權改造會議の目的は各政府を統合して地方會議を召集するに在り。

(三)政府組織に住民の大多數なる勞働階級代表者の爲に指導勢力を保證するを要す。

(四)本委員は表明す。セミヨーノフと其政府とを交渉の對照と認めざる事は、極東の內政及外政に對する彼の勢力を全く排斥し、彼の管下に在る一切の實力を掃蕩するを意味するものなりと。

(五)本委員は一切の根本問題に對し充分責任ある言動をなすべし。

以上の諸條項を破りたる委員は直ちに其全權を剝奪せられ、委員中より除名せらるべし。

右の覺書は黑龍州國民革命委員會の承認する所にして同會委員の羅針盤たるべし。

斯くして居るうちに、十一月四日附の浦潮電報は早くも新極東共和國の成立を傳へて斯う言つて居る。『赤化後のチタの政權は逸早く同地に乘込んだウエルフネ政府の首班クラスノシチヨコフ氏に全く移り、從つて極東の統一權は氏の手に歸したと觀測されて居る。氏は目下頻に極東政府組識の急務を唱へ、終に全極東臨時政府をチタに組識するに至つたのである。此臨時政府の閣員としては首班にクラスノシチヨコフ氏を初め、ニキフオロフ氏、マツウエイフ氏(以上共產派)イワノフ氏、ジユレツソフ氏(以上獨立派)アキシモフ氏、クゼネツソフ氏(以上社會黨穩健派)等が選ばれ、又總軍司令官にエイフ將軍が選擧された。斯樣にして此政府は浦鹽政府代表者の到着を待つて永久的の政府とするの計畫であると云はれて居る。浦鹽政府の代表者は黑龍江線を經由して目下チタへ向け西行の途中であるが、右代表者が果してニキフオロフ氏が浦鹽を代表して入閣した事を承認するか否かゞ非常に疑問とされて居る。』それと同時に新極東共和國宣言の要旨として、ニキフオロフ氏から浦鹽政府に打電した項目も序でに左に引用しておく。

(一)左記領域の舊露帝國の全土は本年四月六日の獨立宣言後獨立自主する事を宣言す。セレンガ河及後貝加爾湖以東の後貝加爾州、沿海州、黑龍州、樺太州、勘察加州。

(二)極東共和國の境界はセレンガ河とす。蒙古の水源より貝

加爾湖畔の河口迄及貝爾湖の中央線並舊ヤクーツク州の境界に沿ひ東方及北方に向つて北氷洋に到る線とす。

（三）本共和國内には全人民の意志を代表する共和民主政權設定せらる。此件は將來選擧代表に依り發表せらるべし。

（四）中央政府に屬する一人の軍司令官の下に國家及各州の全兵力は統率せらるるものとす。

（五）東支沿線租借地に於ける舊露國帝國の總ての權利は本共和國に於て繼承するものとす。

（六）コルチャック、カッペリイ、セミョーノフ軍の殘留部隊の將卒には其不可侵權と企業及平和勞働者の收益の可能を保障すべし。

（七）速かに極東憲法會議を召集して國家の根本法律の編成をなすべし。

（八）議會召集の規則は統一會議に於て一般、直接、無記名に依る普通選擧に依て行ふ如く決定さるべく、人種、宗教、男女等の區別なく比例代表法を採用すべし。

（九）憲法議會召集迄は統一會議は其意志表示及實施の機關として自己の組織中より極東共和政府員を選出し、文武全權を委任すべし。政府組織に際しては民主主義を根本原則とし、社會の平和的發展の原動力たる總ての自由を保障し、個人の所有權は之を認むべしと雖政府は過去の經驗に徵し、勞働者の利益保護の爲適當なる手段を講ずべし。統一會議に依つて新政府選出せられなば目下の各政府は國家的意義を失ひ、唯今後中央政府が發布する法律に依り新選擧の行はるゝ迄の間地方的の自治機關として存存すべきものとす。

（十）世界の各政府を經て其國民に次の事を宣言す。極東共和國は諸州國各人民と密接なる關係を保持し、其國民にして我領内に在る者には善隣の好を設定す。吾人の經濟、生産、貿易は共に崩壞し、吾人は饑餓に瀕す。吾人は平和に努力し、世界の各國民と共に親善を保ち、徹底的に勤勞に復歸せん事を努め、生活を民主的基礎の上に改造せんと欲す。又各國民の不可侵權と所有權とを保障す。

（十一）統一會議は各國政府に對し、選出政府と交渉を開始し其代表者を派遣せられん事を懇請す。而して全極東の住民は選出政府の秩序回復、平和勞働及建設的生活の成就に對する努力に對し極力政府を支持すべし。

電文の如く、果して新極東共和國が成立し、セミョーノフが愈々沒落したとして、さてセミョーノフを葬りたる社會黨が今

後安全に存立するを得るであらうか。汝より出る者は汝に歸るで、セミョノフの沒落の後には社會黨の沒落する事は當然の順序であらねばならぬ。事此に至りては極東は結局赤化する外はない尤も日本の態度如何に依りては斯うなることは疾うに解り切つた事で今更怪む必要も無い。唯だ斯んな風に成り行つたとしたならば彼の緩衝國問題も如何やら御流となるらしい。而して勞働の赤旗と日本の白旗とが極東の野に於て直接接觸する樣な事になるのではあるまいか。若しも斯うなつたならば極東の大勢は一大變化と謂はねばならぬ。

　後貝加爾から黑龍州にかけての狀況が、前述の如く急速に赤化しつゝある一方、ハバロフスク方面は如何と見るに、是亦同樣の狀況である。日本軍が哈府の撤退を終ると、それと入り違ひに黑龍州の過激派軍二個聯隊が早くも哈府に入城したと傳へられたが、果して最近浦潮新聞の報ずる所に據ると、最後の日本軍が哈府を撤退した後黑龍政府の第三十三及第三十五聯隊は浦潮政府代表者より何等の許可をも受けずにブルガコフの指揮の下に哈府市內へ入り、且つ哈府には浦潮政府の任命した衛戍司令官がゐるに拘らず黑龍州軍は浦潮政府代表者ミレーエケ氏とも又浦潮政府軍司令官ペトロフ氏とも交渉を遂げずに已が軍隊中よりフレゴントフなる者を衛戍司令官に任命した。加之黑龍州軍は哈府に於て已が幣制を實施して居るさうである。之が爲に浦潮政府代表者ミレエフ氏は哈府を去らなければならないやうな事態となつてゐる。尙ほ黑龍州軍は哈府占領に飽き足らず、更に進んで鐵道線路に添ひ南下し、日本軍の駐屯即ちスパスカヤと境を接するに至つてゐるらしい。斯かる險惡なる事情の爲に浦潮內閣會議は十月二十三日緊急會議を開き、哈府の政情を研究した後遂に調査委員會を哈府へ派遣することとし、其委員長に浦潮政府軍陸海軍司令官ボードルレイフ將軍を任命したとの事である。

　然し哈府の住民は浦潮政府より寧ろ黑龍州政府の方を賴つてゐる。殊に日本軍の撤退後曩に日本軍に依り哈府を追ひ出された過激派は冬に向ふ折柄なので空屋の多い哈府へ續々と舞戾つて來るであらう。又馬賊の襲來を防ぐには黑龍州から多數の兵を入れねばなるまい。加之沿海洲のラキートナヤから旣に入市した筈の軍隊も赤色軍であるといふから、日本軍撤退後の哈府の赤化は火を見るよりも明かである。斯うなると同類相應ずで桃色の浦潮政府より眞紅な黑龍政府の方が哈府の住民に受けが良いのは自然の道理であらう。要するに日本軍の撤退後は赤化

である。赤化ならまだ良いが黑化するかも知れない。パルチザンと稱する露西亞人、支那人、朝鮮人の馬賊の群が既に哈府を包圍してゐる。そして日本軍が撤退したら哈府を掠奪しやうと待ち構へてゐる。彼等は決して共産主義者ではない。彼等は獰猛な盧無主義者兼專制主義者である。露西亞の當局者も餘程注意しないと此の馬賊團に其領土を蹂躪される。日本側でも十分此點に留意しないと今後の日本人の極東發展は全く不可能となる。露西亞人の或者は日本軍さへ撤退すれば極東の秩序は立所に恢復されるやうに考へてゐるが、然し假令日本軍が撤退しても此の國際馬賊團が掃蕩されぬ間は極東の無秩序は長く繼續するものと覺悟せねばならぬ。何故なら極東から日本軍を除いて了へば其武力の點に於て彼の國際馬賊團が一番優勢だからである。

何にしろ極東の赤化は我邦に取りて非常の脅威である。緩衝國と云ひ、統一政府と云ひ、極東共和國と云ひ、要するに共産黨から見れば形式に過ぎない。彼等は或程度までは日本軍の要求に讓歩しても何等かの形式名目の下に緩衝地帶を設定して、速かに日本軍の撤退を促がし、後徐ろに此の形式を通じて直接日本の勞働無産階級に共産主義を宣傳し、日本に革命を起さんとの陰謀を持つて居る。近頃『ウスリスコエ、スローウオ』紙によつて發露された極東共産黨の秘密プログラムなるものは即ち此の陰謀に關するものである。余は玆に之を引用して廣く我が國民に警告しておきたいと思ふ。左に掲ぐるはそのプログラムの要領である。

『吾人は勞農政府確立の爲、モスクハ萬國主義傳播の爲、勞働者中央集權の爲有謂手段を講じつゝあり、其手段方法とは果して如何？　勞農政府の權利確立を以て我最終の目的を達成したりと思惟すべからず。吾人の目的は高遠なり、勞農政府確立の如きは目的達成の一階段に過ずして之を基礎とし、全世界の勞働者の權威を發展せしめ、資本家を壓迫し以て共産主義をして意味あらしめざるべからず。其高遠なる目的遂行の爲國際關係上已むを得ざる場合に於ては帝國主義者に一時政畧的讓歩をなし、其要求に應せざるべからず。又其要求が我共産黨のプログラムに全然相反し、而も我基礎的問題に觸るが如きことあらば宜しく過日獨逸との間に行はれたるブレスト・リトウスキー媾和條約を締結し一時的彌縫策を講ずべし。此ブレスト・リトウスキー條約は當時の人士間には非難の聲高かりしも今日に於て考ふれば決して吾人の失策に非ず。又餘儀無き讓歩にも非

ず。深遠なる政界上の見地より來れるものにして其眞意とする所は第一に吾人をして團結せしめ、全資本家と輸贏を決するの準備を爲さしめ、第二に到底侵すこと能はざりし獨逸帝國に革命の波を侵入せしむるに便ならしめたり。上記の如き見地を以て更に吾人は極東に於ける吾權利我位置我狀況を熟考し、決して目前の利に走ることなく將來の爲吾過激派勞働團に採るべき最良なる政畧を決定せざるべからず。今吾人が極東に於て我主義を實行せんとするに當り先第一に生ずる問題は未だ完全にして而も歐洲大戰亂の慘禍を蒙らず、國威隆々たる日本帝國と如何に折衝を保つべきかなり。勞農政府が此問題を念頭に置かずして赤旗を翻し、東方に手足を延さんか、必ずや日本及び其背後に立ちて勞農政府を壓倒せんとする全世界の資本家と衝突するに至るべし。此戰爭が吾人の爲最困難にして最不利なるは已に熟知する所なるべし。何となれば此戰爭の爲目下尙ほ少貯藏しある全勢力を傾注せざるべからざればなり。

一九〇四年日露戰爭の時露西亞帝國は西伯利に兵力を集中するに困難を感じたり。況んや西伯利鐵道の破壞せられたる今日に於てをや。而して今や着々地盤を固め、工業の恢復を圖り、新生活の途に就かんとする時期に於て、日本國との交戰は全く其方針を變更し、着手せられんとしたる新事業を全く放擲せざるべからざるに至るべし。即ち此戰爭に於て疲弊せる我勞農政府は再び西方に於て吾人の敵に對する力を失ひ、從て威嚇的危險を醸し、勞働者集權の地盤に著しき動搖を生ぜしむるに至るべし。玆に於て先見の明ある吾人は今極東に於て我勞農政府に對する列國の封鎖を解除する一方策を立案し、日本との尙早なる戰爭より生ずる危險を避けしめ、以て極東より武力干涉者を却けんとす。此手段を實行せんが爲勞農政府國民コミサールは極東に民主的緩衝國を設置することを承諾せり。是我勞農政府が世界の帝國主義者に對する一時的讓歩にして、我政畧の一歩即ち獨逸と勞農政府との間に同樣の目的を以て締結せられたる如き新ブレスト・リトウスキー條約とも言ふべきものにして次の如き眞意あり。第一日本と米國の勞働者に我勞農政府が平和裡に問題を解決せんと企てたるにも拘らず日本は之を承諾せずして尙西伯利に利駐兵す、是日本が領土侵略の野心あれば也と宣傳し、遂に日本軍隊を破壞し、次で日米兩國に革命の動機を與ふること。第二勞農政府をして全世界と對抗して戰鬪を繼續し得、尙早晩起るべき日露戰爭に於て危險を感ぜさらしむる爲の餘力を蓄へしむること。第二の目的を達する爲緩衝地帶に常備

軍を設置す。此常備軍へ日露開戰の際成し得る限り持久戰を以て日本軍に打撃を加ふること（西方より增援兵來る迄或は日本國内に革命を起すまで）。第三緩衝國を以て他國との通商貿易の中樞たらしめ、此地帶を經て吾人に必要なる物資を供給し目下物資的封鎖の情態にある露西亞を救助すること。以上述べたる所により吾人は其雙肩にある極東の使命を了解せざるべからず。即ち目下日本と交戰することは不可能にして太平洋の一角に共勢力を發展せしむることは最肝要なり。又極東に於ける反革命者の絶滅を期することは吾人の重大なる義務にして吾人は緩衝國設置の手段に依り之を實行せんとす。

緩衝國設置に對する吾が政略上記の如し。而して之が實施に當りては國主資黨、エス・エル派又はゼムストウオ（自治會）、農民黨を經て日本帝國と談判を開始し、先づ平和の道に入らしめ吾人は勞働革命の目的を遂行する爲共牛耳を掌握すべし。此の如くして一時萬國資本家に對し讓步して共時期の到るを待ち、世界に於ける革命の萠芽を待つと共にブレスト・リウスキ媾和條約を撤廢したるが如き形式に出でんとす。

緩衝國設置問題の指示は勞農政府中央部にありて勞働革命を保護せるレーニン、トロツキーの主意より出るものにして秩序ある計畫なりとす。此緩衝國が事實上變化を來りて我勞農政府に反抗せざる爲吾人は軍隊管理の權利を掌握すべし。是右黨が緩衝地帶に設置せられたる軍隊を利用して勞農政府に反旗を翻さざる唯一の防止手段にて、又一方緩衝國內に於ける勞農者の利益を保護する方法なりとす。勞農政府に對する外國資本家の攻撃を破滅せしめ、又少くも共打撃を減少せしめんが爲には軍隊の必要あるは勿論なるも、表面上緩衝國なる名稱を存せしめざるべからず。然れ共其內容即ち經濟上軍事上のことに到りては吾人自ら勞農政府の施政方針に從ひ指導せざるべからず。緩衝國內に於て軍事上の施設を爲すことは吾人の義務なり。經濟問題は極東にある各種黨派が露國中央部より受くる方針に從ひ或は極東にある共產黨と協同し勞働者をして最大の利益を收め得る如く決議決定すべし。吾人は唯之を監視するのみ。緩衝國設置の目的、勞農政府の補助及世界勞働革命の發達情況を國民の念頭より忘却せざらしむる爲勞農政府は共指導となり、共產黨の要求する精神目的を國民に注入し、之を了解せしめ、一朝事ある場合に於ては吾主旨に反する行動を執らさるのみならず勞農政府の施政方針に反抗し勞働者の利益を侵略せんとする反革命者を嚴重に監視せしめ、以て喜んで吾目的遂行の爲一臂の力を致さしむべし。斯の如くして吾人は世界勞働革命及共產主義貫徹に關する最後の目的を達成し得べしと信ず。」

秘密プログラムの內容は以上の通りである。勞農政府の出店とも見るべき新極東共和國が成立した以上、彼等は直ぐに此のプログラムの實行に取掛るかも知れぬ。さうなれば單に滿鮮の脅威たるに止まらず、直接我が內國に取つても一大憂患でなければならぬ。之に對して我が當局に於ても相當の手續方法を講ずべき必要があらう。（完）

西比利亞の過激化を何うするか

山川菊榮

一

西比利亞の過激化をどうしたらよいかとのお尋ねに對して、私はどうも致し方がありませんと御挨拶するの外ありません。西比利亞が過激派の手に落ちようと、帝政派の手に這入らうと西比利亞が日本の西比利亞で無く、また日本が西比利亞に毛頭野心の無い限り、うつちやつて置いたら好からうと思ひます。

成程西比利亞と云へば、目と鼻の間のこと故、少しは目障り耳障りになることが無いとも限りません。然し隣の柿の實が赤くなつたからとて、敢て癪に障るの理由とならぬ如く、露西亞人の西比利亞が赤くならうと靑くならうと、吾々に於て毛頭異論の餘地はありません。其れは恰かも帝政時代の露西亞では、人口の七分に過ぎぬ有產階級が、人口の九割三分を占める百姓や勞働者を牛馬の如くに虐待して居つたので、日本人は義憤に燃えながらも、何分他人の家內のこと故、忍んで見物して居る外なかつたと少しも違ひません。

とは云へ、在留日本人が甘んじて過激派の治下に辛抱しなければならぬと申す譯ではありません。西比利亞ばかりに日は照らず、西比利亞ばかりに黃金の雨が降る譯でもありません。否な義を見ること泰山の如く、利益に恬淡な日本人は、敢て過激派輩の西比利亞に執着せず、大和魂と貯金とを以て、さつさと引上げた方が大人らしいではありませんか。

尤も西比利亞が過激化すれば、禍ひ朝鮮に及ぶといふ話であります。此心配は無理からぬ心配ではありますが、それとても隣家に流行感冒が出來たのと同樣、迷惑には相違なくとも、苦情の持込みようがありません、寧ろマスクでも嵌めて、成るべく外出しない方が賢明ではありますまいか。

勿論、朝鮮の國境から一歩でも此方のことになれば、檢疫消毒、固より勝手次第であります。都合に依ては、朝鮮の國境に

萬里の長城を築かうとも、一向差支の無いことゝ思ひます。それでも猶ほ過激派が押寄せて來るといふことなら、それこそ大に國論を喚起して、一陣の神風に依て追拂ふまでの事ではありませんか。

二

尤も近頃は、政府の對露政策が立つて居るとか居らぬとかで大分國論が『喚起』せられて居るようであります。けれども私の見る所では、若し西比利亞に於ける政府の遣方が『失態』だつたとすれば、其れは政策が立つて居なかつた爲めではなく、却て政策が立ち過ぎて居た爲めであります。政策は立つて居らぬどころか、立ち過ぎる位立つて居つたのですが、たゞ相手が其手に乘らなかつたのが惡いのであります。罪は日本政府に在るのでなく、定石を知らぬ先方にあるのです。チエックに對しコルチヤツクに對する日本政府の遣方を見ると無策どころか、多智多策であります。是ほどの妙策に乘らぬようでは、露西亞人はとても日本の外交家や軍人政治家と共に、外交を論ずるに足りません。宜しく足元の明るい中に見限つてしまふ方が好からうと思ひます。勞農政府に若し『外交』と名づけ得るものがあるとしたならば、それは全く無策の『外交』であります。此徹底した無策ぶりは、例の秘密條約の公表に於ても、ブレスト折衝に於ても遺憾無く現れて居ります。若し日本政府の對露外交も當初から徹底した無策に終始して居たならば、恐らくは斯樣な『失態』を見ずして濟んだらうと思ひます。

然しながら、よし幾何の失態があつたにせよ、六億の經費をかけて、日清戰爭で失つたより以上の人命を犧牲にして、あれだけ國威を發揚したのでありますから、此上はもはや十二分に滿足して引上げてはどんなものでせう？　此有り餘つて困つて居るお金が、ホンの六億だけにしろ、とにかく片づいて呉れた有難さに想到したなら、大井司令官なども、今更引揚げるの、引揚げぬのと駄々をこねられたものではありますまい。

三

近來國民外交といふことをよく聞きます。多分國民外交とは謂はゆる外交家の外交でなくて、國民自身の外交といふことかと考へます。ところが此國民の外交たるものは、一體先方の外交家を相手にしてやるものか、それとも國民を相手にしてやるものか、此邊が頗る曖昧なように思はれます。言葉を換へて云へば、セミヨノフを相手にして遣るものか、ウランゲルを相手にしてやるものか、それとも露國民の大多數を相手にしてやる

ものか、更に言ひ換へて見れば、露國民の七分に過ぎない有産階級を相手にしてやるものか、それとも露國民の九割三分を占める無産階級を相手にしてやるものか。若し外交の方針とかを『立てる』とか。『立てぬ』とかいふことが必要とすれば、唯だ此國民外交は誰を相手にしてやるものかといふ、見當を立てるの一手であらうと考へます。

曾て露國に於ける米國の『私設公使』とでも、いふような役目をして居た御承知のレイモンド・ロビンス大佐は、米國の對露政策に就て幾度びか建議をしたが何時も用ゐられず、ワシントン政府のする事なす事、事毎に機宜を失するので、終に業を煮やして歸つてしまつた人であります。ロビンス大佐の直話を記した『レイキンド・ロビンス・オウン・トスリー』のうちに、聯合國側の對露政策の失敗に就て次の如き一節があります。

『ロビンスは、米國に居ても、露國に居ても、徹頭徹尾反ボルシウキの人である。けれども彼は、露國に於ける米國外交の失敗を目撃した。そして其理由——教訓に富んだ理由を看取する機會を持つた。彼等は此失敗の理由を室内氣分と名づける。此室内氣分が露西亞のような、曾ては全人口の百分七の人々が一切萬事を支配して居た國に往く。ところが今や此百分七は支配の力を失つて、千二百萬挺の鐵砲を持つた九割三分が全權を握つて居る。然るに室内氣分は依然として百分の七の方の人々にばかりつき廻つて居る。それは客間や、宴會や、宮殿や、料理屋に餘り出入りをする。そしてそんな所で何時かソヴイエトといふものゝ噂と聞く……ロビンスは云ふ——此民衆の感激の時代此民衆の運動の時代に、室内氣分を棄てゝ戸外氣分をとらぬ以上は、外交は斷じて對外政策を取扱ふことは出來ない。ロビンスは運命か偶然か、露西亞の人民の中に行かなければならなかつた。彼は常に戸外に出て、人民の中に居た……』

日本の對露外交は、戸外に勞働して居る國民か、室内に舞踏し宴會して居る貴族富豪か、一體誰を相手にして居るのでせう？

在滿露領の鮮人解放

大庭柯公

一

琿春事件は考へれば考へるほど、種々なことを吾人に訓へる先づ之を地理的に觀ると。滿洲も露領も――一層委しく言ふと吉林省も烏蘇里地方も沿黑龍地方も、その國土的領域若くは行政的區劃といふものは、單に名ばかりであつて、それ等地方に散布してをる民族も亦、事實に於て左程に國家觀念やら領域觀念やらに捉はれて居らぬものであるといふことを知り得る。また之を社會的に觀ると、是等地方に散布する移動種族の常態は過去の約半世紀に亘つて土着露人も移住朝鮮人も不定住支那人も、此の廣大な地域に殆んど同一狀態の半耕半掠奪生活を續けて來た者で、彼等の間には領土並領民の異同と云ふ觀念は殆んど無いといふことを知り得る。更に政治的に觀ると、支那や露西亞――それは舊帝制時代の露西亞にしても――は、此の地方と是等民族の斯かる常態を知り拔いてゐて、亦それを別段不思議とも考へずに、其自然の儘に支配をし來つたものであることを知り得る。斯う觀來ると、尼港の問題は琿春の問題であり、琿春の事件は尼港の事件であることを知り得る。言ひ換れば、尼港に起つた慘劇は露人によつて起されたものであり、琿春の襲擊は專ら朝鮮人であると、劃然とした區別を立てゝ考へることが、抑もの間違ひである。アムール流域、烏蘇里地方、綏芬牡丹兩水域、松花江流域、それに豆滿江北境、これ等の一大地域に亘つて、實はネルチンスク條約以後の數十年間、政治的に又戰亂的に影響を受けて移動を餘儀なくされた支那人、朝鮮人露西亞人の無産民衆は、彼等の間に支、鮮、露などといふ夫れ〳〵の國民的差別などを、感知する餘裕もなく又必要もなく、その移動的常態の共通點からして、過去五十年間の何時の間にやら半耕半掠奪民衆と成つた次第である。

掌ほどの領土で、何から何まで四角四面に型にはまつて造り上げられてあることを常態としてをる日本が、前記の移動民族を目して、一も二もなく『不逞鮮人』『不逞鮮人』と呼んだり考へたりすることは已むを得ないことではあらうが、これを徹頭徹尾不逞と見做して、それを批判するに日本人本位の見地からのみ批判をし、これが對抗策を考へるに討伐本位の遣り方を以てし、只銃火の力のみで所謂不逞を懲膺すれば足ると信じてをることは、此の大陸の一角に自由無拘束の生活を半世紀も續けてをる移動民族の眞相と常態とを、餘りに見誤つたものではなからうかと私は思つてゐる。

二

試みに我が外務省が去る十月九日に發表した公報を見給へ、その劈頭に『昨年三月朝鮮獨立運動勃發以來、多數の不逞鮮人は間島地方支那官憲の取締緩慢なるに乘じ、此地を不逞運動の策源地として北鮮を擾亂し、私かに露領方面より武器彈藥の供給を受け、昨年五月間島帝國總領事館の一部を燒きたるを手始に』云々と書いてをる。朝鮮の獨立運動者が、彼等の三大基地として上海、間島(琿春方面一帶を含む)及び米國を選定したことは極めて早いことで、決して『昨年三月』などと云ふ事ではない。これは必ずしも外務省の官僚共に限つたことではないが、彼等の根本の考へ方が抑も間違つてをる。と云ふのは、朝鮮内地で獨立運動が始まつたからして、所謂不逞鮮人が間島を策源地として寄り集まつたのではなく、黑龍江水域や烏蘇里地方へ散布してゐるのと全く同一の原因、同一の狀態から寄集まつた朝鮮人が、間島にも早い時代から寄り集まつて居るので、只それが偶々朝鮮内地の獨立運動の勃發に際會して、動き始めたのに過ぎないのである。現に露西亞移民局の一九一四年版の統計に見ても。露領に於ける朝鮮人の數は一八九七年の二萬六千人が、一九一一年には六萬人に增加してをる。言はゞ北山來久しく本來動的素因のある分子に、或る熱の加はつたために動き始めたと云ふことである。それを朝鮮運動が始まつた結果、遽かに間島が策源地となつて、その爲めに琿春事件が突發したと考へるのは。主因と傍因とを取違へてをるものである。

それ故、昨年五月に局子街の帝國總領事館の一部を燒拂ふた間島の騷擾も、本年三月露領ニコラエフスクの慘劇も、更に今回の琿春領事館の全部の燒打並に襲撃も、全く同一の者である。要に同一のものといふ意味は、此の東亞大陸の一角に、廣大な

地域に亘つて五十年來移動散住し來つた各種族――而かも同一狀態の下に置かれた露支鮮の各種族が、或る機會或る運動に促がされて、以上の三個所で激動を始めたものであるといふことを意味する。私は今これを判りよく話すために一つの例を採らう。そして外交官吏や軍人共には、一番彼等が實驗に富んで隨つて判り易い所のゴノコツケンの例で話すことで捷徑であると思ふ。斷はつてをくが私が此の例を擧げることを、戯談半分にやるなど〻思はれては困る。彼等の所謂『不逞鮮人』や『不逞露人』ほどゴノコツケンに似たものはない、私は今それを語らう。

第一ゴノコツケンを發生させたものは誰れか、[redacted]からではないか。露支鮮人の移動種族――特に朝鮮人としては漂泊民族と呼ぶ方が適切であらう――が如何なる時期と原因とから出來たかを考へ見よ、露西亞や日本の帝國主義が其主因であることは否定が出來ない事實である。扨てその既に發生した彼等不逞民族たるゴノコツケンは、一定の熱が加へる度毎に蠢動し繁殖する。丁度世界大戰といふ熱、人種平等民族自決などいふ熱が彼等の上に加はつた、彼等が激動を始め出した所以である。そしてゴノコツケンは最も巣を喰ふに適合した場所に巣くふ。即ち冬季に不備の尼港や、地理的に險要な間島は恰度擁護線のやうなものである。今にして治療に一歩を誤つた時は、例の不可救的の難症に陷ることは、この疾に最も經驗の多い外交官や軍人共の夙に知悉の通りである。たゞ爰で私が注意したいことが二點ある。その一は、是等の所謂『不逞鮮人』や『不逞支那人』や『不逞鮮人』を發生させた責任者は、其昔黑龍江へ遠征して來たヘゞロフ將軍乃至アムールスキー伯ムラヴヰヨフ將軍やら、〇〇戰爭及び〇〇戰爭に戰つた國々自身であると云ふことその二は彼等は人種的にこそ露鮮支の相違はあるが、その社會的生存狀態から見て、此の廣大な平原に放たれた共同群衆である事である。

三

然らば爆彈事件の善後策をどうしたら可いか。我が政府は例によつて銃劍を以て之を征定し得ると考へた。或は征定し得るとは考へなかつたかも知れぬが、この外に案もなく先づ〱出兵といふことに歸着したのかも知れない。最初日支の共同出兵といふことを考へて、支那に交渉したが、此の事件後間もなく罷免された吉林省長徐鼎霖氏などは『間島鮮人討伐のため支那

が大兵を派するは、徒らに鮮人の恨を買ふのみにて支那のため不利』であると言放つてをる。最初出兵に贊成のやうな顔をしてゐた張作霖すら、十月十四日頃には我が軍の間島出兵に反對してをる。それにも拘はらず在鮮の大庭司令官の如きはイキリ切つて可なりの兵數を間島へ進めた、處が本日（十一月六日）の新聞所報によると、政府は一ト先間島から撤兵することに決議し、この九日の外調に附議する豫定とある。今に始まつたことではないが、その餘りに朝三暮四的對策に呆れざるを得ぬ。

　私は前述の通り琿春のも尼港のも、これを同一事件視するものであり、是等の鮮人も尼港の露人と全く同一狀態に在るものと確信してをる者であるから、そして是等兩地の引續いての慘劇を、五十年來の同地域の歷史に關係を有つた根柢あるもの、非一時的のものと確信してをるために、一時的な出兵と云ふ銃劍の力などで、剿滅などの出來るものでないことを斷言するものである。そして若し私に對策如何と問ふ人があるならば、私は言はんと欲する、先づ彼等に自由の天地を與ふることに努めよ、そして彼等の希望を出來るだけ容れることである。唯だ日本人ばかりの權利や欲望を、間島や露領で伸ばすことに努めることが、決して日本人に取つて永遠に利得である譯ではない。吾々は歐米人に向つて人種無差別を提唱しながら、何故朝鮮人のために能ふ限りの無差別政治を開いてやらないのか。吾々が歐米人の前に提唱しつゝある其物を、今朝鮮人が吾々の前に要求してをるのに對して、直ちに『不逞』呼ばゝりをし、直ちに銃劍を以て沈默させやうとするのは、歐米人の妄よりも夫れに數十倍した妄ではあるまいか。あの襲擊、あの慘劇は勿論『不逞』と呼ぶに十分ではあるが、その發生には吾々の從來のやり方が、少くとも一部分の原因を成してをるのではないか。

　銃劍の力による對抗策は、彼等を彌が上に激成させ繁殖させる、琿春事件の善後策は、能ふ限り解放の途を講じて、自由の天地を彼等のために開くにあると私は信ずる。（十一月六日）

赤化に就て

柳宗悦

（自分は過激派の主張や、行爲や、政治に就ては、全く正確な知識を缺いてゐる一人なので、充分な考へを書く事が出來ない。その主張をよく吟味して反省したら、中々深い未知の眞理に逢う事も出來るのではないかと思つてゐる。同時に人情から離れた間違つた幾つかの考へをそこから取り去らねばならないだらうと考へてゐる。とも角現代文明の病弊に對して、それが必要な藥であつたと共に、藥の過剰が更に新な病氣の現因となつてゐるのではないかと想像してゐる。自分は特に赤化と云ふ事に就て精細な考へを述べる程の資格を持たないけれども、玆に一人の過激派と一人の軍國主義者とを對立して考へて見ると、次の樣な會話が二人の間に交されるだらうと想像する。前者を極端な民本主義者と見、後者を頑迷な帝國主義者と見ても差支へない。前者を露國民（甲）が代表し、後者を日本人（乙）が代表すると見れば一層活々その會話が浮んでくる）。

乙「過激派の思想とは要するに血生臭い暴逆な、人道を無視しきつてゐる戰慄すべき主張です。人を何百何千と慘殺したり、强姦したり、戲弄したり。物品を掠奪したり、破壞したりするのは、人類に對する反逆としか思はれません。それは世界を救濟するどころではなく、無秩序に沈める樣なものです。未だ嘗て過激派程恐るべき主張を人間が持つた歷史がないとさへ云へる位です。君臣の道を無視する樣な敎へを此日本は受ける事は出來ません。人倫に悖る貴方の主張に反抗する事こそ吾々の任務です。滿鮮の赤化は斷じて吾々の默許し得ない出來事です。

甲「私達の立場からすれば貴方の國の空氣こそ實に嫌惡すべきものです。全てが官僚的で軍國主義で、侵略的です、民衆の力を無視したり、軍力にばかり勢力を費したり、領土をふやす事に熱中したり。弱い民族を虐げることに優越の念を感

じたりする氣風は、實に文化の恐るべ敵です。或は又時勢おくれの稗餉な行ひだと評する方が適切でしよう。あの傲慢な資本家が、無資産階級の者を奴隷の様にしてゐるのを醜いとは思はないのですか。不正だと云はないのですか。私達はかかる帝國主義や軍刀主義や資本主義の病氣を根柢から殺そうとして起つたのです。貴方は私達を恐れてゐる。全く世界が赤化したら貴方の立場が無くなるからだ。赤化は日本の危機だと貴方がたは思つてゐる。然しかゝる危機こそ日本の救濟だと云ふのが吾々の信念です。

乙、「貴方は日本を責めて自分の罪惡を棚に上げてゐるが、日本はどう云ふ人倫を犯した事があります。凡ての戰爭は正義の爲だつたのです。僅か五十年の間に世界に互する文明を産んだ　は全く軍刀の威光と官僚の統政よろしきを得たからです。天皇を弑したり無垢の民を苦めたりする様な行ひは未だ嘗て日本にはありません。こないだ貴方がたの同類は尼港でどう云ふ行ひをしたのです。天に恥ぢ自分に恥ぢる事をしないのですか。何百の同胞は貴方がたの毒手に斃れたのです。そう云ふ行ひに對して辯解する言葉があるならお聞きゝしませう。あの恐るべき行は人間の歴史を醜くゝする拭ひ得ない汚點です。

甲、「貴方は私に梁の塵を見ないと云つて攻撃をなさるが、私は貴方がそう高言なさるのを苦々しく思ひます。貴方は尼港の事で私達を責める。然し貴方がたも同じ様な事を〇〇で〇〇人に行つたではありませんか。あの時五六十人の〇人が教會堂に入れられて火をつけられ、窓から出た者はつき殺されたのを何と辯解なさるのです。私は私達の行ひを世界が攻撃する時、その虚僞を惡まずにはゐられません。ついこないだ英國人は印度でその土民の數百を充分な理由なく擊殺したではありませんか。こん度の大戰爭で獨逸が野蠻な事をしたと云つて聯盟國で怒つてゐますが、それは程度の差です。どこの軍人も人を殺す事のひどい事に於ては同じです。尼港の事など餘り攻撃されるのは藪蛇でしよう。あれは武力政治に對する懲罰です、軍人さへ來なかつたら、あゝ云ふ事はしなかつたでしよう。貴方の國に〇〇がゐなくなり、〇〇がなくなつたら、私達は頭を下げます。然し軍國主義侵略主義の日本は、露國を詰責する樣の權利をまだ持つてゐません。

乙、「〇〇の事は僅か少數の人の間違ひから起つたので日本の本旨ではありません。尼港のは全く計畫された殺戮です。

甲「それなら同じ様に尼港の事も少數の間違つた人々の行ひで、扼殺は過激派の主旨ではありません。過激派は平和を目的としてゐます。〇〇の様な計畫して領土を侵略する様な事を、最も不道徳だと考へてゐます。そう云ふ様な不道な國を世界から取去らうとして吾々は起つたのです。日本が吾々を恐れるのも無理はありません。そう云ふ意味では過激派は全く日本の敵です。然し日本は世界の敵だと云ふ事を一層考へておいて下さい。民本の上に平和を樹立しようとする大理想に反逆する罪は、いつか〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇が日本の命を短くするのだと云ふ事に、氣がつかれたらどうです。

乙「私は貴方の失禮な言葉をそれ以上聞きたくありません。强いて社會の秩序を亂したり、血を流す事によつて改革を起そうと云ふ様な考へに、眞の平和が樹立されるわけがありません。過激主義は日本の國是を危くします。制度を毀すものです。吾々は斷じて満鮮から赤旗を無くなして見せます。それが自己の守衛でもあり、且つ世界に對する日本の任務です。人道を無視する行ひによつて人道が守護されるわけがありません。そんな世界の大勢はない筈です。そんな叛逆があればこそ益々軍力を養はねばならぬ自覺が吾々に强まつてきます。言葉は役に立ちません。これから貴方に向つて宣戰します。

（こうなれば話が行きづまつて來る事を讀者は感づかれるにはちがいない。お互に自分の罪は反省せずに、他人の缺點ばかりを指摘して、自分の都合のいゝ様にのみ考へを進めてゐる。戰爭はいつも正義の名に匿れようとしてゐるが、それは裝飾に過ぎない。爭ひには利己や排他の念が弱いためしがない。若しも右の様な立場を固守して戰爭が起るとしたら、果して幸ひが東洋に來るだらうか。甲は尚も叛逆な行ひの連續によつて地に平和を來すと考へ得るだらうか。乙は又世界の趨勢に反抗して迄、民本の思想を打破し得るだらうか。人情に叛く行ひが人間の敬念を誘うと思ひ得るだらうか。又は軍力の勢ひが愛を二人の間に齎らすと思ひ得るだらうか。かゝる恐怖すべき露國は永く續くだらうか。又かゝる軍力と官僚との日本は永く榮えるだらうか。とも角二つの異つた心が今や互を打破しようとして近づいてゐる。吾々はどうして此危期を脫したらいゝか。自分は又與つた二人の會話を想像してゐる。若しも次の様に語り合つたら、吾吾は幸ひな結果に導かれはしまいか）。

丙「貴方がたは「過激派」と云ふ名を聞いて既に吾々を恐怖なさる。然し眞の語原は「多數派」と云ふ意味です。若しも眞に恐怖すべき憎惡すべき性質より他に持たないなら、吾々の主張にどうして幾百萬の人を引きつける力が湧くでしよう、多數の人々が歸依してゐるのは、吾々の主張に犯し得ない眞理があるからです。今の文明は種々な不純な不自然な結果を齎らして、僅かの小數な人々の爲に、多數の人々が虐げられた生活を送つてゐます。貴方もその事をよく反省して下さい。幸福をより廣くより深く萬民の共有たらしめる爲に、吾々は今努力してゐるのです。

丁「私達は貴方がたの運動によつて、多くの事を反省さされてゐます。私達はそれが文明の疾病を癒す最も鋭い藥である事を感じます。然し同時に貴方がたによつて行はれた様々な惡逆な行ひは吾々の心を暗くします。吾々はかゝる恐る可き手段を迄正當なものだとは思ひません。とも角貴方がたが一歩進まれて厚くその責任を負つて、一層深い理解を人類の運命や又は眞理の上に持たれる事を私達は心から希望します。

丙「貴方の御注意感謝します。急激な變化を呼び起した爲に、思はずも多くの靈に罪を重ねた人々が吾々の間から出た事を、すまなく感じてゐます。私達は一層反省しその思想や行爲が人道を純に守護する様になる事を心掛けたく思ひます。私達は眞に貴方がたの敵ではないのです。決して人倫を破壞し秩序を亂す事を本旨とはしてゐません。そう云ふ事には今後一層注意したく思つてゐます。貴方も私達の意志を理解されて、貴方自身で軍國主義や民衆を虐げる思潮から日本を救つて下さい。私達は眞理や美の日本には常に頭を下げる用意を缺かないつもりです。赤旗が翻る前に、どうか滿鮮に日本の美しく温い日光の旗を翻して下さい。威嚇や民力に撒るなら吾々は止むなく吾々の旗を立てゝ進む事に躊躇しないつもりです。然しそれは吾々の求めではありません。日本を眞理の日本として迎へる事を吾々はどんなにか望んでゐます。

丁「私達も貴方がたの心を理解する用意を缺かない様にします。貴方はあの恐る可き行ひや思想が貴方の本旨でない事を私に告げて下さつた。然もそれを恥ちて今後かゝる事から自身を救う様に努力する事を明言して下さつた。私はそれが實現せられたる事を心から祈ります。貴方もどうか今後日本を只軍力や自分本位の國だと思つて下さらない事を希望します。かゝる弊害が吾々の間にあるとの反省が。今や國民の間

に目覺めてゐる事を知つて下さい。若い日本人達はその故國を眞理に迄高めようとして今努力してゐます。眞理や美や至善に對してそれ等の人々は決して冷かではありません。それ等の基礎に日本が置かれる時永遠の日本が在る事をよく考へてゐます。日本は日本自らでその運命を、近い内に新な階段へと進めてゆくでしよう。

丙「かゝる日本を想像する事は私達には喜びです。私達は互に自分の罪を深く自覺し、他人の長所を厚く理解し、互に協力して眞理を守護してゆきたく思ひます。かかる時が來るなら、吾々の間に爭ふべき何ものも無くなると思ひます。そう云ふ日の早く來る事を貴方も禱つて下さい。どうか。

丁「貴方の言葉を嬉く思ひます。かかる理解によつて東西の文明が一層接近し得たら、それは眞に世界が、新しい文化の第一歩を踏み始める時だと思ひます。

丙「私は云ひ殘しましたが、私達の思想は露國と云ふ特殊な事情の國によつて強く要求せられた思想です。私達は此改革を實現することに急ぎました。恐らくその結果十分な理知の批判を缺いた點があるかを恐れてゐます。第三者である貴方がたが私達の爲にその缺を補つて下さる事を切に希望してゐます。私達の考へや治策に誤謬があつたら、それを訂正する準備をいつも缺かない樣にしたく考へてゐます。人類を幸ひにし、各人の生活を自然にし、その思想を深くし、信仰を温くし、世界に平和を來そうとする目的は常に不易不滅です。それに逆らう趨勢は躊躇なく破らねばなりません。只かゝる光に至る道に就て、吾々は今後互に内省し批判し正當なものを撰ぶ事に注意せねばならぬと考へて居ます。

丁「吾々は今爭つてゐる時ではないのです。他を排して自己を立てる心を棄てゝ、互に他を容れ他を助け、かくて自己を眞に活かす事をしなければならないと考へてゐます。此信仰をさへ深くしてゆくならば、一つの地に爭う二つの旗が翻がへる事はないと思つてゐます。貴方も爭うが爲の旗を掲げて下さつてはいけない。私も劍を手から棄てよう。平和にはそれ等のものは不必要な筈だ。若しそれ等の力に頼むなら、貴方も亡び私も亡ぶにちがいない。今のままでゆくならば貴方の運命は榮えないだらと思ふ。又私の生命にも永在は許されないと思ふ。

丙「私は貴方の言葉が正當だと云ふ事を信じる喜びを持ちたい。私は貴方にお逢ひした事を嬉しく思ふ。未來の日本が祝福される事を心から祈ります。

丁「お互に吾々二人が眞理の道を歩く樣、神の加護を念じませう。」

（讀者は若しこう云ふ會話があつたら、どう云ふ思だらう。自分はこう云ふ風に考へるより幸な解決は外にない樣に思ふ。互が互を敵視して進めば、その結果が何れにせよいい運命は互の所有にならないと思ふ。赤化に就ての質問があつたので、ほんの感じだけをお答へした）。

支那に於けるラッセル氏

□北支那に於ても南支那に於ても、ラッセル氏の歓迎は非常なものであつた。その長沙で講演した題目はボルシエヴイキと世界政治であつたが、氏は過激主義には一種の宗教的性質が具有されて居ると明破し、此主義が完全に行はるれば戦争は回避せられ、生活は平均せられ、腐敗に瀕しつゝある資本主義は再興を絶つが、しかし私は未だボルセイズムには充分に賛同しない。

■「資本主義の跋扈は民衆に覚醒がないからである。しかし米国あるが為めに資本主義は今後尚ほ四五十年の寿命を保ち得るであらう」なぞと元気がよく、次に「だが何れにせよ資本主義は崩壊するものだ」と

■「資本主義の後継としてボルセイズムが適当したものであるか、若し代るに適当でなかつたら吾等は別に資本主義に代るものを研究せねばならぬ」と説き茲に新制度の必然的発生を豫想して居る。

□一この問題が決解されねば亦た戦争だ」、私は非常に之を恐れて居る、何にせよボルセイズムの研究は細心を要すべきである。

■ラ氏は曰く「露国人はボルシエズムに対して或る新希望を懐いておるが、しかしボルシエズムと共産主義とは同じではない。共産主義は露国の小供の脳中に深く刻まれておる、露国当局は老人に希望を絶ち小供に希望を繋いでおる。しかし各国の改造は露国ほど緊急ではない、その手段も露国ほど劇烈でない」と

■そして露国内の現状に言及して「露国の秩序はさして乱れては居なかつた、ボルシエズムを説くには先づマルクスを説かねばならぬ。マルクスが経済界将来の趨勢を看破した識見をも知らねばならぬ」と可なりマルクスを賞讃しておる。

■しかし、マルクスの言に従へば、階級戦争は資本主義の米国に起るのが当然であるのに、事実は之に反して未だ工業の発達せない露国に起つた、マルクスはいかに之に説明を下さんと欲するかと皮肉つて居る。

■彼はボルシエヰキの事情を演べて曰く「将来共産人たらしむべき児童を教育し、機関新聞を以て鼓吹之れつとめ、消極的に反対なからしめ、積極的に共主義に同情すべき分子の製造に努力して数十年に亘り完全に共主義を実現し得べしとなし、全国言論の自由、出版の自由、思想の自由を絶ち、軍隊の訓練や其他の脅迫でいつたら共主義が実現されるだらうが私は此方法は不賛成だ。」

■何故となればそれは専制であり、そして人民をして共眞理を理解せしむべき方法に出でないからである、今日の露国は平民専制にあらずして政客専制である」と

■「よしんば、それは一時の権宜に出でたもので其目的を達成せるとき人民の自由を回復すと云ふも私は其時に及んで果して回復し得らるゝやを危ぶむ」と、

■ソレから近日米国の或る雑誌に私の対露意見なるものが載つておるが、あれは露国守旧派が自分に都合のよいやうに載せたもので、自分の意見とは無関係である。

■共産主義は多数の国が相共同してやれば実行が出来るが孤立した一国では不可能である。

■それからラ氏が本年十月支那にて、露國記者に語りたる二三の談を摘めば、英國なぞは革命は今日到底行はれない、何となれば革命は國家の衰微せんとせるとき起るものである、例へば、英國が愈々印度でも殺つるやうな下り阪の時に起るものだ。

■彼の炭坑夫問題の如きも、結局は政府と坑夫と相互の讓歩によりて平和に解決する、勞働組合が其要求に不滿足なる結果を得たからとて、全國の革命を蜂起せしむるとするも、其革命は總て完結される、此點は露國共產黨首領の思料の及ばざるものである。

■英國の革命を最も能く撲滅し得るものは米國である。其撲滅の手段は英國を嚴重に封鎖して棉花の輸入を止めることにある。そして各國は食料を英國へ輸入せざるに依りて革命が止むのだ、斯く觀察せば米國にして革命せざる限り英國　社會革命の勃發は意味なきものに了るのである。

■尙ほボルシエヴイキの不徹底に言及して「露國のボルシエヴイキが彼等を攻擊する國家主義者に對して極力敵對するは不當である、何となれば、國家主義者はボルシエヴイキをして軍閥階級を組織せしめ、勞農制度の首領たちは之がために其特等階級の地位を獲たからである。勞農制度の下の軍閥と國家主義の下の軍閥との間に抑どんな區別があろう、軍閥を打破して赤軍閥を建設する、之れ明に共產主義の原理に違反するものである」と。

■「私は何事をも創造しないメンセヴイキを好まない、しかし勞農露國の最後は極めて憐むべき情況裡に陷りはしないかと思ふ、レーニンは高尙なる人格者なるも彼の頭腦はあまりにマルクス主義のために多く裝られ過ぎておる」と。

■しかしラ氏はレーニンと會見して英語で通譯人らずて談話した。彼が純然一個の牧師然たる朴訥なところ、一點の驕氣なきところ、その沈着なるところには傾倒したるが如きも、トロツキイの狀貌佼偉であつて、驕慢的氣分には同感せなかつたのである。少くともその政權者の態度には失望したらしい。

■そしてゴールギーとも逢つた、自分の優れざる、そして暖默に苦む彼と逢つた、彼は「現在露西亞は百分の八十五は農民である、この國狀で共產主義が美しき果實を結ぶかは問題だ」と云つたのに對してはラ氏も耳を傾けたらしい。

■ラ氏はペトログラードに七日、莫斯科に十一日の滯在をした、そして地方の赤色觀察にも數旬を費した。

■ラ氏は英國人である。そして數學の大家である、それだけ觀察も精到微妙に亘つて居る、氏は南京の科學社にてはアインスタインの相對說につき一場の講演をなしておる。

■氏はアインスタインを以てニユートン以後の第一人として一九一五年發刊の新引力說を提唱し、ニユートンの解く能はざりし水星運行の狀態などもアツサリと片付けておる、これ等の說明は可なり詳細を究めておる。



日本印象記

石川三四郎

△日本への旅立

私は昨年秋、アフリカのモロッコ國に旅をして、本年六月末歸佛した。そして直ちに日本に歸へる仕度に取り掛つて、其れに一箇月を費やした。六年來住み馴れた佛國ドルドオニ河畔の山家を棄てゝ愈々歸國の旅路に就いたのは、七月二十日頃であつた。佛國巴里や白國ブルスセルの舊知己恩人等に別れを告ぐべく此兩都會に足を留むること一箇月餘、既に五六回も往復したことのあるドオバア海峽を横斷して英國倫敦に着いたのは八月末であつた。

△日本船

七月三十日頃白國ブルスセル市に着くや否や、私は書面にて倫敦の郵船會社支店に乘船を申込み、因幡丸特三室に一席を得ることとなつた。ソコで私は日本郵船最終の碇船所たる白國アントワアプ港に至り、若し同港にて乘込むことが出來るかドウか、船長に直話を試みやうとした。其れは、倫敦支店の規定ではア港にては一切乘客を申受けぬことになつてるからである。郵船會社の回答に依れば因幡丸は八月二十六日頃ア港に入る筈なれば、私は同日同港に赴いた。而して若し自分の乘船は拒絶されても、手荷物だけは同港から托載することが出來やうと考へて、之を同時に運搬して行つた。然るに因幡丸の入港は數日遲れることとなり、私自身の乘船は無論思ひ止り、唯だ荷物だけは同港中央停車場に托したる儘、其積込方を郵船會社代理店に依賴して私はブ府に歸つた。

其折のことである。私は郵船の碇船所を見るべく彼の長い長い港堤に沿ふて、番號の付いた廣大な倉庫を數へて行つた。長い電車路に歩を進むると幾町、第十三四號目の倉庫に近くと、其

倉庫の前面高く、白色の Nippon Yusen K isha といふ大文字が幾十間かに跨がりて掲げれ、四邊を壓するばかりである。併し其港堤には一隻の郵船も着いて居なかつた。ソコで私は港内の一勞働者に、若し他の港堤に碇泊中の日本船あるやと問へば『有る、モッとズッと遠い彼方の十八號か十九號の倉庫に行つて御覽！　船の名は知らぬ』と答へる。再び長い道をテク〳〵辿つて指示された港堤に着いて見ると、其れは郵船會社の船では無くて、大阪商船會社のドオバア丸であつた。そして明日の出帆を用意すべく、皆が積荷に忙はしかつた。故國を去つて八年、日本人及び日本人社會から殆ど全然隔離した生活を繼續して來た私には、コウした些細な日本の名、日本人の事業に接しても、言ひ知れぬ懷かしさと氣强よさとを感ぜずには居られなかつた。私は彼のクロポトキン翁が、亡命漂浪の長い生活や、常に『我が露國よ！　我が露國よ！』と叫びて故國を思慕し、一朝革命の勃發するや、其病軀をも顧みず、直ちに旅裝を整へて、騷亂當さに酣はなる故鄕へと旅路を急ぎたる心情を能く能く察することが出來た。

△日章旗の威光

私は倫敦に着いて、乘船賃支拂の爲に郵船會社支店を訪ひ、佛貨を英貨に替へる爲に正金銀行を訪ふた。そして此處でも日本人の事業と勢力とが此遠い大都會にまで根を下して居るヿに驚かされた。正金銀行でも、郵船會社でも、倫敦の經濟中心たるバンクの近傍に可なり廣い家を占領して居る。そして、いづれも數十人の英人を雇用して事務を擔理して居る。更に愈々因幡丸出帆の日になつて、同船乘客の一人となるや、私は八年以來曾て味ふヿの出來なかつた日本といふ色彩と氣分とを充分に味ふヿが出來た。此處は正金や郵船の支店と異つて、事務員から、水火夫から、給仕人まで、悉く是れ日本人。水入らずの睦まじい親しい生活が如何にも美しく羨ましい程であつた。そして自分も其人々と親しく談笑し合ふて、モウ日本に歸つた樣な心地になつた。彼の若い、小軀い、水夫達が、優しい落着いた水夫長の指導の下に、マメマメしく働いて居る樣を見て、私はホンとに末賴もしい人達だと感歎せざるを得なかつた。歐洲大陸貿易の咽喉たるアントワアプや、世界經濟の中心たる倫敦や、更に進んでは北海の獨逸港ハムブルグにまで、日本の勢力を植え付けて歩るく此勞役者達に對して、私は心から感謝せずには居られなかつた。

又、同船乗客の多數は日本人では無くて英國人であつたことは、私をして頗る奇異の感を懷かしめた。日本の郵船が英人船長なしには歐米に航海することが出來ず、積荷さへも危險の少ない下等の物品に限られたのも遂先頃までの事實であつた。然るに今日では殆んど一人の外人船長を留めず。恐く是れ日本人自身で航海するのみならず、世界第一の海運國として誇れる英國人が此小汽船因幡丸に乗込む樣になつた。何といふ變化であらう。是れも等しく彼の優しい小艪の勞働者達の効績である。而も彼等は曾て自らの効績を誇らず却て、『日章旗の威光は偉らいものです！』と言ふ。

△ポオト・サイド

因幡丸がポオト・サイドに着いた時、私は殊に日本の『海外發展』の著るしきに驚かされた。日章旗を揚げた幾隻かの船舶はマルセイユに於ても見受けたが、ポオト・サイドに至るや其數は更に增加し、加ふるに日章旗を揚げた多くの小艇は縱横左右に走つて居る。猶太種の兩替屋は因幡丸甲板に登り來りて盛んに日本語を以て華客を求める。『アナタ、リヨウガヘ、イカガ？』『十フランで、一圓アゲマス』『一磅なら七圓』『日本キン高イ！』抔と語ふ。キヤビンの窓から外方を窺き見れば小艇の小商人が『アナタ、西瓜！、良しい西瓜！』などと叫ぶ。是れには私も一驚を喫した。私が八年前に渡歐する頃には、香港やシンガポオル邊りでも此光景は見なれなかつた。此日本の經濟的海外發展は實に活目して見るべきである。

△紅海の酷暑

彼の健氣なる青年海員の爲に祝福し、此盛んなる日本勢力の發展を喜びながら、私は因幡丸と共にポオト・サイドを去つた。船は之より印度コロンボまで十二日間の航海を打續けねばならぬ。其途中チブチ港にもアデン港にも碇泊せぬ故、此處は郵船の歐洲航路中で最苦痛の航區とされて居る。殊に紅海の暑氣は印度洋の其れに比してさへ甚だ猛烈を極むるので、船員の苦艱は實に想像の外である。船員中でも、殊に火夫の生活を實見する時は誰でも一度は戰慄するであらう。

因幡丸が紅海の航行を當に終りて印度洋に近つかんとする時のとである。私は測らずも火夫等の痛烈なる怨訴を聽いて、深くも之に同情を寄せた。其結果、私は豫ねて親密になれる一機關士に乞ふて、日中其機關室を訪問するを許された。私は其の

翌日、晝食を終つて後、直ちに其訪問に赴いた。機關室の入口より入ると、三間四方ばかり有る最上層の床は鐵格子を以て造られ、其床上から下部を瞰めば、幾丈かの底に置へられたる蒸氣罐は酷烈なる熱氣を放ちつゝ悽愴なる運轉を續けて居る。私は其光景を一瞥しただけで、モウ戰慄して了つた。火夫達や機關士の働い居る場所に達するには、更に類似の鐵の梯子を下らねばならぬ。私は其を恐ろしく思つた。そして行きつ戻りつ躊躇すると數分間。ハンケチを掌に卷き付けて焦げ着きそうな欄干に縋りつゝ鐵梯子を下り始める迄には、隨分自ら思ひ勵まさねばならなかつた。漸く最下層の機關室に達して、優しい機關士Mさんに會した時は、やつと安心する程であつた。Mさんは私を導いて機關室の隅から隅まで見せてくれた。發電機の說明、製氷機の說明も詳細にして呉れた。プロペラの太い二本の心棒に沿ふて、身を横にし頭をかがめながら、狹いトンネルを通つて船の後部にも赴いた。熱火のたぎつて居る二つの大罐の間を脫けて、(此處こそ普通トンネルト呼ばる)眞闇の地窖を經て石炭庫までも導かれた。

△焦熱地獄

此間に私の全身には既に油汗が瀧の如く流れて居た。慣れた機關士Mさんの全面にも油汗が流れて居た。私は之を見てトテモ人間社會の事實とは思はれぬ程であつた。鬼哭啾々たる焦熱地獄に自ら投ぜられたる如き心地がした。私は其恐ろしい生活に實に身慄ひせざるを得なかつた。而も此處に働いて居る人達は、鬼でも無ければ、蛇でも無い。否な彼等は吾等の日本人中、その勇氣に於て、其體力に於て、其の智能に於て最も優れたる青年達である。是れは輕々に觀過すべからざる事實であると私は深く考え深く嘆じた。『機關部に三年も働いて居れば、大抵な丈夫の軀も病氣になる』とは海員の等しく物語る處である。『私共は僅かの月給で健康と生命とを切り賣りして居るのです』とMさんも嘆息して居た。『私共は働らくことは少しも厭ひまんが、せめて一航海の終る毎に一二週間の休息修養の時日を與へくれたらと思ひます』とは又Mさんの語であつた。私は此常に百三十度を下らぬと言ふ熱い機罐室を辭し去りながらツクヅクと考えた。あの日章旗の威光をして西歐の地の果てにまで及ぼし、海外發展の今日の如く隆盛を來せる裏面には、此樣に人の想像も及ばぬ程の犠牲が拂はれて居るのだ。郵船會社の重役等をして幾萬の賞與と利益とを得せしめ、株主に對して幾十割

といふ法外の配當あらしむべく、彼等はコウした暗黒なる焦熱地獄に身體の勞働を續けて居る。而して彼等が十數年或は數十年の勞役の報酬として受くる所のものは何であるか。老朽に非ざれば即ち疾病、貧困に非ざれば即ち死滅。犠牲も此に至つては亦悲慘の極と言はねばならぬ。

△新來の日本人客

船がシンガポールに着いた時、此處に多數の日本人客が乘り込んだ。英國から同港に至る間は特別三等室が即ち最下等の席で、通席三等の場所は設置して居なかつた。然るにシ港に至るや、多くの荷物が陸揚せられて、三等室に當つべき大きな場所が空になつた。そして一日の中に百五十名の三等客を收容すべき大廣間が準備せられた。客は忽ちにして此席に溢れるばかりに乘り込んだ。其中の多數は醜業婦と海員とであつた。醜業婦等は國家の體面を思ふて退去を命じたる政府の意に從つて歸國するのである。海員等は會社が賃銀安き支那人を雇入れたる爲め其業を失ふて歸るのである。日本にて此の如き解雇を行はんか、忽ちにして世間の物議を惹起すが故に、狡猾なる會社は船を印度洋の彼方にまで送り出して此處に始めて同胞勞働者放逐の勇斷を行つたのである。是れは米國の排日法案抔の如き生溫い方法では無くて、極めて露骨直截なる而も極めて巧妙なる排日行動を敢てしたのである。此巧妙なる排日實行者は之を國際汽船會社と稱す。憐れなる海員等は其何故に特に海外に於て解雇せられしやを悟らず、歸國の旅費まで戴きたる勿體さに感泣して、『ストライキ抔といふ野暮なことは爲ぬものよ』と濟まして居た。勞働者が皆此樣な心懸で居て下されば、資本家は何時までも萬歳である。目出度いかな。

△醜業婦

『娘の國』として世界に其名を轟かした日本のとなれば、シンガポオルの娘子軍も定めし元氣と色彩とを横溢させて御坐ろうと思ひきや、因幡丸が迎へたる六七十人の婦人群の身窄らしさ！ 彼の灰色の、血の氣の無い、陰欝な而も表情の曖昧な、影の薄い面相の行列を眼前に見て、私は自分の日本人たる誇りをメチャメチャに蹂躪れた樣に感じた。併し考えて見れば、吾等は彼等を責めることは出來ない。彼等は元より最初から自ら好んでアノ生活に投じた譯でもあるまい。否な否な、彼等が身を此處まで投ずるに至つた理由こそ、實に現代社會の實相を談るも

のでは無いか、一語にして言へば、現代の商業主義と生活難とが彼等を驅つて此處に至らしめたのでは無いか。日本の當局が、在外醜業婦を國辱となすは甚だ可しい。日本は宜しく速かに『ムスメの國』たることを辭職すべきである。併し其醜業婦の出稼を根絶し、『ムスメの國』を廢業するには、先づ第一に其原因たる資本主義、商業主義から解放されねばならぬ。之を擱いて、百の施設、千の命令を發するとも、人間の生存する限り、女の存在する限り、之を根絶することは出來ない。

△神戸着

倫敦を出て丁度五十日目、因幡丸は四國土佐沖を經て神戸港に入つた。併し佛國を出發する時、私の心中に聞えた『日本よ、日本よ』といふ叫びは何時の間にか消えかゝつて居た。神戸上陸に際して舊友と接吻し、兄弟と握手した嬉しさは格別として、『日本よ』といふ思慕の情は消え去つた様に思はれた。倫敦にて始めて日本船に乘込み、多くの日本人人に投じた時ほどの感興は全く起らなかつた。蓋し其れは既に長く日本人と親しみ馴れ、日本味に飽き、自らも日本其ものと成つて居たからであろう。

神戸着港の翌日、私は大阪に赴いた。舊友荒畑葉村君等の指導に由りて私は一場の講演を試みた。八年間殆ど日本語に親まなかつた私も、航海中五十日間の練習にて、最早何事にも差支なかろうと自信して演壇に立つた。處が普通の坐談とは異つて、六ケしい、六ケしい。第一に言語の索引に骨が折れる。語句の結構は支離滅裂して纏まらない。日本に上陸して劈頭第一の失敗を演じた。

東京行の汽車に乘る。大分改良せられたと聞いて居たが、マダ〱物になつて居ない。英國や佛國の汽車に比すれば、マルで問題にはならぬ。勿論私は三等に就いて言ふ。英佛いづれの三等室も、長距離のには厚い蒲團がベンチの上に敷かれてある。其膝掛も日本のよりは低くい。足を休める様に出來て居る。仕切のドシエーも高く柔かで、頭を持たせて心地よく眠れる。足の短かい日本人にアの高い椅子を與へて、其れでドシエーか板で硬くて低くい。頭の持たれ處が無い。夜中眠りかけでもすれば、忽ちにして背後の人と頭蓋骨の衝突を來す。其上に汽車は動揺して且つ牛の歩みを摸倣する。是れが日本の摸範鐵道だといふに至つては眞に恐縮せざるを得ない。

東京に着いて見れば、市街は依然として無規律でキタない。道路の惡いことは世界的評判の通り。日本服論者を以て誇りとし

て居た私は、今度親しく雜沓の市民を見て、其ダラシなさ、無作法さ、無趣味さに驚かさるを得なかつた。コンな有樣では無い筈だつたがと、幾度か自分で考えなほして見たが、ドウ最負目に見ても、日本人の服裝はダラシが無い。

△東　京

併しダラシの無いのは、服裝ばかりぢや無い。電車がダラしが無い、家屋もダラしが無い。ブザマな洋風家屋が貧弱な日本家屋と立交つて居る。電線も世界無比なるダラシ無さを發揮して到處に從横に引張つてある。可なりに廣い道を人間と諸車とがダラしなく奔走して雜沓を極める。それからは惡臭芬々として鼻を突く。便所には糞便が山を成して居る。日本政府が資本家に媚びて所謂『物價調節』を逆に行つた結果は、日本をして世界第一無比絶倫の高物價國たらしめた。日本が私に與へた最初の最大驚異の一は實に是れであつた。東京市の亂雜不規律を見ると、此大都が惡い西洋料理を喰い過ぎて、胃痙攣と腸加多兒とを一時に併發した樣に思はれる。日本に着いてマダ一週間も經たぬ内に、私は此大病の日本にウンザリして來た。アノ『海外發展』も『國威振張』も、能く診察して見れば、實は資本家主義といふ文明食を喰過ぎて胃痙攣を突發して、身を誤り足を踏んぞつたに過ぎない。醜業婦の出稼も腸加多兒の結果に過ぎない。此大病の日本、果して萬死に一生をかち得るや否や。

ハ氏の當選と將來の日米關係

二酉氏

米國大統領選擧は愈々豫定通り共和黨の勝利となり、而も未曾有の大多數を以てハーディングは當選せり。尤も當選と云ふも未だ正式には當選した譯ではなく、今回の選擧は大統領を選ぶ人を選擧するので正式選擧は後日のことなるも事實に於ては此選擧人の選擧結果に依つて總て決定するのである、即今回選ばれた選擧人は皆黨派的立場により選ばれたので、憲法制定當初の趣旨が何れにあつたにせよ、事實上彼等は自己の自由意思に依て大統領を選擧し得る譯でなく、自分を投票した投票人の意思に拘束せらるゝ、そこでハーディングの大統領たるべきは確定の事實として差支はない。ルーヅベルトが共和黨幹部の横暴に憤慨し改進黨の別派を組織して所謂第三回大統領候補としてウイルソン及タフトと選擧を爭ひ共和黨側は見事民主黨に敗られて以來八年漸く團結を恢復して玆に再び天下を取るに至つた次第である。今度の選擧は世界戰爭の大波亂を受け講和會議後最初の選擧にして國内關係に於て、又國際關係に於て非常に重大な意味を有するは云ふを俟たぬ、玆には單に今度の選擧と將來の日米關係に付述べることゝする。其の順序として先づ共和黨が斯かる大勝利を得た原因の重もなるものに付て説明し、夫れから選擧が米國の對外政策に及す影響に就て一言し、夫れが日米關係と如何なる關係に立つか又日米關係を如何に進展せしめなければならぬかに付て識者の深き考量を促し度いと思ふのである。

一、共和黨大勝の大因

民主黨も共和黨も各其黨派の立候補大會 Convention に於て選擧戰に對する各黨の政綱と大統領後補者を決定するのである今回は共和黨は六月中旬シカゴに於ける大會に於て、民主黨は七月初旬桑港に於ける大會に於て、何れも候補者と政綱とを定

めた。候補者は民主黨は Ohio 州の知事コックスで、共和黨は同じく Ohio 州の上院議院ハーディングであつた、其發表せる政綱を見るに共に民衆の要求に投ぜんとするに汲々として互に他を非難し自己を辯護するの外其內容の實質に至つては要するに非常なる差異はない今其一細目に亘つて之を論ずるは本問の目的外に走るの虞あるに依り之を讓むが試みに最も重大の問題たる平和條約に關する論爭の焦點である國際聯盟に就て見ても之に反對する共和黨の政綱には國際聯盟に關して先づ「共和黨は世界平和確保の目的を速成する爲め國際條約を締結するに贊するものなる」旨を明記してある唯不贊成なるはウイルソン案の國際聯盟には絕對に不可なりと云ふに過ぎぬそこで兩黨の政綱は卽ち民衆消化の爲めに作製せられたものであり從つて實質よりも寧ろ行文の形式に重きを置きて見なければ要點を逸する

米國大統領の選擧戰は、米國全體の成年男女を相手に行はるべきもので、從つて政綱の實質よりも形式が第一であることは前述の通りで、換言せば國民の理性に訴ふるよりも寧ろ感情卽ブレーンよりもハートに訴ふるの方法を取らざるを得ない。故に兩黨の政綱が其實質に於て餘り差異がない樣で而して其形式に於て非常の差異ある所以である。從つて人氣の題目例へば加州排日問題の如き相方共とり合ひで互に後れざらんことを競ふの風あるは、民衆相手の選擧として黨派制度上誠に止むを得ない所である。

兩黨政綱の大體の形式に於て何が最も異つて居る點かと云へば、共和黨の政綱は是迄ウイルソン大統領の政治制度を全然非認し民主黨は之を防護して居る點である、共和黨に飽く迄ウイルソンの專制政治に止めを刺すとを高調し民主黨は共和黨を以て國內黨派の私情を以てウイルソンが大統領として行ひし政策乃至は對外約束に禍を及し國家の名譽を毀損するものなりと非難する、政綱の一一に付ては實質上餘り差異はないけれども此形式の點には正面から相容れない立場に立つて居る此點は形式の樣ではあるが民主黨と共和黨との根本的性質の差異より出づるもので特にウイルソンの人格性質に職由する所多く兩黨勝敗の分れる主因があり又將來米國の對外政策を窺ふも缺くべからざる着眼點である。

民主黨は卽ち自由黨（リベラル）である理想派である極端に行けば世界主義的傾向に進む共和黨は卽ち保守黨である現實派で之が極端に流るれば帝國主義的傾向に進むこれは何處の國でも同樣で同じアングロサクソンの英國のリベラルとユニヲニスト付も同樣で

あり佛國に於ても政界は自ら兩方の傾向を有する其の他の國も國情により厚薄の差はあるが大體同じに見られ得る日本と雖も此頃は幾分此色彩が明になつて政友會は外國人から見ればりべラルと見られて居るそこで他の國の事は暫く措き米國では民主共和の此傾向が明確に分れて民主黨が理想派で世界主義的傾向を有するは、ブライアン、ウイルソンの如き黨首を有るによりても明白に了解せらるるウイルソンが世界戰爭中平素の持論たる自由平和の主義よりして戰爭參加を隱忍せしにも不拘獨逸軍閥の戰時のやり方が人權を蹂躪しウイルソンの所謂正義の感念に反したりと云ふので遂に理想上劍をとつた其時は米國人全般の後援の羽を得て戰爭を首尾克く終結を告げたが却說平和談判となるとウイルソンは其理想を以て世界に强いんと努め巴里の平和會議に於ては所謂國際聯盟なるものを何處迄も固執し却つてクレマンソーやロイドジヨージ、バルフオアの老猾なる政治家に逆て利用されたる結果には陷つたが兎に角頑强に骨拔きながら其理想を主張して條約は出來た却說條約は出來たが之を持つて歸つて自國民に之を鵜呑みにさせんと高飛車に出たけれども元來自己主張の理想に立つた米國民には一向利き目がなかつた反對黨たる共和黨は此機逸すべからずとウイルソンを目かけて完膚なく攻擊非難した。

此間の機微を察知するには民主黨自體の理想性と此代表者たるウイルソン自身の性格とを見之が米國民衆に如何に反影したかを知らねばならぬ、戰爭中獨逸軍備が海陸に於て暴威を逞ふし有ゆる非人道を敢てしたる際民主黨の理想性は元來正義人道の愈々强き自由人權の主義に立て居る米國人一般に反響せしは怪むに足らぬ而已ならず米國人一般は民主黨政府の遣り方を手ぬるく感じたる際なれば一朝ウイルソンが劍を取つて立つた際は全米國をし全然其背後に立たしめウイルソンは民主黨のウイルソンにあらず米國のウイルソンなり否世界のウイルソンにして又實に正義の神なりと稱へらるゝに至りウイルソンの陰げ口さへきくものあらば黨派の別なく米人の怒りを買ふの有樣なりしは吾輩の米國にて當時親しく經驗せし所であるウイルソンは正義の神と仰がれ十字軍を歐洲の戰線に送り其威容は昔シーザーの天下に號令せしが如く、又シヤーレマン大王の歐洲を平服せしが如くであつたさすがのクレマンソーもロイドジヨージも米國の國力を背後に有するウイルソンの一言一句は悉く傾聽せざるを得なかつた、否少くとも傾聽するの風を裝はざるを得なかつたそこで大學敎授の素質を失ふ暇なかりし、ウイルソン

は元來の性質に加へて氣が馬鹿に大きくなつて乃公には聞かれざるなく行はれざるなし平素の理想一擧にして實現すべしとの氣勢に自然に進んで來た即ち玆に彼は米國の代表者と自己とを分離してしまつた自己の背後であるべき米國民を顧みず自ら馬車馬の樣に突進し王公の氣位で何も彼も自己の理想で律し得又律すべきものと思つた、彼れが講和會議中巴里で何處へ行くのも夫人と同列で大統領の業々しき旗を押し立てた自動車の中にシルクハツトでそり身になつて居たのはクレマンソウやロイドジヨージが簡單な背廣に普通の兵士の運轉する自動車を驅つて居たるに對比すれば如何にもきざであつたのは、何人も米國の民主も獨逸の帝制も少くとも形式は大なる差異のないことを思はしめた、而己ならずウイルソンの巴里の居所たりし Place des iltertas unis の一角は米國の軍隊を以て要所〳〵を固め水を洩さぬ警戒振りは愚か出入の儀容盛んなる戰前獨逸伯林ウンターデンリンデンから皇室の邊の光景を凌ぐこと數等なるものがあつたのは親しく目擊したもの〻感を同じくした所であつた。これが理想家ウイルソンの性質であつた、彼れは飽く迄高壓的にヲートクラチツクに其計畫實現を計つた老猾なクレマンソーやロイドジヨジは其國力を楯として飽く迄ウイルソンに迎合しつ〻實益はすべて之を自己のものとした講和會議に於てウイルソンの正義人道の十四ケ條綱領は英佛には嘗て嵌らぬと云つたのは獨り批評家デイロンのみではなかた、斯くして英佛强大國は其厄を免れ伊太利以下は皆ひどい目に會つた。

伊國のフユーメ問題に付きウイソン大統領が伊國問題に關係したとの理由の下に伊國公權ヲルランド首相以下の巴里引揚げとなり其他の大小諸國皆理想家ウイルソンの威壓的態度の犧牲にならざるものはなかつた。

馬車馬的に進んで其理想たる所謂十四ケ條綱領から見れば骨抜きの樣な條約を携えて歸つて見て初めを米國人と自己との距離の餘りに近きを知つた、然しヲノトクラチツクの彼れは自己の力で何處迄に高飛車で米國の上院も輿論も左右が出來ると信じ、玆に條約締結權の半ばを有する上院は激爭するに至つた、此際已に政界の機微を見て取つた共和黨首領ロツヂやボーラの上院議員は何よりも彼よりもウイルソンのカイザーをも凌ぐ此威壓的態度 Aatacratic tendency を攻擊し其勢猛烈を極め遂に之を大統領選擧に利用し初めたウイルソンが國民の輿論によりて上院の態度を覊さしめんとした全國に遊說を初めたるが半

ばより其演說に對し何等豫期の反響のないのに氣が附いて殆ど失望の極病氣となつたのは何人も知つて居る通りでウイルソンが西部に來てなしたる演說は誠に Poor speech であつたとは米國人自身より能く聞く所であるウイルソンの態度は既に米國人の承認する所ではなかつた、否專制威壓は假に全世界の憎惡の標的である米國人は個人的民主的國民で正義の道を銳敏に感ずる國民である戰爭參加當初のウイルソンは正義の神とせられたが平和を齎られたウイルソンは恰もカイザーの如きヲートクラチックのものであつた、理想派の、世界的傾向を有する民主黨の主義を實現するに當りては他國の事にも干涉したり又ドグマチックとなりヲートクラチックとなるは何も怪むに足らず、然らざれば共主義たるや茫漠として捕捉するを得ざるものにて止らねばならぬ　社會主義も之が實行に當りては同じ傾向を有すると同樣である。況やウイルソンの性格が完全な專制的傾向ヲートクラチックテンデンシーを有するをやだ。

此機微を利用し元來國際關係に冷淡な國民に對し國際條約を犧牲にしても米國主義を高唱し專制主義を排除するの徹底的運動を起したのだから一致したる共和黨の未曾有の勝利を占めたのも亦敢て異とするに當らぬ是れが共和黨勝利の主因で而して此點が立候補大會が定まつた兩黨の選擧政綱の內容が實際餘り差なきに不拘其選擧戰の形式に於て又意義に於て非常なる意味を有して居たことは克く味はねば共和黨の對外政策も見當を附けることが出來ない。

二、共和黨と對外政策

民主黨の對外政策はウイルソンの政策に關聯して前に述べた如く理想派に屬し卽ち平和政策である。正義人道を標榜して世界恒久平和を理想とする是を極端に實現せんとせば卽ち自己の理想を他に强ゆることになるので自分以下の力を有するものには極端に專制的又は威壓的感情を持たしめる傾向を有する然るに元來國家間の交涉取引は尙取引 give and Take 時代を脫せぬ個人間でも未だ共產主義は生ぬるい社會主義も實現し得ず個人の所有權制も持續せられ居り從つて個人間の關係は取引關係である。況や國家間の關係は尙更らである、そこで國家は遂に自己主義 Selbst. ebhemptung により自己を完成し向上せしめんとする現代に於て漫然たる理想論的平和主義を以て國際關係を處理して行かうとすると玆に種々雜多の方面に無理が出來て共理想の實現が例へば今度の國際聯盟の如く鵺的となり

又は他國に對して極めて迷惑至極のものとなる、加之ならず國際間の實現に於て他から見て無理想派の下にある國家の外交が如何なる體樣に發露するか豫想も付かぬ有樣となる、換言すれば理想派の下にある國を相手とする外交は現代の如き國家主義の時代の國際關係に在りては極めて遣り苦くいもので特に共國が米國又は露國の如き深底知れぬ偉力を以て居る國である場合に特に然りとする、例へば日本の大陸即ち支那又は西伯利方面に發展することに對しても理想主義の下に在る米國は何を持ち出すか見當が付かぬ譯である。

然るに共和黨の體樣は前にも云つた通り保守派で寧ろ現實的である、即ち自己を本位とする計算的(カルキュラチブ)態度をとるの傾向がある即ち理想のみに止まらず所謂 Businesslike の所がある、國家主義を本位とする取引關係を脱せざる現國際的交渉に於ては極めて實際的である、即ち徒らに正義人道の主義に固執せずして現俗世界を俗世界として之に伴ひ自由の立場より Businesslike に國際的交渉に進むの風がある是れは米の共和黨にしろ英のユニヲニストにしろ全じ性質である、此主義は取りも直さず國際的の個人主義で即ち自他共に尊敬するの立場に立つて居る故に他國のことには可成干渉せざると共に自國のことには他より容喙せしめぬ此特質を有する共和黨がウイルソンの鵺的國際聯盟に對し猛然立つたのは必ずしも黨派的根性より相手のことは何にも彼を叩くと云ふ計りではない深く意味のあつたことと思はるる

今後の共和黨の對外政策も、亦右の點より大體の判斷を附けねばならぬ、即ち共和黨はウイルソン時代と異り國際間の個人主義を基礎としたビヂネスライクな方法により國際問題を處理するものと見て大差はなかろう從つて佛國も伊國も英國も米又他の國も共和黨の實現に依りて少くともウイルソン時代の壓迫的空氣を脱したるが如き感を有し居るも蓋し當然の事であろう則ち共和黨治下の米國に對しては國力を基礎としたる正當の give and Take の交渉になし得て見込を得る次第である。

此點に付いては新大統領ハーデング氏の人格問題を深く穿鑿する要もなく、彼れは他の多くの米國政治家と同じく立志傳中の一人たるを失はざれども其政治的生活として現はれたるは比較的最近にして出身地ヲハイオ州に於て副知事となり夫れより米國上院議員となりて以來稍世人に知らるるに至つた人物は寧ろローズベルト流にあらずしてタフト流なり、共和黨侯補者たるウツド、ジョンソン等の角逐の裡黨幹部の所謂黒馬侯補者にして幾分ヲハイヲ知事コツクスの民主黨侯補者たらんとする形

勢なりし爲め（後實現せり）此地盤に切り込むの策戰をも含みたるが如し要するに其性格に見又其立候補の狀態に見ハーヂングは共和黨傳來の政策範圍以外に全然新機軸を出すべきを信ずる譯には行かぬ。

三、將來の日米關係

將來の日米關係を亦上記の共和黨對外政策を脫して考ふることは出來ない、即ち兩國の交涉は從來よりも一層ビヂネスライクに之を行ふことを得る時機となつたと見て宜しい、日米關係と云へば何人も加州排日問題を先づ考ふるが其外に日米兩國の外交關係を如何に處理せんかと云ふ大問題をも加州問題關係し併せて考ふることの極めて必要なるを忘れてはならぬ。

イ　加州問題

加州問題と云つても必ずしも加州に限られた譯でない、布哇をも含む米國西海岸に近き諸州に於ける日本人排斥に環連する諸問題を抱容するので加州が其代表的のものとなつたので加州問題の名が附せられる。

所謂排日問題の起源に付ては一言を要する其原動力は即日本民族の發展力で直接の動機は人口過超の爲めの生活難に追はれるから國外に移殖して生計を立て樣とするに在る半世期前は布哇は太平洋人種の一民族に依つて構成せられたる一小弱國であつた米國西海岸は未だ充分には植民せられざる半ば No man's Land であつた、そこで是等の地域に支那人日本人が盛んに出稼ぎに行つた之等の大部分は草鞋を穿き、笠を戴いて移住し婦女子は多く如何はしき吉原女か淺草女の類であつた、それから漸々移民が殖へて今日の在米同胞が出來上り其間に米國西海岸の米人の勢力は完全となり布哇も合併せられたのである。

日本人の嫌惡せらるるのは移民の素質が劣惡で不合化性を有して居たことも與つて力あり、又日本勞働者の競爭による所謂勞働經濟關係も亦其原因を成すに違ひはない併し要するに之等は副因で、而して米國人側が表面唱ふる理由である夫れならば何故伊太利人や南歐人の日本移民より一層激しい奴は之を同一に取扱はぬか、又日本人丈（支那人は暫し別として）特殊の取り扱を受くるか排日立法者が日本人のみを區別する爲め而して白色人を除外する爲め何故適當なる立法の文字を發見するに苦心するやこれ等の反問には答ふることが出來ない、要するに日本人であるから排斥すると云ふ人種問題に歸屬する、昔の日本移民は隨分如何はしきものが多かつたが最近の在米同胞は大い

に昂上して來た、夫れにも不拘日本人が劣等人種にして飽く迄排斥をうける排斥の裡面には日本人には日本と云ふ背景があるので全く敵を發うに均しく實に危險千萬であると云ふ恐怖心もあるが概して云へば例へば米國に於て黑人を下等視すると同樣の種類の輕侮を日本人は受けて居る其心情は所謂ジャップの名前が克く代表して居る日本人が劣等であるの意に於て排斥を受けるのは日本民族の忍ぶべからざる屈辱である、此屈辱は例へば所謂治外法權領事裁判の制度により又は三國干涉によりて受けたる恥辱よりも更に廣汎な而して撤底的のものである、日本民族は此屈辱に對して何時迄も之を忍ぶものでない再び此屈辱を受けぬ樣內外國力(武備ではない國の實力を云ふ)を充實する方策を確立し其實行を急ねばならぬ、則ち吾輩は米國排日問題を以て單に一偏暇の出來事として輕々に觀過するを認容するものではない、併し玆に一言し置くべきは米國に於て劣等なりとて排斥せらるる日本人の生活狀態竝思想を內地の一般日本に比較してみると如何かと云ふ點である、內地の人々は米國に在る日本人は如何にも自分等より劣等である自分等の樣な日本人のみであつたなら排斥運動は起らなかつたろうと思ふ人が少くない樣だけれども其實米國に在る同胞は我一般普通の內地人より思想又は生活程度に於て先づ遙に上位に居ると云ふも過言ではない、是れは在米國同胞の狀態を內地人に比較して研究せる人々の一致する點で則て一般內地人より上等の日本人が米國に於て劣等視せられて排斥せられ居ると云ふ關係に在る之を換言すれば內地日本人社會と米國の米人社會とは其程度に於て非常な差異があると云ふことになる是等の事實は事實として我國民に於て深く省みる所がなくてはならぬ一度米國を研究したものが米國と日本とから各方面より比較して悲觀せずに居られ樣か吾輩の云はんと欲する所は排日問題に付ても先づ人を改むるよりも自ら省みよと云ふ點である、自省の點は一つは國力の點よりである國力充實は主として對外政策の點で又國力政策の根本的改造を要する他は自己改良の點で內地の社會狀態經濟狀態思想狀態總ての方面より急速に改善して行くのが最も急務なるを深く感ずる一つは分娩增加問題で他は品質改良の問題で日本國民は排日問題に於て絕好の自省の機會を與へられたのである、此自省の方法は日本內外の根本的改良の問題に觸れるが之は長くなるから玆には論ぜぬ。

今回の排日は既に何人も知る如く休戰頃よりポツ〳〵起つた日本軍閥專制に反感を持つた米國の輿論が講和會議の山東問題

や人種平等問題に依つて沸騰し之が遂に總選擧の黨爭に利用せられて總ての黨派が排日を標榜し投票を集むるを競爭せるに至つて排日の頂點に達し又米國主義鼓吹犧牲となつたのである、排日の傾向は單に加州のみでなく排日派の策戰は先づ加州を手初めに西部諸州より順次に他州に亘り排日法案を通過せしめ中央政府をして手も足も出ぬ樣に壓迫せんとの計畫らしい從つて其根據は頗る深く爲めに現に交渉進捗中と稱せらるゝ弊原モーリス協商なるものが出來上りたりとて絕對に排日問題を喰ひ止め得るかは吾輩の大に疑問とする所である、弊原モーリス協商の內容は大體我方に於て移民を極度迄制限するに依つて現に米國に在る日本人には私權を享有する點に於て最惠國待遇を受くると云ふに在るらしいそれが成立すれば至極結構と思ふも夫れでも在米の同胞が發展し而して日本人の色を脫せざる限り排日の根據は滅ずるとも絕ゆるものでないことを忘れてはならぬ。

元來米國は濠洲の White Auslleria と同樣 White America を不文の國是として居る是は事實で米國の元來の精神と相容るゝや否やは別問題で米國の如き廣大なる未開の領土を有する國にては何も怪むに足らぬ白人主義の國是を有する米國に日本人の移民するは全然正面から國是に反する所以である、そこで移民問題と云ふことが非常な重大な國際問題となり外交政策の根本より立論せねばならぬ又大問題となる。

三、日米關係

移民を米國に送くるとは米國の最も苦痛とし不快とする所であるとは前述の通りである所が日本が移民を米國に送つて何の効力があるかと云ふに日本側より之を見ると現狀を以てしては夫れは殆ど何等の利益をも見出さない米國に於ける布哇をも併せて約廿萬の日本人が平時に在つては今の所米國との關係を圓滑ならしめるよりも困難ならしむる材料となり萬一戰爭の場合は敵の利用する所とこそなれ我の利益となる點は豫想外に少し彼等は要するに lost People 卽イレデンクデアル民族は集中し居らざれば餘り當てになる程の賴りにはならぬ獨逸が世界特に米國に千萬を以て數ふる程の獨逸人は持つて居り乍らそれが戰時中に何程の役を勉めたか思半に過るものがあらう要するに日本には徹底的な殖民政策のないのが一大缺陷である、日露戰役後小村外相は移民滿韓集中論をやつたが世間の衆愚は其眞意を悟らず政治家は其指導に從ふの明を缺いだ日本の發展は大陸であつて日本民族の集中も亦大陸であらねばならぬ飛び〱に貴

重な血を傾けた數の少く我同胞を四散らしめた所で只內地の食糧多い幾分にても輕減し得る位が關の山で夫れも國外の日本人は日本より食糧は取り寄せるから其れも數ふるに足らぬ、況んや、國力の足しにはならぬ現在日本の人口增殖を以てしては日本は思ひ切つて大陸政策を實行するが死活問題が是れには何れの國に對しても我生存問題として正々堂々と行ふべしだ、最も利害關係のある隣國とは隔意なく交涉し相援け相補ふ兄弟の如き態度を双方より取り得る樣に仕向けねばならぬ、支那人を尊敬し可成其意に副ふ樣にし今日迄の軍閥外交を打破し徹底的の日支親善の方向に進む樣にし他國の日支離間策に乘ぜられぬやう注意を忘るべからず、而して斯く一方に於て正義公平の上に立つ大陸政策を進行すると共に他方米國の如き大國の國是にも反するが如き故障多き米國移民政策は之亦徹底的に排斥し在米の日本人は遺憾乍ら誤まれる過去の移民政策の犧牲とするより外に事實致方はない是が亦彼等の爲めにも結局幸福である。

米國は日本の行動が移民問題を初めとして米國の大平洋南北米大陸に於て米國の利益に反して居ることを事實の有無に不拘深く憂ひて居る日本も亦米國が日本の死活問題たる極東大陸に於ける日本の行動に對し事每に故障を持ち込むものに想像して居る、そこで日本は此米國の懸念を除去する爲め斷乎たる政策を立つると共に又一方死活問題たる大陸政策に對しては米國を充分了解せしむるの努力と熱心とを有たねばならぬ即ち眞の意義の日支親善は米國に於ても喜んで迎へる樣に斷然たる態度と熱烈とを披瀝する時機ではないかと思はれる米國の利害にも間隔に乘じてこそ〳〵妨害もし英國に對しても全樣の不徹底なこそ〳〵主義を持するに至らば夫れこそ日本の對外政策は全然伸長はせぬ而して危險云ふべからざる政策である。

四、經濟

日本の現下の國際上の地位を冷靜に批評すれば決して安全なものとは云へぬ、否孤立無援の危險狀態で恰も開戰當初の獨逸の國際上の地位と似通つたものがある。

日本が世界の戰爭に於て、寧ろ批評的態度を持し剩へ火事場泥棒的行動に出てたのは故意には非るも英米其他同盟國の同情を繫ぐ所以ではなかつた、日本國上下に浸潤した帝國主義的思想と軍閥の專制々度は民主主義の爲めに死力を盡した列國にとつては、誠に忌しき限りであるそこで日本は極東の獨逸にして獨逸の軍閥專制の次ぎには日本の軍閥專制であると思ふに至り

日本の國際的地位は著しく危險に陷り同盟國たる英國も日本に對して有する同情を大に減じた次第で最近我國上下の努力が幾分か此對日感情を改善することを得たけれども我國際上の地位が甚しく薄弱であることは相變らずである歐米を旅行した識者に付て日本の感想を聞く時は何人も日本は武斷專制で外交政治も寧ろ軍人の手に歸し國民思想も軍閥の入れ智慧であると思ひ又人のないのに驚くであろう而して一一例を以て示さるれば恰も答辯に苦むであろう而して日本に同情ある批評家は日本も漸く目が醒めかけ軍閥に對抗する一つの自由民權派が擡頭して來て今日は大戰の結果其勢力に少くない故に此運動に同情して今暫く忍耐して其成行を見なければならぬと云つて具れるであろう、此際我國政を運用するには餘程の注意を要する戰爭前の獨逸の軍閥外交の樣に世界の大國を向うに廻して其時に各方面に不統一に進むは獨逸の國力を有せざる日本に於ては猶更大に警めねばなるまいそこで米國に對しても排日問題の如きは體面問題が別として暫く自省の材料とし之を忍び米國の利益に對して日本は何等の野心なきを明にすると同時に日本の死活問題たる大陸政策に對しては極めて淡泊に之を米國上下に了解せしむる方法をとらねばならぬ、又移民問題の如きを以て飽く迄頑強に爭ひ米國を刺擊し日本の國際的孤立を援助するが如きは國策の全體より見て大に戒むべきことと思ふ。

共和黨の特權は前述の通り理想的にあらずして現實的即ちビデネスライクである共和黨の天下とならず日米の國交關係の全國に於て右述べた樣な極めてビジネスライク例へば石井ランシング、共商のラインで意見交換が行はれ易く從つて、日米の了解が一層克く附き極めて日本の孤立的地位を幾分にても矯正することを得易き方向に進み得ると信ずる米國が日本の立場を克く了解したるはウイルソン時代に非ずして皆共和黨の時代である此點より見て吾等は共和黨の勝利を祝するものでありハーデングの大統領當選を賀するものである。

過激派の女王

──遠視・近視・斜視・亂視（四）──

元祖・日本一のユーモリスト　貝塚澁六

▲今度は貴婦人が萬引をする所でも見つけてやる積りで、今朝わざわざ三越まで足を運んだ所、あいにくなもので「定休日」の札が掛つてゐた。そしてそれが丁度「改造」の「締切日」とかちあつてゐるのだから堪らない。

▲止むなく引返して宅に戻り、扨て何を書かうかと寢ころんで考へてゐる中、ついトロトロと一睡した。拙者の「一睡」は有名なもので、困つた時、弱つた時、種切れの時、金切れの時、總て「一睡」の中に救濟を求める事にしてゐる。

▲所が「一睡」の効驗はいやちこなもので、今日は斯らいふ不思議な夢を授かつた。其の夢は實際不思議なもので、私はまざまざと、ロシヤの一九一七年頃の革命騷ぎを種にした一つの喜劇を見せられた。マア諸君、讀んで見て下さい。斯らいふ筋です。

鉾臺はロシヤ東方の戰線に於ける或る衞戍地の司令部。中央にテーブルがあつて、其の上に卓上電話、公文書類などが置いてある。

將軍ストラムフエストが副官シュナイデキンドを隨へて登場する。

ストラムフエスト。シュナイデキンド。

シュナイデキンド。はい。

ストラムフエスト。もう政府に報告を送つたか。

シュナイデキンド。いえまだです。一體どの政府に送るお積りですか。

ストラムフエスト。そうだなア。明日あたり權力を持つてゐそうなのはどの政府だと君は思ふ？

シュナイデキンド。左樣ですなア。昨日までは假政府が優勢の

やうでしたが。今日の噂では、首相が自殺して、他の諸大臣は皆な極左黨に殺されたと云ふ事です。報告は極左黨に送つて見ませうか。

　ストラムフエスト。然し溫和革命黨が頭を持ちあげるかも知れないよ。

　シユナイデキンド。ではタイプのコピイを五六通作つて、各派に一通づゝ送りませうか。

　ストラムフエスト。イヤ、それはいかん。紙の費えだ。あゝ馬鹿々々しい。(將軍はグツタリとテーブルにもたれかゝる。)

　シユナイデキンド。將軍、お疲れですか。

　ストラムフエスト。疲れる段かい、シユナイデキンド。俺はどうして生きてゐられるかと思ふよ。

　シユナイデキンド。然し將軍、私の年齡では、どうして死なれるかと思ひますよ。

　ストラムフエスト。成程、君は若いよ。若いから冷酷だよ。君等は革命にのぼせてる。君等は自由といふやうな空な者にあこがれてる。然し俺の一家は七百年來、ロマノフ王家に仕へて來たものだ。ツアールは我々に地位を與へ、名譽を與へ勳爵を與へ玉うた。君等のやうな靑年は、文明の爲に戰ひ、デモクラシーの爲に戰ひ、ミリタリズム顚覆の爲に戰ふなどゝ云ふが、よくもそんな空名の爲に血が流されると俺は不思議になる。ツアールは空名空位でなくて實在である。目で見る事も出來る。其手は接吻する事も出來る。俺はツアールの爲には喜んで死ねる。然るに今は其ツアールが位を追はれてゐる。そしてツアールの誇りであり榮譽であつた其の軍隊が、今は賤民の爲に攪亂されてゐる。現に俺は自身が賤しい猶太人から司令官に任命されてゐるではないか、一體、何んといふ奇怪な事だ。俺は今のところ只。三つの目的の爲に生きてゐる。第一は敵を敗る事。第二はロマノフ王家を回復する事。第三はあの猶太人を殺す事。

　シユナイデキンド。將軍、御注意なさい。そんな言分は、今日では危險思想ですぜ。

　ストラムフエスト。オヽそうか、マア何んでもいゝ。仕事を形づけやう。(將軍はテーブルの上の電報を取上げて讀む。すると忽ちビツクリした樣子で、)大變だ!大變だ!

　シユナイデキンド。何事ですか。我軍の敗北ですか。

　ストラムフエスト。馬鹿を云ふな。敗北くらゐな事にビクともする俺か。俺は開戰以來、もう十三度敗北してる。おゝ我君よ、ツアールよ。

シユナイデキンド。ツアールの身に御怪我でもありましたか。

ストラムフエスト。正に我君の胸に短劍を貫いた！

シユナイデキンド。え！それは……。

ストラムフエスト。イヤ、俺の胸にも正に短劍を貫いた！

シユナイデキンド。あゝ比喩の短劍ですか。私は又本物かと思ひました。一體何事です。

ストラムフエスト。内親王殿下が、——あれほどツアールが御寵愛になつた、あのアナジヤンスカ内親王殿下が——

シユナイデキンド。自殺でもなされたのですか。

ストラムフエスト。それならまだズット增しだ。アナジヤンスカ内親王殿下が革命黨に投じられた。

シユナイデキンド。將軍は自身も今は革命黨ではありませんか。我々は悉く革命黨に投じてゐるではありませんか。内親王殿下の御心持も我々と同じ事でせう。

ストラムフエスト。願はくばソウありたい。然しまだ外に恐ろしい事がある。殿下は若い士官と逃亡をされたとある。兩親王殿下が逃亡とは何事だシユナイデキンド。

シユナイデキンド。成程。（とは云つたが、別段驚いてもゐない。）

そこに電話がチリチリチリンと烈しく鳴る。

シユナイデキンド。（受話器を手にして）ハイ、ハイ。そうですナニ？君は誰です？あゝ分つた。ナニ？内親王？

ストラムフエスト。（受話器を引つたくつて）ナニ？もつと大きな聲で。俺は大將ストラムフエストだ。……ヨシ、それは分つてる。それで？……殿下と一緒にゐた其の士官をつかまへたか。……ナニ？見失つた？馬鹿！其奴はチヤンと輕騎兵の大禮服を着てゐたと云ふぢやないか。……ナニ？内親王殿下が惡魔だ怪しからん！それがロマノフ王家の姫君に對して使ふ言葉か。……

シユナイデキンド。（電話を橫取りしながら）將軍、御注意なさい。そんな事を云つては爲になりません。（そして電話に向ひ）ハロウ！今のは冗談だよ。僕がチヨツト部屋をはづしたものだから、餘計な奴が冗談を云つたのだよ。サ、も一ぺん云つて吳れたまへ。ナニ？……ウンそうか。早く内親王をこちらによこしてくれ玉へ。……ナニ？……そウよこした？そんなら早くそう云へばいゝに。馬鹿々々しい。（受話器を掛けて將軍に向ひ）今朝早く内親王をこちらに送つたと云ふのです。（電話が再び鳴る。）えゝウルサイ、何だ？……（將軍に向ひ）今度は下の受付か

らです。(受話器に向ひ)ナニ?…ウンそうか。早くこちらに連れて來い。馬鹿だなア。(電話を切る。)將軍、內親王殿下が見えたのです。

ストラムフエスト。あゝ、そうか。此まゝで內親王殿下にお目に掛るのが。俺は如何にも心苦しいが、護送の兵士等の手前致方があるまい。

そこにアナジャンスカ內親王が飛びこんで來る。疲れきつた護送の兵士が、二人、其の兩腕にすがりついてゐる。內親王は毛皮縁の長外套をスッポリと着て、毛皮帽をかぶつてゐる。

二人の兵士は大骨折をして內親王をテーブルの前のベンチに腰かけさせ、自分等も其の兩側に腰かける。一人の兵士は片手で內親王の腕をつかんだまゝ、片手でポケットから書類を取出してシュナイデキンドに差出す。シュナイデキンドはそれを將軍に渡す。

內親王。此手を放して下さい。此手を放さなけりやベンチを引つくりかへして三人の頭を床に叩きつけてやるから。

ストラムフエスト。(兵士に向ひ)もう放して宜しい。

兵士は初めて自分の手があいたので、一人は額の汗をふき一人は腕首を甞める。

シュナイデキンド。(烈しい聲で)氣を付けい!(二人の兵士はビックリして直立姿勢を取る。)

內親王。暫く此人に手を甞めさせてやつて下さい。私が食ひついたのだから。

ストラムフエスト。あなたが兵卒に食ひついた!

シュナイデキンド。どうして又そんな事を?

內親王。私を放して吳れないから。

ストラムフエスト。食ひついたら放しましたか。

內親王。いゝえ。此人を甞めてやつて下さい。此人どうしても放さない。それで私、此人を食べてしまふわけにも行かないから、とうとうこゝまで引きずつて來たの。

ストラムフエスト。コレめしうど、……

內親王。私をめしうどと呼ぶのですか、ストラムフエスト將軍。私の祖母はあなたを膝の上に抱いた事があるでせう。

ストラムフエスト。(忽ち淚を浮べながら)全く左樣です。私の心に疑りはないのですが、……

內親王。あなたの頭にも疑りがないと見える。私をめしうどと呼ぶ法はない。

ストラムフエスト。私は、あなたのお爲を思つて、わざとあなたの貴いお名前を申さないのですが….では何と呼びませう。

内親王。革命は總て我々を〇〇とした。〇〇と呼んで下さい。

ストラムフエスト。どうあつても、私にそんな事は云へません。

内親王。ではアナジヤンスカと呼んで下さい。

ストラムフエスト。(苦悶の體にて)シユナイデキンド、君に任せる。

シユナイデキンド。(役儀の表らしく)ロシヤ共和國はツアール及び其の家族を保護する爲に監禁した。然るにそちらは其の監禁を破つた。

ストラムフエスト。だから我々はめしうどと呼ばなければならない。(こんな問答の間に、内親王が『〇〇萬歳！』を叫びだすと將軍もそれに釣られて迷惑そうに『萬國の勞働者團結せよ！』と叫んだりする滑稽があるが、少し長くなりすぎるから其邊は略しておく。それで結局。將軍は内親王を『同志』と呼ぶ事になる。)

ストラムフエスト。扨、然らば同志アナジヤンスカ。そちらは若い士官と逃亡したと云ふが、….

内親王。それは將軍、僞りです。

ストラムフエスト。隱しても駄目です。事實は總て報告に依つて分つてゐる。其の士官はハコンスブルクでそちらと落ちあつた。そちらはそこで姿を隱した。然し其の士官はそれからポツテルダムまで追跡された。そちらはそこで又其の士官と落ちあひ今度はそちら一人でプレムシロプに行つた事が分つてゐる。そこで其の士官はどうした。

内親王。私は知らない。私は獨りで來た。ハコンスブルクとポツテルダムの間を往來する士官は毎日何百人ある。私がどうして一々それを知るものか。

ストラムフエスト。いやそうでない。普通の士官はカーキ服で往來する。其の士官は輕騎兵の大禮服を着てゐたそれに其の士官はそちらの旅行劵を持つてゐた。

内親王。男が女の旅行劵で歩けますか。

ストラムフエスト。いやそれは斯うだ多數の旅行者が同時に到着する場合、役人は只だ其の數だけ調べる。

内親王。では、どうして其の士官の持つてゐたのが私の旅行劵だと分りました。

ストラムフエスト。それは斯うです。ポツテルダムのホテルで

其の士官が入浴してる間に、給仕人が旅行券を見た。すると、それがそちらの旅行券であつた。

内親王。ではなぜ其時、旅行券のない私を捕へなかつたでせう

ストラムフエスト。それは斯うです。給仕人が巡査を呼んで來ると、其の士官はモウ消えうせて、そちらが自分の旅行券を持つてゐた。と報告にある。一體これはどういふわけです。

内親王。ストラムフエスト將軍、どうぞ此の人達を外に出して下さい。私は一人きりであなたに話したい。

ストラムフエスト。いや、それは駄目です。絶對に駄目です。王宮の姫君なる者は如何なる場合にも一人きりで他人と話す事はは出來ません。

内親王。然し例外があるでせう。子供になら一人きりで話してもいゝでせう。ストラムフエスト將軍、あなたは私の祖母の膝に抱かれた子供ぢやないか。私が命令する。私と二人きりで話して下さい。私の命令に背く事は出來ない。

ストラムフエスト。命令には背けなくても死ぬる事は出來る。

（將軍はピストルを取出して自分の額に當てがはうとする。）

シユナイデキンド。（其ピストルを引つたくつて）將軍、將軍、

ストラムフエスト。（ピストルを取返さうとしてシユナイデキンドに喰つて掛りながら）何んだ貴樣が！サア返せ、返せ！

シユナイデキンド。（ピストルを内親王の方に差出しながら）サア早く之を御取り下さい。

内親王。（ピストルを引つさらつて）サア將軍の外、皆んな出て行け。サア打つぞ。此の通りだ。（内親王は兵士の足元に向けてピストルを亂發する。兵士は驚いて逃げだす。内親王は更にシユナイデキンドに向ひ）サアあなたも。早く、早く。内親王は又二回ほど發射する。シユナイデキンド止むなく出で去る）

ストラムフエスト。（今度は内親王に食つてかゝりそうな勢いで）殿下！殿下！……

内親王。將軍、お控へなさい。まだ一發殘つてる。あなたが之を取上げやうとするなら之です。（ピストルを自分の額に向ける。）

ストラムフエスト。（兩手で顔を蔽ひながら）イヤもうそれでは御意の儘です。どうぞそれを御放し下さい。

内親王。宜しい、サア。（ピストルをテーブルの上に置く。）

ストラムフエスト。有りがたう存じます。

内親王。將軍、あなたは偶像崇拜者です。あなたは何時になつたら悟るでせう。私達の力は私達に在つたのではない。只あ

なた方の幻の中に在つたのです。

ストラムフエスト。殿下、決して左樣な事をおつしやつてはなりません。あなたの御口から出ても、それは矢張り叛逆の言葉です。

内親王。將軍、自ら欺いてはいけません。ツアールは最早やどうあつてもロシヤを支配する事は出來ない。我々は最早や自己の滅亡を祈つてゐる。

ストラムフエスト。殿下、滅相な事をおつしやつてはなりません。殿下は我々の此の忠誠の心を何と思し召す。

内親王。いゝえ將軍、其の忠誠が駄目です。あなた方はたまに宮中に來ては私達を尊敬して呉れたが、私の身になつて御覽なさい。私は女神でも何んでもない。私は矢張り只の娘です。それをあんなにして奉つて置くのは、動物虐待といふものです

ストラムフエスト。あゝ情けない。殿下は昔しから姫君らしくゐらせられなかつた。殿下は本統ロマノフ家の姫君ではありませんぞ。殿下の御幼少の頃の話も聞いて居ります。

内親王。あゝアノ曲馬の話ですか。私は實際、初めて曲馬を見に連れて行かれた時、本統に愉快だと思つた。それでソット獨り抜出してアノ仲間にはいつたりしたのだが、すぐ又引戻されて檻に入れられた。然し私はもう其時に自由を味はつた。それを忘れることはどうしても出來なかつた。

ストラムフエスト。あゝ情けない。輕業師の奴隷になつて見せ物に晒される事が何んの自由でせう。

内親王。見せ物にされる事には、私は疾くの昔から慣れてゐた。

ストラムフエスト。又しても左樣な事を。殿下、一體あなたは何んの爲にこゝまで御出でになりました。

内親王。私は革命を救ふ爲に來た。

ストラムフエスト。革命を？　殿下、あの謂ゆる革命家の演説やパンフレツトに欺されてはなりませんぞ。革命々々と云つて今どこに自由があります。彼等も矢張り盛んに人を殺戮し、盛んに人を獄に投じてゐるではありませんか。

内親王。それは無論です。我々もやつたでせう。現にあなたがやつたでせう。然らば彼等もやる筈です。一體、人民に自ら治めるだけの力がない以上、誰かゞ治めるより外はない。強制的にやらなければやり得ない人民なら、誰かゞ強制的にやらせるより外はない。だから有力な少數者が權力を握るより外はない。革命は如何にも殘忍です。然し私は其の目的が○です。だ

から私は〇〇に賛成する。

ストラムフエスト。　殿下、　それでは丸で過激主義になります。ロマノフ家の姫君が過激派におなり遊ばすとは!

内親王。　過激派でも何んでもいゝ。　私は此の世の中をもつと牢屋に似ない者にしたい。そしてもつと曲馬に似た者にしたい。

ストラムフエスト。　まだ曲馬に御執心ですか。　殿下は?

内親王。　曲馬は兎にかく、　私は過激派の女王になりたい。　ストラムフエスト將軍、　どうか私と一緒に革命を救つて下さい。革命を救ふ者は戰爭の外にない。

ストラムフエスト。　ナニ戰爭?

内親王。　えゝ戰爭です。　大いなる共通の危險、　大いなる共通の義務、　それより外に國民を團結させる力はない。

ストラムフエスト。　プラボウ!、　戰爭は正義です。　私は常にそう云つてゐる。　然し軍隊が統一されなければ國民の統一はありません。　只だ私に其軍隊を統一する力がない。　軍隊はもう私の云ふ事を聞かない。　(將軍は再び失望して椅子にもたれこむ。)

内親王。　軍隊は私の云ふ事を聞かないだらうか。

ストラムフエスト。　若し殿下が男であらせられて、　そして軍人であらせられたらなア。

内親王。　若し私が其の男と其の軍人とを見つけだしたらドウだらう。

ストラムフエスト。　急に起きあがつて何とおつしやる。あなたは其の一緒に逃亡した士官を連れて來やうと仰しやるのですかそんな奴を私の上に置いて指揮官にしようと仰しやるのですか。

内親王。　將軍、　あなたは總て私の意の儘と云つたではないか(内親王は凛然として軍隊を指揮するやうな態度を示す。)　私は善く知つてる。　只だ其人のみが能く此の軍隊の士氣を鼓舞する事が出來る。

ストラムフエスト。　馬鹿な事を。　恐らく彼は曲馬の輕業師ででもあるでせう。　そしてあなたは其人を戀ひて御出でなさるのでせう。

内親王。　斷じてそんな事はない。　私は其人を戀してゐない。私は斷じて其人と結婚しない。

ストラムフエスト。　然らば其人は誰です。

内親王。　其人は今あなたの目の前に居る。

ストラムフエスト。　(キヨロ／＼して)　何處に居ります。

内親王。　其の窓から覗いて御覧なさい。

將軍は窓のそばに驅けよつて外を覗く。　其の間に内親王は外

套を脱ぎ去る。下には輕騎兵の大禮服を着てゐる。

ストラムフエスト。外には誰も居りません。

内親王。其人はこゝに居る。

ストラムフエスト。（振り返つて）おゝ、あなたが！　殿下が！

過激派の女王！

＋　＋　＋　＋　＋　＋

夢の中の芝居の筋はザツトこんなものでした。分つたやうな分らないやうな、隨分變なものでしたが、そこが夢の事ですから仕方がありません。

目が覺めてから、私は暫くボンヤリして部屋中を見まはして居りましたが、違ひ棚の上に掛けてある大きな額のバナード・ショウが、妙な笑ひ顏をして私を見くだして居るのに氣がつきました。



▽來年の日記が出來ました今の內にお求め下さい△

內容實用的
體裁は優美
紙質は上等
製本は堅牢
附錄は重寶

日記はこれに限る!!

大正十年 重要日記

日記界に最も特色を有して異彩を放つてゐるのは、本社發行の日記です。有らゆる點に於て申分のない理想的のものです。殊に每日各人の吉凶判斷は特色中の特色でありまして、斷じて他に見ることの出來ないものです。來年の重要日記には特に改正所得稅法を附しました。

□定價一圓十錢□
□郵稅八錢□
□四六判總布□

東京京橋區南紺屋町
□實業之日本社□
振替東京三二六番

攜帶至便

大正十年 懷中ノート

日記と手帳と出納帳とを兼ね、年中行事、舊曆、諸稅則等一目瞭然であります。
▼特製價七十錢、稅四錢袖珍總皮
▼上製價五十五錢稅二錢袖珍總布

體裁優雅

大正十年 婦人日記

現代婦人に必要な一切の家庭事項を集めたのは、本日記の特色中の特色であります。
▼定價壹圓、郵稅六錢四六判總布

昇曙夢譯

露西亞現代文豪傑作集

洋裝菊半截判全六冊

各冊定價金貳圓貳拾錢
郵稅書留各金拾八錢

現代露西亞文學は新理想主義の下に科學と宗教と美術とを綜合して象徴の香高く、印象と色彩と音樂のシムホニイは其の魅するが如き官能的描寫と共に現代人の胸奥に無限の共鳴を呼ばずんば止まず。譯者は我が飜譯界の巨匠、近く飜譯の筆を擱つに當り從來の名飜譯に加ふるに新譯を以てして玆に畢生の事業を完成す、蓋し大正文壇の一大偉觀たるを失はず。凡て是れ作者の代表的傑作、平凡なる日常生活の中に驚異と恐怖と神秘とを求めて或は生の悪夢を歌ひ或は戰慄の詩を綴る、將に是十字架上の世界也、今や作者死して一週年に相當す。彼の世界的文動を永久に傳ふべき唯一の記念は本集あるのみ。何れも兩文豪の短篇傑作中の白眉或は目覺めたる個性の頌歌あり、人生の大と美と喜びとを歌へる讃美歌あり、或は愛の哲學あり、若き戀の惱みあり、或は辛酷なる諷刺、沈痛なる悲劇其他生の問題、死の問題、兩性問題等現代の諸相を捉へ來りて表現の深刻と解剖の鋭利とを極む。

第一篇 アンドレーエフ傑作集

第二篇 クープリン アルツイバーセフ傑作集

（以下續刊）

内容見本は無代進呈す

東京市日本橋角 大倉書店 振替口座東京二三八番

文學博士　米田庄太郎先生著　：新刊：

輓近社會思想の研究上卷別册

新理想主義の歴史哲學前篇（一）

四六版六四〇餘頁　正價金參圓八拾錢　書留郵送料拾七錢

本書は歴史哲學を以て文化哲學を完成するものと見る**新理想主義の歴史哲學の起源發達及び大成**を研究するものにして、**本篇**(二)は本篇(一)に續いて其の今日までに最とも大成せる形態を説述し了れるものである。目次左の如し(前篇完結)

歴史哲學の體系

- **第一節**　歴史的事象の意義
- **第二節**　普遍史的過程の一般的構造
- **第三節**　宗教的發達
- **第四節**　藝術的發達
- **第五節**　哲學的發達
- **第六節**　倫理的國家的發達

發行所　京都市丸太町寺町東入　振替大阪三五二六四番　**弘文堂書房**



―(創作)―

孔雀城（女人焚殺）

高倉輝

唄立山心中一曲

泉鏡花

戯曲 孔雀城（五齣。）

——「女人焚殺」三部曲ノ一——

高倉輝

我兒目端厳　爲功徳所致
光明甚輝曜　如優波羅花
以此功徳眼　荘厳於一面
其面貌端正　譬如秋滿月

（阿育王經。）

人物。

阿育王。（摩掲陀國孔雀王家の王。）
帝沙落起多。（王夫人。）
鳩那羅。（王子。）
僧迦密多。（王女。）

泥瞿陀。（老比丘。）

跋陀羅目訶。（若き學者。）

由他。（園丁。）

道化。

巡禮。

宮臣。侍女、奴隷等。

所。摩揭陀國の首都波吒釐子。

（今の北印度パトナ附近。）

時。孔雀王朝の盛期

（耶蘇紀元前三世紀末の頃。）

序齣。

開幕。

舞臺監督登場。

長き杖を持つ。直ぐに花道の端に出て、見物に向つて丁寧に辭儀をなす。次に、見物に背を向け、手を擧げて鐘を鳴らす。

舞臺中央の部分明るくなる。

男装したる影と女装したる影と、卓を挾んで歌留多をなし居る。共に假面をあてて眼を被ひ居る。その周圍に、數名の男女の影、立ち並びて競技を眺め居る。各々假面をあつ。

これより、舞臺監督の説明に隨ひて、その通りの動作をなす。總て無言。

舞臺監督。ただ今これに現はれて居りますのは、御覧の通り二人の男女にございまする。今懸命に爭つて居ります、正に乾坤一擲の大勝負と見受けられます。所が、不思議なことに、此の二人の男女はいつも斯うなのでございます。抑々いつから斯うしてゲエムを始めましたのか、抑々また一體いつまで此のゲエムを續けるので有りますか、誰も知らないのでございます。只いつでも二人は斯うして命を賭した激しい爭ひを續けて居るのでございます。當人達の申す所に據りますと、此の二人は他の何事を致しましても、直きに厭きて了ふのださうでございます。只だ二人の間のゲエムだけには決して厭きる事が無いと申すことでございます。いや、寧ろ、二人はお互に相爭ふために生れて來たのだとも申して居ります。或はさうなのかも知れません。何しろ二人の爭ひは激しうございます。火花の出る様な爭ひでございます。皆さま方には假面の陰にかくれてお見えになりますまいが、二人の眼は丸で火の様に燃えて居ります。正に死者狂ひでございます。札を出す手の震へるのをやつと押へて居るのでございます。それが、いつも斯うなのですから愕きます。

（男の影の上に大きな札現はる。クラブのジヤツクである。）

ほ、男の手にクラブが這入りました。これで勝負は男の方の勝ちでございます。それ。それ。男の眼には一度に力が漲りました。同時に、女の眼には燃える様な憎惡の光りが輝いて居ります。今度は男はきつとクラブを出すに相違ございません。男と言ふやつは正直でございますからね。わけても、此の男は正直なのでございます。それが此の男の第一の弱みなのでございますよ。特に、女に向つた時にでございますね。

（女の影の上に大きなる札現はる。ハアトのポイントである。）

は、これは偉い事になりました、女の手にハアトが這入りましたよ。ハアトが切札なのでございます。これは面白いゲエムになりました。女は切札を使ふ事が上手でございますからね。殆どその方の天才と言つて好い位でございます。御覧なさい、それでも、女は眉一つ動かしは致しません。意地の悪い眼つきが假面の陰できらりと致しました。只だそれだけでございます。あすこが女の一等强い所なのでございますね。それ。果して男はジャックを出しました。これで女の負けでございますよ。女の手にもクラブが有るのでございます。しかも、それが只だの七なのでございます。女は正に絶體絶命でございますよ。それでも、まだ考へて居ります。諦め切れないのだと見えますね。それも其の筈でございますよ。今切札を取つたばかりの所でございますからね。ほ。これはどうでせう。女は切札を出しましたよ。これは滅茶です。こんな行き方は有りませんよ。現在クラブが手に有るのですからね。亂暴ですよ。哥留多の法に無いのですもの。あんな事をすれば、誰だつて勝ちます。果して男が憤りました。それ。札を卓にたたきつけましたよ。ほ。女も負けて居ません。立上りました。御覧なさい。二人は今燃える様な憎惡の眼を見合つて居ります。はち切れる様な緊張が二人の間を支配して居ります。これは危險です。最も危險です。

（騒しく鐘を鳴らす。）

（影消ゆ）

これでゲエムが終りました。それでは、果してゲエムがこれで終りましたかと申しますと、どう致しましてこれは只僅かに一つのゲエムの終りに過ぎません。ゲエムは永久に續くのでございます。死に至るまで續くのでございます。

（舞臺監督、丁寧に辭儀をして退場。）

（舞臺明るくなる。）

（只だ綠色の幕が垂れて居る。）

（道化登場。）

道化。（見物に向つて丁寧に辭儀をなす）御見物の皆さま方これより御覽に入れまするは、今より凡そ二千百年以前の物語所は北印度摩揭陀國の首都なる孔雀王城の出來事。この幕一重が太古と今との境、詩と現實の隔てにございまする男と女、靈と肉とが巴になつての爭ひ。戯曲は過去を現實にして見せますとやら。爭ひの結末は、御見物さま方御覽になつて後の御判斷。先づは古き印度の舞臺の習はしに従ひまして、口上斯くの如くにござりまする。

（道化退場。）

一齣。

孔雀王城の内部

高き圓柱立ち並び、宏壯なれども毫も華美ならず。向う斜めに、大いなる廻廊の一部見ゆ。その向うは庭園にして、遙かに王城の外壁に遮ぎる。外壁の所所に、圓き望樓の影見ゆ。

片方に階段ありて、庭園に降る。

その向うに、一基の大いなる菩提樹、鬱蒼と茂る。

夜。

廻廊に大なる燈籠並び連りて、淡き光を投ぐ。

侍女大勢、中央の柱を環りて踊る。

奴隷達、片方の隅に坐して樂を奏す。

侍女達。（踊りながら歌ふ。）

　摩掲陀(マガダ)の國の王城に
　孔雀城に
　春が來た。春が來た。

　ひまらやの顚に
　燦爛と
　寶華が咲いた。

　神聖な恆河(ガンヂス)の
　水が温るんで
　浮いた睡蓮の頭(カウベ)が重い。

侍女達。（暫らく只だ樂の音のみに合はせて踊る。）

（道化、巡禮の老人を伴ひて出づ。）

道化。お爺さん。これで先づお城の中は一亘り廻つたわけだ。まあそこいらに腰でも卸して一休みするが好い。

巡禮。（侍女達の踊れるを見て）はう。これは何だね。

道化。お爺さん。今夜は孔雀城はお祭だよ。

巡禮。さうかい。それはちつとも知らなかつた。一體何のお祭なのだね。

道化。今夜はね。菩提樹のお供養が有つたのだ。

巡禮。はてね。菩提樹のお供養と言ふとどんな事をするのだね。

道化。（指を指して）それ。あすこに大きな菩提樹の茂みが見えるだらう。あれがね。こないだ中枯れかけたのだ。所が、あれは大聖世尊が王舍城からの歸りがけにあの下で說法なされたと言ふ大事の菩提樹で、王樣は常から丸で御自分のお子か何ぞの樣に大切にしてお出でなされたのだ。だもんだからして、今度は王樣はきつい御心配で、夜もおちおちお休みになれぬ位で有つた。それが今度不思議に生き返つた。それ、あの通りだ。さあ王樣は丸で赤子の樣にお喜びになつて、久しく打ち絶えて居た御酒宴を今度わざわざ久方ぶりに開かれたと言ふわけだ。

巡禮。さうか。それでは、わしは思ひがけ無く有り難い所へ來合せたわけだな。さうだ。わしは迦鯪伽（カリンガ）で王樣の書かれた石碑の詰文を讀んだ。あの中に、王樣が總ての御酒宴をおやめになつたと言ふ事が書いて有つた。「その昔王は謂ゆる遊行に出でて、その間を畋獵及びこれに類する娛樂を行ふを例としたりき。灌頂即位第十年、王は眞の菩提の道に入り、ここに法に捧げられたる遍歷ぞ始まれる。斯くて、沙門婆羅門の接見及び布施、老者の接見及び黃金の布施、人民の接見及び法の宣揚と其の論議、斯くの如きものにて過去の諸々の快樂と更りて王の快樂となるに至りぬ」と言ふのであつた。

侍女達。（踊りながら歌ふ。）

　春が來た。春が來た。
　落叉（ラクシャ）の花が
　血のやうに咲き狂ひ

孕んだ蜥蜴が
尾を振る。尾を振る。
一心に尾を振る。

眠れる娘よ。
目を覺ませ。
春だ。春だ。春だ。

侍女達。（復た響く只だ樂の音に合はせて踊る。）
巡禮。此の前わしが此の王城を訪ねたのは、わしが未だ血氣盛りの頃で有つた。今度來て見て、わしは全く愕いた。何もかも殘らず變つて了つて居る。わしは丸で別の所へ來た樣な氣持がした。
道化。さうだらう。世の中の事はどんどん變る。無常迅速だ。殑河（ガンヂス）の川床だつて。ちよつとの間も一つ所に凝つとして居はしない。
巡禮。何でも此見當だつたと思ふあの怖ろしい旃陀耆棃（チャンダギリ）の地獄と言ふのが有つたのだな。丁度此の前わしの來た時に、王樣の無憂樹を折つたとかで、五百何人かの宮女が殘らず焚き殺されて、大評判の最中であつた。
道化。それでは、お爺さん。此の前お前が來たと言ふのは、未だ迦餕伽（カリンガ）征伐の前だつたのだね。
巡禮。前だとも。丁度王樣の灌頂御即位が濟んで、未だ間の無い時分の事さ。
道化。さうか。それでは變つて居る筈だ。王樣はあの迦餕伽征伐の軍からぽつきり變つて了はれたのだと言ふ事だ。
巡禮。さうださうだな。わしは迦餕伽で王樣のあの詔文を讀んでそれを知つた。あれから王樣は急に發心して歸佛せられたのだな。

道化。さうだ。それから御氣質なんぞも丸で變つて了はれたのだな。つまり。今のあの王様になられたわけだな。

巡禮。元の王様はそれは恐ろしい方で有つた。何しろ一代に此印度全土を平げる方の様に軍に强い代りには、また其の荒けなさと言ふのも無かつた。人の命を取ることなんぞ、お兄弟でさへ何とも思ひはなさらない。お氣に入つた女ならば主が有らうが無からうが、力づくで御自分のものにして了はれる。その頃は丸で暴王か何ぞのやうに怖がられたもので有つた。

道化。それがひよつこり今の様な好い王様になられたのだな。あれは比丘の泥猖陀（ニグロオダ）さまが王様に法を說かれた爲ださうだが、俺の考へでは泥猖陀（ニグロオダ）さまは臾那（ヨオナ）の獅子遣ひよりも偉いと思ふのだな。なぜと言つて見るが好い。いかに馴れても、獅子は象になりはしない。

巡禮。それと言ふのが、皆な法の力だよ。迦𩜁伽であの碑文を讀んだ時ほど、わしは法の力の怖ろしさを感じた事は無かつた。一晩夜あかしをしてあの前で祈つたのだ。「王は懺悔に依つて得たる憐れみの情に依つて」と言ふ所で、わしは本當に聲を擧げて泣き伏した。

道化。それでは、何かい、お前は迦𩜁伽から來たのかい。

巡禮。いや。今度はわしは鄔闍衍那（ウジヤアナ）の方から來た。祇園精舍の方へ行く途中でこゝへ寄つたのだ。

道化。一人でかい。

巡禮。いや。めくらの連れが一人有る。鉢羅耶伽（プラヤアガ）で一緒になつたのだが、乞食のやうな事をして居るのに似合はず人品の好い男でね。何でもこちらの方の生れかして、大變よくこゝいらの事を知つて居る。眼は一方とも無いのだが、それで居て、途すがらもあすこに羯布羅（カルプラ）の林が有りはしないかと言ふ様な事を言ふのだ。するときつとその通り有るのだな。

（樂やむ。）

（侍女達、踊りをやめて、坐る。）

第一の侍女。あゝ。私は勞びれた。ふくら脛がづき／＼する。一體私はいつから踊りを踊らなかつたらう。踊りの手なども もう大抵は忘れて了つて居る。

第二の侍女。確かあれは鬼宿（ナイシヤ）の祭の晩で有つた。あれが私達の踊つた最後で有つた。あれから此のお城の中には總ての御酒宴が止められ、若い女ももう踊れなくなつた。あれからもう何年になるのだらう。

第三の侍女。昔は摩揭陀（マガダ）中の若い女はみな踊るのを命にして居た。井宿日（プナアワス）や鬼宿日（ナイシヤ）のお祭には、孔雀城の有りと有らゆる女はみな閻樓伽（ジヤンカ）の酒に醉ひしれた男の手に抱かれて、朝日のまぶしくなるまで踊り明かしたもので有つた。それでも疲れた樣子を見せる者さへ無かつた。

第四の侍女。今から、あの頃の事を考へると、此の王城は丸で凱旋の酒宴と淫らな戀の囁きで爛れ切つて居た樣な氣持がする。今は王樣さへが數多くのお妃を卻けられて唯だ一人の微沙落起多さまだけを殘された。けれども、私はどうもあの頃の方がなつかしい。今よりもつと世の中に喜びが滿ちて居たやうな氣持がする。

第五の侍女。私はさうは思はぬ。斯うして法の力で統べられてこそ、眞の悅びが此の王城を包むのだと思ふ。法ちや。法ちや。法の力に縋つてこそ、私達の命が永世の後まで救はれる。

第六の侍女。私は久方振りの今夜の御酒宴で、王樣が歸佛せられた折のあの盛大であつた御酒宴の有樣がまざ／＼眼の前に浮んで來た、あれも丁度今夜のやうな春の晩で有つた。じつとして居てさへ、肌がしつとりと汗ばんだのを私は未だに忘れずに居る。總ての燈と言ふ燈がともされて、孔雀城は丸で晝の樣に明るかつた。法の爲に打ち鳴らす法鼓の響きは耳を聾する樣で有つた。途も埋まる程に撒かれた花びらは、曼陀羅華の樣に輝き亘つた。玉座上の王樣は、一言口を開かれる每に涙を流された。それを見て居られる泥縛陀（ニグロオダ）さまもそのたんびにしやくり上げて涙を流された。あの時こそは私達もこれから眞の大きな悅びが摩揭陀全土を包むのだと言ふ氣持がした。

巡禮。さうだ。「今王が法を行ふ事に依りて、戰鼓の響きに代りて法鼓の響き聞こえ、天界の車、群象、炬華等の行列の光景こそ人民に示されし」あの詔文に有つた。（祈る）有り難い事だ。有り難い事だ。

第七の侍女。今夜ほど私は不思議な氣持のした事は無い。丁度夏の眞晝の夢のやうに怪しう變り易うて、そして乾いた樣な氣味の惡さを私の心の底に注ぎ込んだ。第一に、私は王樣のあの思ひ切つて大きな笑ひ聲からして不思議でし方が無かつた。王子鳩那羅さまが摩掲陀の國を出られて以來、王樣があの樣に心の底から笑はれたのを私は見た事が無かつた樣だ。何だか空ろの響きの樣に思はれて、丸で嘘の樣な氣持がした。それでも御酒宴の進むにつれて、私の心も次第にほぐれて行つて、何だか昔の盛んで有つた御酒宴の氣持になりかけて來た。それは丁度忘れて了つて居た歌の節節を少しづつ思ひ出して行く樣な、それは懷かしい氣持で有つた。その時ふとお妃のお聲がした。私の胸は復た一度に冷え返つた樣な思ひがした。それほどお妃のお聲は冷たく硬かつた。陛下の此の御機嫌を誰よりも王子の御目にかけ度いと、お妃はさう仰しやつた。王樣のお顏は、突然鞭で打たれた者のやうに固くなつた。さうだ。鳩那羅が居ないのだ。わしの鳩那羅が居ないのだ。さう言ふ王樣のお聲は呻く樣な苦しいお聲で有つた。私はその時凱歌を奏する樣な嘲けりの笑ひがお妃の頰を引き上げるのをちらと見た。

第八の侍女。ほんに鳩那羅さまのお行方が知れなくなつてからもう何年になるだらう。あれは確か室羅伐拏月の始めで有つた。あの鬱としい雨の中を、王子ははるばると呾始羅の國へ向けて立たれたので有つた。お召しになつた象の被ひに黄金の孔雀が繡ひにして有つた。その上へ雨が瀧の樣に落ちて居たのを私は今でも覺えて居る。さうだ。今で丁度四年になる。あれから間も無くして大將軍の由他さまが迹を追つて呾始羅へ立たれたが、やがて由他さまだけが歸られて遂に王子のお姿は見えなかつた。鳩那羅さまは呾始羅にもお出でなさらないで、お行方が知れなくなつたと言ふ事で有つた。それから今に至るまで、遂に何のおたよりも無い。

第九の侍女。あの時はさまざまの噂が孔雀城に擴まつた。王子が呾始羅へ送られたのは、お妃微沙落起多さまに巫蠱の

戀慕をして、それが王樣のお怒りに觸れたのだと言ふのが專らの噂で有つた。

第十の侍女。けれども、それは表だけの噂で、誠は鳩那羅さまに對するお妃の戀のかなはぬ返報に王樣に讒訴されたのだと言ふ人も多かつた。結局、誰にも眞の事は分からなかつた。

第十一の侍女。ほんに鳩那羅さまは美しい方で有つた。あの朝日にかざした玉の樣に美しかつたお姿は誰の目からも消えはしまい。譬へば秋の滿月の如しと、ある時王樣が仰せられた。中でも、お眼の美しさは全印度に並びが無かつた。ひまらやの麓に歌ふ鳩那羅鳥の眼のみが類ふと言ふので、あのお名前がついたので有つた。

第十二の侍女。何よりも不思議なのは由他さまのお身の上ぢや。摩揭陀の國の大將軍とも有らう方が、呾始羅から歸られると直ぐに卑しい園丁の身に成り下されて、遂に一足もあの藥草園の外へ出ようとなさらぬ。王樣にさへお眼にかゝらなかつたと言ふ事ぢや。泥羅陀さまを師匠にして、只だ一心に法に縋つてお出でなされる。

第十三の侍女。おゝ。いつの間にか月が出たと見える。菩提樹の葉が眞白く光つて居る。大地に引いた望樓の影が長い長い。

（庭の方より琴を弾く音聞こゆ）

巡禮。あれがわしの連れだ。夜に入ると、いつもあゝして琴を彈く。よほど琴が好きだと見えて、ついぞあれを手から離した事が無い。

第十四の侍女。あゝ。私は今夜はどうしたと言ふのだらう。悩ましい氣持がして爲方が無い。あれ。またお庭の草花があんなに香ふ。まるで噎せるやうに。

巡禮。どれ。私はもう行かう。あの象の厩へ歸るのだ。あすは復たあの男と二人で、此の王城を立つて、北の方へ向いて旅をするのだ。

（巡禮、庭の方へ階段を降つて行く。）

侍女達。（歌ふ。）

命命鳥がちゝろと鳴いた。
迦嘍茶（カルダ）と優波（ウパ）の雙頭の
命命鳥がちろゝと鳴いた。
娑羅の林の森かげで。

鬼術（ナイレヤ）なかたの宵宮の晩は
若い男が戀をする。
若い女が戀をする。
戀しらぬ身のやるせなさ。

命命鳥の悲しさは
迦嘍茶（カルダ）と優波（ウパ）と眼を見互はして
ちろゝちろゝと鳴くばかり。
ほんのちろゝと鳴くばかり。

道化。どれ。俺も行かう。所で。どこへ行つたものだらう。今に夜が明けて朝日が出ると、孔雀城は復たもとの水の樣に靜かな王城に戻つて了ふ。今眞赤に醉つ拂つて居る者も綺麗にその顏をふき取つて、假面の樣に動かぬ顏を突き出して居なくてはならない。さうして夜が來て日が出て春が過ぎて雨期に入つて、若者が齡を取つて娘が母親になつて、一體いつまで續いて行く積りなのだらう。うん。あの眞白の孔雀先生。柄にも無く戀病ひと言ふやつで、瞼の重

さうな目つきをして居たつけ。さうだ。あいつを一つ見舞つてやらう。（見物の方へ向つて）はつ〳〵は。宮節道化は一切ひまです。

（道化、退場。）

（鐘鳴り始める。）

侍女達。お。鐘が鳴る。もう御宴も果てるで有らう。どれ。私も行かなくてはなるまい。

（侍女、奴隷等残らず退場。）

（只だ琴の音のみ靜かに續く。やがて、それも已む。）

（王女僧迦密多、出づ。純白なる孔雀の雛を抱けり。立ち留まつて、暫く凝つと孔雀を見つめて居る。やがて、そつと自分の頬を寄せる。跋陀羅目訶、廊より出でて通り過ぎんとす。僧迦密多に氣づかず。）

僧迦密多（ふと頭を上げて跋陀羅目訶を見る）跋陀羅目訶。

跋陀羅目訶。（振り返つて）おお。僧迦密多さま。

（稍や長き間。）

僧迦密多。跋陀羅目訶や。私はもう此の孔雀とも別れなくてはならぬのだよ。

跋陀羅目訶。（僧迦密多の顔を見る）僧迦密多さま。孔雀はもうそんなに惡くなつて居るのでございますか。

僧迦密多。いゝえ。いゝえ。さうでは無いのだよ。それは孔雀の病も好くはない。斯うなつては、もう迚も駄目かも分からない。けれども、私の言ふのはその事では無い。跋陀羅目訶。私はこれを徴沙洛起多さまに差し上げる約束をした。

跋陀羅目訶。え。お妃に。

（間。）

僧迦密多。（更に激しく泣く。）跋陀羅目訶。お前はもう私のもので無い。私のものでない。孔雀と一緒に私の手から離れ

て了ふのだ。（更に激しく泣く。）私はもう諦めて居る。私は諦めて居る。

跋陀羅目訶。（思はず傍つて。）おお。僧迦密多さま。

僧迦密多。（泣きやむ。）跋陀羅目訶。どうぞ私の所爲だと思はないでお呉れ。私は爲方が無かつたのだ。私は斷り切れなかつた。（そつと涙を拭いて。）この孔雀は私の孔雀と言ふよりも、お前の孔雀で有つたかも知れぬ。お前は、私の部屋へ來る度にいつも此の孔雀ばかりを相手にして居た。どうかすると私は、お前が私の所へ來て呉れるのは、私の爲よりも此の孔雀に逢ひに來るのでは無からうかと思ひ惑ふ事が多かつた。跋陀羅目訶や。どうぞ氣持を惡しくないでお呉れ。お前はもう前から私のものでは無くなつて居た。（復た激しく泣く。）

（孔雀の雛苦しげに鳴く。）

跋陀羅目訶。（傍に寄つて、孔雀を見る。）

僧迦密多。跋陀羅目訶。もうこれはよつぽど惡くなつて居るらしい。今私の手を離れたら迚も助る事は有りはしない。

跋陀羅目訶。（默つて孔雀を受け取つて見る。）

僧迦密多。（凝つと庭の方を見つめて。）私は、今夜の御宴の始つた頃から、それは淋しい氣持がしてならなかつた。何よりもあのお妃の水の様に冷たい眼差が始終私の心にかかつて居た。その中に、突然此の雛が悲しい聲を擧げて啼き出した。つい私はそれに氣を取られて、その間だけお妃の事を忘れて居た。そしたら、ふと私の傍で人の氣はひがした。愕いて振り返ると、そこにお妃が立つて居られた。心の底までひやりとする様な氣持がして、思はず私は息を飮んだ。僧迦密多や。私にその孔雀の雛を呉れないか。お妃は眉一つ動かさずさう仰しやつた。私は何かが非常な速さで私のからだを通り拔けた様な氣持がした。立ち竦んだまま、私は言葉が口を出なかつた。やがて、冷たい涙が止め度も無しに私の頬を流れ始めた。私は、此の孔雀は今患つて居ると申し上げた。けれどもお妃はお聞き入れなさらなかつた。惡ければ、跋陀羅目訶に見せて直させると、お妃は斯う仰しやるのだよ。（ほろほろと涙を流して。）跋陀羅目訶。私

はとうとう差し上げる約束をして了つた。

跋陀羅目訶。（孔雀を抱いたまま凝つと立つて居る。）

僧迦密多。私はもう諦める。どんなに私の胸が切なうても。私はもう諦める。孔雀はもう私のもので無い。

跋陀羅目訶。（苦しげに）僧迦密多さま。

僧迦密多。（跋陀羅目訶の抱いてる孔雀の背をさすりながら。）跋陀羅目訶。お前はなぜこれの病を直して呉れなかつたらう。なぜもつと早くこれの病を直して呉れなかつたらう。

跋陀羅目訶。いや。私にはその様な力がございませんでした。

僧迦密多。いえ。いえ。そんな事は決して無い。今摩掲陀（マガダ）全國に、人と獸と二通りの藥が分たれた。それは皆お前一人の力で有つた。それに、どうして此の孔雀の病ぐらいの直せぬ事が有らう。今のお前は、何か心もうつゝの様で、これの病を見るのさへ上の空としか私には思はれなかつた。昔のまゝのお前で有つたら、お前はきつと直して呉れたに相違ない。

跋陀羅目訶。（嗄れた聲を無理に押し出す様に）その通りでございます。僧迦密多さま。（頭を押へて）私はこゝに病の元が有ります。人の知らない怖ろしい病の元が有ります。それは私の藥でも決して直させない。（孔雀を差し出す。）

僧迦密多。おゝ。それが私の手で直してやる事が出來るのだつたら、私はどんなに嬉しからう。（凝つと跋陀羅目訶を見て）

跋陀羅目訶。

跋陀羅目訶。（思はず傍に寄つて。）おお。僧迦密多さま。

僧迦密多。（跋陀羅目訶の胸に縋つて）ああ。跋陀羅目訶や。私はやつぱりお前がいとしい。お前がいとしい。あの頃の跋陀羅目訶がいとしうて爲方が無い。

（長き間。）

（王夫人微沙落起多、庭の方より出づ。）

跋陀羅目砌。（振り返つて、竦然として）お。お妃。

僧迦密多。（跋陀羅目砌の胸を離れて）おゝ。微沙落起多さま。

（長き沈默續く。）

僧迦密多。（目を伏せたまゝ）いえ。いえ。いえ。やつぱりそれは昔の事で有つた。返らぬ昔の夢で有つた。私は諦めなくてはならぬので有つた。この孔雀の雛はもう私のものでは無い。（靜かに微沙落起多の傍へ寄つて）微沙落起多さま。これはあなたのものでございました。

微沙落起多。（默つて只見て居る。）

僧迦密多。私があなたのお部屋へ持つて參つて置きませう。そして、私はもううつろになつた私の部屋へ歸りませう。

（僧迦密多去る。）

（稍や長き間。）

跋陀羅目砌。微沙落起多さま。

微沙落起多。（それを押へる様に。）跋陀羅目砌。これから復た私の退屈の日が續く。私は今後悔して居るのだよ。私はなぜあの菩提樹を助けたか。なぜ一思ひにあれを枯らして了はなかつたらう。私があの菩提樹を枯らさうと思ひ出したのはあまりに王様があれを大事にし過ぎる爲で有つた。あの菩提樹を王様の手からもぎ取つて了つたら、どんなに氣持が好からうと思つた爲で有つた。それに私はとう／＼あれを助けて了つた。菩提樹が生き返つたと聞いて王様が涙を流して喜んで絶えて久しい酒宴まで開くのを見た時に、私は一人で只だをかしくて爲方が無かつた。それが、今日のあの王様の子供の様な愚かな喜びを見て、私は寧ろ腹が立つた。なぜ私はお前のあの毒藥を一度にあの根元に注いで了はなかつたのだらう。

跋陀羅目呵。（ちらと徴沙落起多の顔を見て、直ぐに眼を反らす。そこに孔雀の羽根が一つ落ちて居る。そつとそれを取り上げる。）

徴沙落起多。あゝ。私はもう孔雀城が堪へられなくなつた。この様な退屈な王城がどこに有らう。見るが好い。この見すぼらしい王城が今印度全土をその下に統べる摩掲陀の宮殿なのだ。王は總てのものを法の爲に棄捨して了つた。べなれすの絹。黄金の器。それはもう私の居間に殘つて居るきりだ。やがて、赤裸の王と妃が孔雀城で見られるだらう。今でさへもう塚穴の様に空しくなつて居る。毎日厨で殺さる動物は、只だ二匹の孔雀と一匹の鹿が有るきりだ。それさへ王はやがて已めようと言はれるのだ。あの柱碑の語文に何と書いて有る。「三季の滿月、鬼宿月の滿月、白月の十四日十五日、黒月の第一日及び年中の齋日には、魚を殺し又はこれを賣る事を爲す可からず。同じ日に、象囿魚池の諸々の動物を殺す可からず。月の兩分の八日十四日十五日、並びに鬼宿井宿の日の季滿月、及び祭節の日には、牡牛牡山羊牡羊及び牡豚を去勢す可からず。鬼宿井宿の日、季の滿月及び白月の間、馬並びに牛に烙印をなす可からず。左の動物はこれを殺す可からず。即ち人の食せざる又は人の使役する一切の四足の動物。牝山羊牝牛又は牝豚の兒を孕めるもの並びに哺乳せるもの。或はその兒の六月の齢ひ達せざるもの。鸚鵡、鸛鷺、鶴、鴛鴦、鷲、裏面鳥、蝙蝠、殑伽ぷぷたか、龜、蝎蜥。……」ほほほほほほほほ。夜が明けて日が暮れて、その間ここで他に何事が話される。法。法。法。法。丁度あの望樓の風車のやうに、同じ所ばかりを廻つて居るのだ。大聲を上げて笑ふのさへも、丸で罪を犯した者かなんぞの様に憚らねばならぬ。私は法を呪ふ。法の爲に空ろになつた孔雀城を呪ふ。ああ。これからどうして私は私の此の退屈を消して行かう。

跋陀羅目呵。結句。孔雀城の總ての災はあなたの此の退屈から生れるのかも知れません。

徴沙落起多。（呟く。）なに。お前は今何と言つた。

跋陀羅目呵。（靜に）第一に、王子鳩那羅さまがあの通りの非常な災にお逢いなされました。由他は卑しい園丁に身を落して、今尼乾陀外道にも等しい程な苦業を積んで居ります。

微沙落起多。（只だ冷然として居る。）

跋陀羅目砢。あなたに近づく者には總べて災が有る。それは、毒卉の香りがそれに近づく者の氣穴を通して骨を破るのと少しも變らない。私も遂に私の總べての爲事を棄てゝ了ひました。

微沙落起多。（冷たく笑つて）ほほほほほほ。お前の爲事と言ふのは一體何だ。あの望樓の頂に出て、露の中から空の星を望むことか。それが何になると言ふのだそれとも死にかけた病人の命を僅かばかり延ばして置く爲に、罌粟の葉をしぼつて藥を作ることか。その樣な事は、私の此の細い小指の形を見て居るとき程の値打も有りはしないのだ。

跋陀羅目砢。（やはり同じ調子で）そして、最後に私はあの僧迦密多さまを殺す事になるだらう。白蓮のつぼみの樣にしぼらしいあの僧迦密多さまを。

微沙落起多。（強く）跋陀羅目砢。お前は私の爲には總てのものを擲つて好い筈だ。それでお前は決して後悔しはしない。孔雀城で法を奉ぜぬものは只だ二人有るきりだ。それが私とお前となのだ。

（阿育王、老いたる比丘泥瞿陀と共に出づ。侍臣數名隨ふ）

阿育王。（つかつかと廊の所まで出て）泥瞿陀あれを見ろ。あれを見ろ。あの通り菩提樹は蒼あほと茂つて居る。

泥瞿陀。おお。陛下。

阿育王。泥瞿陀。誰よりもお前がわしの此の悅びを知つて呉れるだらう。わしとお前とが此の久しい間法の爲に有らゆる物を擲つて戰つたその足跡があの菩提樹なのだ。それが今生き返つた。あの通り蒼あほと生き返つた。

泥瞿陀。（さめざめと涙を流して、只だ手を震はす。）陛下。陛下。

微沙落起多。（低く、併し鋭く。）お。やつぱり私はあれを枯らして了へば宜かつた。

阿育王。（ふと人聲を洩れ聞いて、振り返る。）お。微沙落起多。そこに居たのか。おお。跋陀羅目砢も。まあ二人ともここへ來てわしと話して呉れ。わしはな。今夜はからだ中に悅びと力とが滿ち溢れる樣に思ふのだな。（涙組んで）何か斯

う悦びの固まりの様なものが始終腦の底からこみ上げて來る樣な氣持がするのだな。うん。さうだ。わしはお前達に話さなくてはならぬ事が有つた。わしは今非常に大きな決心をしたのだ。それがお前達二人に關する事なのだ。

徽沙落起多。私達二人。

阿育王。さうだ。お前達二人だ。わけても、徽沙落起多お前にだ。な、これは今新しく考へ出した事では無い。久しい前からわしは考へて居た。いや。寧ろ、始終考へ通しに考へて居たと言つた方が好い位だ。それが今度わしには新しい力が湧き上つた。その大きな力がわしに強い決心をさしたのだな。徽沙落起多。わしは初めて此の摩掲陀の國へ世尊の法を廣めた。それから、わしは總ての物を擲つてただ法の爲にばかり盡して來た。わしは九十六億の銀を出して八萬四千の塔を建てた。遠い國國には石碑を立て石柱を立てて世尊の法を人民に傳へた。さうして、漸く印度全土の人民は其の永世の命を救はれつつ有るとわしは思ふのだ。そこにわしの命が有る。わしが最大の悦びはそれなのだ。過去にあの怖しい惡德を行つたわしの生涯に、漸く一道の光明が映し始めたと思ふのは、全くその爲なのだ。それに、始終わしの傍に居て、わしが何よりも大事にして居るお前達を法の道に導く事が出來ぬとしたら。これほど遺憾な事は無いでは無いか。徽沙落起多。考へて見るが好い。これほど又不思議な事も無いでは無いか。

徽沙落起多。（冷たく）人の心はその樣に誰も一樣には參りますまい。

阿育王。そこで、今度わしが固い決心をしたと言ふのはその事だ。わしはきつとお前達二人を法の道に導いて見せる。此のわしの力できつと世尊の法に歸依さして見せるのだ。「法による征服こそは最勝の征服なれ」とわしはあの法文に書いた。わしはきつと法の力の下にお前達の心を征服して見せる。

徽沙落起多。ほほほほ。陛下にどうして其の樣な力が有りませう。それは比丘の爲事でございませう。王者の爲事ではございますまい。

阿育王。それはお前がまだわしの本當の心を知らぬから、その樣な事を言ふのだ。わしは法を宣べる爲に今此の摩掲陀

國の王位に卽いて居るのだ。比丘の爲事を統べる爲の王者で有ると言つても好い。わしの生涯は固より比丘の生涯だ。

徽沙落起多。それならば、陛下は比丘の總ての戒律を守つて、ひたすら法に歸依なさらねばなりますまい。

阿育王。徽沙落起多。その通りだ。そして、今その時が來ようとして居るのだ。

徽沙落起多。おお。それならば先づ陛下は此の徽沙落起多を棄てなくてはなりますまい。陛下は徽沙落起多に依つて先づ第一に最も大きな戒を破つてお出でなされる。

阿育王。徽沙落起多。お前の言ふ通りだ。それが今わしのお前に話さうとする事なのだ。殘らずの戒律を守つて居るとは言はなかつた、わしはあの石碑の詔文に「一切諸行の中最も勝れたるは法を宣ぶる事にして、而して法の實行は戒律なき人の能ふ所に非ず」と書いた。斯かる解脫に達せんには、貴賤を問はず、無上の精進と完き捨離とに依るに非んば實に難し。然れども、これ貴人に於て最も難き所とす。」とも書いた。又次に「罪はたやすく犯さるゝ」とも書いた。あれは實はみんなわし自身の事で有つたのだ。けれども、これからわしはわしの眞の道に出る。更に大きな精進の力を鼓して、わしはわしの眞の途を歩いて行く。これからわしの比丘の生涯が始るのだ。

徽沙落起多。(只だ凝つと王の顏を見て居る。)

阿育王。(敬虔の念に滿ちた聲にて。)徽沙落起多。お前とわしの間も、もうこれからは王と妃との間では無くなるのだ。友と友との間になるのだ。同じ道を歩く法の友としての間柄だ。

徽沙落起多。おお。法の友。

阿育王。これまではどうもわしはお前を怖れて居た樣だ。お前が居るからこそわしの法心が破れるのだと言ふ氣持がして、わしは何度もお前をわしの傍から遠けようと考へた。けれども結句それは卑怯な考へだつたのだな。それは、法の爲にも忠實なもので無い。また眞にお前を愛する所以でも無かつたのだ。わしは今溢れる程の力を身うちに感じて居る。これからわしはわしの全力を擧げてお前を法の道に導いてやるのだ。お前の居間には、まだ黃金の器が殘され

て有る。お前はまだべなられすの絹の表を纏つて居る。けれども、やがてお前は喜んでさう言ふものを法の爲に喜捨する様になるだらう。徽沙落起多。考へて見るが好い。さうなつたら、二人の間はどんなに好からう。

徽沙落起多。おお。陛下は夢を見てお出でなされる。大きな夢を見てお出でなされる。その様な事がどうして出來ませう。

阿育王。徽沙落起多。わしが昔まだ激しい鬪ひに日を送つて居る頃に、時時わしの心の底に鐵の様に硬い力が湧き上つた。それは、必らず戰に勝てると言ふ確信なのだ。一度さう言ふ不思議な力が胸に湧くと、どんな場合でもわしは只だ眞つしぐらに敵の陣へ飛び込んだ。そして遂に一度も誤つた事は無かつた。丁度今のわしがさう言ふ氣持なのだあいかにお前が法を忌み嫌つても私はきつとお前の心を征服して見せる。お前の心をきつと法の方へ向けて見せる。

徽沙落起多。（甚しき侮蔑の態度にて）それはやがて分かりませう。陛下の力がどれだけ強いか、法の力がどれだけ強いかそれはやがて分かりませう。

（泥羅陀、柱にもたれてうとうとと眠り居る。）

阿育王。跋陀羅目砢。わしにはどうもお前の考へる事が分からぬのだな。お前は人の知らぬ事を知つて居る。人の持たぬ力を持つて居る。お前は種々の藥を創り出した。そのお蔭で、死ぬ可き命をも助つた摩揭陀の人民は、それは數へ切れぬ程有るに相違ない。それだけで好さゝうなものでは無いか。お前はどうしてあの怖しい毒藥なんぞと言ふものを一緒に造るのだ。毒藥なんと言ふものが何になるだらう。あれは人や獸の命を取るだけだ。わしにはそれがどうしても分からぬのだな。

（王女僧迦密多（サンガミッタ）出づ。）

僧迦密多。お父さま。

阿育王。おお。僧迦密多か。ここへ來い。ここへ來い。わしは今夜久し振りに酒の杯を手に取つた。わしはもう酒の味

なんと言ふものを大方忘れて居た。ことに依ると、これがわしの杯を取る最後で有るかも知れぬ。これから、いつもう、酒宴を開く様な事が有るだらう。

僧迦密多。(阿育王の胸にすがつて。)お父さま。阿育王。ふむ。ふむ。ことに依ると、一度だけはな。もうたつた一度だけ。

僧迦密多。ええ。ええ。もう一度だけはきつとございますわ。きつと無くてはなりませんわ。それは、あの、(泣く)お兄さまのお歸りになる時でございますわ。

阿育王。さうだ。さうだ。鳩那羅(クナアラ)の歸る時だ。行方のしれなくなつた鳩那羅の歸る時だ。

(下より再び琴(きん)の音聞こえ始む。)

僧迦密多。(阿育王の胸に顔を埋めて泣きながら)お兄さまはきつとお歸りになりますわ。今にきつとお歸りになりますわ。

阿育王。お。誰か琴を弾いて居るものが有る。鳩那羅も琴を弾くのがひどく好きであつた。呾始羅(タカシラ)へ立つ時も、馬の背に琴を持つ事を忘れなかつた。あの琴も今はどうなつたか。

僧迦密多。(泣く)お父さま。

阿育王。僧迦密多。わしは近頃どうもさう言ふ氣持がするのだな。鳩那羅があの様な事になつたのも、元はみなわしの罪だと言ふ様な。

僧迦密多。いえ。いえ。いえ。そんな事はございませんわ。そんな事はございませんわ。みんなお兄さまの御不過からでございますわ。けれども、やがてお兄さまもお歸りになりますわ。あの優波羅(ムメフ)の花の様は美しいお兄さまのお眼がまた此の孔雀城で見られる時がやがて參りますわ。

(琴の音續く)

阿育王。まあ。あの琴の音を聞くが好い。鳩那羅はもと好くああして自分の部屋で琴を弾いて居た。わしも亦よくわしの部屋でじつとそれを聞いて居た。わしは今丁度さう言ふ氣持がするのだな。ああ。何もかもわしには丸で夢の様だ。

鳩那羅が咀始羅へ行つたのも夢なら、鳩那羅の行方が知れなくなつたのも夢で、實は鳩那羅は無事に此の孔雀城の自分の部屋で琴を彈いて居る。

倶迦密多。（涙に呉れて）お父さま。お父さま。

（琴の音續く。）

阿育王。（突然）お。あれは鳩那羅だ。

徵沙落起多。（愕然として）え。

倶迦密多。お父さま。

阿育王。お。わしは何を考へたのだらう。わしは餘り鳩那羅の事を考へ過ぎたのだ。それで、ついあれが鳩那羅の樣た氣持がしたのだ。それに、あの琴の音も餘り好く鳩那羅に似すぎて居た。けれども、あれは庭のどこか厩から聞えて來る。あれは象の厩の在るあたりだ。厩で琴を彈くのは、馬丁か、それとも卑しい乞食の他には無い。やつぱり鳩那羅は居ないのだ。やつぱり鳩那羅はゐないのだ。

（長き間。）

（琴の音に合はせて歌ふ聲聞ゆ。）

目の盲ひて
目の盲ひて
四諦
今おぼろにも
見え初めて
智慧の燈の

闇夜を照らす、
心より
淋しけれども。
心より
淋しけれども。

阿育王。おお。あれは鳩那羅だ。あれは鳩那羅の聲だ。

徴沙落起多。(つと寄つて)陛下。

阿育王。(耳に入れず)おお。鳩那羅が歸つた。鳩那羅が歸つた。早く鳩那羅を連れて來い。早く行つて鳩那羅を俺の所へ連れて來い。

侍臣の一人。は。(行く。)

倚迦密多。(王の胸に縋りついて)お父さま。お父さま。

阿育王。(狂喜して)倚迦密多。鳩那羅が歸つた。鳩那羅が歸つた。(相擁して泣く。)

(歌　復た聞ゆ。)

底ふかき
森蔭の
お暗きに
眞白なる
一輪の
娑羅の花。

婆羅の花。
かすかにも
ふと
咲き出でぬ。
心より
淋しけれども。
心より
淋しけれども。

阿育王。おお。僧迦密多。あれを聞け。あれを聞け。あれが鳩那羅の聲だ。お前の兄の鳩那羅の聲だ。

僧迦密多。（王に縋って只だ泣く）お父さま。お父さま。

阿育王。おお。鳩那羅が歸つた。鳩那羅が歸つた。俺の鳩那羅がとうとう歸つて來た。歸つて來た。僧迦密多。俺は嬉しいぞ。（急に愕然として）お。けれども鳩那羅はなぜ直ぐに俺の所へ來ないのだ。なぜあんな庇なんぞで琴を彈いて居るのだらう。お。これは鳩那羅の身の上に何か起つたのでは無いか。それとも、それとも、（涙にくれて）鳩那羅はわしを怨んで、わしの所へ歸つて來ないのでは無いか。

僧迦密多。お父さま。

阿育王。おお。わしの心の底には復だ新しい怖ろしさが湧き上る樣な氣持がする。あの男は何をして居るのだ。誰かも一度行つて、早く鳩那羅を連れて來い。

侍臣の一人。は。（行く。）

阿育王。それでも、とうとう鳩那羅はわしの所へ歸つて來た。とうとう鳩那羅は孔雀城へ歸つて來た。僧迦密多や。言

つて呉れ。言つて呉れ。これは夢では有るまいな。わしは夢を見て居るのでは有るまいな。

(侍臣一人歸る。)

阿育王。どこに。どこに。鳩那羅はどこに居るのだ。なぜ鳩那羅を連れて來なかつたのだ。

侍臣。は。あの厩で琴を弾いて居りますのは卑しい目盲ひの乞食でございました。

阿育王。なに。あれは目盲ひの乞食だ。

侍臣。は。

阿育王。(考へて)それでは、あれは俺の聞き違ひだつたのか。まさかに鳩那羅は乞食になりはしまい。それに、あれは盲では無い。あれの眼は鳩那羅鳥の眼の様に美しく優しい眼で有つた。その鳩那羅が眼を失ふ筈は無い。やつぱり俺の聞き違ひだつたのか。いや。いや。いや。鳩那羅だ。鳩那羅だ。あれは鳩那羅に相違ない。あれは鳩那羅の聲で有つた。俺は鳩那羅の聲を聞き違ひはしない。お前はどこを捜して來たのだ。俺が行かう。俺が行つて、鳩那羅を連れて來てやらう。

僧迦密多。お父さま。

阿育王。おゝ。僧迦密多。お前も俺と一緒に來い。

(阿育王、僧迦密多、侍臣等みな行く。)

徴沙落起多。(非常に緊張した態度で)跋陀羅目珂。本當にあれは鳩那羅なのだらうか。本當に鳩那羅が歸つたのだらうか

跋陀羅目珂。(非常に不安な眼つきをして)しかし、しかし、目盲ひの乞食だと申しました。

徴沙落起多。さうだ。鳩那羅は目盲ひになつて居るのだ。

(阿育王、王子鳩那羅(クナアラ)を伴ひて出づ、僧迦密多。侍臣等從ひて出づ。鳩那羅は盲目、汚れたる衣を纏ふ。)

阿育王。(激しくせき上げて泣く。辛うじて言句を發す。)鳩那羅。お前は、お前は、どうしてそんな淺ましい姿になつたのだ

あの秋の水の様に澄み切つて居たお前の兩眼をお前はどうして失つたのだ。鳩那羅。わしはわしに此の眼の有るのが辛い。まざ〳〵お前のその姿を見るのが辛い。（鳩那羅を抱いて慟哭す。）

僧迦密多。（鳩那羅の袖に縋つて泣く。）お兄さま。

鳩那羅。お〻。お前は僧迦密多だな。お前も無事で居たのか。

徵沙落起多。（鳩那羅の傍に寄つて）鳩那羅。

（間）

徵沙落起多。（冷たく）鳩那羅。お前はとう〳〵歸つて來た。

鳩那羅。徵沙落起多さま。あなたも無事でお出でなされましたか。

徵沙落起多。（唾棄する如く嫌厭の表情をなして鳩那羅の顏を見る。）

（稍や長き間。）

鳩那羅。（靜かに）お父さま。由他（ユタ）はいかゞ致しました。

徵沙落起多。おお。由他。

泥瞿陀、ふと眼を覺ます。）

阿育王。鳩那羅。由他は今園丁になつてをる。藥草園の園丁になつて居る。併し、總ての事はやがて分かる。總ての秘密がやがてあばかれる。それを裁くのが俺の務めだ。王者としての務めなのだ。

泥瞿陀。これは誰だ。これは誰だ。

鳩那羅。おお。お前は泥瞿陀では無いか。お。お前も無事で居て吳れたのか。泥瞿陀、私は鳩那羅だ。お前に法を聞いた鳩那羅だ。

泥瞿陀。なに。あなたが鳩那羅さまだ。あなたが王子の鳩那羅さまだ。（傍へ寄る。）

鳩那羅。泥瞿陀。

泥瞿陀。おゝ。鳩那羅さま。

阿育王。（なほさめざめと泣きながら）それでも、俺はどんなに嬉しいか。お前がそんな姿になつて歸つて來ても、やつぱり俺はどんなに嬉しいか。やつぱり俺の王子が歸つたのだ。俺の王子が歸つたのだ。

微沙落起多。（跋陀羅目砢を見て冷たく嘲笑ながら、獨り言の樣に。）「左の動物はこれを殺す可らず。鸚鵡。鸜鵒。鶴鴛鴦。鵞。紫面鳥。蝙蝠。殑河ぷぷたか。雞。蜥蜴。百果鳥げえらあた。しまら…………」

二　齣。

王子鳩那羅の居間。

豪奢なる部屋。

向ふに庭に出る扉、明け放しあり。殑河に續く運河、直ぐ下に見ゆ。

朝。

美しき朝日、部屋の中まで映し込み居る。

跋陀羅目砢。藥の壺を持つて出づ。

あとより道化ついて出づ。

道化。小父さん。ゆんべ沙漠でね。獅子が一匹怪我をしたんだ。足のうらのふくら肉の所にとげが立つたんだ。力を入

れれば入れるほど痛むもんだから。どうにも我慢のしやうが無いと言ふわけよ。さすがの大將、すつかり弱ちまつてね。泣き出さないばかりなんだ。何か好い工夫は無いものだらうか。小父さんの其の藥でも駄目だらうかな。

跋陀羅目砢。（藥の壺を卓の上へ置いてじつとして居る。）

道化。（首を振って）駄目かい。可哀さうだな。本當に。（廊へ出る。）は。帆を上げた舟が一艘河へ這入つて來る。大きな舟だな運河一ぱいになつて帆は岸の上まではみ出して居る。朝日を一ぱい帆に孕んで、音も何にもしない。丸で盜む様に水の上を滑つて行く。あれ。岸の尼狗陀（ニゴオハ）の葉が頻りに散る。風も何にも無いのに、丸で雨の様に散る。それ。また帆の上に散りかかつた。一つ。二つ。三つ。四つ。五つ。六つ。七つ。

（道化、廊を廻って見えなくなる。）

（王妃徽沙落起多、廊より出づ。）

跋陀羅目砢。（振り返って）お。徽沙落起多さま。

徽沙落起多。あ。お前だつたのか。鳩那羅は。

跋陀羅目砢。王子はお庭の方かと存じます。

徽沙落起砢。跋陀羅目砢。私はまた暫く退屈しなくても好くなつた。これから戰ひが始まるのだ。

跋陀羅目砢。戰ひ

徽沙落起多。王様は今鳩那羅の事で狂氣の様になつて居られる。どうして鳩那羅、あの眼が抉り取られたのか。何より先に王様はそれを知らなくてはならぬのだ。そこで私と王様との間に戰ひが始る。これは激しい戰ひだ。跋陀羅目砢。見て居てお呉れ。見て居ておくれ。私は私の一ぱいの力を王様の上に投げかける。私はきつと勝つ。

跋陀羅目砢。（只だじつと徽沙落起多を見て居る。）

徽沙落起多。（見廻して）この部屋だ。この部屋だ。さうだ。あれから私は此の部屋へ來た事が無かつた。あれも丁度今

日の樣なよく晴れた朝であつた。鳩那羅はその廊の端に出て、朝日をからだに浴びながら、運河の方を向いて凝つとして居た。私はうしろから忍んで行つて、そつと鳩那羅の肩を抱いた。鳩那羅はつと飛びのいて、凝つと私の顔を見た。私は私の胸先に鋭い劍を突きつけられた樣な思ひがした。今まで比ひなく美しいと思つて居た鳩那羅の眼は、その時水の樣に冷たい光りを帶びて居た。それから私は鳩那羅を憎み始めた。特に、あの眼を憎み始めた。

（下の庭園より人聲聞こゆ。）

微沙落起多。（廊に出で見下す。）鳩那羅だ。おお。あの醜い姿はどうだ。殊にあの目は。あの目は丸で空ろの貝の樣に乾き切て居る。おお。私はあんなものを見たう無い。あんなものを見たうない。

（つと廊から出て行く。）

（稍や長き間。）

（阿育王、出づ。跋陀羅目呵に氣づかず。直ちに座に身を投げ、額を抑へて苦しげにうめく。）

阿育王。それを知つて居る者は、由他と鳩那羅だ。由他と鳩那羅が有るきりだ。

（跋陀羅目呵、王の樣子を見て居る。やがて靜かに出て行く。）

（鳩那羅、僧迦密多に手を引かれて出づ。）

僧迦密多。おお。お父さま。

阿育王。（つと鳩那羅の傍に寄つて。）鳩那羅。

鳩那羅。お父さま。

阿育王。鳩那羅。わしに言つて呉れい。わしに言つて呉れい。誰がお前の其の眼を抉い取つたのか。

鳩那羅。（只だ默つて居る。）

阿育王。鳩那羅。

鳩那羅。お父さま。もしお父さまにそれが分かりましたら、お父さまはどうなされますか。

阿育王。分かつて居るでは無いか。わしは直ぐに其の者を捕へて焚き殺す。（自分ながら自分の言葉にはつとして）ふむ。ふむ。わしは久しくもう刑を行はなかつた。あの下の刑場は、もう長く荒れたままになつて居る。それは罪人が無かつた所爲だ。けれども、これは大きな罪だ。怖ろしい罪だ。わしがそれを裁くのは、お前の父としてでは無い。王としてだ。それが王者としての務めなのだ。鳩那羅。言つて呉れ、お前の其の眼を抉り取つた罪人は誰だ。

鳩那羅。（じつと默つて居る。）

阿育王。お前は言つて呉れないのか。どうしても言つて呉れないのか。鳩那羅。お前が言はうとしない様なら、わしはわしの思つた通りにする。

鳩那羅、お父さま。

阿育王。（激しく）由他だ、由他だ。あの由他だ。わしは由他を捕へて白狀させる。

鳩那羅。おお。由他を。

阿育王。鳩那羅。お前はわしが知らぬと思ふのか。由他は呾始羅（タカシラ）から歸ると直ぐに園丁に身を落して遂にわしにも會はなかつた。わしは其の時から由他に罪があるのを知つて居たのだ。けれども、その時は泥盤陀の由他の事は總て自分任して呉れろと言ふ言葉に隨つて、わしは何も言ひはしなかつた。それから間も無くお前の行方が知れなくなつたに。わしは由他に對する憤怒の心がからだの底から湧き上つたけれども、その時も泥盤陀がどうしてもわしを由他にあわさうとしなかつた。（涙ぐんで）鳩那羅。お前はなぜ明かにわしに言つて呉れぬのだ。お前のその眼を抉り取つた罪人はあの由他だと。お前にはわしの此の心が分らぬのか。わしの此の苦しい心が分からぬのか。

鳩那羅。（靜かに）お父さま。由他に罪はございません。

阿育王。（仰いて、鳩那羅。

鳩那羅。(同じ靜かなる調子にて)由他に罪はございません。お父さまは決して由他を咎めてはなりません。

阿育王。(忙然として居る。)

(間)

阿育王。鳩那羅。お前はお前の眞の心からさう言ふのか。それなら誰がお前の其の眼を抉つたのだ。鳩那羅。どうぞ此の上わしを苦しめて呉れるな。わしに其の名を言つてくれ。お前のその眼を抉つた罪人の名をわしに言つて呉れ。

鳩那羅。(じつと默つて居る。)

阿育王。いや。いや。わしの考へた事は間違つては居ない。由他だ。由他だ。やつぱり由他だ。少くとも由他は其の罪人を知つて居る。

鳩那羅。(やはり靜かなる調子にて。)お父さま。鳩那羅が眼を失ひました事に就いては誰をもお咎めになるに及びません。

阿育王。鳩那羅。お前は何を言ふのだ。

鳩那羅。お父さま。私は眼を失つた事を悲しんでは居ないのでございます。

阿育王。おお。どうぞそんな事を言つて呉れるな。わしにそんな事を言つて呉れるな。それはわしの此の胸をかき破るのと同じ事だ。

鳩那羅。(次第に力強く)お父さま。本當は私は眼を失つた事を心の底から悦んで居るのでございます。眼を失つて、初めて私は法の道に入る事が出來ました。盲目になつて、初めて私は眞の道を見る事が出來ました。

阿育王。おお。鳩那羅。

(長き間)。

(二人とも只だからだを震はして居る。)

鳩那羅。お父さま。どうぞ私の眼を奪つた者の罪を許して下さいますな。それが今の私の只だ一つのお願ひでございま

す。それは法の爲にも亦お父さま御自身の爲にも好い事ではございますまい。私が眼を失つた事はどうぞこれで永くお忘れ下さいまし。私はもう今夜此の孔雀城を去る身でございます。私の最後の願ひとして、どうぞお聞き入れ下さいまし。

阿育王。（驚愕して）なに。お前が今夜ここを去る。鳩那羅。それは何の爲だ。何の爲めにそんな事をするのだ。そして、お前はどこへ行かうと言ふのだ。

鳩那羅。私の行く所とては決まつて居りません。只だ此の孔雀城の王門から北の方へ一筋長く埃で白くなつた道が續いて居ます。あれが私の一生の住家でございます。あれが私の王城でございます。

阿育王。おお。鳩那羅。お前はなぜ其の樣な事を言ふのだ。お前は摩揭陀の王子では無いか。わしのたつた一人の王子では無いか。

鳩那羅。いいえ。私はもう王子ではございません。鳩那羅は今卑しい乞食の身でございます。只だ一筋に世尊の法を身に體して、末に比丘にならうとする乞食の身でございます。

阿育王。（鳩那羅の足下に身を投げて）鳩那羅や。鳩那羅や。

鳩那羅。お父さま眼を失つた私には山も河も人の世界も今殘らず消え去つたのでございます。只だ世尊の法だけが心の底で潮騷の樣に鳴り響いて居るのでございます。私はあの明るい日の映じて居る一筋の道をしつかり足の下に踏みしめて參ります。左の手に食を求める器を持つて、右の手に鈴を持つて私は只だ一心に自分の振り鳴らす鈴の音だけに耳を澄まして歩いて行くのでございます。それが法の聲でございます。それが私の命でございます。

阿育王。（聲を擧げて慟哭す。）

倶迦密多。（鳩那羅の衣の裾に縋つて泣く。）

（侍臣一人出づ。）

侍臣。（鳩那羅に）王子さま。泥毘陀さまが王子さまにお眼にかかり度いと申す事でございますが、こちらへ參上致しましても宜しうございませうか。

鳩那羅。泥毘陀が。さうか。それでは、私が泥毘陀の部屋へ行かう。あすこは私がまだ子供の時分から毎日法を聞いたなつかしい部屋なのだ。僧迦密多。私の手を引いておくれ。

（鳩那羅、僧迦密多に手を引かれて侍臣と共に行く。）

阿育王。（夢の様に顔を上げて）おお。俺は一體どうすれば好いのだ。俺はどうしたら好いのだ。

（微沙落起多、廊より出づ。）

微沙落起多。（王の傍へ寄つて。）陛下。

阿育王。（ふと振り向いて）おお。微沙落起多。（激しい憎惡の表情をなして微沙落起多を見つめて居る。）

微沙落起多。（なほ阿育王に近づいて。）陛下。

阿育王。（激しく）退け。退け。そこを退け。お前は怖しい女だ。お前の罪の怖しさが今初めて俺に分かつて來た。あの時、俺はお前の言葉を信じはしなかつた。けれども、お前の言葉は怖しい毒汁の様に俺の心をかき亂した。鳩那羅がそんな事をしようとは俺は夢にも思ひはしなかつた。お前の言葉が嘘だと知りながらも、俺は心の底から鳩那羅を憎まずには居られなかつた。そして、俺はあれを呾始羅へ送つたのだ。おお。あれが此の怖ろしい事の起る元だつたのだ。

微沙落起多。（つと寄つて）陛下。（王の手を取つて凝つと見る。）けれども、陛下はそれを決して後悔はなさりますまい。陛下の私を愛する心は昔も今も少しも變りは有りますまい。陛下は微沙落起多の爲には如何なるものをも惜しみはなさらなかつた。それは今でも少しも變りは有りますまい。

阿育王。（激怒して）おお。お前は何を言つて居るのだ。お前は自分を何だと思つて居るのだ。漸く一人殘された卑しい只の妃の身だと知らぬのか。これまで俺の傍に居る事が出來たのさへ、身に餘る果報だと思はぬのか。

徽沙落起多。（激しく憤怒に身を震はす。）おお。それが陛下のお言葉でございますか。その様な言葉を陛下は徽沙落起多の面に投げようとなさるのでございますか。

阿育王。その上に、俺はまだ法の力でお前を救つてやらうとした。おお。俺はこれまでの俺の醜い心が今まざまざと眼の前に見える様だ。お前と一緒に送つた日の汚なさが今初めて俺に見えて來た。

徽沙落起多。（沈着になつて）陛下はその言葉をお忘れなさらぬが好い。どんな形でそれが陛下の上に返つて行くか。その時に後悔なさらぬが好い。

阿育王。俺は今怖ろしい事を考へて居る。それは怖ろしい大罪だ。訊さずに置く事の出來ぬ怖ろしい罪だ。それは只だあすこで明かになる。あの藥草園で明かになる。

（つと出て行く。）

徽沙落起多。（そのあとを見送りながら、憎惡と侮蔑との錯綜したる冷笑を浮べて。）總ての事を知るが好い。總ての事を知るが好い。それから本當の戰ひが始るのだ。

（跋陀羅目訶、靜かに這入つて來る。徽沙落起多と眼を合はせる。やがて、靜かに卓の所へ行つて、先刻忘れて行つた藥の盃を取り上げる。そして、復た靜かに出て行かうとする。）

徽沙落起多。（それまで唯じつと見て居たが）跋陀羅目訶。それは毒藥か。

跋陀羅目訶。いえ。これは藥汁でございます。あなたのお部屋へ行つたあの孔雀に飮ませる藥でございます。

徽沙落起多。（鋭く）跋陀羅目訶。お前の毒藥を私にお呉れ。

跋陀羅目訶。（愕然として徽沙羅起多の顏を凝視して居る。）

徽砂落起多。あれが今私に入用だ。私が王樣の手から奪ふものは何だかは、お前にも分かつて居るだらう。戰ひの結末は直ぐに來る。それは王樣が私の足下に打ち碎かれた樣になつて倒れて居る時だ。跋陀羅目訶。お前は私にあの毒藥

を呉れるに相違ない。

跋陀羅目砢。（凝然と立ち竦んで居る。）

徴沙落起多。（跋陀羅目砢に近づいて稍や優しく）跋陀羅目砢。お前はきつと呉れるだらうね。お前が私に力を借して呉れぬ筈は無い。

跋陀羅目砢。（辛ふじて口を開く）徴沙落起多さま。私の毒薬はみなあの由他の室の中に有るのでございます。

徴沙落起多。さうだ。それは私も知つて居る。それをお前は取り出して來て呉れるに違ひない。

跋陀羅目砢。おお。どうしてそんな事が出來ませう。由他がどうして默つてあれを渡しませう。

徴沙落起多。（強く）跋陀羅目砢。お前は由他の胸を刺しても好い筈だ。

跋陀羅目砢。（眞蒼になつて）おお。

徴沙落起多。お前は由他の呼吸の止まつたあとで靜かに室の中からあの壺を取り出しても好い筈だ。

跋陀羅目砢。死人の樣に只だ立ち竦んで居る。）

徴沙落起多。（つと寄つて、跋陀羅目砢の手を取る。）跋陀羅目砢。お前はこれまで私のたつた一人の身方で有つた。そして又私の一番大事な戀人で有つた。私はこれまで色色な男を傍へ寄せた。けれども、私が本當に心の底から愛したのは、跋陀羅目砢、お前一人だけだつたのだよ。お前はそれをしあはせだとは思はないのか。印度全土の在りと在らゆる若い男が皆渴く樣に求めて而かも決して得られぬしあはせをお前だけが得て居るのだとは思はないか。その返報には何をしても惜しくないとは思はないか。よしんばお前の命を投げ出しても、決して惜しくないとは思はないか。（ひしと跋陀羅目砢を抱きしめて）おゝ。私のいとしい跋陀羅目砢。私の顏を好く御覽。お前はいつでも私の顏を餘りよくは見なかつた。いつでもお前はまぶしさうにつと私の眼を避けた。あれは私が餘り美し過ぎた爲で有つたか。それとも、私の此の目の力を恐れたのか。跋陀羅目砢。今私の顏を好く見ておくれ。私はやつぱりお前ばかりに凝つと私

の顔を見つめて居て貰ひ度い。お前の眞の戀人の顔を好く見ておくれ。そしてお前の心を決めるが好い。私は今生き死にの激しい闘ひをしようとして居るのだ。お前はきつと私を助けて呉れる。お前はきつとあの毒藥を私に持つて來て呉れる。

跋陀羅目醒。（徽沙落起多の腕の中で死んだ様になつて居る。）

三　齣。

草園の内部。

中央の部分、天蓋に被はる。その下に大いなる水盤あり。水琳瑯と溢れ落つ。

片方に、由仙の住める室の入口見ゆ。

種々の藥草、一面に咲き亂れて居る。

手に近き強き日光、その上に當る。

巡禮の老人、水盤の傍に坐つて居る。

童化、花の間に坐つて、藥草の葉から藥汁を壺の中にしぼり取つてゐる。

巡禮。摩掲陀の國は氣候が好い。わしの國は健陀羅の沙漠の傍だが、これから先になると、例の熱風と言ふのが吹く。午少し前頃から、家の外へは一足も出る事は出來ない。手足も顔も布で卷いて、じつと家の中で寝て居るのだ。でないと、直ぐに皮膚が燒け爛れて了ふのだな。

（同）

道化。ああ。俺は眼がぐら〳〵して來た。眼の底の所がづき〳〵痛む。何しろ、こんなぎら〳〵日の映してる所で、色んな花の色を見つめて居るのだもの、たまりつこ無い。こんな事をしたつて、何にもなりはしないのだがな。

巡禮。それは一體何になるのだね。

道化。これかい。これは孔雀の雛に飲ませる藥だよ。けれども、あいつはもう駄目だよ。所が變つてから、まためつきり惡くなつた。元の所に居りや好かつたんだがな。さうすりやどつちも無事だつたんだ。さう行かない所が時候の所爲だよ。春と言ふやつのいたづらだよ。何でも物は動くとあぶないよ。動くとあぶないよ。

（園丁由他(ユダ)、室の入口に現はる。激しき苦惱の迹、明かに顏に現はる。）

道化。お爺さん。あれが名高い由他(ユダ)と言ふ大將軍だ。

巡禮。はてね。由他と言ふと、どんな人だつだかね。

道化。それ。知らないのかい。迦餞伽征伐の總大將さ。迦餞伽だけに限らない。摩揭陀が印度全土を平げたのは、まあ大方はあの人の力だつたのだな。

巡禮。さうかい。それにしては大層みすぼらしいなりをして居るのだね。

道化。それはさうさ。大將軍だつたのは昔の事だよ。今は此の藥草園の園丁なんだ。

巡禮。はてな。世の中には隨分變つた事も有るものだね。園丁が出世をして大將軍になつたと言ふ事も聞いた事は無いが、併しそれでもたまにはそんな事も無いとは限らないかも知れない。大將軍から園丁になつたと言ふ話は、ついぞこれまで聞いた事が無いね。

道化。お爺さん。世間には一生牢屋の番をして暮らす者も有る。花園の番人なら好い方だ。所で、そこがむづかしい所なんだ。そんなら、牢屋の番人より花園の番人の方がしあはせかと言ふと、それがさう行かないのだ。

（由他、水盤の方へ近づく）

由他。爺さん。お前は巡禮か。

巡禮。御覽の通りだ。靈地から靈地を經めぐつて、只だ一心に祈るだけが爲事のわしは巡禮の身だ。

由他。爺さん。お前は羨しい身分だな。ああ。俺もいつになつたらお前の樣な身になれるのか。

巡禮。これはをかしい事を聞くものだな。世の中の大抵の者にはなり惡いものだ。中でも、お前さんの樣な強い將軍には一番なり惡いかも知れない。所が、此の地上に生きて居る人間でさへ有れば、その場からでも直ぐになれるのが此の巡禮だ。

由他。所が、俺はその巡禮にすらなる事の出來ぬみじめな身の上なのだ。いや。巡禮になれる時がもしも來たとしたらそれが此の俺の一番しあはせな時なのだ。その時に初めて俺の此のもがき苦んで居る魂が救はれる。併し、それはまだずつと後の事だ。いや。事に依ると、一生來ないで濟むかも分らない。ゆうべから殊に俺はさう言ふ氣がし始めた俺は此の四年の間一心に法の力に縋つて來た。けれども、俺の犯した怖ろしい罪は、なかなか此の位の苦しみで贖はれるもので無い。俺はまだまだ苦しみ方が足りないのだ。俺は今復たはつきりそれが分つて來た。

（稍や長き間。）

巡禮。（つぶやく）地上の人間はみな何かの重荷を背負つて歩いて居るのだ。只だその重荷に負けない樣にするだけだ。その爲には只だ法の力に縋るより他に途が無い。

道化。（立ち上る）どれ。お爺さん。行かうぢや無いか。麗かな日だなあ。ぢたい此の春の大氣と言ふのが好くないのだとかくこいつが人の心を悩ますのだな。そこで、春の來ない國と言ふのを考へた。その事を法と言ふのぢや無いのかい。さうぢや無いのかね。お爺さん。

（道化と巡禮と出て行く。）

（由他、痛ましき苦悶の表情をなして、凝つと前を見つめて居る。）

（長き間。）

（泥瞿陀、出づ。）

泥瞿陀。（由他に近づいて、凝つと由他を見て居る。涙ぐむ。）由他。

由他。（振り返つて）おお。泥瞿陀さま。（泥瞿陀の足下に身を投げる。）泥瞿陀さま。わしは切ない。わしは切ない。骨を碎く様な痛みが昨日から復たわしの生生しい傷をかきむしる。

泥瞿陀。おお。由他。

由他。王子は眼を失つて居られる。王子は眼を失つて居られる。それになぜ此の由他の兩眼が明るいのだ。泥瞿陀さまなぜわしの此の眼を抉り取つて下さらぬ。ああ。わしに此の喉笛をかき切る事が許されたら、わしはどんなにしあはせだらう。

泥瞿陀。（はらはらと涙を流して）おお。おお。由他。

由他。おお。わしは復た恐ろしい非望を抱かうとした。そんなしあはせを夢にもわしは望んではならぬので有つた。どんだけ苦しんでも、わしはまだ苦しみ足らぬのだ。（身を悶へて慟哭す。）此の血の出る様な苦しみをわしは凝つとこらへて居らねばならぬのだ。

泥瞿陀。（涙にくれて由他の肩に手をかける。）由他。お前が此の藥草園へ這入つてから、今年で丁度四年になる。

由他。（ふと身を起こす。）さうだ。あれが丁度四年の前だ。わしはまだ昨日の様に覺えて居る。外にはぎらぎら日が照りつけて居た。大地の熱が足の裏に暑かつた。王子はわしの差し出す勅書を御覽になつて、凝つとわしの顏を見つめられた。それはお妃の造られた僞の勅書で、王子は王の命に依つて兩眼を抉り取り由他の手に渡すべしと書いて有るのだ。わしは王子のあの眼に合つて、心の底まで見拔かれた様な気がした。思はずわしの總身は震え出した。その時、

ふいとわしの耳の傍で呼く聲が聞こえた樣に思つた。それがお妃の聲で有つた。由他。お前は私の頼んだ事をして與れる。きつとして與れるに相違ない。あゝ。わしはあの聲を忘れない。あの聲を忘れない。あれは怖ろしい羅刹の聲で有つた。あれを聞くなら、わしの全身は狂つた力で波をうつた。わしは直ぐに太刀を拔いて、づかづかと王子の前へ進んで行つた。王子は凝つと眼をつぶつて、身動き一つなさらなかつた。わしは王子の右の眼から先に抉り取つた湯の樣に熱い血がぼたぼた大地の上へ流れ落ちた。その時、傍で見て居た群衆の愕き怖れた叫び聲が聞こえたが、わしの耳には只だ遠くを走る風の音の樣にしか響かなかつた。わしは一氣に左の眼をも抉り取つた。王子は衣の袖を顔に當てたきり、やはり身動き一つなさらなかつた。お顔も胸も眞赤になつて居た。抉り取つた兩眼を握つて居るわしの左の手は、何とも言へず氣味の惡い溫みが感じられた。わしは丸で魂の拔けた人間の樣に凝つと立つて居た。ふと氣がついたら、わしの手からはまだ眞赤な血がぽとぽとしたたり落ちて居た。それは不思議なはかない氣持が其の時わしの心の底にみなぎつて來た。あゝ。あの怖ろしい血の色はまだわしの此の手から洗ひ落されてない。あの生生しい血の臭ひがまだわしの此の手に殘つてゐるのだ。

泥玀陀。由他。（由他の手を取つて泣く。）お前はよくこれまで忍んで與れた。よくわしの言ふことを聞いて、これまで忍んで與れた。由他。わしも嬉しいぞ。法はとうとうお前を救つて與れたのだ。

由他。いや。いや。いや。わしの救はれる時は無い。わしは永劫の地獄へ落ちた罪人だ。わしの罪の清められる時は來はしない。

泥玀陀。（靜かに由他を援け起こして）由他。もうお前も廣い安らかな世界に其の胸をさらして好い時だ。此の四年の間の心の底からの懺悔の祈りがお前の罪を清めて與れたのだ。由他。今日からお前は此の孔雀城を去つて巡禮の旅に出るが好い。

由他。（愕然として）おお。泥玀陀さま。

泥犂陀。その代り、お前はこれから先の一生を王子の手を引いて辿らねばならぬのだ。

由他。泥犂陀さま。あなたの仰しやる事はわしに分からない。

泥犂陀。王子はもう元の王子で無い。今夜此の孔雀城を立つて、また遥かな巡禮の旅に出られるのだ。由他。お前はこれからの一生を王子と一緒に巡禮の旅で暮らすが好い。

由他。（只だ忙然として居る）

泥犂陀。王子はわしの願ひを聞き入れて下された。これから先の巡禮の生涯をお前と一緒にしようと仰せられた。由他王子はお前の罪を許して下されて居る。いや。王子はお前が王子の眼を貫いた時から、お前を許して居るのだと仰せられた。（さめざめと涙を流して）王子は今限り無く廣い道に出て居られる。法の世界では、總ての罪が許される。由他わしは餘りの有り難さに思はず泣いた。

由他。（慟哭して）ああ。わしはたまらない。わしはたまらない。わしはさう言ふ言葉を聞くに堪へない。わしが王子のお手を取るなんぞ。おお。考へても怖ろしい事だ。餘りに怖ろしい事だ。

泥犂陀。由他。王子は今目盲ひのおからだ。誰か手を取つて導く人が要るのだ。お前はそれがお前の一生の役目だとは思はないか。

由他。ああ。どうぞわしにそんな事を言つて下さるな。わしには餘りに勿體ない。わしのからだは汚れ切つて居るのだ心の底まで血にまみれて居るのだ。

（跋陀羅日阿、薬草の間より室の入口に現はる。）

泥犂陀。由他。お前は王子の傍に居なくてはならぬ。王子の盲目は一生お前の罪を責めるであらう。それでこそ、お前は生涯お前の犯した罪の足跡を見つめて居る事が出來るのだ。由他。お前は行くが好い。

由他。（涙に咽びながら）ああ。泥犂陀さま。泥犂陀さま。

泥猴陀。（由他の手を取つて一緒に泣く）由他。わしは今日の日の來るのをどれだけ待つて居たか。ほんにお前は憐れな男で有つた。誰よりもわしはお前を救つてやり度かつた。由他。わしも嬉しいぞ。わしも嬉しいぞ。わしの胸も輕うなつた。

（二人とも只さめざめと涙を垂れて居る。）

（長い間。）

（跋陀羅目訶、室の中へ辷入る。）

（泥猴陀、うとうととして居る。）

由他。（ふと顏を擧げて、夢から覺めた人の樣に）巡禮。俺が巡禮に。おお。これは本當の事であらうか。（狂喜して躍り上る）

跋陀羅目訶。（眼を覺まして）お。わしはもう眠りかけて居た。何か夢を見て居た。天鵝絨の樣に眞白な廣いものがわしの眼の前に一ぱいになつて居た。鳥の羽根の樣なもので有つた。わしはどうやら少し努びれた樣だ。

（立ち上る。）

由他。（狂氣の樣に）巡禮に。巡禮に。此由他が巡禮に。此由他が巡禮に。おお。（室の中に走り入る）

（阿育王、藥草の中に現はる。つかつかと室の方に進む。）

泥猴陀。おお。陛下。陛下。

阿育王。泥猴陀。（凝つと見る。厳しく）どけ。そこをどけ。俺はあすこに用があるのだ。あの室の中に用があるのだ。

泥猴陀。おお。

阿育王。俺は由他に用がある。どけ。そこをどけ。

泥猴陀。陛下。陛下は今由他にお逢ひなされてはなりませぬ。

阿育王。（激怒して）おお。泥猴陀。お前はまだそんな事を言ふのか。まだ俺が由他の罪を訊してならぬと言ふのか。

泥犁陀。陛下。由他は今漸やく法心を得ようとして居るのでございます。今始めて眞の法に入らうとして居るのでございます。

阿育王。いや。いや。いや。俺はその樣な事は聞かぬ。泥犁陀。お前はあの鳩那羅の姿を見ないのか。あの淺ましい姿を見ないのか、あれを見て俺がじつとして居られると思ふのか。そこを退け。俺はどうしても由他の罪を訊さずには置かぬ。それが王者としての務めなのだ。

泥犁陀。（强く）陛下。由他の罪は王子御自身が已に許してお出でなされます。由他は今王子の忠實な從者として生涯王子に仕へようとして居るのでございます。

阿育王。泥犁陀。お前は何を言つて居るのだ。

泥犁陀。陛下。王子はお眼が御不自由でいらせられる。由他が生涯その御手を引いて巡禮の旅を一緒にしようとして居るのでございます。それを王子も御承諾なされました。

阿育王。おお。泥犁陀。お前までがその樣な事を言ふのか。お前までが鳩那羅の出るのを止めようとはしないのか。

（身を投げて慟哭。）

泥犁陀。（涙ぐんで）陛下。法の爲には。法の爲には。

阿育王。おお。さうして、俺には何が殘るのだ。たつた一人の王子を失つて、俺にはあとに何が殘るのだ。俺はこれから先何をたよりに生きて行くのだ。

泥犁陀。（はらはらと涙を流して）陛下。

阿育王。おお。お前は法が有ると言ふのか。法が有ると言ふのか。泥犁陀。どうぞわしに今その樣な惨い事を言つて吳れるな。わしはたまらない。ああ。どうしても鳩那羅は行かなくてはならぬか。どうしてもわしは鳩那羅を捨てなくてはならぬのか。

（長き間）

泥娑陀。陛下。陛下のお居間へ歸りませう。そして、私が總ての事を陛下に申し上げませう。さあ。陛下の御居間へ參りませう。

阿育王。（無言のまま立ち上つて、行きかく。）

（室の中より、由他の怒つて叫ぶ聲聞こゆ。）

阿育王。お。（思はずあとへ歸らうとする。）

泥娑陀。（鋭く）陛下。

阿育王。（凝つと泥娑陀を見る）

泥娑陀。（痛ましげに涙ぐんで居る。）

（やがて、阿育王首を垂れて出て行く。泥娑陀從ふ。）

（室の中の由他の怒聲、更に、高く聞こゆ。）

（やがて、由他、跋陀羅目訶を引きずて出づ。）

由他。（激怒して居る。）出ろ。出ろ俺はそんな汚らなしい事を聞く耳は持つて居ないぞ。（激しく跋陀羅目訶を突き飛ばす。）行つて了へ。

跋陀羅目訶。（よろよろとして、辛うじて立ちとまる。じつとして居る。）

（稍や長き間）

由他。（鋭く跋陀羅目訶を見て）お前は何と言ふ淺ましい男になつたのだ。お前は今お前のしようとして居る事の怖ろしさが分からぬのか。

跋陀羅目訶。（やはりじつとして居る。）

由他。跋陀羅目訶。あの女は怖ろしい女だぞ。魔の様に怖ろしい女だぞ。あの女に近づく男は、誰でも皆毒酒に醉つた者の様に平氣で怖ろしい罪を犯す様になる。俺を見ろ。此の俺を見ろ。俺が一番好い手本だ。俺はあの女の寢床で身を滅ぼしたのだ。

跋陀羅目訶。(やはり同じ様にじつとして居る。)

由他。あの女はどんな男にでも身を任せる。あの女はそれを庭の樹の實を取つてやる程にも思つて居ないのだ。あれがあの女の怖ろしい所なのだ。みんなあれに欺されて身を滅ぼすのだ。跋陀羅目訶。お前は眼を覺まさなくてはならないぞ。お前は今俺が踏んだと同じ道を行かうとして居るのだ。

跋陀羅目訶。(じつとしたまま)それは私も好く知つて居る。お妃は決して私の事なんぞ思つて居られはしない。それはあなたの言ふ通りだ。言はば、私はお妃の玩具の様なものだ。それを私は自分で知り過ぎるほど好く知つて居る。それになぜ私は斯うしてお妃の思ふままに操られて居るのだらう。私は今では丸で自分と言ふものが無くなつて居る様だ。何か脫がらの様なはかないものがやつと生きて居る様な氣持がして爲方がない。

由他。(漸つと跋陀羅目訶を見て、優しく)跋陀羅目訶。お前も氣の毒な男だな。お前は摩掲陀一番の偉い學者だ。他の誰にも分からぬ天地の秘密がお前だけには分かるのだ。それがどうしてそんな淺ましい事になつたのだ。

跋陀羅目訶。(やはりじつとして居る。)

由他。それと言ふのが、みんなあの女の所爲なのだ。あの女の爲に、お前の眼がくらまされて了つたのだ。歸れ。歸れお前の部屋へ歸つて好く考へて見るが好い。お前のしようとした事は怖ろしい事なのだ。あとで正氣になつた時には身も魂も震え上る程の怖ろしい事なのだぞ。

跋陀羅目訶。(顏を擧げて)一體私はどうしたと言ふのだらう。あの様な事をあなたに話して、あなたが承知しようとは私は夢にも思つて居なかつた。それにやつぱり私はあなたに話して了つたのだ。何だか私は夢を見て居る様だ。惡い

夢を見て居る様だ。

由他。さうかも知れない。からだに毒を注された人間は、とかく怖ろしい夢を見るものだ。夜中の夢は朝日が出れば覚めて了ふが、真昼の夢は覚めにくい。お前はその夢の覚めるまで、お前の部屋から出ないが好い。でないと、お前は怖ろしい事になるのだぞ。自分で知らずに、怖ろしい事になるのだぞ。

跋陀羅目訶。（じつとして居る。）

（微沙落起多、薬草の陰に現はる。二人とも気づかず。）

跋陀羅目訶。（静かに立ち上つて行かうとする。）

由他。（その後姿を凝つと見て居る。やがてあとから）跋陀羅目訶。

跋陀羅目訶。（黙つたまゝ立ち止まつて振り返る。）

由他。（優しく）跋陀羅目訶。お前は力を亡くしてはいけない。お前は元もと発明な男だ。お前自身の為にも、それから此の摩掲陀の為にもお前はもつと自分を大事にしなくてはいけない。力を出せ。力を出せ。さうしたら、お前はきつと救はれる。

跋陀羅目訶。由他。有り難う。あなたの深切は私に好く分かつて居る。

（跋陀羅目訶行く。）

（由他、そのあとを見送つて居る。）

（微沙落起多、花の中より凝つと由他を見つめて居る。）

（稍や長き間。）

由他。（やがて室の方へ帰らうとする。）

微沙落起多。（薬草の間から出る。）由他。

由他。(振り返る。愕然として立ち竦む。やがて、無言のまま室の方へ行く。)

微沙落起多。(その前へ立つて) 由他。お前はなぜ私の言ふ事を聴かなかつた。なぜ跋陀羅目砢にあの毒薬を渡してやらなかつた。

由他。(自失した様に立つて居る。)

微沙落起多。(鋭く) 私は今あの毒薬が要るのだ。お前が兩眼を抉り取つたあの鳩那羅の命を今度は私が奪ふのだ。さああれを私に與れるが好い。

由他。(漸く我に返つて、毅然と) おお。お前は何と言ふ怖しい事を言ふのだ。俺はお前の言ふ事なんぞ聞く耳はない出ろ。出ろ。早く此の薬草園から出て行け。

(引きずり出さうとして、微沙落起多の傍に寄る。その顔を見るなり。突然立ち竦んでわなわなと震ふ。)

微沙落起多。(つと由他の手を取る)

由他。(振り放さんとして、能はず)

微沙落起多。由他。お前はきつとあれを私に與れる。ねえ。あの毒の壺をきつと私に與れるだらう。その代り。私はお前にお禮をしよう。お前を私の部屋に泊めて上げよう。今夜お前は私の部屋へ忍んで來が好い。私は髮をほどいてからだに案菟羅（アンドフ）の香油を塗りこめて屹度お前を待つて居よう、その時お前はあの毒の壺を持つて來て與れるのだ。

由他。(振り放さんとして) 放せ、放せ。お前は今でも俺がお前の言ふ事を聴くと思つ居るのか。此の上まで俺がお前に欺されると思つて居るか。ええ。そこを放せ。ここを放せ。

微沙落起多。(なほ固く由他を抱きしめて) おほほほほほほ。お前はわなわな震へて居るでは無いか。そんなにお前は私が恐いのかえ。それほどお前は私の力を怖れて居るか。由他。私は今でも覺えて居るよ。お前が始めて私の部屋に忍んで來た時、お前は丁度此の様に震へて居た。あの頃のお前は、こんな見すぼらしい園丁の身ではなかつた。摩掲陀

の軍を其手の下に統べる大將軍の身であつた。百萬の軍勢。二千の象車。それは皆お前の指一つの指す所に動いて行つた。あの頃のお前と言ふのは、丸で軍を飲むのとそれから大きな聲で笑ふのと、それだけを命にして居る樣な、それは男男しい男で有つた。私はお前のあの月に向つて吠える砂漠の獅子の樣な男男しさに心を牽かれた。由他。お前は覺えて居るかへ。あれはお前が迦餕伽から凱旋した其の晩で有つた。闍樓迦の酒に醉ひしれて、お前は私の部屋に忍んで來た。お前は緋に白象を縫ひ出した上衣を身につけて居たのを私は今でも覺えて居る。そつと私の胸に抱いてやつたら、お前はわなわな震えて居た。あの時ほど、私は不思議な氣持のした事はなかつた。お前は摩揭陀の總大將だ。人人は鬼神の樣にお前を怖れて居た。迦餕迦では、七十萬の大軍を打ち破つた。十萬人を殺して、十五萬人を虜にした。その武功に輝く大將軍が、私の腕の中に這入つては、丸で鷹に逐はれた雛の樣にわなわな身を震はして居るのでは無いか。私はお前がいとしうてならぬ樣な氣持がした。あれがやつぱり今斯して私の腕の中で震へて居るお前だつたのだね。それからお前は毎夜の樣に私の部屋へ忍んで來た。結句、お前はやつぱり荒荒しい武將で有つた。もう私の前で震へてなんぞは居なくなつた。來る夜毎に、お前は私に踊りを踊らせた。私が拒むとお前は直ぐに此の力の強い腕を私の上に揮はうとした。私はいつでも素足のままでお前のぐるりを踊つて廻つた。それを見ると、お前は赤兒の樣に大きな聲を擧げて笑つた。

由他。（身をもがいて）放せ。放せ。ここを放せ。（飛びのいて、激しく）おお俺はもうお前の言ふ事なんぞ聞きはしない。もうお前のそんな誘惑なぞにかかりはしない。（室の方へ行かうとして）退け。退け。そこを退け。

微沙落起多。（高く笑ふ）ほほほほほ。お前の聲は惜しい事に空ぽだ。洞穴の中で響く夜の怪鳥の聲の樣に、聲ばかり大きうても、それは空らの聲で有つた。（つと寄つて）由他。私は知つて居るのだ。お前のその眼の中には、私の此の胸の中へ飛び込まうと思ふ心が燃えて居る。ねえ。お前は今夜きつと私の部屋へ來る。お前はきつと私の賴みを聽いて來れる。

由他。(愕然として)おお。それはあの時聞いた聲だ。あの時聞えた怖ろしい聲だ。(蒼白になつて)おお。これは夢では無いのか。

徽沙落起多。(優しくほほ笑んで)ねえ。由他や。お前はきつと私の部屋へ來る。お前は今でも覺えて居るか。私の夜の衣は、あの雪の樣に純白な憍奢耶(コウシヤ)の絹であつた。今夜も私はあれにくるまつてお前を待つて居よう。私のからだに塗りこめた香油の香りは、衣の中から脱け出して、お前の魂まで包んで了ふで有らう。由他。私はきつと待つて居る。

由他。いや。いや。いや。俺は行かない。俺は行かない。俺は決して行きはしない。俺は二度と毒の杯を口に啣みはしないのだ。

徽沙落起多。(優しく)由他。私は待つて居るのだよ。阿育寺(アショカアマ)の夜の鐘の鳴るのが合圖だ。恒河(ガンヂス)の水の面が明るくなつたら、私は私の部屋でそつと耳を澄ましてお前の足音の近づくのを待つて居る。此のふくやかな私の腕がお前を待つて居る。由他。お前はきつと私の部屋へ來る。

(徽沙落起多、つと繁草の間に消ゆ。)

由他。俺は行かない。俺は行かない。俺は決して行きはしない。

四齣

妃徽沙落起多の居間。

寢室に續く。

調度飾華美を極む。

孔雀の籠、台の上に置かる。時時悲しげに啼く。

廊を越えて、殑河の一部見ゆ。

夜。

月の出でたる所。水の面、白く輝げるが見ゆ。

初め、部屋に人の姿見えず。

鐘鳴る。

僑迦密多、そつと廊より部屋の中に忍び入る。蒼白なる顔、直ぐに孔雀の前へ行つて、孔雀を抱き上ぐ、凝つと見て居る。

鐘の音、なほ續く。

跋陀羅目砢、やはり廊より部屋に入る。僑迦密多の姿を見て、立ちとまる。

長き間。

鐘の音、已む。

僑迦密多、孔雀の籠を抱いたまま部屋を出ようとして、振り返つて。跋陀羅目砢と顔を見合はす。

僑迦密多。（思はず聲を擧げて）おお。跋陀羅目砢。

跋陀羅目砢。（凝つと僑迦密多の顔を見て居る。）

（裏門の方より微沙落起多の聲聞こゆ。）

微沙落起多。（鋭く）誰だへ。そこへ來たのは。

僑迦密多。（はつとして孔雀の籠を抱きしめる。孔雀苦しげに啼く。）

跋陀羅目砢。（靜かに）私でございます。

微沙落起多。おお。跋陀羅目砢か。私はまた。

（稍や長き間）

僧迦密多。（跋陀羅目訶の顔を凝つと視つめて低く）跋陀羅目訶。私は此の雛を盗みに來た。

跋陀羅目訶。おお。僧迦密多さま。

僧迦密多。（涙をほろほろ流して）跋陀羅目訶。私はどうしてもこれと別れては居られぬのだよ。死んでも。私はこれと別れる事は出來ないのだよ。

（つと廊より出づ。）

跋陀羅目訶。（凝つと立つたままで居る。）

（人聲聞ゆ。）

（やがて、由他、道化と共に出づ。由他は泥醉してよろよろして居る。手に壺を持ち居る。）

由他。（危く倒れんとしながら）鐘が鳴つた。鐘が鳴つた。鐘が。鐘が。

跋陀羅目訶。（愕然として）おお。由他。

道化。（由他を援けて）あぶないよ。小父さん。一體どこへ行くのだい。小父さんは。ここには誰も居はしないぢや無いか。

由他。（べたべたと坐つて）居ない。居ない。誰も居ない。不思議だ。どうも不思議だよ。俺は一體何をしてこんな所へ來たのだ。

道化。はっはっはっはっは。これは面白いよ。それを俺は小父さんに聞かうと思つてたんだ。

由他。何が五色の雲の様なものが俺をここへ連れて來た。あれは一體何だつたつだらう。（首を振つて）分からない。分からない。（あたりを見廻して）ここはどこだ。ここはどこだ。言へ。言へ。俺の今居るここはどこだ。

道化。ここかい。ここはお前。お妃のお部屋ぢや無いか。

由他。なに。お妃の部屋だと。

道化。さうだよ。小父さん。
由他。お妃。お妃とは何だ。
道化。（高く笑ふ）はつはつはつは。お妃を知らないのかい。小父さん。
由他。うん。忘れて了つた。（歌ふ。）

　　お妃の、お妃の、
　　　ふと見た夢が悪かつて、
　　王様は、王様は、
　　　庭の菴波（アンバ）で溺れて死んだ。

由他。（泣く）庭の菴波（アンバ）で溺れて死んだ。
道化。（優しく労つて）何を泣くのだい。小父さん。王様が死んだのが悲しいのかい。え。
（微沙落起多、寝間の帳の上より上身を現はす）
由他。（歌ふ）

　　黒髪の、黒髪の、
　　　餘り長うて美しさに、
　　聞けば悲しや、
　　　それは古沼の精で有つた。

（微沙落起多、つと身をかくす。）
道化。さうぢや無いよ。小父さん。（歌ふ）
　聞いて見たれば、

　　元は床屋の娘であつた。
道化。斯うだよ。
由他。（よろよろと立ち上る。）
道化。どこへ行くのだい。小父さん。
由他。（寝間の方へ行く）さうだ。俺は事によるとあすこに用が有つたのかも分からない。
道化。小父さん。そこはお妃のお寝間ぢや無いか。
　（由他、寝間に入る）
道化。（歌ふ。）
　灌頂即位の式の前の日、
　　王様のお顔を剃つてた。
　お妃は、お妃は、
　　ゆうべの夢で情夫に帰つた。
　情夫は厩の調馬師で、
　　髯あは背と剃つて居た。
　ふいと一人で思ひ出して、
　　思はずにこりと笑つたら、
　前代未聞だ。
　　王様の髯の片つ方が無くなつてた。
　夜が明けて、夜が明けて、

朝日が王座を照らした頃には、」
王様は、王様は、
菴婆の枝で縊れて死んでた。

（由他、寢間から出て來る。）

由他。（またぺたぺたと坐って）居ない。居ない。どこにも居ない。

跋陀羅目砢。（傍に寄って、痛ましげに）　由他。あなたは一體どうしたのだ。

由他。（首を垂れたままじつとして居る。）

跋陀羅目砢。（由他の肩に手をかけて）由他。

由他。（ふと頭を擧げて）お前は誰だ。

跋陀羅目砢。（涙ぐんで）由他。あなたは私が分からぬのか。

由他。（凝っと觀て）うん。分かつて來た。お前はあの男だな。俺の所へ使ひに來たあの男だな。（突然飛び上つて怒鳴る。）

俺に言へ、俺に言へ。俺に此の壺をどうしろと言ふのだ。

跋陀羅目砢。おお。あなたはとうとう持つて來たのか。

由他。（はらはらと涙を流す）お前は俺にこれを飲めと言ふのか。俺にこれを飲んで了へと言ふのか。（壺を口に當てる）

跋陀羅目砢。（つと寄つて手を押へる。）おお。由他。（壺を取る）

由他。（よろよろと床の上に倒れる）

道化。（由他を扶け起こして）小父さん。どうしたのだい。

跋陀羅目砢。壺を持つて立つたまま凝つと由他を見下して居る。）

（長き間。）

由他。（ふとあたりを見廻す）おお。ここはどこだ。（愕然として飛び退く）おお。俺は怖ろしい所に居る様だ。俺はここに覺えが有る。（寝間の方を指して）あすこだ。あすこだ。俺は、俺はむかし……。おお。俺はどうして斯んな所へ來たのだ。

（わなわなと身を震はす。）

道化。小父さん。

（琴の音、聞こゆ。）

由他。おお。あれは何だ。あれは。あれは。

道化。あれは、小父さん、琴の音ぢやないか。王子さまが弾いて入らつしやるのだよ。

由他。（身をもだえて）おお。あの音。あの音。（耳を掩つて）ああ。聞こえる。聞こえる。まだ聞こえる。ああ。俺は、ここを、この胸をかきむしられる。（身を投げて慟哭す。）

跋陀羅目砢。（傍に寄つて）おお。由他。

道化。（優しく）小父さん。泣くんぢや無いよ。泣くとね。睡れた瞼にあすの朝日がまぼしいよ。ねえ。好い子だから、もう泣き已むんだ。（一緒に泣く。）ああ。氣の毒な小父さんだな。（泣く泣く歌ふ。）

泣いても、泣いても、
涙が流れてとまらない。

それは石家の一人娘で、
眼つかちの奴隷を男に持つのが厭ぢやと言つて
裏の背戸家で泣いて居た。

　まだ新月のお月様が、
　　白分の冷たい死に顔を、
　水に映すが悲しいと言うて、
　　顔を包んで泣かしやれた。

　泣いても、泣いても、
　　涙が流れてとまらない。

由他。（猛然と立ち上る。）おお。あの女はどこに居るのだ。俺はあの女の命を取つてやる。あの女を締め殺してやる。今に見ろ今に見ろ。俺はきつと捜し出してやる。どこにかくれて居ても、きつと捜し出してやる。

（由他、出て行く。）

道化。（跡を追つて）小父さん。

（道化、出て行く。）

跋陀維目訶。（壺を持つて立つたまま）やつぱり由他は持つて來た。やつぱり由他は持つて來た。

（稍や長き間。）

（微沙落起多、廊よりつと現はる。）

微沙落起多。跋陀維目訶。

跋陀維目訶。（凝つと微沙落起多の顔を見て居る。）

微沙起落多。とうとう由他は持つて來たね。どれ。私にお見せ。（壺を取る。）跋陀維目訶。とうとう私の勝つ時が來た

のだ。あの盲の王子は、やがて王様の手から取り上げられる。それは丁度。無心に遊んで居る赤子の手からその大事の玩具を取り上げるのと同じ事だ。それでもう王様の手に殘つて居るものは何だ。あの法が有るばかりでは無いか。それもやがて私は王様の手から奪つてやる。王様は厭でも私について來ないでは居られないのだ。沙漠の猛獸が血みどろになつた獲物の死骸を引きずつて歩く様に、丁度あの様に私は王様を引きずつてやる。私は總てのものを私の此の美しい素足の下に踏み躙つてやるのだ。

跋陀羅目呵。(次第に面色蒼白となる。)

徵沙落起多。(鋭く跋陀羅目呵を見て。)跋陀羅目呵。

跋陀羅目呵。(只だ凝つと立つて居る。)

徵沙落起多。お前は私を助けて呉れるだらうね。お前はこれを鳩那羅の様に注いで呉れなくてはならぬ。(盃を差し出す。)

跋陀羅目呵。(無意識の様に盃を受け取る。)

徵沙落起多。(ほほ笑む。)ゆうべ王様がお前に何と言つた。お前がどう言ふわけで毒藥なんぞをこしらへるのか分からぬと言つた。それが自分の王子の命を取るのだとは氣がつかなかつたのだね。跋陀羅目呵私はお前がうまくやつて呉れるのを待つて居る。聞くが好い。鳩那羅は今琴を彈いて居る。間も無く自分の命を失ふのだとは夢にも思つて居ないのだ。ああ。私は何とも言へない鋭い悦びが胸に溢れて來る。それは丁度、將棋の駒がうねうねした途をこつそり忍んで行つて、ぴたりと敵の本陣へ喰ひ込んだ樣な心持だ。跋陀羅目呵。私はここで待つて居る。お前の爲事が終つたら。お前はまたここへ歸つて來るが好い。その時、私はあの私の寢床の上で寢つて眼をつぶつて居るだらう。お前はそつと私の傍へ寄つて、私の耳へ囁いて呉れるが好い。鳩那羅は今毒を吞んだのだと。

跋陀羅目呵。(やはり凝つと立つて居る。)

徵沙落起多。さあ。お前は行くが好い。

（跋陀羅目阿、默つて出て行く。）

（琴の音、尙ほ繼續して聞こゆ。）

（長き間。）

（阿育、部屋の入口に現はる。）

微沙落起多。（振り返つて。）おお。陛下。

阿育王。（頭を擧げて。）おお。微沙落起多。ここはお前の部屋だつたのか。俺はどこだか知らないで、自然とお前の部屋へ來たのだと見える。暫く俺をここで休まして呉れ。俺は今考へが亂れて了つて居るのだ。

微沙落起多。（凝つと王を視て。）おお。陛下はとうとう私の所へ歸つて來た。

阿育王。（頭を押へて）俺は今疲れ切つて居る。昨日から俺は餘り考へる事が多すぎた。丸で霧か何ぞでからだ全體を包まれて居る様な氣持がする。物を考へる力も何にも無い。そして、只だ大きな聲が俺のからだ中で鳴り響いて居る。それは暗闇の底で鳴り響く鐘の様に怖ろしく大きな聲だ。鳩那羅が行く。鳩那羅が行くと。

微沙落起多。（心の底より悦びがこみ上げる様に。）おお。とうとう陛下は復た私の所へ歸つて來た。

（琴の音、稍や高く聞こゆ。同時に、鳩那羅の歌ふ聲聞こゆ。）

目の盲ひて、
目の盲ひて、
四諦、
今おぼろにも
見え初めて
智慧の燈の

闇夜を照らす。
心より
淋しけれども。
心より
淋しけれども。

微沙落起多。（冷たくほほ笑んで。）あの歌もやがて已む。

阿育王。（獨りつぶやく。）俺はこれまで俺が此の様に無力で有らうとは知らなかつた。俺のたつた一人の王子が今此の孔雀城を去らうとして居る、今行つて了つたら、恐らく二度ともうここへ歸つて來はしないのだ。それに、俺にはそれを留める力が無い。それのみか、俺はその王子を盲にした罪人を訊す事さへ出來ないのだ。俺は摩揭陀の王では無いのか。全印度を統べる摩揭陀の王では無いのか。

（琴の音、已む。）

微沙落起多。おお。琴の音が已んだ。琴の音が已んだ。

阿育王。（やはり同じ様に。）俺にはもう何にも分からなくなつた。これから俺はどうして生きて行くのだ。これから俺はどうして生きて行くのだ。

微沙落起多。（凝つと王を眺めて居る。）

（稍や長き間。）

微沙落起多。（王の傍へ寄つて。）陛下。

阿育王。（面を擧げる。）

微沙落起多。（王の手を取つて。）陛下。

阿育王。お。微沙落起多。（はらはらと涙を流す。）微沙落起多。わしはな。わしは。

微沙落起多。（優しく）陛下のお傍に微沙落起多が居ります。

阿育王。うむ。うむ。お前が居て呉れる。さうだお前がまだわしの傍に居て呉れる。（潸然と泣く。）

微沙落起多。（なほ優しく王を労って。）陛下のどんな悲しみも微沙落起多が慰めて差し上げます。どんな悲しみでも微沙落起多の手で和がぬものはございません。

阿育王。おお。微沙落起多。（固く微沙落起多の手を取る。）

微沙落起多。これまで陛下は微沙落起多を陛下の命にしてお出でなされました。これからも永く微沙落起多が陛下の命でございます。陛下の唯だ一つの命でございます。

阿育王。（涙にくれて微沙落起多を見上げる。）おお。微沙落起多。微沙落起多。

微沙落起多。陛下はどうしても微沙落起多を離れる事がお出來なさらなかつた。數數の後宮をお捨てなされても、微沙落起多だけはどうしてもお傍からお離しなさる事が出來なかつた。法の命ずる戒律に身をゆだねようとなされても、まだ陛下は微沙落起多をお捨になれなかつた。微沙落起多を法の道に導いて、いつまでも微沙落起多をお傍に置かうと遊ばされた。

阿育王。（愕然として身を退く。）おお。微沙落起多。

微沙落起多。それほど迄にしてまでも、陛下は微沙落起多と別れる事がお出來にならなかつた。たつた一人の王子さへも、陛下は巳に微沙落起多に見かへられた。そして陛下は鳩那羅を咀姑羅（ホカシラ）へお送りなされました。

阿育王。（見る見る憤怒の情を現はして。）微沙落起多。

微沙落起多。法の力も微沙落起多の力と比べてはその足下さへも及びもつきません。陛下は遂に法に身をゆだね切る事がお出來なさらなかつた。それも只だ微沙落起多の爲でございますの。結句、陛下は微沙落起多をお捨てになる事だ

けはどうしてもお出來にならぬ。何に代へても、微沙落起多だけはようお捨てにならぬ。

阿育王。（憤怒に身を震はして。）おお。お前は。お前は。

微沙落起多。さあ。陛下は仰しやるがよい。今こそ陛下は仰しやるがよい。微沙落起多が陛下の命だと。微沙落起多だけが陛下の命だと。微沙落起多の爲には陛下は何物でも擲つのだと。何を捨てても惜しくないと。（つと寄つて）陛下。

阿育王。（憤怒の絶頂に達して）微沙落起多。（激しく微沙落起多をつき退ける）

（王と妃、身を顫はして只だ顔を見合つて居る。）

（長き間。）

（由他の怒鳴る聲聞こゆ。）

阿育王。おお。あれは何だ。

微沙落起多。（冷たく）あの男が陛下に總ての事を知らして呉れませう。今何が起こりかかつて居るか。それをあの男が知らして呉れませう。

（微沙落起多、つと寢間に入る。）

（阿育王、呆然として居る。）

（由他、茫覺しく部屋に入る。）

由他。居ない。あの女はどこにも居ない。あの女はどこにも居ない。

阿育王。（つと捕へて顔を見る。愕然として）おお。由他。

由他。（よろよろと倒れながら、憤怒の情に滿ちて）あの女は復た俺を陥れようとした。二度まで俺を欺さうとした。

阿育王。（激しく由他を捕へて）由他。

由他。俺はあの女の爲に身を滅ぼした。あの女に頼まれて、俺は王子の眼を抉り取つた。

阿育王。（慄いて手を離す。）由他。

由他。（ぺたぺたと倒れて）それに復た俺はあの女に欺されて、毒藥の壺を持つて來た。王子の命を奪ふ毒の壺を持つて來た。

阿育王。（呆然として）おお。

由他。（よろよろと立ち上る）今に見ろ。今に見ろ。俺はきつとあの女を殺してやる。あの女の喉笛を摑み碎いてやるのだ。俺の此の手で。此の手で。あの女の…………。

（由他、寢間に入る。）

阿育王。（我に歸つて）おお。鳩那羅が。鳩那羅が。（寢間の方へ向いて激しく。）徵沙落起多。

（しんとして聲無し。）

阿育王。（つと寢間の帳を上げて見る。人の姿見えず。外に向つて高く叫ぶ。）誰か。

（侍臣一名出づ。）

侍臣。は。

阿育王。徵沙落起多を捕へい。

侍臣。（愕いて）は。お妃でございますか。

阿育王。さうだ。けれども妃としてでは無い。罪人としてだ。直ぐに徵沙落起多を捕へて俺の所へ連れて來い。

侍臣。は。

（侍臣行く。）

阿育王。おお。鳩那羅が。鳩那羅が。鳩那羅の命が危い。

（阿育王急いで出て行く。）

(長き間。)

(跋陀羅目呵　手に空しき壺を持つて廊より部屋に入る。落ち着きたる足取にて静かに座の所へ行く。静かに座の上に身をもたして動かず。)

(由他、寝間より出づ。)

由他。居ない。居ない。どこにも居ない。逃げたのだな。あの女は逃げたのだな。逃げても、俺は逃がしはしない。俺はきつと捜し出してやる。きつと捜し出して命を取つてやるのだ。

(由他、荒荒しく廊に出んとす。)

(鳩那羅、一人にて静かに廊を通り過ぎんとして由他の聲を聞いて立ち留まる。)

(由他、鳩那羅の姿を見るなり、竦然として立ち竦む。やがて、わなわなと身を震はす。)

(鳩那羅、不審げに耳を傾けて居る。やがて、また静かに通り過ぎる。)

(由他、凝然と首を垂れたまま動かず。)

(道化、廊より部屋に入る。)

道化。(跋陀羅目呵に)小父さん。とうとう孔雀が死んぢやつた。孔雀の雄が死んぢやつたよ。

(跋陀羅目呵、瞑目したるまま動かず。)

道化。(しほれて)俺は可哀さうでね、死にかけて居る時分にや、いぢらしくて俺もつい泣いちやつたが。死んぢやつて見ると、何だかばかに儚なくて、いつそ涙も出やしない。斯うしたもんなんだ斯うしたもんなんだ。総て斯うしたもんなんだね。色色わけを聞いて見たら。あれは名の知れない花の露を吸つたんだつてね。日向に一輪真つ赤な花が咲いて居て、それが誰も見た事の無い不思議な花だつたんださうだ。それが毒の花だつたんだね。つい其の露を吸つて見る気になつたのが、つまりもれの運が悪かつたんだね。つまりはあれの運が悪かつたんだ。

（道化、廊から出て行く。）

（跋陀羅目砢、やはり動かない。）

（由他、首を垂れたまゝ魂の抜けた人の様に出て行く。）

（長き間。）

（微沙落起多、廊より部屋に入る。）

微沙落起多。（跋陀羅目砢を見て）おお。跋陀羅目砢。

跋陀羅目砢。（懶げに目を開く。）

微沙落起多。（傍に寄つて）跋陀羅目砢あれは。あれは。鳩那羅は。

跋陀羅目砢。（僅かに壺を差し出す。）

微沙落起多。（壺を受け取つて倒さにする。）おお。お前はやつて與れたと見えるね。お前はやつて與れたと見えるね。（跋陀羅目砢の手を取つて。）跋陀羅目砢。お前はやつぱり私の身方で有つた。私のたつた一人の身方で有つた。そして、私の大事な戀人で有つた。跋陀羅目砢や。

（人人の騒ぐ物音聞こゆ。）

微沙落起多。おお。あれは。あの騒ぎは。（ふと氣づいて、こみ上げる悦びを押へる様に）おお。あれが鳩那羅の命を失つた騒ぎなのか。

跋陀羅目砢。（再び靜かに瞑目して動かず。）

微沙落起多。（不審げに）跋陀羅目砢。お前はどうしたと言ふのだ。

（琴の音聞こゆ）

微沙落起多。（愕然として）お。あれは。あの琴は。（つと跋陀羅目砢の傍に寄つて）跋陀羅目砢。（跋陀羅目を抱き起こす。跋

羅目呵ぐたりとなつて居る。悄然として飛び退いて。）おお。跋陀羅目呵。（手に壺を持つたまま、凝つと跋陀羅目呵を見て）さてはこれはお前が飲んだのか。お前が自分で飲んだのか。（忙然と立つて居る。）

（長ひ間。）

（琴の音、續く。鳩那羅の歌ふ聲聞こゆ。）

底ふかき
森陰の
お暗きに
眞白なる
一輪の
娑羅の花
娑羅の花
かすかにも
ふと
咲き出でぬ。
心より
淋しけれども。
心より
淋しけれども。

倶沙落起多。（跋陀羅目呵の傍に寄る。その手を取つて、凝つと見つめて居る。態度全く變り居る。）跋陀羅目呵。お前はやつぱ

り私の本當の心が分からなかつた。お前も私に近づいた他の多くの男と同じ様に、やつぱり私の只の獲物に過ぎないと思つたのだね。それで自分で自分を蔑んで、お前は命を捨てたのだね。跋陀羅目呵それはお前の思ひ違ひだつたのだよ。（涙にくれて）私は心の底からお前を愛して居た。お前ばかりを愛して居た。私が眞實心の底から愛して居たのは、お前ばかりだつたのだよ。私は幾度それをお前に言つたか。それでもお前はそれを信じようとしなかつた。やはりいつもの私のいたずらだとお前は思つて居たのだね。けれどもそれもみんな私の所爲であつた。みんな私が惡かつのだ。私のいたずらな出來心がどれだけお前の心を惱ましたか。それも私はよく知つて居た。知つて居ながら、お前の内氣な姿を見ると、どうしても私は私のいつもの癖を押へる事が出來なかつた、お前は日陰を好んで咲く菫の様に優しかつた。いつも無口なお前の姿は、ふと觸れてさへ直ぐに萎む合歡木の花の様に此の上も無く私には床しかつた。けれども、お前をいとしいと思へば思ふほど、不思議に私の邪見な心がつのつて行つた。お前を自由に操る時の鋭い悦びを、押へても押へても私は押へる事が出來なかつた。それがとうとう斯うしてお前を殺す事になつたのだね。跋陀羅目呵や堪忍しておくれ。堪忍しておくれ。跋陀羅目呵の胸に顔を埋めて、激しく泣く。）

（外の物音、更に近く聞こゆ。）

薇沙落起多。それでも、跋陀羅目呵。お前ばかりは私の本當の心を知つて呉れる筈では無かつたか。あれほど賢いお前だもの。お前だけは私の心の奥底まで知つて居て呉れるだらうと私は思つて居た。それになぜお前は私の心を疑つた。私は永久にお前のものだつたのだよ。それになぜお前はそれを信じては呉れなかつた。なぜさうして一人で死んで了つたのだ。なぜお前は此の壺を空にした。私の爲にもなぜ殘して置いては呉れなかつた。そしたら、斯うしてお前の胸に折り重つて、一息一息お前と一偖に息を引き取る事が出來たのだ。お前は私だけが生き殘つて生きて行けると思つたのか。ああ。私はどうしよう。どうしよう。私だけが生き殘つて、私はどうしよう。（狂ほしく跋陀羅目呵の死骸を抱いて）跋陀羅目呵。お前はなぜ死んで呉れた。お前はなぜ死んで呉れた。

（阿育王、廊より出づ。侍臣數人從ふ。）

阿育王。（荒荒しく徽沙落起多に近づいて。激しく）徽沙落起多。

徽沙落起多。（面を擧げて、振り返る。忽ち傷いたる猛獸の如き憤怒に滿ちたる態度にて、死骸をかばひながら）おお。此の死骸にはさはらせない。誰も此の死骸にはさはらせない。誰も傍に寄つて貰ひますまい。

阿育王。（怒りに身を震はして居る。）

（琴の音、なほ續く。）

五　齣。

高臺。

片方に大いなる圓形の望樓立つ。

向うは只だ一面に殑河の流れの海の如く廣く洋洋と續けるが見ゆ。

夜。

月光、一杯に映じ居る。

（阿育王、望樓の陰より出づ。苦悶の情に堪へざる如く、首を垂る。）

阿育王。（高臺の端まで行つて、向うの庭を見下す。）おお。もう刑場の仕度が出來たと見える。（うめく樣につぶやく。）

（侍臣一人露台の向ふより出づ。）

侍臣。は。お召しになりましてございますか。

阿育王。（首を振る。）

侍臣。（丁寧に辞儀をして行きかける。）

阿育王。（呼び止めて。）待て。待て。

侍臣。は。（降る）

阿育王。僧迦密多はどうして居る。

侍臣。やはり先程と同じ様に、孔雀の死骸をお抱きになつて只だうつつの事のみ申し続けてお出でございます。何事を申し上げましてもお耳には入らぬ様子でございます。

阿育王。（苦しげにうなだれたまま）よい。行け。

侍臣。は。

（侍臣行く。）

（阿育王、うなだれたまま凝つと立ち盡して居る。）

（長き間。）

（僧迦密多、出づ。心の亂れたる様子。死せる孔雀の骸を抱く。）

阿育王。おお。僧迦密多。

僧迦密多。（足早に通り過ぎんとして）孔雀が死んだ。孔雀が死んだ。私の孔雀が死んだ。

阿育王。（僧迦密多を抱き留めて）僧迦密多。これ。僧迦密多。

僧迦密多。私の孔雀が死んだ。私の孔雀が死んだ。私の孔雀がとうとう死んだ。私はいとしい。私はいとしい。私の手

から離れさへしなかつたら、お前も斯うして死ぬのではなかつたらうに。（孔雀をひしと頬に當てて。）おお。いとしいいとしい私の孔雀。

阿育王。（はらはらと泣いて）おお。僧迦密多。

僧迦密多。（飛び退いて）おお。歌が聞こえる。あれ。あれ歌が聞こえる。悲しい歌が聞こえる。水の底から聞こえる樣な悲しい歌だ。おお。あれだ。あれだ。あれが孔雀の胸から拔け出た歌だ。おお。私を呼んで居る。あれ。あんなに私を呼んで居る。（狂喜して）おお。おお。お前は今やつと私の所へ歸る心になつたのか。も一度私の胸へ歸つて來る氣になつたのか。

阿育王。（僧迦密多を抱きしめてさめざめと泣く。）

僧迦密多。私は今行つて上げる。私は今行つて上げる。（悦びに咽び泣く。）おお。お前はよく私の所へ歸る氣になつた。

（僧迦密多、つと望樓の陰にかくれる。）

阿育王。（顔を掩つて慟哭す。）おお。わしは今總てのものをわしの手から失はねばならぬのか。

（長き間。）

（道化先に立つて、鳩那羅と泥曇陀と出づ。）

阿育王。おお。鳩那羅。

鳩那羅。おお。お父さま。

（兩人、手を取り合つて泣く。）

道化。（望樓の階段を登りながら。）おお。もう刑場の仕度がすつかり出來たと見える。薪が山の樣に積んである。もうあれに火をともしさへすれば好いのだな。（高く笑ふ）あつはつはつはつは。眞黑な奴等が眞面目な顔をして槍を立てて居らあ。罪人は自分一人の力で焚くんだと思つて居るんだな。滑稽だよ。あつはつはつはつは。（見えなくなる。）

（泥曇陀、望樓の階段に凭れて、うとうと眠る。）

（侍臣一人、出づ）

侍臣。陛下。

阿育王。（凝つと見て）刑場の仕度は殘りなく整つたか。

侍臣。は。

阿育王。よし。妃微沙落起多を焚け。

侍臣。は。

鳩那羅。（愕然として）おお。お父さま。

（侍臣行く。）

阿育王。（固く鳩那羅の手を取つて。）鳩那羅。わしはお前の言ふ事を聞かなかつた。けれども、お前はわしを咎めて呉れてはならぬ。これはやむを得ざる事なのだ。わしはお前の爲に微沙落起多を焚くのでは無い。わしの爲にだ。わしの爲にだ。（はらはらと涙を流して）わしの法心を守る爲に、わしは微沙落起多を焚くのだ。

鳩那羅。（阿育王の胸に縋つて泣く）おお。お父さま。

阿育王。鳩那羅。わしの此の苦しい心を察して呉れ。お前は行く。僧迦密多は氣が狂つた。わしには只だ微沙落起多だけが殘る筈で有つた。その微沙落起多を今わしは焚くのだ。

鳩那羅。（ひしと阿育王の胸に縋つて）お父さま。

（下より火燃え上る。）

阿育王。わしは微沙落起多を焚く。わしは微沙落起多を焚く。あれはわしにわしの命だと言つた。わしの唯だ一つの命だと言つた。その通りだ。その通りだ。その微沙落起多をわしは今焚くのだ。あれは只だわしの心を占領しようとば

かりした。それがわしには何より危險だつたのだ。それがわしの法心を破る何より大きな力だつたのだ。それで今わしは徴沙落起多を焚いた。それで、わしは徴沙落起多を焚いたのだ。

鳩那羅。（咽び泣く。）

阿育王。わしの手にはもう何が殘るのだ。わしの手には何が殘るのだ。

鳩那羅。お父さま。

阿育王。法（をしへ）。法（をしへ）。法（をしへ）。法（をしへ）。

（兩人固く抱き合つて泣く。）

（刑場の火、下より炎炎と燃え上る。）

（望樓の頂より道化の聲聞こゆ。）

道化。おお。燃える。燃える。燃える。すさまぢひ炎だな。俺は何だか怖ろしくなつた。お。お妃が階段の端に立たれた。眞白な絹を召して居られる。美しい。これは美しい。俺はまだ斯んな美しいお妃のお姿を見た事が無かつた様だ。

鳩那羅。おお。お父さま。

阿育王。（固く鳩那羅を抱いて只だうめく様な聲を洩らす。）

道化。ほら。裳裾がなびく。髪がなびく。炎から風が出るのだな。丸で雲の様にうしろへ揺らいで居る。あ。お妃は前へ進まれる。鐵の階段をしつかり踏んで前へ進まれる。おや。お妃は何か引きずつて居られる。うしろへ何か引きずつて居られる。お。あれは人間の死骸ぢや無いか。

（炎ますます盛に燃え上る。）

道化。おお。とうとうお妃は梯子の端に立たれた。下には炎が渦を卷いて居る。ほら。裳裾を吹きまくる。髪を吹きまくる。丸で眞赤な嵐の様に吹き上げる。お妃のお顔は丸で火の様だ。炎が映つて居るのだな。

鳩那羅。おお。

道化。お。お妃は死骸を抱き上げられた。自分の胸に抱き上げられた。おや。あれは跋陀羅目砢さまだ。

鳩那羅。（愕然として王の胸を離れる。）

阿育王。（苦しげにうめく。）

道化。さうだ。やつぱり跋陀羅目砢さまだ。死骸の顔がぐつたりお妃の肩に凭れかかつて居る。お妃はそれを凝つと覗つめて居られる。お妃は動かない。彫像の様に動かない。

阿育王。（苦悶に堪へざる如く）鳩那羅や。鳩那羅や。

鳩那羅。おお。お父さま。

（炎、一度に激して燃え上る。）

道化。おお。お妃が炎の中に身を投げられた。二つのからだが一つになつて炎の中へ飛び込んだ。炎が一度にぱつと燃え立つた。おお。見えない。見えない。もう何にも見えない。燃えてる。燃えてる。只燃えてる。

阿育王。（只だ鳩那羅を抱きしめて）鳩那羅。

鳩那羅。おお。お父さま。

（長き間。）

（炎、次第に静まる。）

（侍臣、一人出づ。）

侍臣。（阿育王に近づいて）陛下、園丁の由他が自殺を致して居りました。お庭の樹の枝で縊れて死んで居りました。

鳩那羅。（愕然として）え、由他が。

（泥瞿陀、ふと眼を覚ます。）

泥犂陀。なに。由他が、由他が何を。

(誰も答ふるもの無し。)

泥犂陀。(見廻して)はは。夢か。わしが夢を見たのか。はは。夢か。夢。夢。ゆ。ゆ。(復たうとうと眠る)

(侍臣、行く。)

(火、全く消ゆ。)

(長き間。)

(下より澄み亘りたる鈴の音聞こゆ。)

鳩那羅。おお。あの巡禮が私を待つて居る。私の行くのを待つて居る。

阿育王。(固く鳩那羅の手を取つて。)おお。鳩那羅。

(長き間。)

(鈴の音、なほ高く聞こゆ。)

——完——

(附記)作中挿入する所の石碑石柱の詔文字は主として森林太郎大村西崖兩氏著「阿育王事蹟」に據り、これに Smith 氏の "The depicts of Asoka" と島地大等氏の譯とを參照して作者の改訂せしものにかかる。譯文の轉載を許されたる「阿育王事蹟」の著者に深謝せざる可からず。總て此の作「阿育王事蹟」に得る所甚だ多かりしものとす。

作中出づる所の地理風俗その他は、主として Smith 氏の "Early History of India" 及び Edmund Hardy 氏の "Koenig Asaka" に據り、Roper Lethbridge 氏の "History of India" にも亦得る所あり。

題材の出典は「阿育王經」「阿育王傳」「阿育王息壊目因縁經」の中、大體「阿育王經」卷四「鳩那羅因縁」に據れるものとす。

唄立山心中一曲

泉鏡花

一

「ちら〳〵ちら〳〵雪の降る中へ、松明がぱつと燃えながら二本――誰も言ふことでございますが、他にいたし方もありませんや、眞白な手が二つ。悚然とするほどな婦が二人……最うやがて其處等一面に薄り白く成つた上を、靜に通つて行くのでございます。

正體は知れて居ても、何しろ其に、所が山奥でございませう。何うもね、餘り美くしくつても凄うございました。

と鑄掛屋が私たちに話した。

いきなり鑄掛屋が話したでは、些と唐突に過ぎる。知己に成つて此の話を聞いた場所と、其のいきさつを一寸申陳べる。けれども、肝心な雪女郎と山姫が長襦袢で顯はれたやうなお話で、少くとも御覽の方はさきをお急ぎ下さるであらうと思ふ。で、簡單に其の次第を申上げる。

所は信州姨捨の薄暗い饂飩屋の二階であつた。――饂飩屋さへ、のつけに薄暗いと申出るほどであるから、夜の山の暗い事思ふべしで……其の癖、可笑いのは、私たちは月を見ると言つて出掛けたのである。

別に迷惑を掛けるやうな筋ではないから、本名で言つても差支えはなからう。其の時の連は小村雪岱さんで。双方、彼方此方の都合上、日取が思ふ壺にはまらないで、十一月の上旬、閏年の順にをくれた十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事であつた。

居待月である。

一杯飲んで居る内には、木賊刈ると云ふ歌のまゝ、研かれ出づる秋の夜の月と成るであらうと、其の氣で篠の井で汽車を乗替へた。が、日の短い頃であるから、五時そこ〳〵と言ふのに、最うとつぷりと日が暮れて、間は稲荷山唯一帳場だけれども、線路が上りで、進行が緩い處へ、乗客が急に少く、二人三人と數へるばかり、大な木の葉がばらりと落ちたやうであるから、掻合はす外套の袖も、妙にばさ〳〵と音がする…外は霜であらう。山の深さも身に沁みる、夜さへそゞろに更け行くやうに思はれた。

「來ましたよ。」

「二人切ですね。」

と私は言つた。

名にし負ふ月の名所である。此處の停車場を、月の劇場の木戸口ぐらゐな心得違ひをして居た私たちは、幟や篝燈には及ばずとも、屋號をかいた弓張提灯で、へい、茗荷屋でございます、旅店の案内者ぐらゐは出て居やうと思つたのは大きな見當違。繪に描いた木曾の棧橋を想はせる、斷崖の丸木橋のやうなプラットホームへ、…然も下りたのは唯二人で、改札口へ渡るべき橋もない。

一人がバスケットと、一人が一升壜を下げて、月はなけれど敷板の霜に、寒い影を映しながら、彼方へ行き、此方へ戻り。で、小村さんが唇を一寸曲げて、

「汽車が出ないと向ふへは渡られませんよ。」

「成程、線路を突切つて行く仕掛けなんです。」

やがてむら〳〵と立昇る白い煙が、妙に透通つて、颯と屋根へ掛る中を、汽車は音もしないやうに靜に動出す、と漆の如き眞暗な谷底へ、轟と谺す……

「行つていらつしやいまし：お靜に――」

と私はつひ、目の前をすれ〳〵に行く、冷たさうに曇つた汽車の窓の灯に挨拶した。此處へ二人きり置いて行かれるのが、山へ棄てられるやうな氣がして心細かつたからである。

墻はあるが、深いから、首ばかり並んで霧の裡なる線路を渡つた。

「一寸、伺ひますが。」

「はあ？」

手ランプを提げた、眞黒扮裝の年の少い改札掛僅に一人。

待合所の腰掛の隅には、頭から毛布を被つたのが、其も唯一人居る。：此が伊勢だと、彼處を狙つて吹矢を一本、：と何も不平を言ふのではない、旅の秋を覺えたので。―小村さんは一旦外へ出たが、出ると、すぐ、横の崖から瀧を滴る、ひた〳〵と清水の音に、用心のため引返して、驛員に訊いたのであつた。

「其の邊に旅籠屋はありませうか。」

「はあ、別に旅籠屋と言つて、何ですな、此から下へ十四五町、：約半道ばかり行きますと、湯の立つ家があるですよ。外は大概一週間に一度ぐらゐなものですーでなあ。」

「あの風呂を沸かしますのが。」

「然やう。」

「有難うー少し何うも驚きました。とに角、其處等まで歩行いて見ませう。」

と小村さんが暗がりの中を探りながら先へ立つて、

「いきなり、風呂を沸かす宿屋が半道と來たんでは、一口飲ませる處とも聞きにくうございますよ。しかし何か知らありませう。：何しろ暗い。」

と構内の柵について、…灯の百合が咲く、大な峯、廣い谷に。はら〳〵とある灯をたよりに、もの丶十間とは進まないで、口を開けて足を噛む狼のやうな巖の徑に行惱むだ。

「何うです、一層此處へ蹲んで、壜詰の口を開けやうぢやありませんか。」

「まさか。」

と小村さんは苦笑して、

「姨捨山、田毎の月ともあらうものが、こんな路で澄まして居るつて法はありません。屹と方角を取違へたんでせう。お待ちなさいまし、逆に停車場の裏の方へ戻つて見せませう。いくらか燈が見えるやうです。」

双方黑い外套が、こんがらかつて引返すと、停車場には、早や驛員の影も見えぬ。毛布かぶりの痩せた達磨の目ばかりが晃々と光つて、今度は何うやら羅漢に見える。

と停車場の後は、突然荒寺の裏へ入つた形で、芬と身に沁みる木の葉の匂、鳥の羽で撫でられるやうに、さら〳〵と——袖に鳴つた。

落葉を透かして、山懐の小高い處に、まだ戸を鎖さない灯が見えた。

小村さんが、まばらな竹の木戸を手を廣げつ丶探り當て丶、

「屹と飲ませますよ。…此の戸の工合が氣に入りました。」

と勢よく、一足先に上つたが、程もあらせず、さわ〳〵さわと、落葉を鳴らして落來るばかりに引返して、

「退却…」

「え、安達ケ原ですか。」

と聞く方が慌て丶居る。

「い丶え爺さんですかね、一人土間で草鞋を造つて居ましてね、何だ、誰ぢやいッて喚くんです。」

「いや、それは恐縮々々。」

「まことに濟みません、發起人が此の樣子で。」

「飛でもない。恁う言ふ時は花道を歌で引込むんです。柄にはありませんがね、何でしたつけ。：」

　　わが心なぐさめかねつ更科や
　　　姨捨山に照る月をみて。

照る月をみて慰めかねつですもの、暗いから慰められて可い譯です。いよ〳〵路が分らなければ、停車場で、次の汽車を待つて、松本まで參りませう。時間がありますから其處は氣丈夫です。」

然る處、暗がりに目が馴れたのか、空は星の上に星が重つて、底なく晴れて居る—何處の峯にも白銀の覆輪はかゝらぬが、自から月の出の光が山の腑を透すかして、巖の欠めも、路の石も、褐色に薄く蒼味を潮して、はじめ志した方へ幽ながら見えて來た。灯前の木の葉は白く、陰なる朱葉の色も浸む。

恁くして辿りついた薄暗い饂飩屋であつた。

何しろ薄暗い。：赤黒くどんより煤けた腰障子のそれも、宵ながら朦朧と閉つて居て、よろづ荒もの、うどんありと記した大な字が、鼾をかいて居さうに見えた。

此店の女房が、東京ものは清潔ずきだからと、氣を利かして、正札のついた眞新しい湯が沸を達引いてくれた心意氣に對しても、言はれた義理ではないのだけれど、

「これは少々酷過ぎますね。」

「此處まで來れば、あと一辛抱で、最う些と何うにかしたのがありませう。」

實は、此の段、囁き合つて、丁ど其處が三岐の、一方は裏山へ上る山徑の落葉の徑、一方は崖を下りる石ころ坂の急な奴。で、其の下りる方へ半町ばかり又足探りを試みたのであるが、がけの陰に成つて、暗さは暗し、路は惡し、灯は

返し、思切つて逆戻に其の饂飩屋を音訪れたのであつた。

「御免なさい。」

と小村さんが優しい穏な聲を掛けて、がた／＼がたと入つたが、向ふの對手より土間の足許を俯向いて視つゝ、横にとぼ／＼歩行いた。

灯が一つ、ぼうと赤く宙に浮いた切で、何も分らぬ。釣ランプだが、火屋(ほや)も笠も、煤と二所に油煙で黒く成つて正體が分らないのであつた。

が凝視める瞳で、漸と少しづゝ、四邊の黒白(あいろ)が分つた時、私はフト思ひかけない珍らしいものを視た。

二

框の柱に、天秤棒を立掛けて、鍋釜の鑄掛の荷が置いてある、―亭主が擔ぐか、場合に依つては恁うした徒(てあい)の小宿でもするか、鑄掛屋の居るに不思議はないが、珍らしいと思つたのは、薄汚れた鬱紺木綿の袋に包んで、其の荷に一挺、紛ふべくもない三味線を結え添へた事である。

話に聞いた―谷を深く、麓を狹く、山を奥へ入つた村里を廻る偏路のやうな渠等には、小唄淨瑠璃に心得のあるのが少くない。行く先々の庄屋のもの置、村はづれの辻堂などを假の住居として、晝は村の註文を集めて仕事をする。傍ら夜は村里の人々に時々の流行唄、浪花節などをも唄つて聞かせる、聞く方では、祝儀のかはりに、なくても我慢の出來る、片手とれた鍋の鑄掛も誂へると云つた寸法。小兒に飴菓子を賣つて、一手踊つたり、唄つたりと同じ格で、ものは違つても家業の愛相―盛場の吉原にさへ、茶屋小屋のおかつぱお莨盆に飴を賣つて、爺やあつち、婆やこつち、おんちやらこつちりこ、ばあ／＼と、鳴物入で餡とおかめの小人形を踊らせたおん爺(ぢい)があつたとか…同じ格だが、中には妙いやうな巧いのがあると言ふ…

唄ひながら、草や木の種子を諸國に撒く…怪しい鳥のやうなものだと、其の三味線が、ひとりで鳴るやうに熟と視た。

「相談は整ひました。」

「それは有難い。」

「さあ、二階へ何うぞ…何しろ汚いんでございますよ。」

と、雨もりのやうな形が動くと、紺の上被(うはつぱり)を着た婦に成つてガチリと釣ランプを捻つて離して、框から直ぐの階子段。

小村さんが小さな聲で、

「何しろ此の體なんですから。」

「結構ですとも、行暮れました旅の修行者に成りませうね。」

「では、其のおつもりで—さあ、上りませう。」

と勢よく、下駄を踏遂へるトタンに、

「あつ。」と言つた。

きやん〳〵きやん〳〵クイ、キウと息を引いて、きやん〳〵きやん。クイ、ウクン、きうと鳴く。

見事に小狗を踏つけた、小村さんは狼狽へながら、穴を覗くやうに土間を透かして、

「御免よ…御免よ。…仕方がない、御免なさいよ。」

で、遁げないばかりに階子を上る、と續いた私も、一所にぐら〳〵と揺れるのに、兩手を壇の端に緊り縋つた。

二階から女房が、

「お氣をつけなさいましよ…お頭(つむ)を何うぞ、…お危うございますよ、お頭を。—

「何(なあに)。」

と吻としながら、小村さんは氣競(きほ)つたやうに、

「踏着けられた狗から見りや、頭を打つけるなんぞ何でもない。」

日頃、沈着な、謹深いのが此だから、餘程周章てたに違ひない。

きやん〳〵きやんクイツ、キウ、きやん、きやん〳〵きやん、と斷々に、聲が細つて泣留まない。

「身に沁みますね、何ですか、狐が鳴いてるやうに聞こえます。」

木地の古びたのが黒檀に見える、卓子臺にさしむかつて小村さんは襟を合はせた。

件の油煙で眞黒で、ぽつと灯の赤いランプの下に畏つて、動くたびに、ぶる〳〵と疊の震ふ處は、天變に對し、謹んで、日蝕を拜むが如く。少なからず肝を冷しながら、

「旅は此だから可んです。何も話の種です……話の種と言へばね、小村さん。」

と、探らないと顔が分らぬ。

「はあ。」

「何ですか、此邊には、あはれな、寂しい、物語がありさうな處ですね。あの、月宵鄙物語を言ふのがあります、御存じでせうけれど。」

「いゝえ。」

「それはね、月見の人に、木曾の麻衣まつりでし手したる坊さん、と言ふのが、話をする趣向に成つて居るんですがね

更級山の月見むんとて、かしこに飛登りけるに、大なる巖にかたかけて、肘折れ造りたる堂あり、觀音を据え奉れり。鏡臺とか云ふ外山に向ひて……と云ふんですから、今の月見堂の事でせう。……屹と此の崖の半腹にありませうよ。……其處の高欄におしかゝりながら、月を待つ間のお伽に、とて其の坊さんが話すのですが、蘭原山の木賊刈、伏屋里の箒木、更級山の老桂、千隈川の細石、姨捨山の姥石なぞツて、標題ばかりでも、もの寂しくなるのです。皆此の邊の、山々谷々の事なんでせう。何にしろ、

信濃なる千隈の川のさゞれ石も
　君しふみなば玉とひろはん。
と言ふ場所なんですもの―やあ、明るく成つた。」
と思はず言つた。
釣ランプが、眞新い、明いのに取換つたのである。
「お待遠様、…濟みません。」
「何ういたしまして、飛だ御無理をお願ひ申して。」
女房は崩れた鬢の黒い中から。思ひのほか白い顔で莞爾して、
「私どもでは有難いんでございますけれども、まあ、何しろ、お月様がいらしつて下さると可いんですけれども。」
爾時、一列に蒲鉾形に反つた障子を左右に開けると、ランプの、―小村さんが用心に蔓を壓へた…灯が一煽、山氣が颯と坐に沁みた。
「一昨晩の今頃は、二かさも三かさも大い、眞圓いお月様が、あの正面へお出なさいましてございますよ。あれがね旦那、鏡臺山でございますがね、何うも暗うございまして。」
「音に聞いた。どれ。」
と立つと、ぐら／＼と成る…
「おつと。」
欄干につかまつて、蝸牛と云ふ身で、背を縮めながら首を伸ばし。
「漆で塗つたやうだ、ぽつと霧のかゝつた處は研出しだね。」
宵の明星が閃然と蒼い。

「あの山裾が、左の方へ入江のやうに擴がつて、ほんのり奥に灯が見えるでございませう。善光寺平でございましてね。灯のありますのは、善光寺の町なんでございますよ。」

「何里あります。」

「八里ございます。」

「はゝあ。」

「眞下の谷底に、ちら〳〵と灯が見えませう、彼處が、八幡の町でございましてね、お月見の方は、那處から、皆さんが支度をなすつて、私どもの裏の山へお上り(のぼ)に成りますんでございますがね、鏡臺山と、丁どさし向ひに成つて居りますーおゝ、冷えますこと：唯今お火鉢を。」

「小村さん、寸法は分りました。何うなすつたんです、景色も見ないで。」

と座に戻ると、小村さんは眞顔で膝に手を置いて、

「いえ、其の椽側に三人揃つて立つたんでは、棧敷が落ちさうで危險(けんのん)ですから。」

「眞個(まつたく)、これで猿樂があると、：天狗が揺り倒しさうな處です、可恐いね。」

と二人は顏を見合はせた。

が、註文通り、火鉢に湯沸が天上して來た。火も赫と、此の火鉢と湯沸が、前に言つた正札つきなる眞新いのである。酒も銚子だけ借りて、持參の一升壜の燗をするのに、女房は氣障だと云ふ顏もせず。お客冥利に、義理にうどんを誂へれば、亂れてもすなほな銀杏返の鬢を振つて、

「およしなさいまし、むだな事でございます。おしたちが惡くつて、めしあがられやしませんから。：何ぞお香のものを差上げませう。」

其の心意氣。

「有難い。」
と熱燗三杯、手酌でたてつけた顔を撫で〻、
「おかみさん。」
杯をづいとさして、
「一つ申上げませう、お知己に……」
「私は一向な不調法ものでございまして。」
「まあ一盃。」
「最う、全く。」
「でも、一盃ぐらゐ、お酌をしませう。」
と小村さんが銚子を持つたのに、左右に手を振つて、辷るやうに、然も軋んで遁げ下りる。
「何だい。」
「毒だとでも思ひましたかね。して見ると、お互の人相が思はれます。おかみさん一人切なんでせうか知ら」
「泊りませうか。」
「御串戯を。」
クイツ、キウ、クツクーーらと…うら悲げに、また聞こえる。
「弱りました、あの狗には。」
と小村さんは又滅入つた。
のし〳〵みしり、大皿を片手に、其處へ天井を抜きさうに、ぬいと顯はれたのは、色の黒い、いが栗で、しるし半纒の上へ汚れくさつた棒縞の大廣袖を被つた、から脛の毛だらけ。圖躰は大いが、身の締つた、腰のしやんとした、鼻の隆

い、目の光る…年配は四十餘で、猿坐りの屈竟な山賊面。…腰にぼッ込むだ山刀のないばかり。あの皿は何んだ。ヘッヘッ、生首二個受取らうかと言ひさうな、が、そぐはないのは頭に短い山羊髯であつた。

「御免なせえ。…お香のものと、嬶々衆が氣前を見せましたが、取つておきの此の奈良漬、此奴あ水ぽくて些と中でがす。茶ッ葉が食へますよ。長蕪てッて、此處等一躰の名物で、異に食へまさ、めしあがれ。—處で、嬶々衆のことづけでがすがな、折角御酒を一つと申されたものを、やけな御辭退で、何だかね、南蠻秘法の痲痺藥…あの、それ、何とか傳三熊の膏藥とか言ふ三題噺を逆に行つたやうな工合で、旦那方の御酒に毒でもありさうな様子合が、申譯がございません。で居候の私に、代理として一杯、いんえ唯一つだけ、おしるしに頂戴してくれるやうに、と申すんで。や、も、御覧の通不躾ながら飛出ました。實はね、嬶々衆、あゝ見えて、浮氣もんでね、亭主は旅稼ぎで留守なり、此方のお若い方のやうな、おッこちが欲しさに、酒どころか杯を禁つて居りますんでね。はッはッはッ。」

階子の下から、伸上つた聲がして。

「馬鹿な事を言はねえもんだ。」

と、むきに成ると、まるだしの田舎なまり。

「眞鍮臺め。」と言つた。

「…眞鍮臺?……」

聞くと、…眞鍮臺、またの名を銀流しの藤助と言ふ、金箔つきの鋳掛屋で、此が三味線の持ぬしであつた。町所でも知れる…此のしたゝかものが、やがて涙ぐんで…話したのである。

三

「私はね、旦那、まだ其の時分、宿を取つちやあ居なかつたんでございます。居酒屋、と言つた處で、豆府も駄菓子

も突つくるみに黄つて居る、天井に釣した蕃椒の方が、燈よりは眞赤に目に立つてツた、寂びた店で。榾同然の鯡に山家片鄙はお極りの石斑魚の煮浸、衣川で食しぱつた武藏坊辨慶の奧齒のやうな奴をせゝりながら、店前で、やた一きめて居た處でございましてね、

一寸私の懷中合と、鑄掛屋風情の此の容躰では、宿が取惡かつたんでございますよ。と云ふのが、燒山の下で、バツと一くべ、おへつゝゐ様を燃したも同じで、山を越しちやあ、別に騷動も聞えなかつたんでございますが、五日ばかり前に、其の溫泉に火事がありました。ために、木賃らしい、此の方に柄相當のなんぞ燒けて居て、二三軒殘つたのは、いづれも玄關附だから、些とたぢろいだ次第なんでございますが。

えゝ：溫泉でございますか、名は體をあらはすとか言ひます、とんだ山中で：狼溫泉──」

「あゝ、何處か三峯山の所迄ですか、」

と、嘗て美術學校の學生時代に、其のお山へ拔參りをして、狼よりも旅費の不足、でしたゝかな可恐い思をした、小村さんは開怯をして口を入れた。：嚙むが如く杯を啣みながら、

「那處ぢやあ、お狗様と言はないと山番に叱られますよ。」

藤助は眞顏で、微醉の頭を掉つた、

「途方もねえ、見當違ひ、山また山を遙に離れた、峯々、谷々：と言へばね。山の中に嶋々と言ふ處がありまさ、をかしいね。いやもつと深い、七里も奧へ入つた、飛驒の山中：、心細い處で──それでも小學校もありや、郵便局もありましたつけが、それなんぞも燒けて居たんでございましてね。

山坂を踏越えて、少々平な盆地に成つた、其の溫泉場へ入りますと、火沙汰は又格別：酷いもので、村はづれには、落葉、枯葉、燒灰に交つて、あとり、頰白、山雀、鶸、小雀などゝ言ふ、紅だ、靑だ、黃色だわ、紫の毛も交つて、あの綺麗な小鳥どもが、路傍にはら〳〵と落ちて居る。此奴あ、それ、時節が今頃に成りますと、よく此の信州路、木曾街

道の山家には、暗い軒に、糸で編んで、ぶら下げて、美しい手鞠が纏れたやうに賓つてる奴だて、それが。お前さん、火事騒ぎに散らかつたんで―驚いたのは、中に交つて、鴛鴦が二羽…番かね。…や、頂きます、ト、トごぜえやさ。」

と小村さんの酌を、盞するやうな大な掌で請けながら、

「何うもね、拾つて抱きたいやうでがしたぜ。まさか、池に泳いだり、樹に眠つたのが、火の粉を浴びはしますめえ賓ものが散らばりましたか、眞紅に染つた木の葉を枕で、目を眠つて居ましたよ。

天秤棒一本で天上へ宙乘でもするやうに、ふら〳〵ふら〳〵、山から山を經歴つて…えゝ、丁ど昨年の今月、日は、もつと末へ寄つて居りましたが―此の緋葉の眞最中、草も雲も虹のやうな彩色の中を、飽くほど視て通つた私もね此には足が停まりました。

如何と…綺麗な、其の翼の上も、一重敷いて、薄りと白く成りました。此の景色に舞臺が換つて、雪の下から鴛鴦の精靈が、鬼火をちら〳〵と燃しながら、すつと羅上つたやうにね、お前さん、…唯今の、其の二人の婦が、私の目に映りました。凄いやうに美しうがした。」

と鋳掛屋は、肩を歛に、胸を低うして、更めて私たち二人を視たが、

「で、山路へ掛る、狼温泉の出口を通るんでごさいますが、場所はソレ件の盆地だ、私が飲んで居ました有合御肴と言ふお極りの一膳めしの前なんさ、小さな原場ぐらゐ小廣うごさいますのに、―それでも左右へ並ばないで、前後に成つて、すつと連立つて通ります。

前へ立つたのは、褄を着て、竹の子笠を冠つて居ました。…端折つた片褄の友染が藁の裙に優くこぼれる、稲束の根に嫁菜が咲いたと言つた形、ふつさりと銀杏返が、耳元へばらりと亂れて、道具は少し大うがすが、背がすらりとして居るから、其の眉毛の濃いのも、よく釣合つて、抜けるほど色が白い。些と大柄てはありますが、如何にも躰つきの嫋娜

な婦で、

「今晩は。」

と、通掛りに、めし屋へ聲を掛けて行きました。が、瀲と燃えて居る松明の火で、をくれ毛へ、恁う、雪の散るのが白い其の頬を、殺ぐやうで、鮮麗に見えて、いたく\しい。

いたく\しいと言へば、其がね、素足に上草履、あの、旅店で廊下を穿かせる赤い端緒の立つた奴で――しつとりと些と沈んだくらゐ落着いた婦なんだが、實際其の、心も空に成るほど、氣の揉めるわけがあつて、…思掛けず降出した雪に、足駄でなし、草鞋でなし、中ぶらりに右のつゝかけ穿で、ストンと落ちるやうに旅館から、上草履で出たと見えます…其の癖、一生の晴着と言ふので、母さん譲りの裙模様、紋着などを着て居ました。

お話をしますうちに、仔細は追々おわかりに成りますが、―此が何でさ、双葉屋と言つて、土地での、先づ一等旅館の女中で、お道さんと言ふ別嬪、以前で申せば湯女なんだ。

いや、湯女に見惚れて居て、肝心の御婦人が後れました。最一人の方は、山茶花と小菊の花の飛模様のコートを着て、白地の手拭を吹流しの…妙な誂だと思へば…道理こそ、降かゝる雪を厭つたも、お前さん、いま結立てと見える高島田の水の滴りさうなのに、對に照つた鼈甲の花笄花櫛、―此の拵ぢやあ、白襟に相違ねえ。お化粧も濃く、紅もさしたが、何故か、顔の色が透き通りさうに血が澄んで、品のいいのが寂しく見えます。華奢な事は、吹つけるほどではなくても、雪を持つた向風にや、傘も洋傘も持切れますめえ、被りもしないで、湯女と同じ竹の子笠を胸へ取つて、襟を伏せて、俯向いて行きます…袖の下には、お位牌を抱いて、葬禮の施主に立つたやうで…恁う正しく端然とした處は、視る目に、神々しうございます、何となく容子が四邊を沈めて、陰氣だけれど、氣高いんでございますよ。

同じ人間もな…鑄掛屋を一人土間で飲らして、納戸の炬燵に潜込むだ、一ぜん飯の婆々媽々などゝ言ふ徒は、お道さんの「今晩は。」に、唯「ふわ、」と言つた切だ。顔も出さねえ。其の「ふわ、」がね、何の事アねえ、鼠の穴から古

綿が千断れて出たやうだ。」

「些と耳が疼いだな、」

と饂飩屋の女房が口を入れた。—女房は鋳掛屋の話に引かれて、二階の座に加はつて居たのである。

「其のかはり大まかなものだよ、店の客人が、飲さしの二合壜と、最う一本、棚から引攫つて、此奴を、丼へ突込むで、少時して、婦人たちのあとを追つて、ぶらりと出て行くのに、何とも言はねえ。山は深い、旦那方の、おつしやる、それ何とかつて、山中暦日なしぢやあねえ、狼温泉なんさ、いつもお正月で、人間がめでてえね。」

「はゝあ。」

「成程。」

私たちは、そんな事は徒に聞いて、さきを急いだ。

「椅は何うしたよ。」

と女房が笑つて言つた。

「ほい忘れた、いや、忘れたんちやあねえ、一ぜん飯に置放しよ。」

「それ見たか、あんな三味線だつて、壜詰二升ぐらゐな値はあるでござんさあ、なあ、旦那方。」

「うむ、眞個な。」

と藤助は額を壓へて。

「おめでゝえのは此方だつけ、はツはツはツ。」

四

「さて、旦那方、洒落や串戯ちやあねえんでございます・・御覧の通り人間の中の變な章のやうな、こん野郎なにも、不

思議なまはり合せで、其の婦たちのあとを尾けて行かなけりや成らねえ一役ついて居たのでございましてね、…乘掛った船だ、鬱陶しくもお聞きなせえ。

「すつとこ被りで、」

襟を敲いて、

「どんつくで出ましたわ。…見えがくれに行く段取だから、急ぐにや當らねえ。別して先方は足弱だ。はてな、此處等に色鳥の小鳥の空蟬、鴛鴦の亡體と言ふのが有つたつけと、酒の勢、雪なんざ苦に成らねえが、赤い鼻尖を、頰被から突出して、へつぴり腰で嗅ぐ工合は、夜興引の爺が穴一のばら錢を探すやうだ、餘計な事でございますがね、ー性が知れちや居ましても、何だか、婦の二人の姿が、鴛鴦の魂がスツと拔出したやうでなりませんや、此の邊だつけと、今度は、雪まじりに鳥の羽より燒屑が堆い處を見着けて、お手向にね、壜の口からお酒を一雫と思ひましたが、待てよと私あ考えた、正覺坊ぢやあゝるめえし、鴛鴦が酒を飮むやら、飮ねえやら。一層の事だと、手前の口へね、喇叭と遣つた、…恁うすりや鳥の精がめしあがるも同じ事だと、何しろ腹ン中は鴛鴦で一杯でございました。

女房が肥つた膝で、疊に當つて、

「藤助さんよ。」

「あゝ。」

「酒の話ぢやあないぢやあないかね、ねえ、旦那方。」

「何しろ、其處で。」

と、促せば、

「と二人は最う雜木林の崖に添つて、上りを山路に懸つてゐます。白い中をふつ〳〵と、眞紅な鳥のたつやうに、向ふへ行く。…一軒、家だか、穴だか知れねえ、穢多、非人の住んで居さうな、引傾いた小屋に、莚を二枚、ぶら下げ

て、此奴が戸に成る…横の羽目に、半分ちぎれた浪花節の比羅がめら〳〵と動いて居るのがありました、其が宿はづれで最う山に成ります、峠を越すまで、當分のうち家らしいものはございませんや。

水の音が聞こえます、ちよろ〳〵水が青いやうに冷く走る、山清水の小流のへりについて、あとを慕ひながらいゝ程合で、透かして見ると、坂も大分急に成つた石礫道で、誰がどつちの解いたか、扱帯をな、一條、湯女の手から後に取つて、其を其の少い貴婦人てつた髙島田のが、片手に控へて縋つて居ます。—最う笠ははづして脊へ掛けて。…紋の紅いのがね、松明が揺れる度に、雪に薄紫に颯と冴えながら、螺線の道條に、恁う畝ると、其の毎に、崖の緋葉がちら〳〵と映りました、夢のやうだ。

視る奴の方が夢のやうだから、御當人たちは現かも知れねえ。

で、其の二人は、然うやつて、雪の夜道を山坂かけて、何處へ行くんだと思召す。

此處だて、—旦那、」

藤助は息繼に呷と煽つて、

「此の二階から、鏡臺山を—(少し薄明りが映しますぜ、月が出ませう、まあ、御緩りなさいやし、)—それ、恁うやつて視るやうに、狼温泉の宿はづれの坂から横正面と言つた、肩で恁う捻向いて、高く上を視る處に、耳はねえが、あのトランプのハート形に頭を押立つた梟獄。梟、梟と一口に稱へて、何獄と言うほどぢやあねえが、岳が一座。其の頂邊に、天狗の撞木杖と言つた形に見える、柱が一本。—風の吹きはしで、松明の尖がぼつと伸びると、白く成つて顯れる時は、耶蘇の看板の十字架てつた奴にも似て居る。…こりや、もし、電信柱で。

蔭に隱れて見えねえけれど、其處一張天幕があります。何だと言ふと、火事で焼けたがために、假ごしらへの電信局で、温泉場から、其處へ出張つて居るのでございます。

其處へ行くんだね、婦人二人は。

で、其の郵便局の天幕の裡に、此の湯女の別嬪が、生命がけ二年越に思詰めて居る技手の先生と…最う一人は上州高崎の大資産家の若旦那で、此の高島田のお嬢さんの婿さんと、其の二人が、いはれあつて、二人を待つて、對の手戟の石突をつかないばかり、洋服を着た、毘沙門天、増長天と言ふ形で、五躰を締めて、殺氣を含むで、呼吸を詰めて、待構へて居るんでがしてな。

お嬢さんの方は、名を縫子さんと言ふんで、申さずとも娘ッ子ぢやありません、こりや御新姐…ぢやあねえね―若奥様。」

五

峯の白雪麓の氷、
今は互に隔てゝ居れど、
やがて嬉しく溶けて流れて、
　合ふのぢやわいな。…

「私は日暮前に、其の天幕張の郵便局の前を通つて來たでございますよ。…狼の溫泉へ入込みます途中でな、…晩に雪が來やうなどとは思ひも着かねえ、小春日和と言つた、ぽか／＼とした好い天氣で。…

最も、甲州から木曾街道、信州路を掛けちやあ、麓の岐路を、天秤で、てく／＼で、路傍の木の葉がね、あれ性のいゝ女の、ぽうと成つて、少し唇が乾いたと言ふ容子で、へりを白くして、日向にほか／＼して居て、草も乾燥いで、足のうらが擽え、と言つた陽氣で居ながら、槍、穗高、大天井、やけに燒ケ嶽などと言ふ、大薩摩でもの凄いのが、雲の上に重つて、天に、大波を立てゝ居る。…裏の峯が、忽ち颯と暗く成つて、雲が被つたと思ふと、箕で煽るやうに前の峯へ霰を立てゝあびせ掛ると、浴びせて置いて晴れると思へば、其の裏の峯が披ち晴れる處から、ひだを取つて白く成ります、

見る／＼うちに雪が掛るんでございましてね。左右の山は、紅く成つたり、黃色かつたり、醉つたり、醒めたりして、移つて來る其のむら雲を待つて居る、：

と言つた次第で、雪の神樣が、黑雲の中を、大な袖を開いて、虛空を飛行なさる姿が、遠くの其の日向の路に、螽斯ほどの小さな旅のものに、あり／＼と拜まれます。

だから、日向で汗ばむくらゐだと言つた處で、雜樹一株隔てた中には、草の枯れたのを、日が映すかと見れば、何、瑠璃色に小さく凝つた龍膽が、日中も冷い白い霜を嚙んで居ます。

が、陽の赤い、其時梟ケ嶽は、猫が日向ぼつこをしたやうな形で、例の、草鞋も脚絆も滲え。：：滿山のもみぢの中に、もくりと一つ、道も白く乾いて、枯草がほか／＼する。：芳い落葉の香のする日の影をまともに吸つて、くしやみが出さうなのを獅嚙面で、

「鑄掛：：錠前の直し。」

すくつと立つた電信柱に添つて、片枝折れた松が一株、崖へのしかゝつて立つて居ます、天幕張だらうが、堀立小屋だらうが、人さへ住んで居れば家業冥利：

「鑄掛：：錠前の直し。」―

と、天幕と其松のあります、一寸小高く成つた築山てつた下を―溫泉場の屋根を、黑く小さく下に見て通りがかりに、ちろり：：」

藤助は、ぎよろりとしながら、頰邊を平手で拊いて、

「此の人相だ、お前さん、ちろりとよりか言ひやうはねえてね、ト行つた時、はじめて見たのが湯女の其の別嬪だ、

「お道さんは、半襟の掛つた縞の着ものに、前垂掛、晝夜帶、若い世話女房と言つた形で、其の髮のいゝ、垢拔のした白い顏を、神妙に俯向いて、粗末な椅子に掛けて、卓子に凭掛つて、足袋を繕つて居ましたよ、紺足袋を：

「鋳掛……錠前の直し。」―

一寸顔を上げて見ましたつけ。すぐじつと足袋を刺すだて。動いたゞけに倚ほ活きて、光澤を持つた、きめの細な襟脚の好さなんと言つちやねえ。……通り切れるもんぢやあねえてね、お前さん、雲だか、風だか、ふら〳〵と野道山道宿なしの身のほまちだ。

一言ぐれゑ口を利いて、澁茶の一杯も、あのお手からと思ひましたがね、ぎよつとしたのは半分焦げたなりで天幕の端に眞直に立つた看板だ。電信局としてある……

茶店小屋、出茶屋の姉さんぢやあねえ、風俗は此の目で確に睨んだが……おや〳〵、お役人の奥樣かい。―郵便局員の御夫人かな。

此が旦那方だと仔細ねえ。湯茶の無心も雜さはねえ、西行法師なら歌をよみかける處だが、山家めぐりの鋳掛屋ぢやあ道を聞くのも跋が變だ。

處で、椅子はまだ二三脚、何だか、此方人等にや分らねえが、ぴか〳〵器械を据附けた卓子が最う一臺。向つてきちんと椅子が置いてあるが、役人らしいのは影も見えねえ。

はゝあ、來る道で、向の小山の土手腹に傳はつた、電信の綱線の下あたりを、木の葉の中に現はれて、茶色の洋服で棒のやうなものを持つて、毛虫が動くやうに小さく歩行いて居る形を視た―鐵砲打の鳥おどしかと思つたが、大きにそんなのが局員の先生で、此の姉さんの旦那かも知れねえよ。

が何しろ留守だ。

「鋳掛…錠前の直し。」―

と崖ぶちの日向に立つたが、紺足袋の結ひ。……雪の襟脚、白い手だ。悚然とするほど身に沁みて、なりませんや。

遥に見える、高山の、かげつて桔梗色したのが、すつと雪を被いで居るにつけても、で、其處へ先づ荷をおろしました。

「や、えいとこさ。」と、草鞋の裏が空へ翻るまで、山端へどつしりと、暖い木の葉に腰を落した。

間拍子も機かけは渡られねえから、ソレ向の嶽の雪を視ながら、

「あゝ、降つたるも雪かな。」

とか何とか、うろ覺えの獨言を言つてね、お前さん、……

「それ、雪は鵝毛に似て飛で散亂し、人は鶴裘を着て立つて徘徊すと言へり……か。」

なんのツて、ひら／＼と來る紅色の葉から、すぐに吸ひつけるやうに煙草を吹かした。が、何分にも鑄掛屋ちやあ納りませんな。

處でさて、首に卷いた手拭を取つて、拂いて、馬士にも衣裳だ。芳原かぶりと氣取りましたさ、古三味線を、チンとかツンとか引掻鳴らして、此處で、內證で唄つた奴でさ。

　峯の白雪、麓の氷——

旦那、鋼を見つこなし……極が惡い、……何と、もし、これで別嬪の姉さんを引寄せやうと言ふ腹だ、をかしな腹だ、狸の腹だね。

だが、此奴あ此方人等徒の、即ち狸の腹鼓と言ふ甘術でね。不氣味でも、氣障でも、何でも、聞く耳を立てるうちにうか／＼と釣出されずにや居ねえんだね、何うですえ、—それ、來ました。」

と不意に振向く。階子段の暗い穴。

小村さんも私も悚然とした。

女房は肯の事……

「あれ、吃驚した。」

と膝で摺寄る。……

[illegible]助は一笑して、
「先づは、此の寸法でございましてね。お道さんを引寄せた工合を云ふのがあはサはッ。」

六

「見ない振、知らない振、雪の遠山に向いて、―溶けて流れてと、唄つて居ながら、後方へ來るのが自然と分るね、跫の寄るのとは違ひます。…別嬪の香がほんのりで、裸緻に打たれて身に沁む工合が、温泉の女神様が世話に碎けて顯はれたやうでございましたぜ。―逢ひたさに見たさに何とか行つて、チャンと句切ると、
「鋳掛屋さん。」
と、初音だね。…
覩ると、朱塗の盆に、吸子、茶碗を添へて持つて居る。黒繻子の引掛帶で、淺黄の襟の其の様子が何とも言えねえ。いえ、最一つ、盆の上に、紙に包んだ蝶々と言ふのが戯つて居ました。―其がために讃めるんちあねえけれど、拵えねえで、なまめいたもんでしたぜ。人を喰つた此方の芳原かぶりなんさ、もの欲さうで極りが悪くなつたくらゐで。
「へい、へい、へい、こりや奥様、恐入りました。」
と故とらしくも、茶碗をな、兩手で頂かずにや居られなかつた。
姉さんが、初々しい、しほらしい事を、お聞きなせえ、ぽーつと成つて、
「まあ、あんな事、私は奉公人なんですよ。」
さ、其の奉公人風情が、生意氣のやうだけれど、唄をもう一つ唄つて聞かしてもらへまいか、と言ふんぢやありませんかい。お誂が註文にはまつた。こんな處でよろしければ、山で樹の數、幾つだつて構やあしませんと、…今度は浮世はなれて奥山ずまゐ、戀もりん氣も忘れて居たが、…で、御機嫌を取結ぶと、それよりか、矢張り、先の、やかけ嬉し

く溶けて流れて合ふのぢやわいなの方を聞かして欲いと、山姫様、御意遊ばす。」
藤助は杯で一寸句切つて、眉も口も引緊つた。
「旦那方の前でございますがね、恁う中腰に、占加減の好い帯腰で、下に居て、白い細い指の先を、染めた草につくやうして熟と聞く。……聞手が、聞手だ。唄う方も身につまされて、此でもお前さん、人間交際もすりや、女出入も知らねえぢやあねえ。少い時を思出して、何となく、我身ながら引入れられて、……覚えて、つひぞねえ、一生に一度だ。較べものにやあ成りませんが、むかし琵琶法師の名誉なのが、こんな處で草枕、山の神様に一曲奏でた心持。
と姉さんが、とけて流れて合ふのぢやわいなと、きゝ入りながら、睫毛を長くうつむいて、ほろりとした時、此方も思はず、つひ、ほろり……いえさ、此の面だからポタリと出ました。」
と口では言ひつゝ聲が濕つた。
「つかん事を伺きますけれど、鋳掛屋さん、錠の合鍵を頼まれて下さいますか」……と姉さんがね。
私あ此を聞いて、ポンと両手を拍つた。
此のくらゐつく事は、私の唄が三味線につくやうなもんぢやあねえ。
「鍵が狂つたんでございますかい。」
「いゝえ、ないんですけれど。」
「雑さはがあせん、煙草三服飲む間だ。」
其處で錠前を見て、と言ふ事に成ると、些と内證事らしい。……しとやかな姉さんが、急に何だか、そはついて、彼方此方眴しましたが、高い處に恁う立つと、風が攫つて、すつと、雲の上へ持つて行きさうで危かしいやうに見えます。
勿論人影は、ぽつゝりともない。
が、其でも、天守の正面からぢやあ、氣咎めがしたと見えて、

「濟みませんが、此方から。」

裏へ廻はると、錠びた處があるので。‥姉さんは科よく消えたが、此方は自雷也の妖術に、アリヤ／＼だね。列子と言ふ身で這込みました。が、それ處ぢやあねえ、此の錠前だと言ふのを一見に及ぶと、片隅に立掛けた奴だが、大蝦蟆の干物とも、河馬の木乃伊とも譬へやうのねえ、皺びて突張つて、兀斑の、大古物の大かい革鞄で。

此奴を、古新聞で包んで、薄汚れた兵子帯でぐる／＼と卷いてあるんだが、結びめは、はづれて緩んで、新聞もばさりと裂けた。其處からそれ、煤を噴きさうな面を出して、蘆の髄から谷覗くと、鍵の穴を眞黑に窪まして居るぢやあゝりませんか。

「何が入つて居りますえ。」

失禮な‥‥人樣の革鞄を‥だが、私あつひ、うつかり言つた。

「あの、旦那さんのお大事なものばかり。‥」

「へい、貴女の旦那樣の？」

「いゝえ、技師の先生の方ですが、其の方のお大事なものが殘らず、お國でおかくれに成りました奥樣のお骨も唯たお一人ツ子の、かけがへのない坊ちやまのお骨も、此の中に入つて入らつしやるんですつて。」

と、恁う言ふんでね。」

小村さんと私は、默つて氣を引いて瞳を合はした。

藤助は一息ついて、

「其を聞いて、安心をしたくらゐだ。技師の旦那の奥樣と坊ちやまのお骨と聞いて、安心したも、をかしなものでございますがね、一軒家の化葛籠だ。天幕の中の大革鞄ぢやあ、中に何が入つてるか薄氣味が惡かつたんで。

「へい、其の雛をおなくしなすつた‥其奴はお困りで、」

と錠前の寸法を當りながら、恁う見ますとね、新聞のまだ殘つた處に、青錆（あをさび）にさびた金具の口でくひしめた革鞄の中から、紫の袖が一枚。…

袂が中に、袖口をすんなり、白羽二重の裏が生々と女の膚を包んだやうで、被た人がらも思はれる、裏が通つて、揚羽の蝶の袖の紋がちら／＼と羽を動かすやうに見えました。」

小村さんと私とは、じつと見合つて居たまゝの互の唇がぶる／＼と震へたのである。

七

―實は此の時から數へて前々年の秋、おなじ小村さんと、(連が最う一人あつた。)三人連で、輕井澤碓氷のもみぢを見た汽車の中に、まさしく間違ふまい、此に就いた事實があつて、私は、不束ながら、はじめ、淑女畫報に、怪しき革鞄、後に、片袖、と改題して、小集の中に編んだ一篇を草した事がある…

確に紫の袖の紋も、揚羽の蝶と覺えて居る。高島田に花笄の、盛裝した嫁入姿の窈窕たる淑女が、其の嫁御寮に似もつかぬ、卑しげな慳のある女親まじりに、七八人の附添とゝもに、深谷驛から同じ室に乘組んで、御寮は丁ど私たちと眞向ふの席に就いた。將に嫁がんとする娘の、嬉しさと、恥らひと、心遣と、恐怖と、笑と、涙とは、其のまゝ膝に手を重ねて、つむりを重たげに、たゞ肩を細く、さしうつむいた黒髪に包んで、顏も上げない、まことにしとやかな佳人であつた。

此の片袖が、隣席にさし置かれた、他の大革鞄の口に挾まつたのである。… 失禮ながら、其の革鞄は、こゝに某助が[illegible]ふるのと、略太差のないものであつた。

が、持ぬしは、意氣沈んで、髯、髮もふしやうにのび、面も憔悴はして居たが、素純にして、然も謹嚴なる人物であつた。

汽車の進行中に、此の出來事が發見された時、附添の騷ぎ方は：：無理もないが、思はぬ麁相であらう。失策した人物に對して、傍の見る目は寧しろ氣の毒なほどであつた。

一も二もない、したゝかに佗びて、其の革鞄の口を開くので、事は決着するに相違あるまい。

我も人も、しかあるべく信じた。

然るにもかゝはらず、其の人物は、人々が騷いで掛けた革鞄の手の中から、すかりと握拳の手を拔くと齊しく、列車の中へすつくと立つて、日に燒けた面は瓦の黃昏るゝ如く色を變へながら、決然たる態度で、同室の御婦人、紳士の方々と室内に向つて、掠聲して言つた。：：此なる、窈窕たる淑女（ー私もこゝに其の人物の言つた言を、其のまゝ引用したのであるがー）窈窕たる淑女のはれ着の袖を狼したのは偶然の麁匆である。はじめは旅行案内を摑出してそれを投込むで錠を下ろした時に、うつかり狹んだものと思はれる。が、それを心着いた時はーと云つて垂々と額に流るゝ汗を拭つてー、唯一瞬間に千萬無量、萬怯の煩腦を起した。如何に思ひ、如何に想つても、此の窈窕たる淑女は正しく他に嫁せらるゝのである：ばかりでない、次か、或は其の次の停車場にて下車なさるゝとともに、忽ち夫人と成らるゝ、其の片袖である。自分は生命を掛けて戀した、生命を掛くるのみか、罪はまさに死である、死すとも此の革鞄の片袖は敢て離すまいと思ふ。思切つて鍵を棄てました。私は此の窓から、遙に北の天に、雪を銀個の如く刺繡した、あの連山の頂を望んで、殆ど無邊際に投げたのです、と言つた。

ー滊車は赤城山を其の巽の窓に望むで、廣漠たる原野の末を貫いて居たのであつた。ー

渠は電信技師である。立野龍三郎と自から名告つた。渠は固より兩親も何もない、最愛の兒を失ひ、最愛の妻を失つて、世を果敢むの餘り、其の妻と子の白骨とともに、失ふべからざるものゝ一式、餘さず此の古革鞄に納めた、寧ろ我が孤の瑩然たる影をも納めて、野に山に棄つるが如く、絕所、僻境を好んで飛驒山中の電信局へ唯今赴任する途中である。

已に我身ながら葬去つた身は、こゝに片袖とゝもに蘇生つた。蘇生ると同時に、罪は死である、否、死は尙ほ容易い。：：

天の咎、地の責、人の制規、如何なる制裁と雖も、甘んじて覺悟して相受ける。各位が、我がために刑を撰んで、其の最も酷なのは、磔でない、獄門でない、牛裂の極刑でもない。此の片袖を挾んだ古革鞄を自分にぶら下げさせて、嫁御寮のあとに犬の如く從はせて、其のまゝ今日の婿君の脚下に拜し跪かせらるゝ事である。諸その戲罰を蒙りませう。斷じて自分は此の革鞄を開いて片袖は返さぬのである。唯、天地神明に誓ふのは　貴女の淑德と貞潔である。自分は生れてより今に及んで、其の姿を視たのは僅に今より前、約三十分に過ぎない、…包ましくさしうつむかれた淑女は、申すまでもなく、自分に向つて瞳をも動かされなかつた事を保證する―謹んで斷罪を待ちます…各位。

吶々として、然も沈着に、純眞に、諄々此の意味の數千言を語つたのが、轟々たる汽車の中に、恰も雷鳴を凌ぐ、深刻なる獨白の如く私たちの耳に響いた。

附添の數の男女は、或は怒り、或は罵り、或は呆れ、或は呪詛つた。が、狼狽したのは一樣である。車外には御寮を迎の人數が滿ちて、汽車は高崎に留まらうしたのであるから…

既に死灰の如く席に復して瞑目した技師が其の時再び立つた。こゝに手段があります、天が命ずるにあらず、地が敎うるにあらず、人の知れるにあらず、唯何ものゝ考慮とも分らない手段である…即ち小刀を以て革鞄を切開く事なのです…私は拒みません。刄ものは持合はせました、と云つて、鞘をパチンと拔いて渡したのを、あせつて震へる手に取つて、慳相な女親が革鞄の口を切裂かうとして、屹と猜疑の瞳を技師に向くると同時に、大革鞄を、革鞄のまゝ提げて、其のまゝ下車しやうとした時であつた。

「否―」

と一言、其の窈窕たる淑女は、袖つけを犇と取つて、びり〳〵と引切つた。緋の長襦袢が燃と燃える、片身を火に鎧いたやうに衝と汽車を出た其の姿は、却つて雪の滴る如く、おめき集ふ群集は黑煙に似たのである。

技師は眞俯向けに革鞄の紫の袖に伏した。

乘合は喝采した。萬歳の聲が哄と起つた。

汽車の進むがまゝに、私たちは窓から視た。人數に抱上げらるゝやうに成つて、やゝ亂れた黑髮に、雪なす小手を翳して此方を見送つた半身の紅は、美しき血を以て描いたる煉獄の女精であつた。

碓氷の秋は寒かつた。

八

籐助は語繼いだ。—

「姉さんが、然うすると…驚いたやうに、

「あれ、其を見ちや不可ません。」

「やあ、つひ麁匆を。」

と、何事も御意のまゝ、頭をすくめて恐縮をしますとね、低聲に成つて氣の毒さうに、

「でも、あの、然う云ふ私が、密と出して、見たいんでございます。」

「其處で鍵が御入用。」

「えゝ、ですけど、人樣のものを、お許しも受けないで、內證で、見ては惡うございませうねえ。」

「何、開けたら又閉めて置きあ、何でもありやしませんや。」

と共の容子だもの、お前さん、何だつて構やしません。—お手輕樣に言つて退けると、口に袖をあてながらうつかり釣込まれたやうな樣子でね、また前後を視ましたつけ。

「では、一寸今のうち…鑄掛屋さん、あなたお職柄で鍵を拵えるより前に、手で開けるわけには參りませんの。」

ぶる／＼ぶる、私あ、頭と嘴を一所に振つた。旦那の前だが、…指を曲げて、口を押へて、瞼へ指の環を當がつて、

もう一度頭を掉つた。それ、鍵の手は、內證で遣つても、忽ちお目玉。…不可えてんだ、お前さん。

「御法度だ。」

と重く持たせて、

「ではござれども、姉さんの事だ、遣らかしやせう、大達引。奥様のお紀念だか、何だか知らねえ、成程此奴あ、此のな、へつへつ、誰方かに向つての姉さんの心意氣では…お邪魔に成るでございませうよ。奥歯にものが狭まつたつて譬は此だ。すつぱり、打開けてお出しなせえまし。」

「いえ、あの、開けて出すよりか、私が中へ入りたい。」

と仇氣なく莞爾すら、チエーしたもんだ。

「御串戯で、中へ入ると、恐怖え、其の亡くなつた奥さんの骨があるんぢやありませんかい。」

「もう、私は、あの、奥さまの、其の骨に成りたいの。」

あゝ、其の骨に成りたいか、いや、其の骨で此方は海月だ、ぐにやりと成つた。

「御勝手だ。」

「あれ、そのかはりに奥さまが、活きた私にお成んなさる、容色は、たとへこんなでも。」

「御勝手だ、いや、御法度だね。」

「そんな事を言はないで、後生ですから、錺掛屋さん。」

「開けますよ。だがね…」

と、一つ勿體で、

「此奴あ口傳だ、見ちや不可え、目を瞑つて居ておくんない。」

「はい。」

「最つと。」

「はい。」

「不可え〳〵、薄目を開けてら。」

「まあ、では後を向きますわ。」

「引しまつて、ふつくりと柔かで、あゝ、堪らねえ腰附だ。」

「可厭……知りませんよ。」

と向直ると、串戯の中にしんみりと、

「あれ、一寸待つて下さいまし。いま目をふさいで考えますと、お許がないのに錠前を開けるのは、何うも心が済みません。神様、佛様に誓文して、悪い心でなくつても、よくない事だと存じます。」

私も眞面目にうなづきました。

「でも、合鍵は拵えて下さいまし、大事にそれを持つて居て、……出來るだけ我慢はしますけれども、何うしても開けたくつてならなくなりました時に、生命にかへても、開けて見たうございますから。」—

晩の泊は何處だつて聞きますから、向ふの峯の日脚を仰向いて、下の温泉だと言ひますとね、双葉屋の女中だ、とこゝで姉さんが名を言つて、お世話しませうと、きらい發奮さ。

御旅館などは勿體ねゝ、此方人等式がと不貨がると、今頃はからあきで、人氣がなくつて寂いくらゐ—でも、お一方……一昨日から、上州高崎の方ださうだけれど、東京にも少なからう、品のいゝ美い、お嬢さんだか、夫人だか、少い方がお一方……」

「お一方？」

と、うつかり訊いて私は膝を堅うした。—小村さんも同じ思ひは疑ひない。—あの時、其の窈窕たる御寮が、汽車を変

てたのは彼處であつた。

「然やうで。―お一方御逗留、おさみしさうな其の方にも、いまの立山が聞かせたいと、何となく其のお一方が。以ての外氣に成るやうで、妙に眉のあたりを暗くしましたつけ、熱と日のかげる山を視めたが、

「あゝ。鋳掛屋さん。」

と慌しい。皆まで聞かずと飲込むだ、旦那様歸り引と…こゝらは鵜だてね、天幕の蓬月をひよこりと出た。もとの山端へ引退り、然らば一服仕らう…つぎ道の茶の中には、松の落葉と、朱葉が一枚。…」

「あゝ、腹が減つた…」

と色氣のない聲を出して、どかりと倚子に掛けたのは、焦茶色の洋服で、身の緊つた、骨格のいゝ中古の軍人と云つた技師の先生だ。」

―言ふまでもなく、立野龍三郎は渠である―「減つた、減つた、無茶に減つた。」

と、いきなり卓子の上の風呂敷包みを解くと、中が古風にも竹の子辨當。…御存じはございますまい、三組の食籠で、疊むと入子に重る奴でね。案ずるまでもありませんや、お道姉さんが心入のお手料理か何かを、旅館からかう運ぶんだね。

「うまい、あゝ旨い。此の竹輪は骨がなくて難有い。」

餘り旨さうなので、此方は里心が着きました。饂場々々で飲酒りますから、滅多に持出した事のない仕込の片餉、油揚の黄深に澤庵と言ふのを、もく〳〵と頬張りはじめた。

お道さんが手拭を疊んで一寸帯に挾んだ茶汲女と言ふ姿で、湯呑を片手に、半身で立つて私の方を視ましたがね。

「旦那様…あの、鑄掛屋さんが。お辨當を使ひますので、お茶を御馳走いたしました。…お盆がなくて手で失禮でございます。」

と湯氣の上る處を、卓子の上へ置くんでございますがね、加賀の赤繪の金々たるものなれども、ねえ、湯呑は嬉い心意氣だ。

「何、鑄掛屋。」

と、何だか、氣を打つやうに言つて。先生、偏平い肩で捻ぢて、私の方を覗きましたが、

「やあ、御馳走はありますか。」

とかすれ笑をしなさるんだ。

「へつ、へつ。」と、先はお役人様でがさ、お世辭笑をしたばかりで、此方も肩で捻向く面だ。道陸神の首を着換へたと言ふ形だてね。

「旨い。」

姉さんが嬉しさうな顏をしながら、

「あの、電信の故障は、直りましてございますか。」

「うむ、取拂つたよ。」

と頰張つた含聲で、

「思つたより餘程さきだつた。」

はゝあ、電線に故障があつて、障るものゝ見當が着いた處から、先生、山めぐりで見廻つたんだ。道理こそ、いまし方天幕へ戻つて來た時に、段々塗の旗竿を、北極探檢の浦島と云つた形で持つて居て、かたりと立掛て入んなすつた。

「何うかなつて居ましたの。」

「變なもの、…何、くだらないものが、線の途中に引掛つて…」
カラリと箸を投げる音が響いた。
「うむ、來た。―トーン―トーン―…、可。」
お道さんの聲で、
「旦那樣、何ぞ御心配な事ではございませんか。」
一口がぶりと茶を飲んで、
「詰らぬ事を…他所へ來た電報に、一々氣を揉んで居て堪るもんですか。」
「でも、前刻、此の電信が參りました時、何ですか、お顔の色が、…」
「…故障のためですよ、靑天井の煤はきは下さりませんからな、は、は。」
と笑つた、
坂をする〳〵と這上る、蝙蝠か熊のやうなのが、衝と近く來ると、海軍帽を被つたが、形は郵便の配達夫―高等二年ぐらいな可愛い顏の少年が、丁と恭く禮をした。
「あゝ、丁どいま繋つた。」
「何うした故障でございますか。」
と切口上で、然も心配をしたらしい、たのもしいぢやあございませんか。
「網掛場の先の處だ。烏を蛇が捲いたなりで、電線に引掛つて死で居たんだよ。烏が引啣えて飛ばうとしたんだらう。…可なり大な重い蛇だから、飛切れないで鋼線に留つた處を、電流で殺されたんだ。ぶら下つた奴は、下から波を打つて鎌首をもたげたなりに、黒焦げに成つて居た――君、急いでくれ給へ、約四時間延着だ。」
「はつ。」

と云つて行くのを、
「あゝ、時さん。」
とお道さんは沈んで呼んだが、寂い笑顔を向け直して、
「配達さん――何處へ……」と訊いた。
少年が正しく立停まつて、疊んだ用紙を眞すぐに視て、
「狼温泉――双葉館方……村上縫子……」
「そして執方から。」
「ヤホ次郎。――行つて來ます。」
「そんな事を聞くもんぢやあない。」
「あゝ、濟みませんでした。」
「何、構はないやうなもんぢやあるがね、――どつこいしよ。」
がたがたんと音がする。先生、もう一つの卓子を引立つて、猪と取組むやうに勢よく持つて出ると、お道さんはわけも知らないうちに、椅子を取つて手傳ひながら、
「何う遊ばすの。」
と云ふうちに、一段下りた草原場へ据えたんでございますがね、――わけも知らずに手傳つた、お道さんの心持を、あとで思ふと涙が出ます。」
と肩もげつそりと、藤助は沈んで言つた。……
「で、何でございますよ――何う遊ばすのかとお道さんが言ふと、心待、此の日暮には此處に客があるかも知れんと、先生が言ひますわ。あれ、それぢやこんな野天でなく、と、言はうちやあございませんか、

「いや、中で間違があると成らんので。」

「え、間違とおつしやつて。」

とお道さんが、ひつたり寄つた。

「私は、」

と先生、髭で口の端を横撫して、

「話もまづいが言ふ事がまづくて不可んです。間違ちやあない、故障です。素人は氣なしだからして、あんな挾い天幕の中で、器械にでも障つて又故障にでも成ると不可んのだ。決して心配な事ではないのです。—さあ、飯だ、飯だ。」

と今度は何故か、箸を着けずに辨當をしまひかけて、…親方の手前もある、客に電報が來た樣子では、また村女の手も要るだらう、餘り遲く成らないうちにと、懇に言ふと、

「はい、はい。」

と柔順に返事する、片手間に、繼掛けの紺足袋と、寢衣に重ねる浴衣のやうな洗濯ものを一包、辨當をぶら下げて、素足に藁草履、こゝらは山家で—悄々と天幕を出た姿に、最う山の影が薄暗く隈を取つて映りました。

「今、何時だらう。」

と天幕口へ出て、先生が後姿を呼びましたね。

「…四時半頃にも成りませうか。」

「時計が留つたよ—氣をつけておいで。」

と大な懷中時計と、旗竿の影を、すつくり立つて、片頰に夕日を浴びながら、熟と落着いて視めて居なさる。…落着いて視ちやあ居なすたが、先生少々何うかなさりやしねえのかと思つたのは、恁う變に山が寂く成つて、通魔でもしさうな、靜寂の鐘の唄の塩梅、何處となくドーンと響く、天狗倒の木精と一所に、天幕の中ちやあ、旬の掛時計がコトリ

〳〵と鳴りましたよ。

お地藏樣が一體、もし、此の梟ケ嶽の頭を肩へ下り口に立つてござる。—私どもは何うかすると、一日の中にや人間の數より多くお目に掛る、至極可懷いお方だが…後で分りました、此の岳は、むかし、小さな山寺があつたあとださうで。然う言や草の中に、崩れた石の段々が、蔦と一所に、眞下の徑へ、山懷へまとつて居ます。其の下の徑と云ふのが、温泉宿入りの本街道だね。

お道さんが、皈りがけに、其の地藏樣を拜みました。石の袈裟の落葉を拂つて、白い手を、じつと合せて、しばらくして、

「また、お目にかゝります。」

と顏を上げて、

「後程に—」

最う先生は天幕へ入つた—で、私に沁々とした調子で云つた時の面影が忘れられねえ。…睫毛にためて、涙が一杯。…

風が冷く、山はこれから濕ぽい。

秋の日は釣瓶落しだ、お前さん、もうやがて初冬とは言ひ條、別して山家だ。靜に大沼の眞中へ、石を投げたやうに山際へ日暮の波が輪に成つて颯と廣がる中で、此の藤助と云ふ奴が、何をしたと思召す。

三尺をしめ直す、脚絆の埃を拂いたり、荷づなを天秤に掛けたり、はづしたり。…三味線の糸をゆるめたり、袋に入れたり、…さて又袋を結んだり。

其處へ、…いまお道さんが下りました、草にきれ〳〵の石段を、攀ぢ〳〵、づつと上つて來た、一個、年紀の少い紳士(しんし)があります。

山の陰氣な影をうけて、凄いやうな色の白いのが、黒の中折帽を廂下りに、洋杖(ステツキ)も持たず腕を組んだ、背廣で、オー

パーコートと云ふのが、色が又妙に白地けて、うそ寂しい。瘠せて肩の立つた中脊でね、此が地藏樣の前へ來て、すつくりと立つたと思ふと、　頭髮の伸びた技師の先生が、づか〱と天幕を出ました。

それ、卓子を中に、控へて、屹と向合つたと思召せ。

少い紳士が慇懃に、

「失禮ですが、立野龍三郎氏で居らつしやいますか。」

「然やう、お尋を蒙りました龍三郎、私であります。」

「申をくれました、私は村上八百次郎と申すものです、はじめてお目にかゝります。……唯今、一名刺を。」

「いや。」

と先生、卓子の上へ兩手をづかと支いて、

「三年前から、御尊名は、片時と雖も相忘れません。出過ぎましたが、略、御訪問に預りました御用向も存じて居ります。」

唯、少いのが少し屹と成つて、

「用向を御存じですか？」

「先づ、お掛け下さい。」

と先生は、ドカリと野天の倚子に掛けた。

何となく氣色ばんだ双方の意氣込が、殺氣を帶びて四邊を拂つた。此の躰を視た私だ。むかし物語によくあります、峯の堂、山の祠で、怪しく凄い神たちが、神つどひにつどあはせたと云ふ場所へ、破戒坊主が、はひ廻つたと云ふ體で可恐しく〱、地藏樣の前に蹈んで、恁う。拜み伏む形をして、密と覗たんで。

先生は更めて、兩手を卓子につき直して、

「――受信人、……狼温泉二葉屋方、村上縫子、發信人は尊名、貴性であります、

　コンニチゴヽツク。ヨウイ（今日午後着く用意。）」

と聞きも濟まさず、若い紳士は、斜に衝と開いて、身構へて、

「何、私信を見た上、用件を御承知に成りましたな。」

「偏に申譯をいたします。電報を扱ひます節、文字は拾ひますが、文字は普通……拾ひますが、職務の德義として、文字は綴りましても、用件は記憶しません。然る處、唯今申し上げました、（コンニチゴヽツクヨウイ）で、不感に故障が起りました。幾度も接續を試みますうちに、うかと記憶に殘つたのです、のち四時間、漸と電線が恢復して、（ヨキカ）と受信しましたのです、謹で謝罪いたします。」

と面を上げ、乾びた咳して、

「即ち、受信人、狼温泉、二葉屋方、村上縫子、發信人、尊名、貴性。即ち、（今日午后着く用意よきか。）」

「分りました。」

と靜に言ふ時、ふと見返つた目が私に向いた、と一所にな……先生の眼も光りました。

怯えて立つたね。悚然した。

荷を擔いて、ひようろ、ひよろ。

漸く石段の中ほどで、吻と息をして立つた處が、薄暮合の山の凄さ。……天秤かついだ己が形が、何でございますかね、天狗様の下男が清水を汲みに山一つ彼方へと云つた躰で、我ながら、餘り世間離れがした心細さに、

「ほつ、」

と云つたが、聲も、ぼやける。肩をかへて性根だめしに、其處で一つ……

「鑄掛――錠前の直し。」

何と――旦那。」

九

「…時に――雪の松明が二把、前後に次第に高く成つて、…白い鳥の毛に見へます白い梟、化梟、萬萬の羽毛の其の石段を攀ぢるのは、まるで幻影の女餞が捧げて、頂の松、電信柱へ、龍燈が上るんでございました。
　上り果てた時分には、最う降つてるのが留みましたつけ。根雪に殘るのぢやあございません、ほんの前觸れで一きよめ白くしましたので、ぽつとほの白く、薄鼠に、梟の頂が暗夜に浮いて見えました。
　苦い時ばかりぢやあねえ。こんな時も神頼み、で、私は崖縁をひよいと横に切れてのしこと地藏様の背後に蹲込んで覗いたんで、石像のお袈裟の前へは、眞白に吹掛けましたが、うしろは苔のお法衣のまゝ眞黑で、お顔が青うございましたよ。
　大方いまの雪のために、先生も、客人も、天幕に引籠つたんでございませう。卓子ばかりで影もない。野天の其の卓子が、雪で、それ大理石。――立派やかなお座敷にも似合はねえ、安火鉢の曲んだ奴が轉かるやうに出て居ました。
　其の火鉢へ、二人が炬火をさし込みましたわ、一ふさり臥つて、柱のやうに根を持つて赫と燃えます。其の灯で、早や出端に立つて出掛つた先生方、左右の形は、天幕が其のまゝの巖石で、言はねえ事ぢやあねえ、青くまた、朱に刻みつけた、怪い山神に、宛然だね。
　ウゝとあとへ引いて若い紳士が、卓子にさきの席を取つて、高嶋田の天人を、
「雛子さん。」
と呼びました。
　御婦人が、髮の吹流を取つた、氣高い顔は、松明の火に活々と、其の手巾で、お召のコートの雪を拂つて居なすつた

け、揺れて山茶花が散るやうだ。

「立野さんに御挨拶をなさい。」

「唯今。」

と靜に言つて、例の背後に掛けた所の子笠を、紐を解いて、取りましたが、吹添つて、風はあるのに氣で鎭めたかして、其の笠が動きもしません。

卓子の脚に、お道さんのと重ねて置いて、

「貴方、―御機嫌よう。」

「は。」

と先生は一言云つた切、顏も上げないで、めり込むやうに深く卓子の端についた太い腕が震へたが、それより深いのは、若旦那の方の年紀とも言はない額に刻んだ幾筋かの皺で、短く一分刈かと見える頭は、坊さんのやうで、福々しく耳の押立つて大いのに、引締る口が、窪んで大きく見えるまでもつくりと頰の肉が落ちて居る。

「夫人。」

と先生はうつむいたまゝで、

「再び、御機嫌のお顏を拜することを得まして、私一代の本懐です。生れつきの口不重方が、眼前に、貴女のお姿に對しましては、何も申上げる言を覺えません。唯しかし、唯今。」

とよろめいて、立つて、椅子の手に縋りました。

「唯今、一言御挨拶を申上げます。」

と天幕に入ると、提げて出た、卓子を引抱へたやうなものではない。手似の重さに堪えない體に大革鞄を持つた、腕が、吐呼吸を浪に吐く。

それと見ると、襞を絞つ乗てました。お道さんが手を添へてながら、顔を見ながら、溺へて、縺れて、うつかりしたやうに手傳ふ姿は、却つて、あの、紫の片袖に魂が入つて、革鞄を投げたやうに見えました。

づしりと、卓子の上に置くと、…先生は一足退つて、起立の形で、

「最早や、お二方に對しましては、…御夫婦に向ひましては、立つて身を支えるにも堪へません。一刻も早く此の人畜の行爲に對する、御制裁を待ちます。即時に御處分のほどを願ひます。」

若旦那が、

「よろしいか。」

と些と甘いほどな、此の場合優い聲で御夫人に言ひました。

「はい。」

と、若奥様は潔い。

若旦那はまつすぐに立直つて、

「立野さん。」

「……」

「では、御要求をいたします。」

「謹で承ります、一點と雖も相背きはいたしますまい。」

「其處に、卓子の上に横にお置きなさいました、革鞄を、縦(たて)にまつすぐにお直し下さい。」

「承知いたしました――いや〳〵罪人の手傳をしては、お道さん、汚れるぞ。」

と手傳を拂つて、緊と其の處へ据直す。

「立野さん、貴下は革鞄の全形と折重つて、其の容量を外れない範圍内にお立ち下さい。縫子が、縫は私の妻とし

て、婚禮の日の途中汽車の中で、」

と云ふ聲が少し震へました。

「貴下に、其の紫の袖を許しました。其の實に任ずるために、こゝに短銃を所持して居ります。—其の短銃を以て此處に居て革鞄を打ちます。彈丸を以て錠前を射切るのです。錠前を射切つて、其の片袖を—同棲三年間—まだ純眞なる處女の身にして、私のために取返すんです。袖が返るとゝもに、更めて結婚します、夫婦に成ります。が、勿論しかし、其が夫婦のものゝ、身の終結に成るかも分りません。—何故と云ふに革鞄と同時に、兇器を以て、貴下のお身躰に向ふのです。萬一のお生命を縮めると成れば、私は其の罪を負はねば成らないのですから。其は勿論覺悟の前です。—お察し下さい、此は殆ど私が生命を忘れ、世間を忘れ、事業を忘れ甚しきは一人の親をも忘れるまで、寢食を廢しまして熟慮反省を重ねた上の決意なのです。はじめは貴女が、當時汽車の窓から、赤城山の絶頂へ向つて御投棄てに成つたと言ふ、革鞄の鍵を何とぞして拾戻して、其の鍵を持ちながらお目にかゝつて貴下の手から錠を解いて、鞄の其の袖を返して頂きたいと存じ、凡そ半年百日に亘りまして、狂と言はれ、痴と言はれ、愚といはれ、嫉妬と言はれ、んすけと嘲けられつゝも、多勢の人數を狩集めて、あの邊の汽車の沿道一帶を、粟、蕎麥、稲を買求めて草に刈り芥にむしり、甚しきは古塚の横穴を發いてまで、捜させました。流星の如く天際に消えたのでせう。一點似た釘も見當りません、—唯今：要求しますのは其の後の決心であることを諒として下さいまし。雖もよく此の意を對して、三年の間、晝夜を分かず、的を射る修錬をいたしました。—最初、的をつくります時、雖がものさしを取つて、革鞄の寸法を的に切りましたが、こゝで實ぶつを拜見しますと、其の大さと言ひ、錠前のある位置と言ひ、殆ど寸分の違ひもありません。：不思議です、：特に奇蹟と存じますのは、—家の地續きを劃つて、的場を建てましたのですが、土地の樣子、景色、一本の松の形、地藏のあるまで」

—私はすくんだね—

「夢のやうによく似て居ます。‥多分、皆お互に悲しうした運命だと存じます。‥短銃は特に外國に註文して、英國製の最優良なのを取寄せました。連發ですが、彈丸は唯一つしか籠めてありません。屹と仕損じますまい。しかし、御覺悟を下さいまし。—最も革鞄と重つて、お立ち下さいますのに、其の間隔は五間十間或は百間、三百間、貴下のお心に任せます、要は唯、着彈距離をお離れに成りません事です。」

「一歩も此處を動きません。」

先生は、拱いた腕を解いて言ひましたぜ。

—然うだらうと。私だちも思つたのである。

十

「堪らねえやね、お前さん。

私、あ猿坊のやうに、ちよろりと影を畝つて這出して、其處に震へて立つて居る。お道ねえさんの手に合鍵を押つけた早く早くと口ぢやあ言はねえが袖を突いた。

—若奥樣の手が、最う懐中に入つた時でございますよ。

「御免遊ばせ。」

と縋つくやうに、伸上つて、お道さんが鍵を合はせ合はせるのが、あせるから、ツルツルと二三度辷りました。

「あら、一寸。」

と若奥樣が、手で壓へて、

「何うぞ‥其ばかりは。」

と清く言ひます、此の手二つが觸つたものを、錠前の奴、ぐわんとして、雲に成つても消えなんだ。

舌の硬ばつたやうな先生が、
「飛でもない事—お道さん。」
「否（いいえ）構ひません。」
と若旦那はきつぱりと、
「飛でもない事ではありません、それが當然なのです。立野さん、貴下が御自分でなくつても、貴下が許して、錠前をさへお開き下さるなら—方法は撰びません、短銃なんぞ何に成りませう。私はそれで滿足します。」
「旦那様。」
と精一杯で、お道さんが押留められた一つの手を、それなり先生の袖に縋つて、無量の思の目を凝らした。
「はあ、」
と蒂込むやうな大息して、先生の胸が崩れやうとしますとな、
「貴方、…あの錠が返りましたか。—優い、お道さん、美しい姉さん、…お優い、お美い姉さんに、貴方は最うお心が移りましたか。」
と云つて、若奥様が熟と視ました。
先生が蒼く成つて、兩手でお道さんを押除（おしの）けながら、
「此は餘所ので娘です、あはれな孤兒です、」
とあとが消えた。
「決行なさい。錠子。」
「……」
「打て、お打ちなさい。—

「唯今。」

と肩を輕く斜めに落すと、コートがすつと脫げたんです、燻ちもせぬのに氣が立つて、颯と燃える松明より、紅に燃立つばかり、緋の紋縮緬の長襦袢が半身に流れました。……袖を切つたと言ふ三年前の婚禮の日の曠衣裳を、其のまゝで、一方紫の袖の紋の揚羽の蝶は、革鞄に留まつた友に添つて、御先にひら〳〵と揺れました。

若奥樣が片膝ついて、其の燃ゆる火の袖に、キラリと光る短銃を構へると、先生は、兩方の膝に手を揃れて、目を瞑つて立ちました。

「お身代りに私が。」

とお道さんが、其の前に立塞がつた。

「あ、危い、那方。」

と若旦那が聲を絞つた。

若奥樣は折敷いたまゝで、

「不可ません——お道さん。」

「いゝえ、本望でございます。」

「私が肯きません。」

と若奥樣が頭を掉ります。

「貴女が、お肯き遊ばさねば、旦那樣にお願ひ申上げます。こんな山家の女でも、心にかわりはござんせん、願を叶へて下さいまし。お情はうけませんでも、色も戀も存じて居ります。もみぢを御覽なさいまし、つれない霜にも血を染めます。私は唯活きて居ますより、旦那さんのかはりに死にたいのです、其の方が嬉いのです。こんな事があらうと思つて、最う家を出ます時、なくなつた母親の紀念の裾模樣を着て參りました。……手織木綿に前垂した、それならば身

分相應ですから、人樣の前に出られます。時をくれのない紋着、襦袢も帶もうつりません、あられもないなりをして、戀の仇の奥樣と、並んでこゝへ參りました。ふびんと思つて下さいまし。あゝ女は淺間しい、私には唯一枚、母親の紀念だけれど、奥樣のお姿とこんなはかないなりをくらべて、思ふ方の前に出るのは死ぬよりも辛らうござんす。これさへ思切りました。男のために死ぬのなんか、冥加に餘つて勿體ない。……唯心がかりなは、私と同じ孤兒の、時ちやん（少年の配達夫）の事ですが、あの兒も先生おもひですから、恁うと聞いたら喜びませう。」

若旦那の目にも奥樣にも輝く涙が見えました。

先生は胸に大波を打たせながら、半ば串戯にするやうに、手を取つて、泣笑をして、

「これ、馬鹿な、馬鹿な、ふふふ、馬鹿な事を。」

「えゝ、馬鹿な女でなくつては、こんなに旦那樣の事を思ひはしません、私は、馬鹿が嬉しうございます。」

「弱つた、これ、詰らん、そんな。」

「お手間が取れます。」

「さあ、お退き、これ、其方へ。」

「いゝえ、いゝえ。」

否否をして、頭をふつて甘へる肩を、先生が抱いて退けやうとするなり、くるりとうしろ向きに成つて、前髪を犇と胸に當てました。

呼吸を鎭めて、抱いた腕を、ぐいと背中へ捲きましたが。

「お退きと云ふに――やあ、お道さんの御母君、御母堂、お紀念の肉身と、衣類に對して失禮します、御許下さい……御免。」

と云ふと、抱倒して、

「あゝれ。」

と震へてもがくのを、

しかと片足に蹈据えて、仁王立にすつくと立つた。

「用意は宜しい。……雛子さん。」

「…………」

「然やうなら……」

「……然やうなら、貴方。」

日光の御廟の天井に、墨繪の龍があつて泣きます。尾の方へ離れると音もしねえ、頭の下で低い。手を折つて、コツンと、高い天井で鳴りますので、案内者は、勝手に泣龍と云ふのでございますが、同じ音で。——

コリンと響いたと思ふと先生の身躰は左右へふら〳〵して動いたが不思議な事には倒れません。

南無三寶。

片手づきに、白襟の衣紋を外らして仰向きになすつた、若奥様の水晶のやうな咽喉で、口から垂〳〵と血が流れて元結がぷつりと切れた。

トタンにな、革鞄の袖が、する〳〵と抜けて落ちました。

「貴方……短銃を離してもう可うございますか。」

若旦那が頷いて其の手を吸ふと、釣鐘を落したやうに、輕さうな手を柔かに先生の膝に投げて、

「あゝ嬉しい。……立野さん、お道さん、短銃をそちらへ向けて打つやうな女とお思ひなさいましたか。」

「唯今、立處に自殺します。」

と先生の、手のついて言ふのをきいて、かぶりを掉つて、櫛笄も、落ちなで、亂れかゝる髮を其のまゝ莞爾して、

「否、百萬年の後に……また、お目にかゝります。お二方に、これだけに思はれて、縫は世界中のしあはせです——貴方、お佗は、あの世から……」

最後の言葉でござました。

お道さんが銀杏返の針を拔いて、あの片袖を死骸の袖に縫つけました。

其の間、膝にのせて、胸に抱いて、若旦那が、お縫さんの、柔かに投げた腕を撫で、撫で、

「此の、清い、雪のやうな手を見て下さい。私の偏執と自我と自尊と嫉妬の如き、詮ずるに烈しい戀のために、——三年の間、夜に、日に、短銃を持たせられた、血を絞り、肉を刻み、骨を砂利にするやうな拷掠に、よくも此の手が鐵にも鉛にも成りませんでした。あゝ、全く魔の如き殘虐にも、美いものは滅びません。私は慚愧します。しかし、貴下と縫子とで、どんなにもお話合のつきますやうに、私に三日先立つて、縫子を此方によこしました。それに、あからさまに名を云つこ、故と電報を打ちました。……貴下を當電信局に之を存じましていたした事です。とにかく私の心も身の果も、やがて、お分りに成りませう。」

と、いひ〳〵、地藏樣の前で、男が二人で密と舁ぐと、お道さんが、笠を伏せて、其の上に、帯を解いて疊んで枕にさせました。

私も十本の指を額に堅く組んで頂いて拜んだ。

そこらの木の葉を、やたらに火鉢にくべながら……

「失禮、支度をいたしますから。」

若旦那がする〳〵と松の樹の處へ行きます。

其處で、內證で涙を拂ふのかと思ふと、肩に一揺り、ゆすぶりをくれるや否や、切立の崖の下は劍を植えた巖の底で眞逆樣。霧の海へ、薄ぐろく影が殘つて消えません。

――旦那方。

先生を御覽なせえ、いきなりうしろからお道さんの口へ猿轡を嵌めましたぜ。――一人は放さぬ一所に死なうと悶へたからで、――それをね、天幕の中に抱入れて、電信事務の卓子に向けて、椅子にのせて、手は結えずに、腰も胸も兵子帶でぐる／＼卷だ。

「時夫の來るまで……」

然う言つて石段へヅッと行く。

私は下口まで追掛けたが、何うして可いか途方にくれてくる／＼廻つた。

お道さんが、さんばら髮に肩を振つて、身悶へすると、消えかゝつた松明が赫と燃えて、あれ／＼女の身の丈に、めら／＼と空へ立つた。

先生の身體が影のやうに歸つて來て、いましめを解くと、一所に、五體も溶けたやうなお道さんを確と腕に抱きました。

いや、何とも……醉つた勢で話しましたが、其の人たちの事を思ふと何とも言ひやうがねえ。

實は、私と云ふものは……若奥樣には內證だが、其の高崎の若旦那に、頼まれまして、技師の方が可とさへ一言云へば、すぐに合鍵を拵えるやうに道中お抱へだつたので……何、鍵までもありやしません。――天幕でお道さんが相談をしました時、寸法を見るふりをして、錠ははずして置いたんでございますのよ――。

皆、何とも言ひやうがねえ、見てござつた地藏樣に手のつけやうがなかつたに違えねえ。若旦那のお心持も察して上げてごらんなせえ。

——あくる日、峠道を傳ひますと、山から取つた水樋が、空を走つて水車に颯と掛ります、眞紅な木葉が宙を飛んで流れましたつけ、誰の血なんでございませう。」

(峯の白雪麓の氷
今は互に隔てゝ居れど)

あとで、鑄掛屋に立山を聽いた——追善の心である。皆涙を流した。座は通夜のやうであつた。

姨捨山の月霜にして、果なき谷の暗を霧の底に、千曲川は水晶の珠數の亂れる如く流れたのである。

(完)

■編輯局だより

□吉江孤雁氏は新年號へ長篇の續稿をいただく關係上十二月だけは休ましてくれとのことであつた。

□同人室伏の渡歐はいよ〳〵十二月廿九日伏見丸にて横濱發渡米に決した。英國に一年ぐらゐ滯在のつもりだ。

□北京へ旅行中であつた同人横關は過日歸京した。

□講談は紙面の都合で一二ケ月休むの余儀なきに至つた。皆紙面の幅湊から止むなく休揭したのである。

□新年號からの本紙がいかに精彩を放つか、我社は自信のある作物を提供が出來るのを聊か誇りとしてゐる。

□本年は二、三、七、八九の五ケ月は賣切れの盛況を呈し、五、六の不景氣時期にも返品の少きことが第一位であつた、これ偏に讀者の賜である。本年の筆納めに當り厚く讀者に謝しておく次第である。

□創作の方面でも、來春よりはドシ〳〵無名作家の大作を登載したい希望である潑剌たる、そして總べての心髓を突く底の勇氣に滿ちた藝術品でありたい。

□本號に掲載した高倉輝君の「孔雀城」は同氏が四年間に亘つて、心血を瀝いだ一大勞作で近來出色の讀物であろう。

□石原純氏の巻頭論文は學界より多大の注意を引いた重要論文で、或は本論文のために全國各學校の教科書も改訂の必要があろうと思はれるから必ず再讀、三讀して戴きたい。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	七十錢	二錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて續誌を發送す
▲日本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正九年十一月二十日印刷納本
大正九年十二月一日發行

編輯兼發行者 [illegible] 横關利藤太
印刷者 東京市[illegible]七番地 [illegible]
印刷所 秀英舍

本號特價 金八十錢

發行所 東京芝區櫻川久保町七 改造社
電話新橋一八五九
振替東京一八四〇二